女性改造

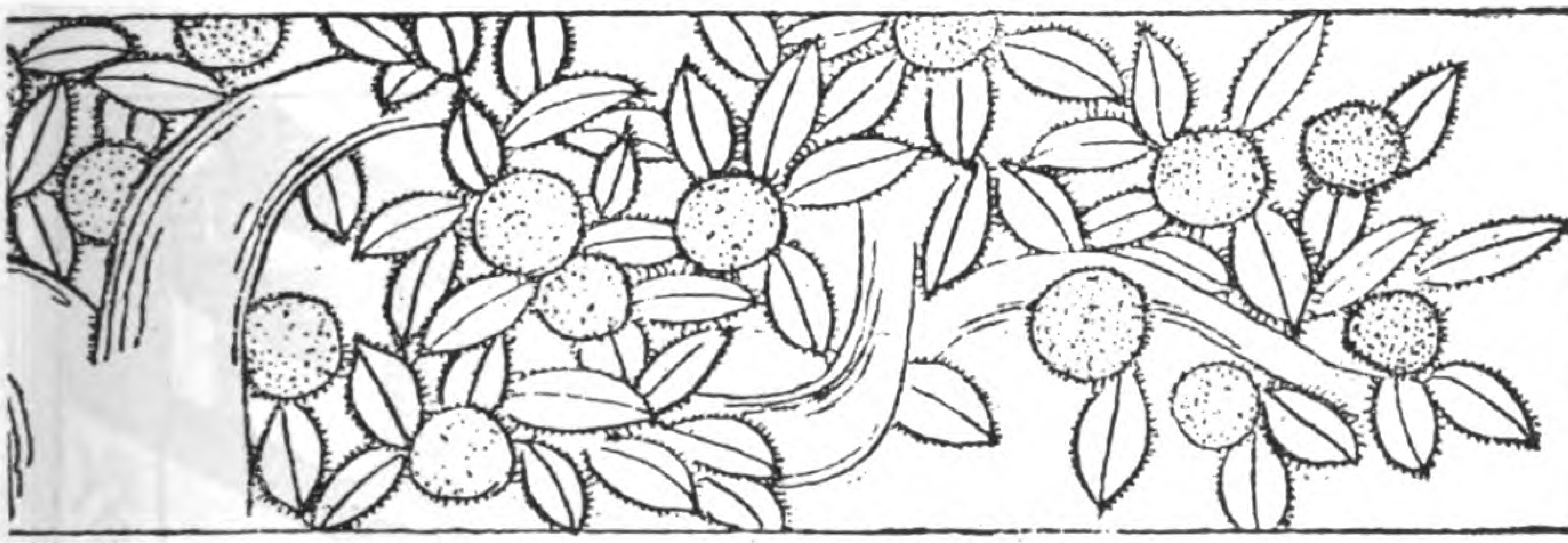
大正十一年九月三十日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正十三年九月一日發行　大正十三年八月十三日印刷納本



九月號

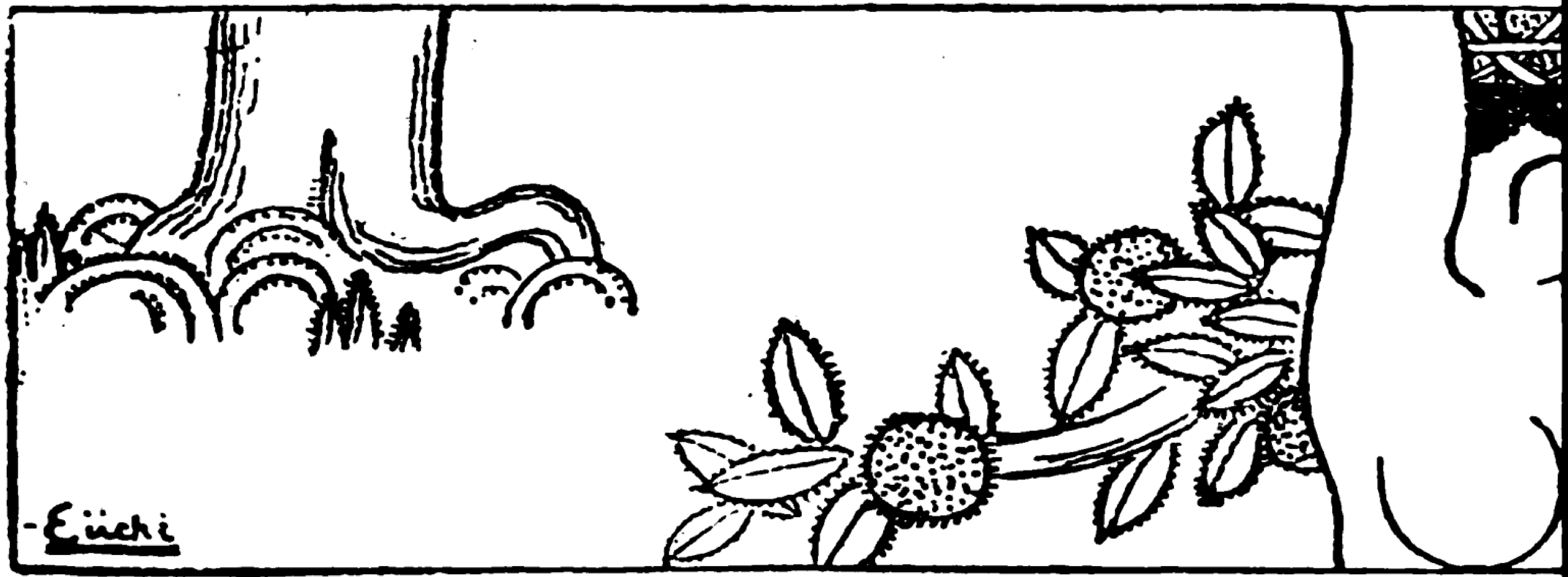


ビクトリヤ
到る処の薬店小間物店にあり
純ゴム製 鑵容器附 月經帶
いつも快活に、微笑の絶えない御婦人が激増しました、それは月經時の不快と不便をすつかり拭ひ去つたビクトリヤの大きな功績です！
送料拾貳錢
定價
一號品（純ゴム製丸罐入）金五拾五錢
二號品（ネル腰衣附角罐入）金七拾錢
發賣元
東京向島寺島町曳舟驛前
大和護謨製作所
電墨 長一〇三三番
話出 一〇三四番
四 二 一番
振替東京一三〇〇二番



女性改造九月號目次

史上の女性美



創作



西芳寺林泉

山下新太郎



愛と哲學

ソクラテス及びプラトンの理解せる哲學の意義に就て

石原謙

一

哲學に就て多少の智識を學んだ者の誰でもよく熟知してゐるやうに、哲學は其言葉の本來の意義から云へば知識に對する愛を意味する。即ちphilosophyの語源philosophiaは希臘語にてphilos（愛）とsophia（知）との二つの言葉から成れる複合詞である。而してフィロスの語源philiaは云はば友情を意味するので、友として愛する愛を謂ふのである。其從つて其語を形作れる二つの要素の各々に重きを置くことによつて二樣の意義を演繹することが出來る。第一に哲學は愛である、即ち其は單なる理論的の説明解釋乃至論議ではなくして心の傾向、欲求、努力である。説明論議に於ても其によつてある

目的に達せんとする要求が存しなければならぬ。しかもフィロスの語源Philiaは友に對する愛情で、其は利己的打算とか其他の實際的動機を離れて純粹な內的要求に基かねばならぬのである。第二に其愛は知識に關はつてゐる。即ち偶然的な變化し易い衝動から發した其ではなく、靜かな內省と思索とによつて換言すれば系統的方法論的に努力される理性的活動でなければならぬ。若し理性の知的活動と內的に關はらないならば、——再び希臘的に言へば——若し知的の驚駭を以て始まらないならば、其は哲學となることは出來ないのである。

希臘に於てPhilosophiaといふ語が何時頃又何人によつて用い始められたにしても、上述したやうな意味に於ての即ち知的愛としての哲學はソクラテスによつて始めて明かに認識され理解されることを得た。彼以前には世界の根源とか事物の生成變化とか又存在といふことの意味とかに就ての探究がなされ而して其によつて少からぬ知識は積まれることを得たが、かゝる學問研究の態度意義又其限界に對する明かな自覺は存しなかつた。そうしてソクラテスによつてなされた此點の自覺が我々をして哲學の眞の貴い意義の理解に導いたのである。

二

ソクラテスは此理解に達するのに、我々の無知なることとの自覺に據つた。事物の本性なり技能なりに關して我々は如何に深く究め如何に多く知り得たにしても、其は恐らく完き知識ではない。完きといふことは神にのみ屬することで、人間の知能は常に脆くして弱い。人は多くを學ぶ前に先づ其知能の限界を知らなければならぬ。其が我々の理性的生活の始めである。之はソクラテスの深い自己內省と多くの事例に就ての鋭い觀察とによつて——之を彼の弟子等はソクラテスのエゴパゲーEpagogeと呼んだ、後世の歸納法である——達した推論なのである。

知能の限界を意識することは云ふ迄もなく自己の無知を表白することである。其は我々の知的生活に於ける云はゞ開心

である。此眞理を人々の心に深く印銘させる爲めに而して彼等をして此知的回心を遂げさせる爲めに、ソクラテスは、丁度ヨルダンの河畔に悔改めよと叫んだユダヤの豫言者のやうに人々の前に立つて、汝等自らの無知なるを知れと說いた。けれど其敎は固より困難であつたし、又其のみでなく危險でもあつた。何故なら、世界の最大强國波斯に對する戰勝の余威を以て外に向つても又内にも、軍事的にも政治的にも社會的にも又文化的にもあらゆる改革と施設とを試み、最も盛な最も美しい時代を現出して既に陶醉と驕奢とに傾かうとしてゐたアテナイの市民に取つて、彼の敎は餘りにも激しく鋭い難であり、切なる苦味であつたからである。

兎に角彼は荒野に行く代りに、町の市場や體育場に赴いたり又街頭に立つたりして、其處に集まる人々と老若貴賤の別なしに語つた。そして彼一流の快よい諧謔と鋭い反語的質問とによつて談話を導き、彼等自らをして其無知を自白せざるを得ないやうに陷れた。が之によつて固より彼自ら得意がるのではない、自らを罪人の頭とする福音の使徒パウロのやうに、最も無知なる者、若し少しでも知る所ありとすれば自己の無知なるを知つてゐるのみだと謙るのである。併し其にしても彼の言葉は强くあつた。

彼はあらゆる機會を捉へて對話を試みた。體育場の着衣室の一隅に休息所（之は今日の學校schoolといふ言葉の語源であるscholēといふ語を以て呼ばれてゐたが、此語義の歷史は殊に興味深く思はれる）がある。戰場から歸つたソクラテスが此處に來てゐると樣々の人に逢ふ。其中に靑年カルミデスも來つて彼の傍に坐を占める。其姿は大理石像のやうに美しい。彼は思ふ、美しい心を持つてゐる者の姿は更に美しい心に慮り（希臘語ではsophrosyneといふ特色ある語が用ひられてゐる。本來健かなる心の義であるが、理解に富み賢明にして思慮あり、動作の上にも控え目で愼ましく、過度放逸ならずして節制と秩序とあり、中正にして訓練あることを意味する語である）あれば身體も健全であらうと。そこで彼は問ひかける、

『君はいつも「慮り」あるやうだ。一體ソーフロシユネーといふのは、どういふことだらうか。』

青年は少しく顔を赤らめながら、

『其は落着いてゐる態度のことだと思ひますが』

と答へる。ソクラテスは直ちに反問する、

『其は可笑しい。書いたり讀んだり學んだり記憶したり又競技や琴の演奏に於て望ましい立派なのは、機敏であることだ。「慮り」に於ても矢張り然うなのではないだらうか。』

そこでカルミデス『ソーフロエネーは云はゞはにかみだ』と言ふ。ソクラテスは之に對しては『乞食がはにかんでゐたら仕樣がない』といふ詩人ホメロスの句を引いて答へる。カルミデスは不圖ある人の語を想ひ起して『其は己れ自らのことを爲すことである』と言ふ。ソクラテスは、其が誰から聽いたのであつても差支ないが、面白い說明である。けれど其も吟味して見なければ確かでないと答へる。そして

『敎師は自分の名を書く許りでなく、子供に其友人や敵の名まで書くことを敎へる。醫者や大工や織匠も他人の爲めに働く。若し誰も他人の爲めに働かないで、各々自分の衣を織り自分の靴を造り自分の家を建てなければならなかつたら、國家はよく即ち慮りを以て治められてゐるとは謂へないだらう。だから自分のことを爲すのが慮りだとは定義し得ない。』

カルミデスは復た前言を取消さゞるを得なくなり、そして最早答ふべき言葉を知らないのである。結論は導き出されないで、結局其に就て知らないといふ事實が曝露された丈けである。

併し其處にソクラテスの對話の最も樞要な重心が存してゐた。「慮り」の意識をカルミデスもソクラテスも說明し得ないが、知らないのを悟つた時に、其悟り其事が「慮り」sophrosyneの眞の意味である所以が其對話の末に序々に明か

にされて來る「慮り」とは自己の知れる所と知らざる所とを知ることである。即ち其はデルフイの神殿に掲げられてたる句の示してゐるやうに自己自身を知ることである。自分自身を識り、眞に知らないのに知れるかの如くに自惚れてゐることを省みて自己の無知なるを究める者が眞に「慮り」あるのである。

ソクラテスはこゝで自己の無知の認識を「慮り」といふ概念内容として求めてゐる。が此場合に「慮り」の概念を見出すといふ仕事は彼に取つて「哲學すること」に外ならないのである。而して此は無知を認識するによつて充され、寧ろ完うされるのである。

三

當時ソフイストと呼ばれた人々がアテナイの町に於て青年等に、樣々の學問技能、殊に若き野心ある者等が公けの政治界に雄飛して成功するに有用な知識とか修辭雄辯術などを教授した。ソフイストとはsophia即ち知識を有する者云はば學者といふ程の意味で、當時の青年等には少からず尊敬され、殊に彼等の中の名ある者の來た場合などは人々が群がつて其門を叩いて教を乞ふのが常であつた。彼等自らも凡ての問題に通曉する知者を以て任じてゐた。さればソクラテスの無知の自覺の要求が彼等の態度と最も極端な反對に立たなければならないのは當然であつた。彼等の上に加へられた攻撃が殊に激しくあつたのは怪しむに足りない。」

ソフイストの一人なるヒッピアスが非常な喝采の中にホメロスの詩に關する講演を終つた。群衆の去つた後、ソクラテスは、正直なアキレスと賢いオディッセウスと何れが優れてゐるかといふ少しく意地惡い質問を發する。ヒッピアスは雑作もなく、其は無論アキレスが優れてゐると言ふが、ソクラテスは肯じない。アキレスは正直であるにしても、餘りに朴突である。其よりも、虚僞を語らうと思ふ場合に語り得るといふことは一種の能力であつて、つまり優越であり、即ちオディッセ

ウスのやうに氣の利いた賢こい狡猾なことが、アレキスのやうに單純な正直よりも優れてゐるではないかと詰る。そこで問題はこんぐらかつて來る。正直な者が必しも虛僞者よりもよいのではなく、又此兩者が常に反對してゐるのでもない。問題となるのは故意に自ら欲して僞つたか如何かといふ點にあるので、つまり彼は自ら知つて惡をなす者（かゝる場合が若しありとすれば）は自ら知らないで誤に陷り不正をなす者よりもよいといふ結論に達しようとしてゐるのである。併し之を彼は獨斷的に主張するのではない。彼の目指す所は、眞に自覺なきソフィストの自恣的な私見や道德說を覆して、其弱さを曝露しようとするにある。

『ソクラテスよ、君の意見に私は同意し得ない』

といふヒッピアスの最後の答に對して、彼は猶ほ反語的の言葉を弄するのを止めない。曰く、

『私自身も自分の言ふ所を是認はしないのです。が、私の初めから言ふてゐるやうに、此問題に就ての私の考は樣々に動搖して、固定した確信といふものがどうしても得られないのです。たゞ私がとんでもない思ひ違ひをしたり、又普通の人間が誤つた所で不思議はないが、併しあなたのやうな學者でさへも答に窮するといふことになつたら、我々も亦其には當惑せざるを得ないので、最早あなたの許に赴いて我々の誤りを正す目標を得られなくなるでせう。』

併し此等の語の中にソクラテスの意味した所を讀者は見誤ることはないであらう。

要するに此處でソクラテスの要求してゐるのは自己の無智を自覺するといふことで、之に達しない爲めにヒッピアスは何時迄も揶揄されてゐるのである。此場合に知者といふ敬稱は――ソフィストは希臘語 Sophistes より來り「知ある者」を意味する――何の誇りともならずに、却つて自己認識の妨げとなることが多い。市井の民衆や未熟の青年は彼等よりも容易に其自覺に入ることが出來るであらう。

此自覺の主たる意義は其が我々を眞の學問に導くことに存する。卽ち彼の自己認識は果のない單に消極的な自己否定ではなく、其中に積極的の意義を包藏してゐるのである。何となれば道德的問題は彼に取つて學問の終局であり、人間をして人間たらしめるのみでなく、優越せる力ある者換言すれば有德なる者たらしめるのであるが、其考察は常に自己認識を

前提し、自覺なき者には決して之に入ることを許されてゐないからである。そして之は人間としての止むを得ない制限であり運命であり又自然なのである。此自然の約束に從つて自らを認識した時に、眞知の第一歩が既に始まつてゐる。而して此貴い歩みを始めた人を、固より知者とはなし得ないが、知識卽ち眞理に向ひつゝある者、之を愛する者、卽ち哲學者と呼ぶのである。

されば哲學者といふ言葉は此場合に極めて謙遜な態度を以て用ひられたのであることは言ふ迄もない。ソクラテスに向つて自分は然か〴〵のことを知つてゐると語る者があれば、彼はかく答へるのを常とした。『おゝ幸な方よ。あなたは神々の仲間に屬する。』彼に取つて知識は神々にのみ許されるので、彼は唯だ其を愛し求めて努力するに過ぎないと信じたのである。哲學は神々に屬する知識其者のことではなく、我々自身の中に知識を生み出さしめようとする道、彼自らの語を以て云へば知識といふ愛兒を生み出すのを助けようとする産婆術に外ならない。併しかく誠意と努力とによつて眞理に近づき得る所に人としての誇が存しなければならぬ。此意味で哲學者は眞の人間、人の中の人である。

四

斯樣なソクラテスの教と其眞理の爲めの戰ひを示すものはまだ此外に少くはない。殊にかの『辨明』の中に述べられた彼の最後の演說は、自己認識に關する彼の偉大な說教と謂ふべきである。而して之等は何れもプラトンの記述した所で、從つて其哲學的思想を背景としてゐないとは云へないが、併し彼の若い時代の作に屬してゐる許りでなく、クセノフオンの傳へた物語やアリストテレスの記述によつて見ても、如上の教がソクラテス自身から出たものであることは殆ど疑を容れる餘地はない。

否、其のみでなく彼の此貴むべき發見は其弟子プラトンにより形而上學的に深められ、哲學的內容の豐なる思想として理解されることを得た。ソクラテスに於て既に哲學は無知なる者が神的の知識を得んとする努力若くは方法であつたが、プラトンは之をイデア說によつて理解し、低い現象界に浮沈せるかよわい可死者の靈魂が其神的なる故鄉イデアの世界へ

歸らうとする憧がれ、其偶有性を離脱して其永久なる實在と生命とに預からうとする切なる希求に外ならぬとした。かくて哲學は自然界の理法の探究でも認識機能の分解でも又論理的體系の組織でもない。其は云はゞ内なる聖殿に神を模索し其姿を認識することによつて痛ましい心の運命から自由になり完き眞理と祝福とを得ようとする宗教である。實に宗教が彼の哲學の中心點また核實を形作る。之を外にしては凡ての思索も探究も第二義的の意義を有するに過ぎないのである。

哲學は此意味に於て超自然的靈的世界に接する。其は最高實在の認識として知的なものでありながら、單なる理知を以ては盡きない、理知を以ては解し得ず證明し得ない範圍を假定してゐる。眞理とは單に論理上の無誤謬とか實際生活上の眞實とかを謂ふのではなく、寧ろ非理性的な靈的なるものに其根抵を有し、從つて之を内容とする哲學は云はゞ神的靈感として現はれることがあるのである。

プラトンは既に若き頃の對話篇『イオン』に於て、詩の中に此世界を越えたある神的なる力の影響の存することを認め、其靈的なる力をムーゼの神に歸し、ムーゼ神の靈感に觸れて詩人は詩作すると語つてゐるが、『パイドロス』篇などによれば、哲學にも亦かゝる神的若くは靈的なる作用の存するのを明かに認め、そうしてソクラテス自身此超自然的の力に動かされて一種の神靈な狂氣に與かつて居り、そこから最高の知識が與へられたのであると言はうとしてゐる。此場合ソクラテスは彼に取つて哲學的人格の模範的理想的代表者として認められてゐたことは云ふ迄もない。彼がソクラテスに就て語つてゐる所はやがて哲學其者に就て述べてゐるのである。

かゝる彼の哲學的確信は固よりイデアの觀念の熟する迄は成立してゐなかつたであらう。其迄は彼は其師の教を繼承して、自己の認識の基礎の上に正しい德の概念を求めることに其哲學的勞作を集めてゐたであらう。併しそこから永遠不變なる眞實在としてのイデアの觀念が見出された時に、彼の哲學的努力は最早道德的の然かも概念規定の範圍には止まることを得なくなつた。そして新らしい超自然的の世界との活き々々した交渉が彼の強く關心する所となつて來たのである。

斯くより高き世界への憧がれであり又神的なものゝ靈感若くは其との内的交通として解せられた哲學が、詩人的なるプラトンによつて更に愛として頌へられたのは怪しむに足りない。彼の哲學核心的な然かも最も美しい部分を成せる此思想は有名な對話篇『饗宴』(Symp sion) 及び『パイドロス』の主題とされてゐるが、私は今遺憾ながら其内容を語ることは出來ない。讀者は親しく其書に就て彼の美しい叙述に接し、其處に示されてゐる意義を直接に了解されんことを希望する。英語を解せられる人はB.Jowettの名譯によつて、又外國語に不便を感ぜられる人は木村氏若くは生田氏の邦譯によつて此兩篇の内容の大體を窺知することが出來るであらう。

併し若し哲學は愛——プラトンは此場合にErosといふ神話的名稱を用ひた——であるとの此教を詩人的想像又描寫に過ぎないとか、或は說教者の慣用する譬喩であると解するならば、其は全く正しくはない。彼に取つて其は詩以上の眞實である。否、詩が思索と區別されてゐない故に(ホメロスなどの詩を彼は排斥したとは云ふものゝ)ゲーテの語に從つて詩にして同時に眞實 (Dichtung und Wahrheit) であると謂へよう。『饗宴篇』は此意味で殊に美くしい哲學的の詩であるが、就中其終にソクラテスによつて述べられるディオテイマ——靈感されたる女性の豫言者——の教は全く詩の言葉を以て愛の本性を語ると共に深い哲學の奥義を啓示せんとしてゐる。其は愛の歌であると同時に哲學に對する禮讃である。其はアレゴリー(喩解)でもあるが、併し其儘に眞理の解明として見られねばならぬ。

ディオテイマの語る所によると、愛エロースは豐滿富有の神ポロスを父として、凡てを缺ける女性ペニア(貧しさを意味す)から生れた兒である。彼はペニアを母とする限り生々しさと美しさとを缺き歩むに靴なく、住むに家もない。其父の性を享けて大膽にして知慮あり、常に生氣に富む。彼は父のやうに不死でなく、又母のように死に定められてゐない。彼は知と暗愚との中間にあつて、無知でありながら知を求め美を有しないが美を慕ふ。此意味で彼はエロース愛と呼ばれるので、所謂愛知者、哲學者なのである。

併し其に關して殊に大切なのは、愛のはたらきに關する問題即ち愛の對象若くは目的が如何にして得られるかといふことである。愛の對象となるのは云ふ迄もなく、美又は知である。併し美又は知が愛即ち欲求の目的となるのは、其所有が

我々に幸福を與へるから、より一般的に云へば其が善に歸し而して我々は善其者を得たいといふ自然的の願ひを持つてゐるからである。善其者は固より永遠にして絶對であり神的である。が其に到る道は低い階段から始まる。即ち肉體的產出によつて永遠なるものを得んとするので、性的愛は之である。次には心に關はる產出、例へば國法を作り發明をなし又よき行ひを名譽欲よりなすが如きもので、之等も永遠なるものに對する心の愛と謂へる。併し最後に愛の最も高い階段に進まなければならぬ。其は知識の愛ではあるが、之は更に凡ての美しき物の預かる美其者、即ち絶對者を對象とする知識の愛に於て極致に達するのである。

以上がディオティマの敎で、之によつて我々は愛其者は常に同じくあるにしても其はたらきには階段あることを知る。しかも『饗宴篇』の全體を通じて見れば、愛のかゝる理解は決して容易に達せられるのではなく徐々たる認識の階段を經なければならないことが寓意されてゐる。然るに愛の認識段階はプラトンに取りてはやがて哲學的思索の發展である。愛と哲學的思索とは併行しつゝ進步の階段を登るが、實は同じ我々の精神的發展に外ならぬので、哲學は愛として認められる心の態度の換言葉に過ぎぬ。我々の精神は先づ低い程度の愛として活動の萌芽を示すが、精神の自己認識が深まるにつれて、完全を希ふ憧がれとしての愛も人間相互の關係から進んでより高き對象に向ひ、遂に唯一にして永遠に變りなき神的にして絶對なる善美、他のあらゆる事物が之に預かり其寫し若しは姿としてのみある眞の美其者に對する哲學的な思慕となるのである。

此エロースの敎は、美のイデアに就て語られたプラトンのイデア說に外ならないが、之によつて人間の自然的要求、若い青年が美はしい姿を追ひ求める衝動さへもが、永遠なる神的の善を求むる心から理解され、同時に理知的なる哲學が人間の自由なる本性と內的に關はれるものとして說明されることを得たのである。こゝから哲學は特殊の學理の研究ではなくして生活其者であることが示される。而してディオティマの敎を語るソクラテスの談話の終ると共に、若くして有爲なる政治家アルキビアデスが來つてソクラテスを頌へるが、此頌もエロース敎と關はつて居り、然かも著者は此敎の典型としてソクラテス自身を描かうとしてゐたらしく見へる。アルキビアデスの言葉は此意味で我々にも興味深い。

『ソクラテスはシレーネスの樣であり、又サテウロスの如く醜いが其言葉は人を引着け、少年を愛するが、私自らの經驗で知つてゐるやうに如何なる美と富とによつても誘はれない程に愼ましい。彼が何物にも動かされないことは眞に心憎い程である。彼は堪え難い寒さにもめげず、戰場にあつては勇敢である。彼のやうな人を見出すのは恐らく難かしい。彼言葉もシレーネスのやうに表面嘲笑的であるが實は理性的で、徳と知とに充ちてゐる。』

此演説は——其自身も半ば批難で半ば讃美であつたが——ソクラテス自身が貧しくありながら然かも富み且つ豐かなるエロースに似てゐることを示して居り、即ち彼をエロースの、從つて眞の哲學の典型的人格として理想化してゐる。されば我々は此描寫に於てプラトンの抱ける哲學的精神の具現され生活化されたる姿を見ることが出來る。ソクラテスは最早單なる過去のアテナイ市民ではなくして、生ける人格として描出された哲學的眞理其者なのである。

六

ソクラテスによつて捉へられプラトンによつて深められた哲學のかゝる意義は全く希臘的である。其は今日の我々をも引惹けずには置かない程に美くしくあり又深い内容を有する。殊に我々を圍む此世界の不完全と我々の人間的本性其者の中に潛める限界とを明かに自覺しつゝ靜かな完全其者を神に歸し、唯だ之に達せんとする憧れと努力とに純眞なる人間性を認める、謙遜にして優しいしかも希望ある樂天的な世界觀は希臘的精神の最も貴い表はれである。其にも拘らず他の希臘的思想と文化と同じやうに、之にも亦制限と運命とが免がれなかつた。既にヘレニズムの時代には哲學は實際的な教訓となり、かくも美しい希臘的精神が次第に忘られて行つた。併し近代に至つて、哲學の問題と從つて其内容とは著しく異なれるにもせよ、希臘人の抱ける哲學的精神が再び理解されて來たことは注意すべきである。殊に獨逸に於て發達した唯心論的哲學の中には古代の精神及び思想が新しい裝を着けて回復されてゐるのを見出すのに難くない。そして我々は、『凡て美しきものは永久である』といふ眞理をこゝにも再び學ぶのである。



無抵抗主義・百姓の眞似事など

生田長江

弘法大師がある時ひどく空腹を感じて、路傍の一農家へはいり、山の如く盛り上げられた、ふかし立ての里芋一つを乞ひ求められた。強慾なその家の老婆は、けれども、里芋ではなくて石であると言ひ張つて、大師の乞ひを頑なに斥けた。すると大師が去られて後、老婆自らそのお芋を口に入れようとした時、お芋は本當に石になつてゐた。今日でも其遺跡からは、お芋そつくりの形をした硬い石がいくつもいくつも出ると云ふ。

弘法大師に關係した、此種類の傳說は隨分色々とあるらしいが、基督についてもこれに似通つた、しかも一層あくの强い傳說の殘つてゐるのを、世間の人達、とり分けクリスティアン達はどんな具合に見てゐるだらうか。それとも、どんな具合にも見てゐないであらうか。

——朝早く、都にかへる時イエス飢えたまふ。路の傍なる一もとの無花果の樹を見て、その下に到り給ひしに、葉のほかに何をも見出さず、之にむかひて『今より後いつまでも實を結ばざれ』と言ひ給へば、無花果の樹たちどころに枯れたり云々——

これは馬太傳第二十一章十八節十九節の記述である。馬可傳第十一章十二節より十四節まで、同じく十九節より二十一

節までの記述も大同小異である。そして路加傳、約翰傳にはこの事件を記述したらしい何物も見出されない。

愛についての、復讎についての、呪咀についてのイエスの教訓を通觀して見ても、乃至それらの教訓を彼自身の生活の上に、如何にすばらしく具體化して見せてゐるかといふことを考へて見ても、あの無花果事件に描かれてゐるイエスは、何と云ふイエスらしくないイエスであらう。

しかも馬可傳の方には、葉のほかに何も見出し得なかつた理由として、『これは無花果の時ならぬに因る』とさへ明記してあるではないか。そして無花果の季節でもないのに、その果を求め、求めて見出さなかつたことの憤りから、その無花果の樹を呪咀するといふのは、あまりに念入りな沒分曉ではないか。あまりに身勝手な、蟲のよすぎる、殆んど賤劣に近い物の考へ方ではないか。

無花果の呪咀が、善意からにもせよ、惡意からにもせよ、兎に角故意の聖典改惡であるべきは、殆んど些の疑をも容れないと思ふ。

殊に路加傳第十三章六節より九節までの處を讀んで見れば、イエスが果を結ばぬ無花果に對して如何に寛大であるかを知ると共に、寛大を證明する筈の彼の言葉から、偶ま以て彼を殘忍な、復讎心の強い人格に造り上げてしまふところの、あの傳説のひねり出されたらしいことをも知るのである。曰く――

――又この譬を語りたまふ、『或人おのが葡萄園に植ゑありし無花果の樹に來りて果を求むれども得ずして、園丁に言ふ、『視よ、われ三年きたりて此無花果に果を求むれども得ず。これを伐り倒せ、何ぞ徒らに地を塞ぐか。』答へて言ふ、『主よ、今年もゆるしたまへ、我その周圍を掘りて肥料を施さん。その後、果を結ばゝ善し、もし結ばずば伐り倒したまへ』――

呪はれたる無花果の傳說を、格別不可思議にも思はないで、ただ安らかな氣持で讀み過ぎることの出來る人達は　イエスの言葉と行ひとによつて示された愛の敎が、とり分け敵に對する愛の敎が、如何にイエス以前の所謂猶太敎思想から遠いものであつたか、否如何にイエス以後の所謂基督敎（むしろポーロ敎と云つた方がいいかも知れい）思想とも調和しにくいものであつたかを、全く思ひ及ばないでゐるのである。

そしてそれらの人達の中にあつて、常人以上の嚴肅さと眞劍さとを以て、ひたすらイエスの敎に隨はうと心掛ける少數の殊勝人達は、レオ・トルストイ等と共に、所謂無抵抗主義といふ誤つた解釋に落ち込むのを常とする。

惡しき者に抵抗ぬといふこと、右の頰を打たれた時左の頰をも向けるといふこと、訟へて下衣を取らうとする者には、上衣をも取らせるといふこと、一里の道を行くことを强いられたならば、共に二里を行くといふこと、請ふ者に與へ、借りようとする者を拒まぬといふこと（馬太傳第五章三十九節以下參照）單に此等の戒めを守るだけで、心の中に相手をどう思つてゐるかを問ふことなく、單にかうした外的態度をとるだけで、所謂無抵抗主義道德の內容が出來るものならば、その所謂無抵抗主義道德は、新約の敎であるよりも先きに舊約の敎である。

なぜと云つてモーゼ第三書第十九章十八節には『自ら復讎すな』とあり、モーゼ第五書第三十二章三十五節には『主いひ給ふ、復讎するは我にあり、我これを報いん』とあり、箴言第二十五章二十一節二十二節には『もし汝の仇飢えなば之に食はせ、渴かば之に飮ませよ、なんぢ斯くするは熱き火を彼の頭に積むなり』とあるからである、

しかし乍ら、我がイエスが說いたのは、單にさうした外的態度をのみ問題にするやうな所謂無抵抗主義ではない。

イエスの敎にあつては、自ら復讎してはならないのみならず、神によつて復讎されることをねがつてもならないのである。換言すれば、敵に對して無抵抗の態度をとるだけでなく、眞心からしてその敵を愛しなければならないのである。そして、若し輕重を云へば、眞心からして愛することの方を、無抵抗よりも重しとしたに違ひない。從つて無抵抗は、愛す

るが爲めの無抵抗であるべきで、『熱き火を彼の頭に積む』爲めの無抵抗ではあるべきでないとしたに違ひない。

マタイ傳第五章四十四節には、『されど我は汝等に告ぐ、汝らの仇を愛し、汝等を責むる者の爲めに祈れ』とあり、ルカ傳第六章二十七節二十八節には、『われ更に汝ら聽く者に告ぐ、なんぢらの仇を愛し、汝らを憎む者を善くし、汝らを詛ふる者を祝し、汝らを辱しむる者の爲めに祈れ』とあるのである。

神の手を通して復讎し、熱き火を仇敵の頭に置かう爲めの、復讎好きな、執念深い、いかにも猶太人的な（私は一概に猶太人を憎惡したり、輕侮したりする者ではないが）舊約的無抵抗に對して、イエスの無抵抗が如何に赴きを異にした物であるかよ。

しかもイエスの無抵抗が如何に理解されにくいものであるかは、ポーロの如き人物にして尚ほ且つ、イエスの教をすてて舊約の教にまで引き返してゐるの一事を見ても想察出來るであらう。彼はロマ書第十二章十九節二十節に書いてゐる。――『愛する者よ、自ら復讎すな、ただ神の怒りにまかせまつれ。しかして『主いひ給ふ、復讎するは我にあり、我これを報いん』とあり。『もし汝の仇飢えなば之に食はせ、渇かば之に飲ませよ。なんぢ斯くするは熱き火を彼の頭に積むなり。』

ポーロの教が色々の點に於て、どれだけ宛かイエスの新約主義より舊約主義への引き返しを暴露してゐるのは、わざわざ指摘するまでもない事乍ら、この無抵抗主義道德に關する所謂猶太教徒的な、猶太人的な解釋の如きは特に注意して置くだけの價値が十分にあるかと思ふ。

私の尊敬するレオ・トルストイ及び其徒等は、勿論、神の手を通して復讎し、熱き火を敵の頭に積む爲めの無抵抗を目標にするほど、それほど舊約的もしくはポーロ的な立場にゐたのではなからう。

しかし乍ら、無抵抗といふ外的態度にのみ重きを置いて、それよりもずつと大切な衷心から敵を愛するといふ内的態度

を輕視してゐたらしく思はれる限りに於て、私は彼等がイエスの教を十分に理解し得ず、從つて彼等自ら實行生活の上にずつかり行きつまつてしまつたのを、むしろ當然の事のやうにさへ感ずるのを禁じ得ないのである。

そもそも、曾つてイエスが指摘してくれた如く、また今日殆んど總ての人々が承認するであらう如く、女を見て色情を起すのは、心の内に既に姦淫を犯してゐるのである。そして心の内に姦淫を超越することの準備がちつとも出來てゐないやうな、天分の薄い、もしくは修行の足りない人々が、強いて外的行爲の上に貞潔を守とうとするのは、餘りに價値のある事でないのみならず、往々にして甚だ危險有害な事でさへもあるのである。

それ故一生不犯を理想としてゐたイエスも、さうした生活を一般人に強いようとしなかつた。その點に於ては殆んど完全にイエスの精神を傳承したるポーロも、『若し自ら制する能はずば、婚姻すべし、婚姻するは胸の燃ゆるよりも勝ればなり』と言ひ、『されど淫行を免れん爲めに、男はおのおの其妻をもち、女はおのおの其夫をもつべし』と言つてゐる。

ところで、所謂無抵抗の問題に關しても、全く同樣の事が言ひ得られるではあるまいか。

人にして若し、敵に對して憎惡の情を起すならば、呪咀の念を抱くならば、彼は既にその心の中に敵と戰ひ、敵に復讐してゐるのである。從つて、所謂行爲の上に如何ほど所謂無抵抗の態度を取つてゐようとも、それは餘りに價値のある事でないのみならず、寧ろ往々にして危險有害な事でさへもあり得るのである。

なぜと云つて、餘りにも内生活と反對な無抵抗を自ら強いて行くのは、少くとも其内生活を一層陋劣醜惡にすることの有力な原因になり易いからである。又、より惡しき場合に於ては、その不自然なる無抵抗的態度がつひに維持しきれなくなると共に、突如爆發的に、驚くべき野蠻さと殘忍さとをもつた復讐行爲が犯さるるに至るかも知れないからである。

乃ち私は言ひたい――婚姻するは胸の燃ゆるよりも勝つてゐる如く、出來得る限りの人間的な仕方で以て抵抗するのはいたづらに相手を憎惡し呪咀しながら、無抵抗といふ形式的戒律を守るよりも勝つてゐると。又、人々が淫行に陷らない

爲めに、或は妻をもち、或は夫をもつことが必要である如く、往々發作的に殘虐なる對仇的態度に出るのを避ける爲めに、平生からして柄相應な仕方に於ける防衞攻撃等を、餘りに嚴しく自ら禁じないことも必要であると。

愛するに、對仇敵道德の眼目は、抵抗しないといふ外的態度にあるのでなくして、衷心から、その隣人を愛する如く愛するといふ内的態度にあるのである。

處で、外的に抵抗しないといふことが、如何に割合にたやすく（特に、女性的につらあて心理を有する人々、猶太人的に復讐好きな、執念深い人々にとつて）して、衷心から敵を愛するといふことが、如何に本當に困難であることぞ。

衷心からして敵を愛することが出來た時、彼にとつてその敵はもはや敵でない。そして（總ての敵がもはや敵でなくなり、一切がただ隣人ばかりであるやうになつた時、彼は眞に『天の父の全きが如く』全くなることが出來たのである。

衷心からして敵を愛することが出來、一切の物を隣人として愛することが出來た時、その愛の力は不可思議である。恐らくは神その物の如く不可思議である。

諸君は、さうした不可思議な力の持主を打ち据える爲めにふり上げられた腕が、忽ち何者からか筋をぬかれてしまつたことの傳説を讀まなかつたか。或は白刃が段々に折れて飛び散つたといふやうな傳説をも讀まなかつたか。或は飢えたる虎が、さうした力の持主の前に小猫の如く横り　その人の掌からつばをねぶつたといふやうな傳説をも讀まなかつたか

勿論　さうした不可思議な力の持主も、イエスの生活の最終の部分に於て、否彼の生涯の全體に於て、恐らくは最も花花しく示されてゐる如く、彼を責むる者の爲めに遺憾なく責められ、彼を呪ふ者の爲めに遺憾なく呪はれ、彼を辱むる者の爲めに遺憾なく辱められ、そしてその儘になつてしまふやうに見えることは希れでない。

しかし乍ら、そのやうに見えるのが、單にそのやうに見えるだけであつて、まことは彼の『世に勝つた』ものであるこ

とを認識し得る人々は幸なるかな。その事を信じ得る人人は幸なるかな。

遠くから、近くから、私のこれまでに見た無抵抗主義者等の十中八九までは、その敵に對してのみならず、その隣人に對してすらも愛を感ずることの、特別にむつかしさうに思はれる人達であつた。そして彼等の所謂無抵抗は愛からであるよりも、憎しみからであり、呪咀からであり、復讐からであるやうに思はれた。

いや、それどころではない。私の見た無抵抗主義者の中には、他から好遇されることよりも、むしろ虐待されることに滿足を感ずるところの、マゾヒズム的傾向を有する性格の、往々にしてあることをさへ告白しなければならぬ。

要するに、我々は先づ隣人をも、敵をも、總ての者を、衷心からして愛することを學ばなければならぬ。この肝要事をさし置いて、いたづらに無抵抗といふ戒律に急ぐのは、眞に笑ふべき本末顛倒事である。

道徳家として無抵抗主義を唱道し、實行し、或は實驗して見て立派に行きつまり、條件つきの無抵抗主義、或は條件つきの抵抗主義にまで引き返してしまつたところのレオ・トルストイも、人類生活の現實を前にしたる文化批評家、社會批評家としては、全く前の場合と比較にもならないほどのめざましい成績を擧げてゐる。

トルストイは文化に對する文明を否定し、田園に對する都會を否定し、農業に對する商業を否定した。これらの否定は勿論、クロポトキンからも、ラスキンからも、モリスからも、時としてはニイチエの如き思想家からも聞くことが出來ないではない。しかし乍ら、我々がトルストイからきいたところの否定ほど、直截な、簡明な、熱烈な、執拗な、戰鬪的なものは希れであらう。從つてあれほどの大きな世界的反響を見出したものも希れである。

文明に對する、都會に對する、商業に對する彼の反感憎惡を、象徴的に表現するものとしてトルストイは、出來るだけ

農民生活に近い生活をやらうとした。そしてあした百姓の眞似事も、彼自身に謂はせれば、單に彼の思想的傾向の象徴的表現であるのみならず、更に彼のなし得る、否一般人類のなし得る唯一の正しい生活形式として、擇び取られたものである。

ところでトルストイの追隨者等（特に日本に於ける）は、文明に對する、都會に對する、商業に對するトルストイの如き堪え難き反感憎惡を、その十分の一百分の一をも有つことなしに、けれども甚だたやすくトルストイの百姓の眞似事を眞似るのをつねとする。そしてさうした百姓の眞似事の眞似をやり乍ら、彼等自ら、唯一の正しい生活でないまでも、最も正しい生活でさへないまでも、兎に角正しい生活を生活してゐるといふ安神と、自信とを持ちつゞけて行くのである。しかし乍ら、今日の世界に於て、百姓の眞似事の眞似事は、百姓の眞似事は、否百姓生活その物も、果して唯一の正しい生活と云へるであらうか。最も正しい生活とさへも云へるであらうか。否單に正しい生活とさへも云へるであらうか。

更に進んで云へば、商業主義資本主義の汚毒が、人類の經濟生活の隅から隅まで、寸分の隙間もなく流れ込んでゐる今日の社會に於て、少くともトルストイ的良心から判斷して、苟くも正しい生活、正しい勞働と云はれるやうなものが、ただの一でもあり得るであらうか。

少くともトルストイ的良心からすれば、今日自己の勞働によつて生活しないで、資產によつて生活するのが恥づべき事であるのみならず、單にさうした資產を有つてゐるだけでもが、決して十分に正しい事ではあり得ないのである。

偖て本來無資產の者、もしくは自ら無資產者の地位に下つた者が、今日の勞働市場へ、彼の勞働を賣るべく出かけて行くとする。

勞働が餘りにも苦しいものであり、勞賃が餘りにも廉いものであるのは、改めて說くまでもない。しかも勞働の苦しさと報酬の乏しさとに出來るだけの我慢と讓步とをなし、その上往々他の求職者等をだしぬくことの心苦しさを堪へ忍んで、

辛うじて見出し得るところの職業は、勞働は、そもそも如何なる性質のものであるか。

或は、廣告費が資本の大部分を占めてゐるところの、無益にして有害なる化粧品、賣藥、飲料水等の製造工場に於ける勞働である。少くともそれに近い種類の勞働である。

或は寶石、眞珠、貴金屬等のまがひ物、贋物を製作する處、詐欺的に賣却する處に於ける勞働である。少くともそれに近い種類の勞働である。

或は、公許の賭博所であるところの競馬場、資本主義的害惡の中樞ともいふべき取引所、人間が人間をさばく裁判所、人間が人間を監禁し殺害するところの監獄刑務所、大規模の殺人を練習するところの兵營、それらの物の建造、經營、執務に關係した各種の腦力的肉體的勞働である。少くともそれに近い種類の勞働である。

或は三十萬圓と價した獵犬の世話係となり、折々馬鹿殿樣の御伴を仰せつかり、無益の殺生の手傳ひをして廻るのである。少くともそれに近い種類の勞働である。

或は、丁年にも達しないやうな若者を遊廓へ送り込み、頭の禿げた老人を待合から連れ歸る車夫、自動車の運轉手の仕事である。折々奥樣へ内密に、妾宅への使を命ぜられたり、その又奥樣から、その妾宅の探偵を命ぜられたりするのさへ、默つて我慢しなければならぬ玄關番の役目である。少くともそれに近い種類の勞働である。

——以上の如く、トルストイ的良心から見て十分に正しい生活、正しい勞働と云はれないやうな物を列擧しながらも、私はまだ農業に關係した勞働について少しも語らないでゐる。

人が今農業勞働に從事するとする。彼にして若し、煙草や、桑の如き奢侈品贅澤品の原料を作ることを好まないほどの、トルストイ的良心を持ち合せてゐたとしたら、彼は今日の農夫として明白に無資格者でなければならぬ。

彼にして若し、寒中に茄子や苺を製造（これがもはや農業でなくして工業であることは、既に多くの人々が言つてゐ

る）するのが、餘りにも都人士の間違つた生活を手傳ふものであるとなし、頑くなにさうした營利主義的計畫を斥けて行くとしたら、特に都會に近く生活してゐる場合、彼は今日どうしてくらしを立てゝ行くことが出來ようぞ。

それどころではない、彼にして若し、今日多數の百姓共のなしてゐる如く、果物一個、野菜一把についてゞも、需要者の足下を見ては、本當に目の飛び出るやうな高値を吹きかけるほどの、小商人根性と圖々しさとを持ち合せてゐないとしたら、彼の百姓の眞似事は單に百姓の眞似事たるに止まり、彼の實際的生活手段とは到底なり得ないであらう。

要するに、今日に於ける農業は半ば以上を商業化されたところのものであり、今日の農民はその手足に於てのみ當時の儘の農民であるけれど、その精神に於て殆んど完全に商人となりきつてゐる。そして改めて云ふまでもなく、彼等がそれほどまでも商人根性になつたのは、資本主義經濟組織の脫ることを許さない影響であつて、實際に止むを得なかつたのである。

私は明治十五年、多少の餘裕ある地方の小地主の家に三男として生れた。父は縣會議員なぞにもなつて、相應活動した方の人間だけれど、一面、よそへ出ても牛肉を口にしないほどの傳統主義者であつた爲め、引きつゞきやらせてゐる自作農の仕事を、ひまある毎に自分でも手傳ひ、私達小供にも手傳はせた。だから、明治三十年頃までの田舍に於ける農民生活が（自作農小作農を通じて）商業主義資本主義の濁流から如何に超然たるものであり、少くともその點に於て、如何に所謂正しい生活に近い物であつたかを、かなりの程度にまで知つてゐる。或は當時の追想を土臺として今日から推定することが出來るのである。

そして私が學校生活を終つて所謂智識階級の一人になつた頃から、私の父、及び彼の相續者等は種々なる事情と原因とにより、急轉直下の勢で、先祖傳來の土地をも手ばなさねばならなくなり、この十數年以前からは殆んど無資産となつ

てしまつたのであるが　それにもかゝはらず、頑なに傳統主義者であるところの父及び父の相續者等は、農業といふ勞働をどうしても思ひ切ることが出來ず、つひに小作農にまで身を落しながら、依然として農民生活を持續して來た。

それ故、三男に生れたとは云ひ乍ら、長男以上の經濟的責任を　少くとも心持に上に經驗させられて來た私は、この十數年來の田舍に於ける農民生活すらもが、如何に從前と異つた物になり、如何に商業主義資本主義的濁流の爲めに押し流されてゐるか、特に小作農の地位が如何なるものになつてゐるか、一口に云へば、今日の農民生活がトルストイ的意義に於ける正しい生活から、如何に遠いものとなつてゐるかについて、殆んど單なる觀察者の見地からでなく、むしろ親しく直接に體驗し、むしろ深刻にすぎるほどの智識をさへ與へられて來てゐるのである。

乃ち私が、大抵のトルストイ派以上にさへ、彼の文明否定、都會否定、商業否定に共鳴しながらも、尚ほ且つ今日の現實なる社會組織の下に、生活手段として直ちに農業勞働を擇ばないといふのは、特にそれが私の現在營んでゐる著作家生活より以上にさへ商業化した、商業主義資本主義に汚瀆された物になりきつてゐるからである。そしてさうした汚毒から超然たる勞働、少くともトルストイ的良心と矛盾しないやうな種類の生產勞働に從はうといふ、餘りにも蟲のよすぎる計畫を立てる時、農業は今日單に私共を飢えしめるにすぎない物となるからである、

耆那教は佛教とほゞ同時代に印度に起り、佛教がその鄕土を逐はれてしまつたのに對し、引きつゞき國內に殘存して、今日尚ほ中印度に於て百三十餘萬の信徒を有するところの大宗教である。

その耆那教徒等にとつて、今日最も重要なのは殺生戒を嚴守することである。そして農業すらも微生物の生命を奪ふこと甚だしきに過ぎるものとして、彼等のやはり忌避しなければならないところの職業である。乃ち彼等はなるべく田園から都會へ出て、商業に從事することにしてゐる。しかも金貸業は、殺生戒に觸れること最も少いものであり、從つて最も正

しい生活、もしくは唯一の正しい生活であるといふ風に考へ　その大多數が皆金貸業を營んでゐるとのことである。今日の社會制度經濟組織の下に行はれる農業勞働が、唯一の正しい生活方法と考へ、そしてその生活の眞似事に安んじてゐられる、一部のトルストイ派思想家等のオメデタサと、かの耆那教徒等の金貸業觀に於けるオメデタサとの間に、かなりに大きな一つの共通物が存在してはゐないであらうか。

今日の資本主義社會の次ぎに來なければならない、否、來させなければならない新社會が、如何なる構造、組織、形態等を有つてゐるだらうかについて、現在のところ何人もまだ、十分にはつきりした事を言ひ得ないのは非常に遺憾である。

だが、最近數世紀の間、人間の營利衝動をして餘りに暴威をふるはしめすぎたのが、現代の社會惡に根本の原因をなしてゐるといふこと、從つてさうした營利衝動を出來るだけ禁遏し、何等かより人間的な、より道德的な別種の衝動に、新しく支配者の地位を附與するのが、新社會建設の最も基礎的な事業であるといふことを考へれば、少くとも新しき社會に於ける第一の指導原理が、重商主義に對する農本主義の如きものであるべきことは、ほゞ推定し得られるやうにも見える。

重商主義に對する農本主義の如きもの―私は特に『如きもの』といふやうな曖昧な言葉遣ひをして置かざるを得ないのである。なぜと云つて文明と、都會と、商業との間から救ひ出された後の人類が、その殆んど全部を擧げて從事しなければならない、より健全なる、より人間的なる生産勞働は、今日に於ける農業と全然別種なものであるのみならず、更に過去の、恐らくは最善なる時代の農業に比べてさへも、かなり趣きを異にしたものであるかも知れないからである。そして農業といふやうな舊い型にはまつた名稱をそのまゝに冠することが、餘りにも不適當な、餘りにも不便なものに感じられて來るかも知れないからである。

流行、奢侈、必要の或る理說

杉森孝次郎

流行は奢侈よりも、また必要よりも、複雜な考察を値ふ一面を持つ。奢侈論よりも、また必要論よりも、流行論の方が當然、餘計に興味をそそると考へられる一面の理由もある。

流行が同時に奢侈を意味する場合はあるが、すべての流行が必ず同時に奢侈を意味するとは限らない。イギリスあたりで、トップ、ハットすなはちいはゆるシルクハットが以前ほどはやらなくなつたり、フロックがすたつたりして、小ざつぱりした平服を着用する機會がその代はりに殖えたことなども、一とつの流行と見られないではないが、これは、多くの場合、奢侈をば同時に意味しない。ちよんまげがざんぎりに讓位したり、女の髪のゆひかたがそれからそれへといくらかづつ變遷推移の跡を示すことなども、流行のそれだけの變遷推移と見られないではないが、それは必ずしも同時に奢侈をば意味しない。輕便、簡易、省勞したがつてまた省費を意味する流行もあるのだ。

一とつの流行が、その社會のすべての人々の自由の或る増大を意味するものである場合には、それはその社會の風俗のそれだけの進化を意味する。

流行が同時に奢侈を意味する場合がある。一、二、三年前に買つた肩掛、外套、着物類が、色も褪せず、地もいたまない

が、それらのものの布地、色合、模樣などの流行が變はつたために廢用にされて、ことしの流行ものが買ひ重ねられ、かくの如くにしてそれらのものが一枚も着古るされずして年々の如くに買ひ改ためられる場合の如きはこれに屬する。お齒黑が白齒に、剃り眉が剃らず眉に、丸髷が束髮に、曳き摺り裾が短褐に、また一種の束髮が他種の束髮に流行權を奪はれて行くが如きは、手間や費用がいくらか減つたり、減らずとも增さなかつたりする方角をさす性質の流行現象の或る生滅々起であると同時に、甚だしば〳〵、通則的にしば〳〵、そこには、單なる實用以外の興味、したがつて狹義の純藝術的興味から考へても、すなはち生活全體の興味から考へて、方法と形式がいよ〳〵單純化し、結果と內容がいよ〳〵豐富化して行く進化的原則が多少看取される。

しかしながら、流行のうちには、一見顯著的に實用意識にもとづくものと、一見顯著的に藝術意識にもとづくものと、一見してどちらとも見わけがつかぬ仕方に於いてそれらの兩意識の協働にもとづくものとがある。

純實用意識的流行は奢侈性を極小限に、そして必要性を極大限に持つ傾向を必ず帶んでゐる。行燈がラムプに、ラムプが電燈に流行變はりした如き、また私用人車が私用馬車に、私用馬車が私用自動車に流行變はりした如きは多少ともこの部類だ。

純藝術意識的流行は奢侈性をばどんなに高い程度にも持ちうると同時に、必要性をばどんなに低い程度にも持ちうる。本質的に實用意識にもとづく流行は奢侈らしく始まつても、進步的社會にあつては、次第に必要性を顯著にしつゝ普及し行く必然がある。わが國に於ける電燈、アメリカに於ける自動車はこれを例證する

本質的に藝術意識にもとづく流行は最初から最後まで一貫して奢侈だ。それには超人意識がある。それは、多數の隣人から追つ付かれさうになれば、身をもがいて一段の高處へ逃げる。過去及び現代の通般的經濟組織、すなはち個人的及び團族的財力別公許、もしくは財力に於ける個人的及び團族的自由競爭の或る公許を一事情とする社會に於いては、それは、

餘裕には及びもつかない高價品をそれの不斷の安宅とし、逃げ場とする。

純眞藝術意識は、表現及び鑑賞の或る本能であつて、財力的卓越となんらの本質的に必然的な關係を有しないばかりか、社會そのものとさへもなんらの本質的に必然的な關係をば有しない。「木曾山へ流れ込みけり天の川」の表現及び鑑賞はこれの一例證たりうる。

しかしながら、流行は、社會と本質的に必然的な關係を或るいちじるしい程度及び樣式に於いて持つ。流行は、それ自身、第一に一とつの社會的事實だ。どんなに純眞なる藝術意識にもとづく流行であつても、それが一とつの流行であるからには、それはすでに一とつの純藝術意識的事實であるよりも一とつの純社會意識的事實だ。それは、一とつの藝術意識的事實としての資格に於いては、一とつの社會意識的事實としての資格に於いてと比して、どれほどか餘計に不完全でもあり、不純粹でもある。財力的優越意識を直接の一條件とする流行が流行の一大部分を形成するといふ事實は、こゝにそれの一說明を見いだす。或る種類の流行は、實に、財力的優越を社會的に誇示する本能の一發現にほかならない。流行は、さる場合には、財力誇示の一手段であり、一機會であつて、それ自身に最後の目的をば持つてゐない。藝術意識は、しかるに、それ自身に最後の目的を持つ興味及び活動にほかならない。

寶石や貴金屬類が代表する種類の流行は、おほむね、藝術意識を手段として利用した財力誇示意識だ。目的は、その場合、財力誇示にあるのだ。その流行は、それゆゑに、實は、財力誇示としての流行にほかならない。

現代の多くの女性及び男性は、もしも瑪瑙が、あすにも、翡翠よりも高價となり、もしも赤銅が、あすにも、プラチナよりも高價となつたならば、かの女らの帶どめには爭うて瑪瑙を買つて着け、かれらの時計の鎖には爭うて赤銅を買つて着けるに相違ないと、この理由によつて確實に推斷される。

或るものが財力誇示に最後の目的が置かれてゐる行動であるならば それは或る藝術意識的行動だが、その藝術意識的

行動は、財力誇示としての藝術意識的行動だ。もしも財力誇示は淺粗な趣味だといふならば、その藝術意識的行動は淺粗な藝術意識的行動だと、したがつて、いはねばならん。現代に於ける流行の一大部分はその「或るもの」だ。

「米値段くつくと下る暑かな」に對するわたくしの評價は、それに對する世間の評價によつて上下されべきでない如くに、もしも翡翠やプラチナを美意識によつて愛する人があるならば、かれは、それらのものの市價、相場、社會的評價によつてさうするのではないのだから、これらの昂騰や下落によつて増愛したり、減愛したりする筈はない。寶石品や貴金屬品に代表される種類の流行が藝術意識としての資格をどれほど持つてゐるかは、かくして容易に知られる。

實用意識と藝術意識の協働にもとづくらしく見える種類の流行にあつては、その兩意識の割合によつてそれの必要性と奢侈性の割合が決定される。

奢侈もしくは贅澤は、それが人間の或る本能の自然的自己主張であるといふだけの意味に於いては、惡ではない。それは、その限りに於いては、それだけの善だ。奢侈は、しかしながら、一個人の全生活に於けるそれの位置、及び一社會の全生活に於けるそれの位置如何によつて、個人倫理的見地からしては、あるひは個人倫理的一善として、あるひは個人倫理的一惡として評價され、社會倫理的見地からしては、あるひは社會倫理的一善として、あるひは社會倫理的一惡として評價される。

一個人の瞬間的奢侈がかれの將來的窮乏を、それを原因づけるかたちに於いて、意味する性質のものであるならば、そしてかれは、充分に自覺したかたちに於いては、その將來的窮乏を欲しないやうに出來てゐるならば、その奢侈は個人倫理的一惡だ。

一社會の部分的奢侈が、その社會の殘餘部分の窮乏を、あるひはそれを原因とする、あるひはそれを手段とする、あるひはそれを機會とする、あるひはそれを結果とする、あるひはそれを目的とするかたちに於いて、意味する性質のもので

あるならば、その奢侈は社會倫理的一惡だ。その奢侈する部分は單數人でもありうる。それはその社會の全成員數以下のいかなる複數人でもありうる。また社會は空間的にだけでなく時間的にも存在するがゆゑに、それは、その社會の全たき將來以下のいかなる有限期間にも於ける全成員でもありうる。

夫婦暮らしとしての社會に於いて、一方の奢侈が他方の窮乏を意味する性質のものである場合があるとするならば、それはいふところの單數人の場合の一例だ。いはゆる搾取階級、ブルジョワ階級、消費主義階級が文字通りのわるいかたちに於いて存在するとするならば、それはいふところの部分的複數人の場合の一例だ。もしも歐洲戰中の日本國民のすべてが、歐洲戰後の日本國民の窮乏を意味するかたちに於いて奢侈したとするならば、それはいふところの全成員の場合の一例だ。

一個人の奢侈がかれの全生活の本質的目的もしくは統一的利福を助けこそすれ、妨げない性質のものであるならば、それは個人倫理的一善だ。

一社會の奢侈がそれの全生活の本質的目的もしくは統一的利福を助けこそすれ、妨げない性質のものであるならば、それは社會倫理的一善だ。現代の社會は往古の社會に比して、すくなくとも科學及び技術に於いて、實は教育、道徳、哲學等に於いても、著大なる發達を遂げたといふ關係に於いて、大體に於いて奢侈だが、これは、先代をも、後代をも、當代のなに人をも、利己的に犧牲とした、またする、性質のものではないといふ部分が注意される限りに於いては、社會倫理的一善だ。

しからば、本質的意義に解したる奢侈とはなにか。それは物質的消費が、それが伴なひもしくはもたらすといふかたちに於いて、意味する快樂または幸福を目的とする生活または行爲をいふ。しかし、これになほ多少の條件がつく。その物質的消費は、費用のかかる性質のものであるほど、またその費用が無制限であるほど、それから、その消費される物質がまたそれの種類及び數量に於いて無制限であるほど、且つその消費しかたがまた無制限的であるほど、したがつて浪費的でもあれば濫費的でもあるほど、それは奢侈としての資格をいよ／＼完全にする。

奢侈は、實に、それ自身だけの性質に於いては、自由のそれだけの自己主張及び自己實現にほかならない。奢侈善惡論または奢侈正邪論は、かくして、人格的全目的及び社會的全目的の見地からしてのみ最も有意義に成り立つ。心理的には、奢侈はいつでもそれだけの善、すなはち快樂または幸福であるときまつてゐる。人格的全目的及び社會的全目的が、それだけの善によつていかに滿足させられうるかが正當に問題とされる限りに於いて、奢侈は評價の原則ではなく一客體だ。奢侈の價値は奢侈自身によつてはつひに決定されない。それは奢侈以上の興味によつて決定されるほかない。

必要は能力と目的を條件とする一とつの事實だ。能力と目的が小さければ、必要はしたがつて小さい。必要は經濟によつて、そして奢侈は藝術によつて、或る理解を條件として、代表される。必要は基礎條件だ。奢侈は目的價値だ。先づ必要を滿たさないでは、目的價値は最も有意義に、すなはち完全には實現されない。

たとへば音樂的能力及び興味が高度に發達してゐる個人及び社會にとつては、相當の音樂は、それがさほどに發達してゐない個人及び社會にとつては不必要、奢侈として成り立つにもかかはらず、必要として成り立つ。しかし、音樂的能力及び興味がどんなに高度に發達してゐる個人及び社會であつても、健康が必要とする程度の衣食住を缺くわけにはゆかない。生物學的人格として生きる必要と、文化學的人格として生きる必要とが同時に兩立しない場合には、常則としては、文化學的人格として生きることを目的として、生物學的人格として生きることを先づ可能に、現實に、するほかない。人格としてさうだから、社會としてもさうだ。

常に必要から奢侈へ、しかも全人格的及び全社會的に、ここに人生進步の法則の一記述が完成されてゐる。

以上は、流行、奢侈、必要を、それらの言葉の適用される或る場合だけを特に選んで、多少概念化し、多少理論づけて見たのだ。

その或る場合とは、最近のわが政府の一法案が自然に國民の想像を刺戟したといふ事實によつて代表される、きはめて有限的な性質のものだ。(七、二三)



現代文明批評

野口米次郎

(一) 隅田川

私はなにもテームス河畔を飾るクレオパトラス・ニードルと同程度の價値あるものを隅田川に建てよと論ずるものでない。(讀者諸君はこの唐突な書出しの文字に接して聊か面食ふであらう 私はそれを知つてゐる。私はいつも出しぬけに語ることを喜ぶものだ。 私はこゝで隅田川を問題として論じてみたい)。假令隅田川にテームス同樣の價値がないとしても…主として底の淺くて大きな船の出入を許さない關係上、隅田川の價値はテームスのそれの幾分の一しかあるまいが…倫敦がテームスを中心として存在してゐるやうに、私は隅田川を人間の脊髄同樣に重要視して東京といふ都會をそれから擴がり延び生長せしめたい。 徳川時代に於ける隅田川は今日に於ける隅田川より遙かに尊重されて居つた、敬意を拂はれて居つた今日の日本人より過去の日本人は遙かに隅田川の價値を知つて居つた。 過去の日本人は…過去といつても僅か百五十年になるかならない以前の日本人は晝夜の區別無く永劫に流れる隅田川の水を賢明に利用する術を理解して居つた。 その點だけを見ても彼等は今日の日本人より百層倍も偉い日本人であつた。 私は無理にも舊江戸は隅田河を中心として萬事が消長したと論ずるものでないが、過去の日本人は如何に水が尊いもので單に社會的文化の上からいつても水を背景として都會に新鮮味ある生氣を加へるものだといふ眞理を知つて居つ

たに相違ない。然るに御維新後明治になつて、東京の社會的文化の中心は段々と隅田川を離れて地質學の言葉を用ゐると岩滓で、文化が斷片となつて全體の上に撒散されて仕舞つたがため、文化的雰圍氣は極めて稀薄なものになつて今日に至つて居る。隅田川に滔々と流れる水は錢や金で買はれるものでない。この尊い自然を適當に利用し、十分に尊敬する力を失つた時に、日本人……日本人といつても東京の日本人であるが……その文化的活力は萎靡するに至つたのである。愚なる明治時代の日本人は尊い自然の祝福から遠ざかつた。都會建設の上から見て この位詰らない話はない、私はなにもかも過去の日本人を尊敬するものでないが、過去の日本人が隅田川を賢明に利用したといふ點では英國人がテームス河に對する態度に比して何等の遜色が無いと信ずる。テームス河に十分な働をさせる點で英國人が文明人だといふとが出來るならば過去の日本人は等しく文明人であつたと云へる。さうして東京の文化的中心を隅田川から離れさせて平氣で居る今日の日本人は、決して文明人といふ資格が無いと云はねばならない。

論者は私にいふであらう……軍艦一つも出入することとさへ不可能な東京灣と直接關係して居つては隅田河の實際上の價値は大なるものでない。一種のロカル・ストリーム以上でないと。もとより私はその點を知つて居る、然し東京灣築港問題がひさしい間の懸案であり乍ら、未だ實際の上に何等の着手を見ないといふことはどうしたことだ。東京市民にその工事に堪える資力が無いのであるか、又日本の國庫にその工事を援助する資力が無いのであるか。要は東京市民に『斷』の一字を缺いて居るに起因して居る。亂暴な言葉ではあるが、『腑抜けな人間が居る、その名前は東京人だ』といひたい。又考へると、『勿體なくも過去に於て隅田川を捨てた東京人だ、その東京人にどうして捨てたものに生氣を入れて活用する術があらう』ともいひたい。由來日本人は過去の價値の上に新しい價値を加へる力がない。古いものは捨てゝ新しいものを臨時に作らうとするのが日本人だ。過去の努力を無視して新奇の仕事に力を浪費して何とも思はないのが日本人だ。私が手近かに一例を上げると、東京灣に宛も死んだ蜥蜴が天日に曝らされてゐるやうな屍體を出して居るのが例のお臺場だ。この位人間の努力を亂暴に浪費した醜い證據は他に澤山は有るまい。然し私はそれが作られた時代を考へて今日から無同情に否定し非難さるものでない。私がこゝで一矢放つてみたいと思ふ點は、どうして東京人はこのお臺場を利用する方法を講じないのであるかといふことだ。若しこれが倫敦や

巴里の附近であるとするならば、英國人や佛蘭西人は決して打棄つては置くまいと私は信ずる。さし向け英國人や佛國人であるならば、お臺場に澤山の樹木を植ゑるであらう。底が淺い乍らも何とか工夫して、夏の日曜日の如きは、遊覽船を簡單に出して一日の涼を市民に取らせるには、持つてこいの場所であらうと思はれる。都會建設は何も無いものを作るといふことばかり意味してゐない。已に存在して捨てられて居る物を活用する點から始まらねば駄目だ。又これ位手近に効果の擧ることは無い。外國人から云はせると、日本人は智識に富み工夫力に豐かだとなつて居る。然し日本人の一人である私から見ると、日本人位、よしんば外國人がいふ如く利口な人間であるとしても、持つて居ると云はれる智識を實行するに遲鈍な人間は無いのである。日本人は議論倒れの國民であるかのやうに見えるが、人に誇ることが出來る程度の議論の文學も無い。さうして見ると日本人の議論は畢竟井戸ばた會議の議論のみである。私は井戸ばた會議の論客を輕蔑するものであることを斷言するものである。

私は今論を後にもどして、底の淺い東京灣との關係上隅田川に實際上大きな價値がないとしても、それは私の既に語り又これから語らうとする所を打破ることが出來ない。隅田川の海との關係は私の重要視する所でない、それは私が要點として論ずる所のものでない。私のこの議論は、なぜ今日の日本人は隅田川を文化的に利用し尊敬して都會美の背景とさせないかを詰らんとするのである。隅田河を少くも文化文政時代の日本人が取扱つたやうに取扱へといふのである。百幾十年前の東京人即ち江戸人の社會的生活は隅田川と密接の關係を保つて動いたやうに、今日の東京人も一度離れた隅田川へ再び歸つてはどうだと助言せんとするのである。年に一度の『川開き』でその存在を認めようとする行爲は、過去の日本人の生活にかくも大きな歡喜を與へた川に對する適當な所置でない。私は大きな聲で警告したい、曰く倫敦人に對するテームス或は巴里人に對するセーンのやうに、東京人は隅田川を背景とせよ。或は前景とせよ、又或は中心とせよ、さうして隅田川を人情化させよと。過去の隅田川は人情化して居つた、故に市民と一緒に笑い泣き又雜踏した。然るに今日の隅田河は一錢蒸汽の散歩場である、裸體で汚い船頭の運動場である。東京といふ都會の文化的呼吸は隅田川の面に觸れないその皮膚を撫でない。彼等兩者は同じ言葉を語らない、私はこれを遺憾するものである。私は彼等の關係を百年幾十年の以前に戻らせたい。私は東京をして隅田川を中心として、新

都會を建てさせたい。

如何に過去の江戸人が隅田川を愛撫し尊敬し、又如何に過去の隅田川がその時の市民に喜ばしい便宜を與へたかは、今日殘つて居る澤山の繪草紙や浮世繪を見ると容易にそれを知ることが出來る。兩岸の風景と風景との間に時の世態人情を描いた讀物の繪は十指や二十指で屈することが出來ない。冬の雪景色の上に於てよりは夏の夕凉の場所として隅田川はその本領を發揮して居るといふことは云ふまでもない。所謂浮世繪師はたれかれを問はず皆なこの夕凉を題として隅田河の繪を描いて居る。中にも歌麿は立派な三枚物を描いて居る。廣重の『兩國の花火』は彼の獨壇場であるが、兩國から上へと溯つて永代吾妻橋、三圍に眞乳土山、山谷堀に水神の森、この隅田川が無かつたならば廣重の繪は少くも江戸名所の上では淋しいものとなつて仕舞つたであらう。いつの頃から始つたかは知らないが、昔に於ける兩國の花火は今日の一夜だけの催ではなく、夏の間長きに渉つた催であつたと書物で讀んだことがあつたと記憶して居る。今日の『川開き』のやうに喧囂を極めたものでないけれども、餘裕のある江戸人は遊船を河上に浮べて納凉と花火見物を同時に味つた靜かで趣味のある詩的場面が私共の想像に浮かんで來る。いつ頃までの狀態であつたかは知らないが、德川時代のある時までは、この隅田川の兩岸は欝忽たる樹木で蔽はれて居つたさうである。この樹木の幾部分でも今日まで殘つて居つたならば河の兩岸の風致はどんなに良いだらうと思はざるを得無い。日本人が樹木を伐採するのは惡い癖だ。實際日本人は昔から伐木の常習犯だと見へる。少し話が横へそれるが、私が今住んで居る中野方面でも月々樹木が伐採されて行つて、十年前に出て居つた土地の趣味は今日では僅かに想像することが出來るのみである。かういふ惡癖、かういふ無智な行爲を持つて居る國民がどうして文明人だと云ふことが出來やうとさへ思ふことがある。如何なる森林の狀態が昔の隅田川を飾つて居つたかは想像することが出來ないが、確に今日河畔の公園として許すことが出來る所のものであつたであらうと思ふ。私のやうな隅田河畔を公園とせよと主張するものに取つては、昔こゝにあつたといふ森林を考へると今更の如く殘念に思はざるを得無い。

今假りに私が倫敦でテームス河に掛つて居るウエストミンスター橋上に立つて居ると想像する。こゝは昔詩人ウオツウオースが瞑想の歩みを運んで憂愁の頌をあげ『麗はしい倫敦であるわい』と叫んだ場所だ。私は果して倫敦がウオツウオ

ースの言葉通りに麗はしいかどうかは知らないが、橋下を流れるテームス河の水は綺麗だ。橋上や橋下を右や左、前や後へと飛ぶ鴎を見て居ると、『何といふ平和な都會だらう』といふ感が起る。又朗かな聲で響いて來るビック・ベン（議事堂の大時計）の時の鐘を聞いて居ると、時代は幾百年前へと逆戻りしてゐるやうに思はれ、この橋の袂で騒がしい英國の政論が闘はれて居るといふことを誰が想像されよう。橋から議事堂を左へと廻つて歩むと、そこに苔蒸すゴシック造りのウエストミンスター寺院が時の壓迫を冷笑し乍ら巍然として立つて居る。諸君、戸を排して寺院の内へ入つて見給へ、黒衣の『孤獨』が思想から思想へと聲の無い歩を運んでゐるのを感ずるであらう。又諸君はこゝで平和な法悦はたゞ寂しい祈祷から得られるものだとも思ふであらう。私が『私は時と場所の觀念を離れた一小蛾、沈默が傷付けられんことを恐れて飛び得ない、たゞ立止つて居る』と書いたのもこの寺院内に於てゞあつた。こゝで得られるやうな深漠寂莫な心持は世界いづこへ行つても感ずることが出來ぬであらう。

私は今ウエストミンスター寺院を離れて所謂エンバンクメントを歩きウオルタールー橋の方角を向いて居ると想像する。テームスの恐ろしく大きな堤防は英國人氣質其物のやうに手堅く出來て居る。右手にゆる〳〵と流れる河上には澤山の大船小船が走つて居つて、私は已に音に名高いクレオパトラス・ニードルを過ぎ頭を擧げて遙にセントポール寺院の巨大な圓天井を眺めるであらう。私はこれ以上テームス河畔の光景を語らない。何故といふに、テームスを語るのがこの文の主意でないからである。然し私が少しでも此處でテームスを語らなければならない理由は、倫敦がテームスに於けるやうに、東京も隅田川を賢明に利用して眞實の都會美を發揮せねばならないと思ふからである。

英國と日本とは國の歷史も富の程度も違つて居る、從つて隅田河がテームスとなる理由も無い。然し私のいふ所は、英國人がテームスを美的に又有利に善用して都會美を創作して居るやうに、東京人も自分と隅田川を社會的生活の上にもつと親密に關係せしめ無くてはならないといふことである。一言でいふと、百五六十年前の德川時代が隅田河を取扱つた態度に今日の東京人も戻つてもらいたいといふ希望である。昔の兩國は社會的文化生活の中心であつて、澤山有名な料理店が軒を並べて居つたと想像することは容易である。私の知つて居る限りでも兩國には立派な料理屋がいくつもあつた。然しそれ等は震災の爲め倒れて仕舞つたが、再びもとのやう

に新しい力を出して復活し得るであらうか。私は時々國技館がウエストミンスター橋畔の英國議事堂のやうに日本の貴衆兩院であつたならばと思ふことがある。今日の東京の中心らしいものは丸の内にあつて、今更何といつても仕方があるまいが、都會美の上から見ると決して賞讃に價する計畫でない。私は安田邸の跡に東京の大會館が出來るさうであるといふことを新聞で讀んで非常に喜んだ。被服廠の跡にも早晩死者を記念する殿堂のやうなものが建設せられるであらうか、果してセントポール寺院に近いものが出來るであらうか。私は第一に隅田川の兩岸を取拂つてエンバンクメントを作るといふことを提案せねばならぬ。兩岸を取拂ふといふことは市内の區劃整理に比較すると遙に樂な仕事であると思はれる。震災後色々な公園の議案が出たやうであるが、隅田河畔をエンバンクメントとして公園の設備する位有利で簡單に實行せられることはあるまい。さうして私は東京人の生活的歡樂の上に市民と隅田川とを更に親密にならしめたい。若し隅田川の兩岸をテームスのエンバンクメントのやうにすることが出來たならば、新東京の公園問題の少くも半分は解決せられたものであると信ずる。

私は傳道していふ、手近か所から始めよ。古いものに新しい意義を與へて復活させなくては駄目だ、これが即ち最も意味のある復興で無くて何であらう。新東京の計畫は議論倒れの傾向がある。實際震災後一年にも垂として居る今日に至るも、何一つ纏つた事業が實行されてゐない。然し若し假に隅田川兩岸に立派なエンバンクメントを築いて公園的設備が出來たとすると、よしんばその他のことが全部實行されないとしても、今日の東京は將來に威張つて誇ることが出來る一大事業を仕遂げたといふものだ。右側は兩國から吾妻橋に至り、左側は更に延長して新大橋近くに至るエンバンクメントを想像して見給へ……あゝ單に想像するだけでも氣分が良くなる。この堤防には勿論樹木を植える。櫻の木でも惡くないが私は寧ろ何か常盤木を希望する。樹下には樹木の色とよく配合する色のベンチを置かねばならない。かういふ所で春なり秋なりに學校のボートレースを遣らせたい。キャンブリヂ・ヲクスフオードの端艇競爭のやうな特別な催を年に一度遣らせて、その日には東京全體の休課日としたい、さうしてこの日には有らゆる邪魔な船を河の面から追拂つて、隅田川を鏡のやうに清らかなものにしたいものだ。

(二) 現實の價値

私は已に近代生活を現實の上から論したが私の議論は盡きたのでない。今それを更に延長させて、現實の上から文學を論じてみたいと思ふ。近代生活が已に現實を離れて無意味だとすると、近代生活を心理的に傳へようとする近代文學が現實主義の上にたつて居ることはいふまでも無い。然し今の文學がこの立場を得るに至つた經路を調べることは、文學史の研究者に取つて興味のあることに相違ない。如何なることでも、こゝに一傾向が芽出してこれが押しも押されもせぬ運動となるには長日月を要する。文學に於ける現實主義の確立でも簡單な出來事であるかのやうに見へても、決して突發的現象でない 文學上の歎美辭を切捨てゝ不純な詭辯から離れる。さうして『現實を現實として取扱ふといへば、短い現實として取扱ふ』といふのみでは、私の信ずる現實主義が文學として成立するものでない。文學者が如何なる現實を見るかを第一に知らねばならぬ。現實といつても、俗語でいふピンから切まであつて、現實が現實としてのみ終るものであつたならば、その現實の價値は知れたものと云はねばならぬ。現實が想像を産みだす。云ひ替へると現實が想像の試練に堪へるや否やで現實の價値が定まると私は信ずる。かういふ價値ある現實の上に文學者が立つて始めて價値ある文學者たることが出來るのである。故に私は眞實の想像は現實の中から芽出すのである。私の信ずる現實主義は私の信ずる想像主義と相爭ふものでない。眞實の想像主義は概念とか空想とかに類似したものでないことは云ふまでもなく、その實際的であることは現實が實際的であると同程度に實際的である。

文學が人生の附屬物であつて辯跡的に取扱はれて來た歴史は長い。もとより之れは之れとして文學的價値が無いと斷言はしないが、今日のやうに文學が生活を遂行する上に本質的價値がある。文學は人生の了解を進めて人間の立場を明瞭ならしめるに至つて、始めて文學はその本領を發揮して來たのである。私はそれを祝福せざるを得ない。私は常に意味ある時代に産れたことを喜ぶものである。

現實を動かすことが出來ない根本義とすることに關して、第一番に先鞭を付けたのはいふまでも無く科學である。科學は輕卒で性急な投機的態度を排斥する、移氣な假託を絕對的に避ける、さうして已に知れてゐる現象の背後に未知のサブスタンスがあると信じて、それ一筋に頼つて現實を目掛けて進んで行くのである。科學に對する結論は無いとしても、その經過して來た經路に偉大な價値がある。今日の生物學の如

きも細胞の研究となつて居るが、以前は外形的な分類法だけで滿足してゐたものだ、丁度善とか惡とか乃至は理想とか非理想とかいふ槪念に捕はれて居つた文學同樣の狀態であつた。科學を始め文學に至るまで、今日私共の要求する所は外でない、現象の產生的進化の經路、云ひ替へるとその本原的心理狀態を調べるのである。私共は部分〳〵の現實に注意を拂ふ、さうしてその有機體的活力を理解した時が卽ち全部を了解した時である。全部が無くて部分がある理由は無く、又部分が無くてどうして全部が有り得よう。私共は量を問題とするものでない、到着點はどうでもいゝ、私共の注意は結論に拂はれるので無く、如何に私共は始めるかに懸つて居る。故に私共の仕事に變化はあるが進步は無いといふことが出來る。詩人として私は嘗て『私の歌』といふ一篇を書いて、近代詩の立場を左の文字で表現したことがある。

『私のは進步を否認する歌、
形式で伴せられざる、言葉なき歌、——
生命の生れ、
避くべからざる偶然、
創造的本能の上昇。
歌よ、汝は現象で、仕遂げではない。』

英語でいふとロカル・ハビテーションで、局部〳〵の現實に住み卽ち徹するといふ意味である。私共近代人は文學者としても又は科學者としても、この局部の住者であるに外ならない。如何に眞實に私共は局部の住者たることが出來るかで私共の價値は定まると私は信ずる。過去の文學者は自然を一と見たが、私共は自然を『多く』として見たい。過去の文學者は宇宙は一と見たが、私共は宇宙は『多く』として見たい。多い自然は一つに成る、又多い宇宙は縮んで一となるといふ點で、私共は過去の文學者と接觸點を持つて居るともいふことが出來る。宗敎の上では、私共東洋人は多神敎信者で想像の生活者である、私共の宇宙は善惡の爭鬪で支配されてゐると考へる。然し善には創生的生氣があつて宇宙の生命は善の行動一つに懸つて居るといふことが出來るとすると、此時已に西洋の一神敎とも握手して居ることにも成る。科學者の言葉を聞くと、熱が重力に勝つことがある、アブソルユートゼロになると重力は單に一種の力として證據立てられるのみであるさうである。今これを文學に應用して一理屈附けてみると、文學を氷點的心理狀態まで落とし本質的單純な現實の上に立たせるとする、之れは決して文學の生命を奪つて仕舞ふ

といふことで無く、眞實な價値を新に値打ち付けようとする態度を掴ませることになるのである。今の文學は現實主義の上に立つて居る。それは今の文學が現實主義へ到着したのでなく、今の文學はそれから出發するのであると見てそこに眞實の意味が湧いて來るのである。故に現實主義の文學は現在の文學でなく、將來の文學であると見て意義とするものである。現實主義の文學が『即刻只今』だけのものであるとすると、それには大きな價値は無い。然しそれが將來を暗示し得る可能性を持つ點で、最も力のある文學であるといふことが出來る。

私は現實主義の文字を信じ詩に於ける實行者として存在せんと願ふものであるが、こゝに過去の理想を忘れることが出來ない人があるとしても、その人に對して非禮な行爲をするものでない、その人の信念を動かさんとして否定し罵倒するものでない。若しその人が宮殿中に美人を夢見るとしても、私は彼にその自由を得させる。若しその人が森中に不思議な天狗が居ると想像するとしても、私は彼の行爲を批評するものでない。私は何人にも先祖代々の陣羽織を捨てゝ仕舞つて洋服一着買へと强いるもので無い。私はたゞ過去より現在を重要視する。なぜといふに現在には將來を產む力があるである。私は昨夜の夢より今日の活動を希望する なぜといふに今日の活動は明日を暗示するからである。重ねて繰返すが私の信ずる現實的文學は 眞實な想像を產みだす創生的生氣のある文學である。若し現實主義の文學にその力がないとすると、それは外面に浮動するに過ぎない根無しの草と同樣の價値だけしか持つて居ない。

過去の文學者は――もとより國に依つて樣々な變化はあつたに相違ないが――概して天國を理想とした、さうして人間の地上生活を向上させようとした。所が結果として彼等は天國にも達することが出來ず、又地上生活に何等の飛躍も與へることが出來なかつた。彼等が書いた歷史は正しく失敗の歷史であつた。彼等は玉を得ようとして土塊を握るに止まつた。理想主義の文學者と反對に今日の文學者は、地上生活の向上も向下も念頭に置くもので無い。私共の認識し力說しようとする所のものは眞實の生命のみである。私共の希望する所は如何にその生命を流れさせるかに懸つて居る。眞實の生命が地上生活になみ〳〵と流れ渡る、そのことが卽ち地上生活をエキザルトさせる心理狀態でなくて何であらう。過去の文學者が語らない斷片として捨てゝ顧みなかつた日常生活の瑣事にしても、今日の文學者が拾つてその中から新しい世界

を發見することが出來るとすると、その仕事は驚異の仕事でなくて何であらう。現實主義の文學を平凡の文學であるといふものがあると、その人は文學に對する盲者と云はねばならない。現實主義の文學位驚異の世界を見せる文學は無いのである。驚異の世界を遠方に見出さうとして見出すことが出來なかつたのが過去の文學者である。然るに私共は驚異の世界を眼前に足元に見出さうとするのである。文學を天國に入る階段と思つて天國に上ることが出來なかつたのが過去の文學者である。それに反して私共はこれまで下賤だと云はれた地上生活を現實に生きるといふことで眞實のエキザルテーションを攫もうとするのである。然らば私共の文學は無理想の文學であるかといふに決してさうで無い。たゞ私共は『理想』の文字を好まないのみである、たゞ私共は『理想』を對照として生きないのみである私共の地上生活は理想から分離した所謂爲流しの生活でないと私は信ずる。私共は眞實の現實に從順である、その緊張と法則を理解する。完全と規律ある宇宙の循環を深い空間と豐かな時間を通じて眺めるといふこと自身が、已に理想と合一して居る行爲だと信ずるのである。

官能の洗練を經ないインテレクトに眞實のインテレクトが無いと同樣に 現實にしても官能の水道を潛つて來て始めて淨化される。淨化といふ言葉が惡るければ輪廓がはつきりするといつても良い。戀愛にしても、文學にしても、人間世界で如何なるものでも、五官の試練を經て眞實の姿を出して來る。現實を單純に見るといふと言葉の上では短いが、官能の力を持たない人間がどうして現實を見ることが出來よう。私共は現實の上に住む卽ち現實に卽するといふと、私共の行爲は制限せられるであらうと誤解してはならない。制限は擴大である、眞實の制限の無い所に眞實の擴大がある理由は無い。實際私共の信ずる文學の世界では、制限とか、擴大とかいふ言葉は無用である。然し事實として擴大された世界が制限されて居るやうに感ぜられる現實的地上生活から產れて來る。現實主義に立つ文學はこれまでに無い廣い世界に住む文學であるといふことが出來る。

私は現實が眞實なものであれば想像を產みだす力を持つてゐて、之れこそ眞實な價値がある現實で、之れを見るのが文學者であるといつた。若しこゝに文學者があつて之の現實描寫に暗示が無いとすると、之の文學者は生きる價値無き文學者である。若しこゝに文學者があつて之の作品に――詩にしても小說にしても乃至は評論にしても――讀者をして想像の世界を作りださせる力が無いとすると、その文學者は頁の

インキが消へると同時に死ぬであらう文學者である。故に眞實の現實主義は眞實の想像主義ともいふことが出來る、又眞實の暗示主義ともいふことが出來る。私は現實を現實としてのみしか傳へる力の無い文學者を病弱な文學者と思ふのである。

目撃する力は科學者に對して重要であるのはいふまでも無いが、この力の强弱で文學者の價値も定まる。然らば目撃する力はどうして養ふことが出來るか。批評的判斷だけでは之の力は保たれない。官能の血が滲みでる人間性、別の言葉でいふ人間的同情が無ければ眞實に目撃する卽ち洞察力は養ふことが出來ない。文學とは寫眞でない、又文學者は寫眞の提供者で無い。文學の力で私共人間の世界が擴大せられて、私共は生きがいのある世界を見せられたことに對して文學者に熱心な感謝をするのである。

私は今日の日本文壇に對する批評は避ける。然し日本の文學者、之れが詩人にしても又小說家にしても、私の書いて來たやうな現實主義を信條として廣い新しい世界に住んで居る人は幾人あるであらうか。これは私が論じてみたい最後の問題であるが、今は之れに觸れたくない。

懸賞論文募集

（題）農村婦人の生活

都人士の想像さえもつかぬ生活難と戰ひつつある農村婦人の狀態ば哀れにも惨めなものと思はれます。奢侈、流行なぞと云ふ騷ぎを藥にしたくも味ふことが出來ずに曉鷄の晨より、晩鐘の夕まで炎天に野ざらしに曝され、其上不景氣の影響は覿面、營養不良とやらで背にせる赤兒の乳さへ出ぬのが農村の現態です。若き乙女はその生活難に堪え得ないで悉く工女として農村を去り、今や若き婦人の影さえ止めない哀れな農村です。そのありのままを、いつはらず書かれたものであつて欲しい。これ以外の自由投稿をも歡迎します。

期日

八月三十一日締切ります。當選者には薄謝として十圓乃至十五圓呈上、四百字詰十枚以下のこと

女性改造編輯部

ロンドン會議とドーズ案に就いて

青木得三

(一) ロンドン會議

七月十六日から所謂ロンドン會議といふものが開かれて居る、之れに出席して居る人は英國の内閣總理大臣マクドナルド、大藏大臣スノーデン、佛國の總理大臣兼外務大臣エリオ、大藏大臣クレマンテル、陸軍大臣ノーレ、白耳義の總理大臣チュニス、外務大臣イーマン、伊太利の大藏大臣デ、ステファニイ、駐英大使デラ、トレッタ侯、米國の駐英大使ケロック、日本の駐英大使林權助男、駐佛大使石井菊次郎氏等であつて、誠に現代世界第一流の政治家外交家を集めた近來稀に見る大會議である。

此の大會議は獨逸賠償問題を議する爲の會議である。獨逸賠償問題といふのは大正三年から七年に亘つた世界戰爭の結果敗北した獨逸が聯合國――其の中には日本も含まれて居る――に向つて拂ふ償金の問題である。其の償金の額は世界戰爭の結末をつけた巴里會議の作つたヴェルサイユ條約の中には確定されなかつた。大正十年五月のロンドン會議は之を千三百二十億金貨マーク(凡そ我が金貨六百六十億圓)と決定した。而して無理矢理に獨逸政府に承諾させた。それ故に其の後獨逸は約束通拂ふことが出來なかつた。そこで大正十二年一月時の佛國總理大臣ポアンカレは獨逸の債務不履行に對する制裁なりとして、軍隊を派遣してライン川の東に在る獨逸の領土ルール地方を占領し、白耳義の軍隊も又之に參加した。それ以來獨逸の財政經濟は益非常の窮境に陷り、賠償金を拂ふことは勿論出來ないのみならず、國内の物價は紙幣

濫發の爲に非常に暴騰し、獨逸國民の大多數は悲慘なる生活難に陥つた。

(二) ドーズ報告

一體此の獨逸賠償の問題を決定する爲に、ヴエルサイユ條約は巴里に賠償委員會といふものを作つた。此の委員會は英米佛伊白日本及塞耳比亞の代表者で組織せられ、佛白兩國は總理大臣級、伊太利は國務大臣級、英米日は次官級の人を代表者として出して居る。此の賠償委員會は大正九年一月ヴエルサイユ條約實施以來今日迄獨逸賠償問題の解決に努力したが、昨年一月のルール占領以來此の問題が全く行詰つたことを心配して、本年一月專門家の委員會を組織して之に獨逸共和國豫算の均衡と通貨の安定とを研究することを囑托した。委員會は嘗て米國の豫算局長であつたドーズを委員長として本年一月十四日から四十八回の會議を開いて一の報告書を作り、之を四月九日に賠償委員會に提出した。之が世に所謂ドーズ報告である。

そこで賠償委員會は此のドーズ報告に述べる獨逸賠償問題解決案を採用することに關し又其の實施の手續に關し各國政府の意見を纏める必要があつた。此の各國政府の意見を纏める爲に今度のロンドン會議が開かれたのである。

(三) マクドナルドとエリオ

獨逸賠償問題解決の爲に聯合國總理大臣會議の開かれたことは大正九年以來度々の事である。スパ會議、ブルッセル會議、カンヌ會議、パリ會議、ロンドン會議と同じ樣な會議が幾度となく繰返された。しかし今度のロンドン會議がいつもよりも多く注目を惹いて居るのは、英國首相マクドナルドと佛國首相エリオとを中心とする最初の首相會議であるからである。スパ會議はロイドジョウジとミルランとフェーレンバッハとジモンスとの會議であつた。カンヌ會議はロイドジョウジとブリアンの會議であつた。大正十一年八月のロンドン會議はロイドジョウジとポアンカレの會議であつた。大正十二年一月のパリ會議はボナーローとポアンカレの會議であつた。

然るに今やロイドジョウジもミルランもフェーレンバッハもジモンスもブリアンもポアンカレも皆政權を離れ、ボナーローは不歸の人となつた惱みに惱んだ獨逸賠償の問題、世界

經濟界恢復の爲に絕對の障碍となつて居る此の問題、現代世界の最偉大なる政治家が大正八年から今日迄五ヶ年の間其の腦漿を絞つても解決の出來ない此の問題を、始めて英國の首相となつたマクドナルドと始めて佛國の首相となつたエリオとが解決しやうといふ會議である。況んや英國建國以來勞働黨が内閣を組織したのは今度始めてのことである。マクドナルドは其の勞働黨を代表する首相である。佛國でも巴里講和會議以來常に右黨の方に勢力があり、殊に前首相ポアンカレに至つては最其の極端に達し、ポアンカレが佛國首相である間は、獨逸賠償問題は到底圓滿に解決されない、ルールの占領は永久に止まない、歐羅巴大陸殊にライン川の兩岸に和かな春風の吹くことがないであらうといはれたそのポアンカレが本年四月の總選擧に敗れて、左黨から出たエリオが内閣を組織したのである。英國の勞働黨はロイドジョウジの內閣、ボナーローの内閣又ボルドウインの内閣時代から常に野に在つて獨逸賠償問題に關し獨逸民族に寬大なるべきことを主張して居たのであるから、之を代表するマクドナルドと佛國左黨聯合を代表するエリオを中心とする今度のロンドン會議が、世界永遠の平和を希望し、獨逸國民の悲慘なる生活に憫む世界の男女に依つて、至大の期待を以て迎へられたのは、誠に尤なることである。

（四）會議の結果如何

私が今此の筆を執つて居る七月三十日に於てロンドン會議は未だ其の途中にある。七月十七日の東京朝日は「豫期さるる數々の難礁」と題して會議の前途を樂觀せず、七月二十四日の時事新報は「倫敦會議凶兆現はる――對獨制裁と銀行團の反對、會商二日尙妥協に至らず、困難なる佛國首相の立場」と題して倫敦特報を掲げて居る。二十九日のジヤパンタイムスは愈獨逸の代表者が七月三十一日及八月一日ロンドン會議に出席するであらう。しかし會議は獨逸に對して何事も强制する考は毛頭なかつたといふロンドン電報を掲げて居る。會議の途中に於て筆を執つて居る私が會議の結果を豫想することは困難であり、且不穩當であるから、之を避ける。又「女性改造」の編輯者が私にロンドン會議に關する記事を依賴せられた所以も亦、私をして會議の結果如何を豫斷せしめる爲ではなくして、ロンドン會議をドーズ報告とは何であるかを、日本の女性に理解せしめるに在ると思ふから、私は之より會議の結果が今後如何樣にあらうとも、其の結果を理

解する助となる材料を之より述べて見度い。

（五）獨逸豫算の均衡と通貨の安定

ドーズ委員會の報告が獨逸豫算の均衡と通貨の安定を論じ、ロンドン會議が之を議題として居るのは前述の通であるが、何故に獨逸賠償問題と獨逸の豫算均衡及通貨安定の問題が關係があるか。獨逸が賠償金を拂ふといふのは獨逸政府が拂ふので、獨逸國民が直接拂ふのではない。從つてそれは獨逸政府の豫算上の歳出となる。故に獨逸政府の豫算上歳入と歳出とが均衡を得なければ――其の歳出の中には賠償金をも含ませて――賠償金を拂ひ得ない道理である。然るに今日獨逸の豫算は歳入歳出の均衡を得ず、歳入が不足するので、其の不足は共和銀行から借金して埋め合せて來た。その要求に應ずる爲に共和銀行の發行する紙幣は非常に巨額に上り、爲に獨逸の物價は非常に騰貴して國民は生活難に惱むのみならず、政府の歳出は益膨脹することになつた。それ故に獨逸をして賠償金を拂はせやうと思へば、どうしても獨逸の豫算の均衡を得せしめ、通貨の安定、即貨幣價値の安定、言ひ換へれば物價の安定を得せしめねばならといふのである、而して其の方法はドーズ報告が最詳密に之を說いて居る。ドーズ報告の非常の弘瀚なもので、其の全部を精細に研究することは中々容易なことでないが、私が今日迄研究した所に依ると、若し聯合國が此の報告を採用すれば、最初の年には十億金貨マーク、次の年には十二億二千萬、第三年目には十二億、第四年目には十七億五千萬、第五年目には二十五億の賠償金を拂はせることが出來ることになつて居る。但しそれは聯合國の銀行家が報告案實施の劈頭に於て八億金貨マークの金を獨逸に借すことを、而して獨逸の財政及經濟上の統一を回復することを前提として居る。

（六）ルール占領の撤廢

「獨逸の財政及經濟上統一の回復といふ語はドーズ報告の用ひて居る用語であるが、私は之はルール占領の撤廢を婉曲に言明した語と信じて居る。然らばドーズは何故斯樣な婉曲な語を用ひたか、それは佛國の嫌ふ點に觸れるからであると思ふ。吾々はドーズ報告がポアンカレの佛國首相時代に作られたものであることを忘れてはならぬ、今日では佛國の內閣もルールの鐵道を獨逸に引渡すことに贊成したやうであるが、

若しポアンカレが依然として首相であつたならばそれはどうかわからぬ。

今度のロンドン會議は初め三個の委員會を作り後に尚一の委員會を作つた、第一委員會は獨逸債務不履行判定機關構成の問題、第二は獨逸の財政及經濟統一の問題、第三は獨逸支拂引渡の問題、第四は獨逸、代表の會議參加の可能竝に其の方法の問題である。而して其の第二委員會 即 私をして言はしむれば、ルール占領撤廢の問題を議する委員會に於て佛國委員は、ルール竝にライン地方に在る今日佛白兩國が管理して居る獨逸の鐵道を獨逸に引渡すことには異存はないが之を引渡した後に於いても占領軍隊の安全を確保する爲佛白兩國の鐵道從業員を殘留せしめなければならぬと頑强に主張した。

抑ドーズ委員會は政治問題には軍事問題を議する權限を與へられて居なかつた。故に其の主張し得た所は唯獨逸の財政上及經濟上の統一といふことであつた。しかし若しドーズに政治問題又は軍事問題を議することを囑託したならば、必ずやルール占領撤廢の必要を叫んであらう。賠償委員會がドウズ委員會に囑託するに財政經濟問題のみを以てしたのは委員會——佛國委員を含む——が成案を得るに便利ならしめたのであるとも考へられる。然るに今ロンドン會議の第二委員會に於て佛國委員がルール及ライン地方の鐵道を獨逸に返すにも拘らず、佛白兩國の鐵道從業員を留めて置かうといふ、それでは獨逸の財政經濟上の統一がどうして回復せられやう、而かも其の留めて置かうといふ理由が、占領軍隊の安全を確保する爲であるといふに至つて、誠に驚くの外はない。

ライン川の東岸ルール地方、それは獨逸の領土で佛蘭西の領土ではない。ヴェルサイユ條約は其の四百二十八條に於て『獨逸國の本條約履行に對する保障として同盟及び聯合國の軍隊は本條約實施後十五年間ライン川の西方に位する獨逸國領土及ライン川橋頭地域を占領す』ことを定めた。これすらも獨逸に取つて忍び難い屈辱と憤恨の原因であることはいふ迄もない、然るにルール地方は此の條約に規定せられた占領地帶よりも尙東である、しかもそれは獨逸經濟力の中樞ともいふべき地方である。それを故なく佛白兩國の軍隊は占領した。否ポアンカレは故なく占領するとは言はなかつた。ヴェルサイユ條約第八編第三附屬書第十八項には「獨逸國が故意に履行を怠りたる場合に同盟及聯合國が執る權利を有する措置には經濟上及金融上の禁止及報復其の他の一般に各當該國政府に於て事情に應じ必要と決定したる措置を包含する獨逸國は右措置を以て戰爭行爲と認めざることを約す」と言い

である。時の佛白兩國政府は此の條文を楯として獨逸が故意に賠償金を拂はぬからといふ理由でルール地方を占領した。成程條約の文字にはあてはまるかもしれぬ。しかし吾々が人道の上から考へ、世界の平和の上から考へるときに、それが果して稱讃すべき行爲であらうか、是認すべき行爲であらうか、正當なる行爲であらうか、私は否と答ふるに躊躇せぬ。

幸に今ドーズ委員會の報告が出來て、所謂獨逸の財政及經濟上の統一が回復せられんとするときに、佛白兩國鐵道從業員殘留の問題の爲に此の回復がロンドン會議に於て未だ決定せられぬとは返すぐも殘念である。斯樣に述べて來ると、私は五十年前のアルザスロレーヌの占領を思ひ出さずには居られない。大正三年の歐洲大戰爭、それは墺太利の皇太子フェルディナンド大公がボスニヤの都セライエブォで暗殺せられたのに端を發したけれども、アルザスローレンヌ占領に對する怨と憤が佛蘭西國民の胸に燃えて居たのが、五年に亘る大禍亂の最も重なる原因の一であつたことを誰が否定することが出來やう。ライン川西岸の占領は條約の表では一應十五年間と限られて居るが、東岸のルールの占領のやむ時がなければ西岸の占領も亦已む時がないであらう。若し萬一此の占領が永久に繼續することがありとすれば、嘗て佛蘭西國民が同上アルザスローレンヌを紅に染めて獨逸國民の暴虐に復讐しやうと誓つたやうに、獨逸國民がライン川の兩岸を紅に染めるであらう。かくして世界は恐るべき禍に脅威せられる、私はロンドン會議の今日迄の經過を見て實に遺憾に思ふのである。

（七）八億の外債

ロンドン會議の第一委員會は獨逸債務不履行の判定機關として賠償委員會を主體とする案を作つた。ヴェルサイユ條約に於て獨逸が故意に賠償債務の履行を怠つた場合に聯合及聯合國が如何なる行動でも自由に執ることが出來ると書いてあるのは前に述べた通であるが、然らば獨逸が故意に賠償債務の履行を怠つたかどうかは誰が判定する、從來條約の解釋としては賠償委員會が之を判定する權利を持つてゐると考へられてゐる。然るに賠償委員會に於て此の問題に就いては英佛白伊の四ケ國委員が議決權を持つて居るに過ぎないから、常に英佛白伊三國に都合の良い議決を作ることになる。

ドウズ委員會報告は聯合國の銀行家が獨逸に八億金貨マーク（四億圓）の金を貸すことを前提として居る、これは机上

の空論ではなく本年二月日本に對して三億圓の金を貸すことに盡力した紐育の金融業者モルガンは眞劍になつて今度の獨逸外債にも盡力して居るのである。しかし聯合國の銀行家と雖も返る見込のない金は貸さぬ。獨逸に金を貸し、獨逸も之を返す氣があつても、若し聯合國が獨逸は故意に債務を履行しないと認めて、或はルール地方を占領し、或は鐵道を管理し其他何事を爲しても、獨逸は之に反抗する事が出來ないのであるから、獨逸は事實上銀行家から借りた金を返すことが出來なくなる。それ故にロンドン會議の第一委員會の作つた獨逸債務不履行判定機關として賠償委員會を主體とする案には英米銀行家が反對し、それでは金を貸すのはいやであると言つたので、第一委員會は再び審議をやり直すことになつた。私は考へる、英米銀行家の言ふことは如何にも尤であつて、無理ならぬ主張と思ふのである。七月廿五日倫敦發電報は巴里の新聞、ル、ジユールナルが「現在の聯合國會議の停頓狀態は當分繼續する形勢であるが。此の原因は銀行家が財政の領域を離れ政治問題に容喙する權利を主張して居るに在る」と論じたと報じて居る、しかし私は決して左樣に考へぬ、英米の銀行家は全く單に商賣を論じて居るのである、何となれば返る見込のない金を貸すことは商賣上の禁物であるからである。

此の停頓せる狀態を救ふ爲に白耳義總理大臣チユニスは一の案を出した。それは獨逸の債務不履行の爲にドーズ報告に述べる以上の制裁を課する必要が起つた場合に於ては、斯る制裁を加ふる當事國は必ず獨逸に貸付ける公債の元利支拂を保證しなければならぬと云ふのである。私思ふに、獨逸の債務不履行の爲にドーズ報告に在る以上の制裁を課する國は佛蘭西か白耳義の外にはない、英米の銀行家が獨逸に軍事的制裁を加へやうとする意思の未だ消えない佛國又は白耳義の保證に信頼して八億の金を獨逸に貸すであらうか。而かも其の保證は將來軍事的制裁を獨逸に加へる時に與へられるものとすれば、殆んど無いも同然である。白國首相が將來斯くの如き起るべき軍事的制裁の發生を防止する爲に、此の案を出したものとすれば、大正八年以來或は賠償委員として或は大藏大臣として或は首相として獨逸賠償問題の爲に貢献して居る同氏の案として實に感嘆する次第であるが、果して佛國が之

に同意するや疑問である。

(八) 會議停頓

繰返していふ、私が今筆を取つて居る七月三十日に於て會議の將來を豫斷することは不可能である、唯今日に於ては聊停頓の形であるといふことが出來る。大正八年以來ロイドジョウジ、ウイルソン、クレマンソー、ミルラン、ポアンカレ、ブリアン、ボナーロー、等現代世界第一流の政治家の腦漿を絞つても解決し得なかつた此の獨逸賠償の問題、今や世界の政治家のみならず世界第一流の金融業者を參加せしめ、英國歷史あつて以來始めての勞働黨內閣、佛國政界に珍らしくも表れた左黨聯合內閣、此等の力を以てしても尙解決し得ないとしたならば、吾々の賴む所は唯世界人類の輿論の力に待つ外はない、獨逸賠償の問題は獨逸民族と佛蘭西民族との間に幾十年前から培はれた根ざしの深い怨恨の結晶であることを了解する者は、之を融和する力が人類愛の暖き光より外にないと考へるのも決して妄斷ではない。世界全般に亘る永久平和の運動に依つて徐々に之を解決することが却て近道であるかもしれぬ。婦人參政權の問題、女子解放の問題、日本の女性を煩はすべき問題は數多い、世界永久平和の運動も亦確に日本の女性を煩はすべき問題の一である　獨逸賠償問題の根本的解決策はロンドン會議でもなくドーズ報告でもなく、世界永久平和の運動であるとすれば、私が「女性改造」に獨逸賠償問題を解說するのも決して徒勞ではない。

短篇小說懸賞募集

本誌は現文壇の重鎭島嵜藤村氏に選評をお願ひして、毎號左の規定に依り短篇小說を募集してゐますから、皆樣は奮つて自由な眞劍な作品を御投稿下さい。

規定

一、一篇の長さは四百字詰用紙三十枚以內に限ります。

一、毎月壹日を以て〆切日と定めます。（今回の〆切は九月一日で、發表は十一月號の誌上でいたします。）

一、當選作に對しては參拾圓以上百圓迄の稿料をお送りします。

一、住所姓名を明記して下さい。（但し應募者は婦人に限ります。）

宛名は　東京芝區愛宕下町一ノ一　改造社內

女性改造編輯部

史上の女性美

最古日本の女性生活の基調

折口信夫

古代の歴史は、事實の記憶から編み出されたものではない。神人に神憑りした神の物語つた叙事詩から生れて來たのである。謂はゞ夢語りとも言ふべき部分の多い傳への、世を經て後、筆錄せられたものに過ぎない。日本の歴史は、「語部」と言はれた村々國々の神の物語を傳誦する職業團體の人々の口頭に久しく保存せられて居た律文が、最初の形であつた。之を散文化して文字に記したのが、古事記・日本書紀その他の書物に殘る古代史なのである。だから成立の始めから宗教に關係して居る。神々の色彩を持たない事實などの、後世に傳りやうはあるべき筈がないのだ。並みの女の様に見えて居る女性の傳說もよく見て行くと、きつと皆神事に與つた女性の神事以外の生活をとり扱うて居るのであつた。事實に於いて吾々が溯れる限りの古代に實在した女性の生活は、巫女として一生涯或は、ある期間は必ず召されて來たものと見てよい。して見れば、古代史に見えた女性の事蹟に、宗教の匂ひの豐な理由も知れる事である。女として神事に與からなかつた者はなく、神事に關係せなかつた女の身の上が、物語の上に傳誦せられる譯がなかつたのである。

私は所謂有史以後奈良朝以前の日本人を萬葉人と言ひ慣して來た。萬葉集は略ぼ日本民族が國家意識を出しかけた時代から、其觀念の確立した頃までの人々の內生活の記錄とも見るべきものである。此期間の人々を、精神生活の方面から見た時の呼び名として、恰好なものと信じて居る。古事記・日本書紀・風土記の記述は、萬葉人の生活竝びに、若干は其以前の時代の外生活に觸れて居る。此に萬葉集を註釋とし、更に今一つ生きた註釋を利用する便宜が與へられて居る。萬葉人の時代になつて、漸く以前共に携へて移動して來た同民族の落ちこぼれとして途中の島々に定住した南島の人々を、既に異鄕人と考へ出して居た。其南島の人々の後なる沖繩諸島の現在亡びかけて居る民間傳承によつて、わが萬葉人或は其以前の生活を窺ふ事の出來るのは、實際もつけの幸とも言ふべき、日本の學者にのみ與へられた恩賚である。沖繩人は百中の九十九までは支那人の末ではない。我々の祖先と手を分つ樣になつた頃の姿を今に多く傳へて居る。萬葉人が現に生きて、琉球諸島の上に、萬葉生活を、大正の今日我々の前に再現してくれて居る譯なのだ。

一　君主から——巫女

大化の改新の一つの大きな目的は、政敎分離にあつた。さう言ふよりは、祭權を奪ふ事が、政權をもとりあげる事になると言ふ處に目をつけたのが、此計畫者の識見のすぐれて居た事を見せて居る。

村の大きなもの、郡の廣さで國と稱した地方豪族の根據地が、數へきれない程あつた。國と言ふと、國郡制定以後の國と紛れ易いから、村の名で表してゆかう。村々の君主は、次第に强い村の君主に從へられて行き、村々には大きな村の下に併せられて行つて、大きな村の稱する國名が、村々をも籠めて了ふ事になつた。秋津洲・磯城島と倭、皆大和平原に於ける大きな村の名であつた。他の村々の君主も、大體に於いて、おなじ樣な信仰組織を持つて村を統べて居た。倭宮廷の勢力が、村々の上に張つて來ると、事大の心持ちから自然に愈似よつたものになつて來たであらう。村の君主は國造と稱せられた。後になる程、政權の含蓄が此語に乏しくなつて、敎權の存在を感じる樣になつて行つた樣である。國造と稱する事を禁じ、村の君主の後をすべて郡領と呼びかへさせ、一地方官吏と見做す事になつても、尚私に國造と稱するものが多かつた。平安朝になつても、政權に關係なく、村々の君主の祀つた神を子孫として祀つて居る者には、國造

の稱號を默認して居た樣である。出雲國造・紀國造・宗像國造などの類である。倭宮廷でも、天子自ら神主として神に仕へられた。村々の君主も神主として信仰的に村々に勢力を持つて居たのである。神主の嚴格な用語例は、主席神職であつて、神の代理とも、象徵ともなる事の出來る者であつた。神主と國造とは、殆ど同じ意義に使はれて居る事も多い位である。村の神の威力を行使する事の出來る者が、君主として、村人に臨んだのである。村の君主の血緣の女、娘・妹・叔母るな言ふ類の人々が、國造と國造の神との間に介在して、神意を聞いて、君主の爲に、村及び村人の生活を保つ樣々の方法を授けた。其高級巫女の下に、多數の采女と言ふ下級巫女が居た。此組織は、倭宮廷にも備つて居た。神主なる天子の下に神に接近して生活する齋女王と言ふ高級巫女が、天子の近親から擇ばれた。伊勢の齋宮に對して、後世加賀の齋院の出來た事から見れば、本來は主神に仕へる皇族女子の外にも有力な神に接する女王の巫女があつた事は考へられる。さうして此下に、天使の召使とも見える采女が居た。宮廷の采女は、郡領の娘を徵して、ある期間宮廷に立ち廻らせられたものである。采女は單に召使の樣に考へて居るのは誤りで、實は國造に於ける采女同樣、宮廷神に仕へ、兼ねて其象徵なる顯神の天子に仕へるのである。采女として天子の倖寵を蒙つたものもある。此は神としての資格に於てあつた事である。采女は神以外には、觸れる事の禁せられて居たものである。同じ組織の國造の采女の存在、其貞操問題が、平安朝の初めになると、宮廷から否定せられて居る。此は元來なかつた制度を模倣したと言はぬばかりの諭達であるが、實は宮廷の權威に拘ると見た爲であらう。此事は日本古代に初夜權の實在した證據になるのである。村々の君主の家として祀る神の外にも、村人が一家の間で祀らねばならぬ神があつた。庶物にくつついて常在する神、時を定めて來臨する神などは、家々の女性が祀る事になつて居た。

此等の女性が、處女である事を原則とするのは勿論であるが、其は早く破れて、現に夫のない女は處女と同格と見た。而も其は二人以上の夫には會はなかつたものと言ふ條件があつた樣である。其が更に頽れて、現に妻として夫を持つて居る者にも、巫女の資格は認められて居たと見える。「神の嫁」として、神に出來るだけ接近して行くのが、此人々の爲事であるのだから、處女は神も好むものと見るのは、當然である。齋女王も、處女を原則としたが、中には寡婦を用ゐた事もある。

併し、此今一つ前の形はどうであらう。村々の君主の下になつた巫女が、嘗ては村々の君主自身であつた事もあるのであらう。魏史倭人傳の耶馬臺國の君主卑彌呼は女性であり、彼の後繼者も女兒であつた。巫女として呪術を以て村人の上に臨んで居たのである。かうした女君制度は、九州の邊土には限らなかつた。卑彌呼と混同せられて居た神功皇后も最高巫女としての教權を以て民を統べて居られた樣子は、日本書紀を見れば知られる事である。萬葉人の時代でも、女帝には殊に宗教的色彩が濃い樣である。喜田博士が發見せられた女帝を中天皇（萬葉には中ツ皇命）と言ふのも、博士の解説の樣に男帝への中繼ぎの天子と言ふ意でなく、宮廷神と天子との中間に立つ一種のすめらみことの意味らしくある。古事記書紀には天子の性別についても、古い處では判然せない點がある。さう言ふ處は、すべて男性と考へ易いのであるが、中天皇の原形なる女帝が尚多く在らせられたのではあるまいか。

沖繩では、明治の前までは國王の下に王族の女子或は寡婦が齋女王同樣の爲事をして、聞得大君（ちふいぢん）と言うた。尚家の中途で、皇后の下に位どられる事になつたが、以前は沖繩最高の女性であつた。其下に三十三君と言うて、神事關係の女性がある。其は地方々々の神職の元締めの樣な位置に居る者であつた。其下に當るのろ（祝女）と言ふ地方の神事官吏なる女性は今も居る。其又下に其地方の家々の神に事へる女の神人が居る。此樣子は、内地の昔を髣髴させるではないか。沖繩本島では聞得大君を君主と同格に見た史實がないが、島々の舊記には其痕跡が殘つて居る。

二　女——軍

萬葉及び萬葉以前の女性とさへ言へば、すぐれて早く戀を知り、口迅に秀歌を詠んだものの樣に考へられて居る。併し此とてやつぱり、傳説化せられたものに過ぎなかつたのである。佳人才女の蹟を傳へたのは、其女性自身の作と傳へながら、實は語部の叙事詩其自身が、生み出した性格でもあり、作物でもあつた。つまりは物語や、其から遊離した歌謠の上にのみ、情知り譯知りらしく傳つたので、後世から憧れる程のものでなかつたのである。唯、事の神事に關する限り、著しく女性としての權威を顯し、社會的に活動をしたのは事實である。神の意思を宣傳し、神の力を負うて號令する巫女の勢力が、極度に發揮せられるのである。

近江・藤原の都の頃から禁じられ出したが、尚、その行き亙

らなかつた地方には、存して居たらうと思はれるのは、女子の從軍である。昔から學者は軍旅の慰めに、家妻を伴うたものと解して居る。尤、此法令の出た頃は、女と戰爭との交渉について、記憶が薄らいで居たものであらう。戰爭に於ける巫女の位置と言ふ樣な事が、巫女にして豪族の妻なる者の從軍を、巫女である爲といふ中心點が、妻なる爲と言ふ方へ移つて行つて居たのである。

日本武尊の軍に居られた橘媛などは、妻としての從軍と考へられなくもない。崇神天皇の時に叛いた建埴安彦の妻安田媛は、夫を助けて一方の軍勢を指揮した。名高い上毛野形名の妻も、其働きぶりを見ると、單に「堀川夜討」の際の靜御前と一つには見られない。やはり女軍の將であつたらしい。調伊企儺の妻大葉子も神憑りする女として、部將として從軍して、俘になつたものと考へられる。神功皇后などは明かに、高級巫女なるが故に君主とも、總大將ともなられたのである。

女が軍隊に號令するのに、二つの形がある。全軍の將としての場合と、一部隊の頭目としての時とが其である。巫女にして君主と言つた場合は、勿論前の場合であらうが、軍將の妻なる巫女の場合には、後の形をとつた事と思はれる。

神武天皇の大和の宇陀を伐たれた際には、敵の兄磯城・弟磯城の側にも、天皇の方にも、男軍・女軍が編成せられて居た。「いくさ」と言ふ語の古い用語例は軍人・軍隊と言ふ意である。軍勢に硬軟の區別を立てて、軍備へをする譯もないから優形の軍隊と言つた風の比喩表現と見る說はわるい。やはり素朴に女軍人の部隊と說く考へが、ほんとうである。巫女の從軍した事實は際限なくある事で、皆戰場に於いて、神の意思を問ふ爲である。其と共に、女軍を指揮するのだから、眞の戰鬪力よりも、信仰の上から薄氣味のわるい感じを持つて居たのであらう。其と共に、他の種族の祀る異教神の呪力を物ともせない勇者にとつては、極めて脆い相手であつたのである。神武天皇なども、女軍を破つて敵を窮地に陷れて居られる。

黃泉醜女の黃泉軍衆と言ふのも、死の國の獰猛な女の編成した死の國軍隊と言ふ事である。いさなぎの命が、あれ程に困らされた傳へのあるのも、祖先の久しい戰爭生活から來た印象である。

沖繩の記錄を見ると、三百年前までは、巫女從軍の事實は屢見えて居る。離島方面では、島々の小ぜりあひに、かうした神意の戰爭が、近年までくり返されて居た事と思はれる。

三 結婚——女の名

「妻覓ぎ」と言ふ古語は、一口に言へば求婚である。嚴格に見れば、妻探しと言ふ事になる。此と似た用語例にある語は「よばふ」である。竹取物語の時代になると、既に後世風な聯想のあつた事が見えて居るが、語原はやはり「呼ぶ」を語原として居るのである。大きな聲をあげて物を言ふ事である。つまり「なのる」と言ふのと、同義語なのである。名譽ある敵手の出現を望む武士の、戰場で自ら氏名を宣する形式を言ふ事になつて了うたが、古くは もつとなまめかしいものであつた。

人の名は秘密であつた。男の名も、ずつと古くは幾通りも設けて置いて、どれが本名だかわからなくしたものがあつた。大汝ノ命などは、一部の分の意義は、大名持即多數の名稱所有者である、名譽ある名「大名」を持つと言ふ意ではない樣だ。事實色々の名を持つた神である。名を人格の一部と見て、本名を知れば、呪咀なども自在に行ふ事が出來るものと見たところから、なるべく名を周知させぬ樣にしたのである。男は其ではとほらぬ時代になつても、女は世間的な生活に觸れる事が尠かつた爲、久しく、此風は守り了せたものである。平安朝の中末の頃になつても、やはりさうであつた樣である。

萬葉に「たらちねの母がよぶ名を申さめど、道行く人を誰と知りてか」と言ふ歌のあるのは、あなたは自分の名も家も言はないぢやありませんか。あなたがおつしやれば、母が私によびかける私の名をばおあかしも申しませうが、行きすがりの人としてのあなたを、誰とも知らずに申されませうか、と言ふのである。兄弟にも知らせない名、母だけが知つて居る名（父は知つて居るにしても、かうした言ひ方はする。併し、母だけの養ひ子の時代を考へると、父母同棲の後もそんな事もなかつたとは言へない。）其名を他人で知つて居ると言ふのは夫だけである。女が男に自分の名を知られる事は、結婚をすると言ふ事になる。だから、男は思ふ女の名を聞き出す事に努める。錦木を娘の家の門に立てた東人とは別で、娘の家のまはりを、自身名と家とを喚うてとほる。此が「よばひ」でもあり「名告り」でもある。女が其男に許さうと思ふと、はじめて自分の名を其男に明して聞かすのであつた。

かうして許された男は、女の家に通う事になつて、「よばふ」「なのる」が、意義轉化をした時代までも、ある時期の間は、家に迎へる事をせない。此は平安朝になつてもさうであ

る。だからどうしても、長子などは大抵極の幼時は母の家で育つのである。古くから祖の字を「おや」と訓まして、兩親の意でなく、「おつかさん」の意に使ふ事になつて居るのは字は借り物だが、語には歴史がある。母を專ら親とも言ふのは父に親しみの薄かつた幼時の用語を成長後までも使うた爲である。

娘の家へ通ふ神の話は、それこそ數へきれぬ程ある。此は神ばかりでなく、人も行うた爲方であつた。唯どこから來るとも名のらず、ひどいのになると、顏や姿さへ暗まぎれに一度も見せないのがある。少說とは言ひでふ、源氏物語の人情物の時代になつても、尙且、光源氏の夕顏の許へ通ひつゞけた頃は、紐のついた顏掩ひをして居た樣に書いてある。まさか其頃はそんな事もなかつたであらうと思ふ。が、かうした事の出來るのは、過去の長い繰り返しのなごりである。つまりは、よその村の男が通うて來る時に、とつた方法と見るべきであらう。よその村が異種族の團體と見られて居たのは、國家意識が出て後にも、尙續いては居たであらう。が、かうした結婚法は、どこまでが實生活の俤で、どこからが神話化せられて居るのか區別がつきにくい。

唯、此形の今一つ古い形と見られるのは、女の家に通ふと言ふ手ぬるい方法でなく、よその村の娘を盜んで來る結婚の形である。

外族の村どうしの結婚の末始終圓滿に行かず、何人か子を產んで後遂に出されて戾つた妻もあつた。さうなると、子は父の手に殘り、母は異鄕にある譯である。子から見れば、さうした母の居る外族の村は、言はう樣なく懷しかつたであらう。夢の樣な憧れをよせた國の俤は、だんだん空想せられて行つた。結婚法が變つた世になつても、此空想だけは殘つて居て、「妣が國」と言ふ語が、古代日本人の頭に深く印象した。「妣」は祀られた母と言ふ義である。又古傳說にも、死んだ妣の居る國と言ふ風に扱うて居るが、此語を使つた名高い僅かな話が、亡き母に關聯して居る爲であらう。此語は以前私も、日本人大部分の移住以前の故土を、比喩的に言なる國土としたのだと考へて居たが、さうではない。全然空想の衣を着せられて後は、戀しい母の死んで行つてる所と言ふ風に考へられたらうが、意義よりも語の方が古いのである。かう言つた結婚法がやはり段々と見えて居る。掠略婚と言ふが、此は近世ばかりか、今も、其形式は內地にも殘つて居る。唯古代の掠略法とも見える結婚の記錄も、巫女生活の記念と言ふ側から見ると、さう一概にもきめられぬ處がある。景行天

皇に隙見せられた美濃國泳ノ宮ノ兄媛（古事記）は、天子に迎へられたけれども、隱れて了うて出て來ない。妹弟媛をよこして言ふには、「私は、とつぎの道を知りませんから」と言ふのである。

おなじ天皇が、日本武尊らの母印南大郎女（播磨風土記）を×××に行かれた際、大郎女は逃げて〱加古川の川口の印南都麻と言ふ島に上られた。ところが川岸に殘した愛犬がその島に向いて吠えたので、其處に居る事が知れて、天子が出向いて連れ戻られた。印南の地名は、隱れるひつこもるなどの意の「いなむ」と言ふ語の名詞形から出たのだと言ふ。島の名も、かくれ妻と言ふ意だとある「いなみづま」言ひかへれば、逃婚と言ふ事になる。奪略婚に對して、逃走婚と言ふ方法を考へに入れねば奪略の眞意義もわかりにくからうと思ふ。

地方豪族の娘は、其土地の神の巫女たる者が多い。殊に神に關した事のみ語る物語の性質から見ても、此等の處女が、巫女であつた事は察せられる。巫女なるが故に、人間の男との結婚に、此までの神との仲らひを棄てる樣に見えては神にすまなくもあり、其怒りが恐ろしいのである。其で形式としても、逃走婚の姿をとらなければならなかつた。又眞實從來の生活と別れる事の愛着の上から言つても、自然にもさうなつたであらう。兄媛の如きは其例で、原則としての巫女の處女生活を守り貫いた譯である、大郎女の方は、あんなに逃げて置きながらと思はれる程、つかまつたとなると、極めて從順であつた樣である。

此も沖繩の民間傳承が此の說明に役立つ。首里市から陸上一里半海上一里半の東方にある久高島では、島の女のすべてが、一生涯の半は、神人として神祭りに與かる。大正の初めに島中の申し合せで自今廢止と言ふ事になつて、若い男たちがほつとした結婚法がある。

婚禮の當夜盃事がすむと同時に、花嫁は家を逃げ出して、森や神山（御嶽と言ふ）岩窟などに匿れて夜は姿も見せない。晝は公然と村に來て、嫁入り先の家の水甕を滿す爲に、井の水を頭に載せて搬んだりする。男は友だちを誘うて、花嫁のありかをつき止める爲に顏色も青くなるまで尋ね廻る。若し、三日や四日で見つかると、前々から申し合せてあつたものと見て、二人の間がらは、島人全體から疑はれる事になる。勿論爪彈きをするのだ。長く隱れ了せた程、結構な結婚と見なされる。「內間まか」と言ふ名で、職名外間祝女と言はれて居る人などは、今年七十七八であるが、嫁入りの當時に

七十幾日隱れとほしたと言ふが、頂上になつて居る。夜、聟が嫁を捉へたとなると、髮束をひつつかんだり、隨分手荒な事をして連れ戻る。女も出來る迄り大聲をあげて號泣する。其で村中の人が、どこそこの嫁とりもとう／＼落着したと知る事になるのである。かうした花嫁の心持ちは、微妙なものであらうから、單に形式一遍に泣くとも見られぬが、ともかく神と人間との間にある女としての身の處置は、かうまでせねば解決がつかなかつたのである。此風は沖繩全體で、最近まで行うて居たのは、此島だけである。其にも拘らず、嘗て一般に行うたらしい痕跡は、妻覓ぎに該常する「とじ・かめゆん」（妻捜す）「とじ　とめゆん」（妻覓る）など言ふ語で、結婚する意を示す事である。

又此島では、十二年に一度新神人の就任式の樣なものがある。神人なる資格の有無を試驗する事が、同時に就任式の形になるのである。「いざいほう」と言ふ名稱である。同時に二人の夫を持つて居る樣な事がないかを試驗するので、七つ橋と言ふ低い橋の上を渡らせる。此貞操試驗を經て神人となると共に、村の女としての完全な資格を持つ譯である。何でもない草原の上の假橋を落ちて氣絕したり、死んだりする不貞操な女もあると言ふ。此は、巫女が處女のみでなく、人妻をも採用する樣になつた時代の形で、沖繩本島でも古くから巫女の二夫に見ゆるを認められなかつた事實のあるのと、根柢は一つである。ところが、內地の昔にも亦、此があつた。東近江の筑摩神社の祭りには、氏人の女は持つた夫の數だけの鍋をかづいて出だと言ふ。伊勢物語にも歌がある程で名高い事だが、實は一種の「いざいほう」に過ぎなかつたものと思はれる。鍋一つかぶる女にして、神人たる資格があつたものと思はれる。

四　女の家

近松翁の女殺油地獄の下の卷め書き出しに、「三界に家のない女ながら、五月五日のひと夜さを女の家と言ふぞかし」とある。近古までもあつた五月五日の夜祭りに、男の出拂うて女だけ家に殘ると言ふ風のあつた暗示を含んで居る語である。

鳰鳥の　葛飾早稲を饗すとも、彼愛しきを外に立てめやも

誰ぞ。此家の戸押ぶる。新嘗忌に、わが夫を遣りて齋ふ此戸を

萬葉十四に出た東歌である。新嘗の夜の忌みの模樣は、おなじ頃の同じ東歌の事を傳へた常陸風土記にも見えてゐる。御

祖の神、即、母神が、地に降つて姉なる富士に宿を頼むと、今晩は新嘗ですからとにべもなく斷つた。妹筑波に頼むと新嘗の夜だけれど、お母さんだからと言うて内に入れてもてなした。其から母神の呪咀によつて、富士は一年中雪がふつて、人のもてはやさぬ山となり、筑波は花紅葉によく、諸人の登る事が絶えぬとある。

新嘗の夜は、神と巫女と相共に米の贄を喰ふ晩で、神事に與らぬ男や家族は脇に出拂うたのである。早稻を煮たお上り物を奉る夜だと言つても、あの人の來て居るのを知つて、表に立たして置かれようか、と言ふ處女なる神人の心持ちを出した民謡である。後のは、亭主を外へ出してやつて、女房一人神人としての役をとり行うて居る此家の戸をつき動かすのは誰だ。さては、忍び男だな、と言ふ位の意味である。

神社が祭りを專門に行ふ處と言ふ風になつて、家々の祭りが段々行はれなくなると、家の處女や、主婦が巫女としての爲事を忘れて了ふ樣になる。其でも徳川の末までは、一時上臈など言つて、女の神人を祭りの假臨時に民家から擇び出す樣な風が、方々にあつた事を思へば、神來つて家々を訪問する夜には、所謂「女の家」が實現せられたのであつた。

沖繩でも、地方々々の祭りの日に家族は海岸などにおいて女だけ殘つて神に仕へる風が可なり多い。

萬葉集に現はれたる女性

古泉千樫

私は今萬葉時代の女性について書かうとしながら、正倉院の樹下美人圖や、藥師寺の吉祥天女畫像や、法華寺の十一面觀世音像（木彫）の寫眞を見て居る。豐艶な顔と豐滿な肉體とを持つてゐるこれ等の像は、寧樂時代の理想的美人であつた

らうと思ふ。

十一面觀世音の彫刻は、傳說によると光明皇后がみづから刻まれたものとも云ひ、又光明皇后をモデルとしたものであるとも云ふ。此說は信じ難いにしても、此像によつて光明皇后の面影を偲ばうとするのは、あながちに無理なことではあるまい。

光明皇后の歌は萬葉集に三首ある。そのうち、

　わが背子と二人見ませばいくばくかこのふる雪のうれしからまし

　大船に眞梶しじぬきこの吾子を唐國へやる齋へ神たち

前首は天皇聖武に奉られたもので、調子がほがらかで快い匂ひとひびきとを持つて居る。大船にの歌は、遣唐大使藤原淸河に賜つたものである。淸河は皇后のために甥にあたる。伯母君としての慈愛と、皇后陛下としての威嚴との備はつた歌である。これ等の歌、優しくして嚴くしく、滋味がこもつて、調べがおほらかに整つて居る。このおほろかに整つて美しい面影を思ひ浮べつつ、私は更に十一面觀世音の寫眞に見入つたのである。

吉祥天女の畫像と、樹下美人の畫とはその容顏は最も似て居る。何れも聖武天皇時代の作であらうと云ふ。吉祥天女の深紫の衣、淺綠の裳など當時の內親王又は女王の服制に協つて居るので、或は當代高貴の肖像に憑りて畫いたものであるかも知れないと云ふ。兩方共如何にも豐麗な感じがする。たゞ寫眞で見たところによると、私は樹下美人の圖に、より多く心を惹かれる。和辻哲郎氏も其著「古寺巡禮」中で、「樹下美人には少からず精神的陰影が現れてゐる。萬葉の烈しい戀歌などにもふさはしいと思へる氣宇が、眉の間に漂つてゐるのもある。その點では吉祥天女の顏は、單に肉感的である以上に複雜な情緒を現はさない。そこにまた吉祥天女の特殊な意味があつたのであらう。」と云はれて居る。豐麗で而も深い精神的陰影の現はれて居る樹下美人の圖を見て居ると、私は額田女王を思ひ浮べずには居られない。もちろん、樹下美人の圖は、額田女王と、事實上何等の關係もなく、作畫の素因を爲しては居ないのである。

萬葉集の女歌人として、私に第一に思はれて來るのは額田女王である。この女王は樹下美人の圖の製作された天平時代よりはずつと以前の歌人である。女王の歌の中最も古いもの

は、

秋の野の美草刈り葺き宿れりし兎道の都の假廬し思ほゆ

の歌で、皇極天皇時代の作である。秋の野の薄を刈つて、屋根を葺いて宿つたことのある宇治の行宮の假小屋の容子が思ひ出されるといふので、無造作に感慨を叙し去つた處に、情がよく現はれて居る。

にぎた津に船乗せむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎいでな

齋明天皇の西征に隨從した時の歌である。展開しつつある景情を、讀む者の心に傳へる無限のひゞきを持つた歌である。「今は漕ぎいでな」の一句を以て全首を統一してゐる所に作者の健やかに充ちた感情を思はせらるるのである。

額田女王は、天智天皇の皇太弟で、後には天武天皇となられた大海人皇子に召されて、その間に十市皇女を生んで居られる。それが後には、天智天皇に召されるやうになつた。

あかねさす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる

天智天皇が、近江の蒲生野に遊獵の時、皇太子なる大海人皇子に對して、女王の詠まれた作である。大海人皇子の返歌は

紫のにほへる妹をにくゝあらば人妻ゆゑにわれ戀ひめやも

といふのである。これ等の歌を見ると、天智天皇は、大海人皇子より額田女王を××れたやうに思はれる。

うま酒三輪の山、青丹よし奈良の山の、山の間ゆい隱るまで、道の隈いつもるまでに、つばらかに見つつ行かむを、しばしばも見さけむ山を、こころなく、雲の隱さふべしや

反歌

三輪山をしかも隱すか雲だにもこころあらなむ隱さふべしや

天智天皇が都を近江に遷されたので、額田女王が近江に下られた時の歌である。此の歌について、先師伊藤左千夫先生は「苟くも、萬葉集を讀むもの、苟くも我國上代の詩を知らむとするもの、否眞に詩といふものの味ひを解せんとするものの、假初にも見過す事の出來ない歌である。作者は云ふまでもなく、我國上代に於ける唯一の女詩聖であつて、限り無き戀の悲痛を深く胸底に包みつつ、現はには泣く事も出來ない境遇に懊惱した時に、其遣瀬なき思ひを僅に漏らされた歌が、即ち此歌であるのだ。」と述べられた。さうして、三輪山は當時の皇太弟大海人皇子

の居所であることを注意して置かねばならぬといはれた。歌としては、第一句二句で莊重に三輪の山と呼び掛け、一篇の焦點たる三輪の山を、眼目に据ゑ置き、更に向きを變へて、熱烈な思ひを云ひ出して、一句は一句より強く叙した句法、雲にも山にも命令せん許りに、極度に強く云ひ放つて、多くを云はざる處に、限り無き哀情の動搖は餘韻に現はれて居る。感情の張溢から動く自然の妙趣であるといふやうの評をして居られる。

三諸の山見つつ行けわが背子がい立たしけむ嚴橿がもと

此歌で見ても、三諸山即ち三輪山は、額田女王に對して忘るる事の出來ない、强く執着せしむるものあつたのを知る事が出來る。

額田女王の歌は、措辭が大膽で生き々々して居り、簡潔で力強く、一首々々生命が充ち徹つて居る。そしてその根柢に深刻痛切なる感情が潜んで居る。感情銳敏にして熱烈、才智明快、而も、これを統御する强い意志力を有して居る女性が思ひ浮べらるるのである。

前の「兎道の都の假廬し思ほゆ」の歌も、單に昔の旅の面白味を偲んだのみではないであらう。

私はこゝで額田女王の時代のことを一寸云つておきたい。大化改新は主として氏族制度に對する改革で、所謂中央集權である。朝廷の勢力を普遍的にした國家統一の大計畫であつた。此革新は天智天皇を中心として遂げられた。天武天皇は天智天皇の急進主義に對して、幾分か漸進主義に引戻つて、天智天皇の爲された事を整理して行かれた。此天智天武兩帝の治世は、我國文化史上餘程注意しなければならぬ時代で、多事で活動的であつた。額田女皇は此兩帝の間にあつて、深刻な印象を受けられたのである。艷麗であつて、深い精神的陰影の現はれた容姿を思ひつゝ、女詩人額田女王を偲ぶものはたゞに私ばかりではあるまい。

私はまたここで、天平時代の女歌人狹野茅上娘子の歌を紹介したい。この狹野茅上娘子と、中臣宅守との贈答の歌が、萬葉集卷十五に六十三首ある。そのうち娘子の歌は二十三首である。この贈答の歌は、尋常の戀ではなくて、宅守が藏部の女を妻としながら茅上娘子といふ官女と戀をして、その罪の爲に流されて、越前におくられた時に、互に贈答したものである。茅上娘子そ其悲痛な運命と、熱烈な生一本な感情を表白して居る。

あしびきの山路越えむとする君を心に持ちて安けく
もなし

君が行く道の長路を繰りたたみ燒きほろぼさむ天の
火もがも

いのちあらば逢ふこともあらむわがゆゑに將な思ひ
そ命だに經ば

天地の至極の限に吾が如く君に戀ふらむ人は眞實あ
らず

白たへの我が下衣うしなはず持てれ我が背子たゞに
逢ふまでに

歸りける人來れりといひしかばほとほと死にき君か
と思ひて

わが背子が歸り來まさむ時のため命のこさむ忘れた
まふな

今一々の歌について言うて居る暇がない。強い執着の上に湧き上がつて來る悲痛の聲である。此作者は積極的な燃える感情と、男まさりな强い意志とを持つて居る女性であつたと思ふ。特殊の境遇にあつて、ほんとうに生命に觸れた歌を詠んで居る。眞實純情。命をかけた戀のこころが、永久に讀む人の心に迫つて來る。額田女王の歌のやうに、豊かさと含蓄とには乏しくとも、熱烈な感情の凝結を投げ掛けて居る所に吾々の心を強く動かすものがあるのである。

つぎねふ山城路を、人夫の馬より行くに、己夫の徒步
より行けば、見るごとに音のみし泣かゆ、そこ思ふに
心し痛し、たらちねの母の形見と、吾が持たる眞澄鏡
に、あきつひれ負ひ並め持ちて、馬買へ吾が夫。

卷十三にある歌で、作者は不明である。

山城往還を、よその人の夫は馬で行くのに、自分の夫は徒步で行くので、それを見る每に泣くばかりである。其事を思ふと胸が痛くなる。それで、母の形見として私が大事に持つて居る鏡に、蜻蛉の羽のやうな領巾、此二品をば一緒に抵當にして、さうして馬をお買ひない、わが背の君。といふのである。後世山内一豐の妻が鏡背の金を取出して、夫に馬を買はしめたのも此遺風であつて、同一の意氣込とも見られる。さうして私の心は寧ろこの貧しい人妻の心持に一層强くひかれる。

萬葉集には「詠み人知らず」の歌がたくさんある。この何といふ人か、どういふ生活をした人かも、分らない人の或時

に詠んだ歌に、面白いものが非常に多い。

朝戸出の君が足結をぬらす露原、とく起きて出でつつ吾も裳の裾ぬれな。

旋頭歌である。いかにも健康な清新な女性を思はせられる。萬葉集巻頭にある雄略天皇の長歌に「此丘に菜つます兒家のらへ名のらさね」といふ言葉がある。どうも上代ほど自然に親しんで、生き生きした女性を美しいと見たやうに思はれる。

庭に立ち麻を刈り干ししき偲ぶ東女を忘れ給ふな

稲搗けば皸る吾が手を今宵もか殿の若子がとりて歎かむ

大化改新以後、地方諸國と都その往來が頻繁になつて、地方の女性の心にだんだん動搖が起つてきた。私はさうした地方の美しい女性の面影を思ひ浮べながらここで筆を擱く。

平安朝の女性

與謝野晶子

日本の女性史上で、私の最もなつかしく思ふのは、平安朝の文化に参加した婦人達が第一です。

平安朝と云つても、その初期と中期の婦人達を云ふので、地方を根據とした武人の勢力が中央に及び、藤原氏の榮華が衰へて、朝廷の財政が不如意になり出した晩期には、もう後世に於ける日本婦人墮落の萌芽が胚胎してゐました。

私がなつかしく思ふ婦人は當時の平民階級でも無ければ最高の特權階級即ち貴族社會でもありません。その中間にある第二階級、官位で云へば男子は概ね地方官になり、京官として榮達しても辛うじて四位に叙せられるか叙せられぬかの間にあり、到底上卿格にはなれないと云ふ階級に生れた女子達を云ふのです。

即ち平安朝初期の小野小町、伊勢にしても、中期の右大將道綱の母、馬内侍、淸少納言、紫式部、赤染衛門、和泉式部大貳三位、藤原孝標の女にしても、悉く右の第二階級に生れた婦人です。

この階級は官位こそ藤原氏や源氏の中の時の花を挿す第一階級に及ばず、常に其れに隷屬してゐますが、當時地方官の物質的收入は豐富でしたから、其點で餘裕を持つた有産階級であり、また第一、第二階級を通じて學問藝術及び宗教を尊重した時代に殊に、この階級の男子は仕官の資格として學問を修めなければなりませんだから、併せて知識階級でもあつたのです。學問上の專門家は大抵この階級から出ました。當時の大學は第一階級の子弟も學びましたが、この階級の子弟が學生の大多數を占めて居ました。

男子がさうであつたばかりで無く、この階級では女子もまた競つて高等教育を修めました。女子に學問の奬勵された事は既に奈良朝時代の特權階級に始まり、藤原不比等の後妻で光明皇后の繼母、宮中に勢力を持つて、藤原氏の幸運の礎は大にその手腕に由つたと考へられる縣犬養三千代のやうな女學士をさへ出してゐますが、この女子好學の風は平安朝に入つて層一層盛んになり、嵯峨帝の皇女有智子内親王のやうな漢詩漢文を善くする閨秀作家などが出ました。さうして高等教育を修める事が當時の第一、第二階級を通じての女子の資格として必須の條件になりました。

つまり是等の階級に於ては、教育の均霑上に男女の差別的待遇が撤廢されて居たのでした。その學ぶ所も性別に由つて大して拒ばまれる所は無かつたやうです。天文、數學、兵學などは男子の專ら學ぶ所でしたけれど、國文學、漢文學、佛教、歴史、音樂、習字と云ふ類の教育は男子も女子も共通に受くべきものになつて居ました。此點は德川時代は勿論、明治の女子にも拒まれて居た所で、私が平安朝の女性のなつかしい特色の一つと考へる所です。

教育は略ぼ男女平等でしたが、併し教育の仕方は男女に由つて異つて居ました。男子には幾つかの官立の大學があり、また學者の私塾のやうなものもあつて、自由に門を出て學ぶことが出來ましたが、今のやうな女學校の制度の無かつた當時の女子は、一人一人家庭に於て學ばねばならなかつたのです。

それは今の女學校で學ぶよりも困難の多かつたことでせうが、併し今日の一般の家庭よりも、この階級の當時の家庭はいろいろの條件が好かつたやうにも想はれます。第一、親兄弟

が自ら教育があつて、學問藝術の價値と必要とを知り、同時に好學の大勢に促されて。女子の高等教育を奬勵しました。父兄が自ら熱心に教へもし、專門の道は家庭教師と云ふべき人々を聘して教へもしました。紫式部の幼時に父の爲時が、史記を教へたのは有名な話ですが、兄の惟規も常に妹の學問の相手となり、「源氏物語」の材料なども供給したらしく想はれます。「源氏物語」の中で幼い紫の上を源氏が自ら教育する所、宇治の八の宮が二人の姫君達に琵琶や琴を教へたりする所は當時の上流の家庭が寫實されてゐるのでせう。當時の文學を讀んでも歷史や隨筆を見ても、學問藝術の教養ある女子は專ら讃美され、その半可通には顰蹙しても、その深きことには益々深からんことを好しとされてゐるのは、當時の父兄が女子教育を奬勵した反影だと思ひます。

即ちこの階級の家庭は、概して初めから學問藝術と宗教を生活の重要條件としてゐる家庭で、明治以來の家庭が營利と專門の職業との外に何も知らない家長に司配されてゐるのとは大違です。さうして概して物質上の苦痛を知らぬ家庭でしたから、教育の設備には事を缺かず、印刷術の無かつた時代でしたけれども、必要な內外の書物は寫本を作らせて讀み樂器其他の教育器具は家にも傳はり、また新しく造らせもしました。言はば各の家庭が女子のために一つの好い學校でした。

かう云ふ好い環境に生れた當時の女子が、何よりも感心なことは、概して自發的に進んで其等の課業を精勵したことです。彼女等の學んだ科目の數は決して今の女學校の科目の數に劣らず、その教育の質の高さに於ては今の女子大學の比で無いと思ひます。音樂は必須科と云ふべきもので、箏の琴、和琴、琵琶の數々を習ひます。和歌作文も必須科の一つで、そのためには古今の歌集と小說隨筆の類の代表的なものを讀まねばなりません。漢文學や歷史も漢文で書かれたものを讀み、佛教では短い陀羅尼の類は勿論、法華經八卷を初め幾種かの經を讀みます。故事の趣味の尊ばれた時代ですから、座談の資料にも、歌や文章の資料にも、其等の和歌、小說、隨筆、漢書、經文の意義と成句とが諳記されねばなりません。清少納言が白氏文集の詩を諳記してゐたのは格別驚くべき事でなく、和泉式部の歌を初め當時の女流歌人の歌には法華經が屢々引用されて居ます。「源氏物語」に至つては作者が和漢の學問歷史、故事、典據、及び佛教と音樂と、人情の曲折と、社會生活の機微とに驚くべき博大細緻な蘊蓄のあつたことが想はれます。此外當時の女子は、裁縫、習字、香、雙六

碁の如き技藝をも修め、また、衣服、持物、裝飾具、調度等に就て色彩と形とのデリカアな諧調を心得ねばなりませなんだ。

それだけの複雜な敎育が家庭に於て成されたと云ふ事は、明治大正の家庭の粗悪な光景を見慣れた私共には奇蹟のやうにも感ぜられますが、それがさまで困難も無しに實行されたのでした。殊に驚くのは、それだけの高等敎育が大抵廿歳前後に一通り完成してゐた事です。敎育を受けたと云ふ今の女子が廿三四にもなつてまだ日本文學の代表作の一冊にも精通してゐないのとは大違ひです。

どうして、さう云ふ敎育が出來たかと云ふと、環境も宜しいが、何よりも女子自身が進んで自己を敎育しようとする自發的の意氣込が盛んであつたからです。更科日記の著者は父の任地の常陸に居て、十三歳以前に「源氏物語」其他の小說や歴史を讀むために早く都へ歸ることの出來るやうにと祈つて、木で等身の藥師如來を造らせて拜んだと書いて居ます。之が當時のこの階級の女子に共通の敎育欲であつたのです。自發的にする精勵は案外苦痛とならなかつたので、それだけの煩瑣な自己敎育が出來たのだと思ひます。一體に平安朝の男女の心持は年齡よりも早く成熟したやうです。

人は常時のこの階級を漫然と想像して有閑階級であつたやうに思ふのでせうが、それだけの複雜な敎育を家庭でするには、非常に周到な用意を以てせられ、今日暑中休暇に二ケ月もぶらぶらして暮すやうな弛緩した生活は無かつたのです。法華經や般若經を幾部も寫すと云ふやうな修行さへ妙齡の女子もしたのです。

次に私の感服する事は、平安朝の女子が、右の敎育に由つて高め且つ深め得た自己の個性を以て、概して二様の生活を創造した事です。私は之を更に非常に尊いことだと思ひます。二様の生活とは、一つは藝術に於て、一つは戀愛に於て。

小野小町の歌は奈良朝の人麿に繼ぐ敍情詩の新聲です。その刺戟は貫之、躬恒を起し、和泉式部を振はせました。歌人伊勢の書いた「伊勢物語」は我國最初の小品文學集として後の凡ゆる大小の小說の祖では無いでせうか。それは平安初期に於ける女子の藝術的業蹟の代表です。之よりして中期に入れば「蜻蛉日記」「枕草紙」「源氏物語」「紫式部日記」「狭衣」「更科日記」「榮華物語」「和泉式部日記」「和泉式部歌集」、數へて來れば女子の藝術が平安朝文學の殆ど全部を満たしてしまひます。是等は最も大きく光る星ですが、遺された文献に由つて想像すると、小さな星は此外に無數にあつたやうです。

當時の女子が、どうして其れだけの創作を藝術に由つて成し得たかと云ふ事は、また徳川時代や明治大正の生氣と獨創とをかいた女子を見慣れた者には想像も附きかねる問題ですが、私は之を解釋して、當時の女子は教育に由つて高められると共に、ほんとうに自己を、從來の因習女子から、因習男子から、一切の小さな物欲に囚はれた人間から解放した爲めだと思ひます。それの最も偉大な代表者が、紫式部です。

當時の同じ階級の男子は、高等教育を受けながらも、女子ほど正直に、大膽に一本調子に飛躍する事が出來なかつたのです。彼等は通俗な欲望に拘泥する不純な文化人でした。彼等は名聞利欲に繫がれて、人間としての理想に專心沒頭することが出來なかつたのです。一流の博士である大江匡衡さへも權門藤原氏の手足たるに甘んじ、歌聖の巨匠と云はれた藤原公任さへも、官界に戀々として、その歌は憐れむべき凡庸の域に停滯しました。一條帝と中宮と道長との異數の愛顧を受けながらも、常に宮仕を厭うた紫式部の心境に比べて、何たる相違でせう。(後の西行だけは別ですが。)

紫式部ほど大きくない女子でも、また紫式部ほど徹底しない女子でも、教育に由つて目覺めた自己の純粹を愛重し、理想的生活へ側目も振らず勇往する氣分が勝つてゐたので、大なり小なりの價値ある文學的作品が出來上つたのだと思ひます。即ち彼女等は同じ階級の男子等よりも自由に新しい生活を體驗したのです。

彼女等の戀愛も同じ意味の、眞劍な、自由な、大膽な、さうして純粹な生活の創作だと私は考へます。彼女等は因習婦人のやうに男子に隷屬しようとは思はなかつたのです。自己の地歩を高く守りながら、眞に自己を知る男子と愛し合ふことを求めたのです。彼女等には自己の尊貴に目覺めるだけの教育があつたと共に、その理想を以て一貫し得るだけの經濟的保障が備はつて居たのは非常な強みでした。この強味は平安末期以來今日に至るまでの女子の失つてゐるものです。

平安中期の文學なり歷史なりに現れたこの階級の女性が、物質生活のために一身を愛の無い男子に托する例の甚だ乏しいのを見ても、彼女等の結婚が戀愛に終始することを理想としてゐた事が想像されます。但し藝術が獨自の創作であるのと違ひ、戀愛は二人の合作であるために、容易にその機會をも、その完全な戀人をも得難いのです。性急な殉情的女子、奔放な狂熱的女子にあつては、屢ゝ一致し難い對象の性格をも輕信し、自己の心の内にのみある理想の戀の姿を對象に移して眞實の人格の如く幻覩し、幾度も失敗を繰返して、他か

ら徒らに多情浮薄な女性のやうに誤解され罵倒されるやうな結果にもなります。道長が和泉式部の物だと云ふ扇の上に「うかれ女の扇」と書いたと云ふのは半正しい批評ですが、併し純粋な戀愛を求めて、運惡く理想的な戀人を探し當てなければ、和泉式部のやうな不幸な結果にもなるでせう。この人は理想的な戀愛生活の創作には失敗しましたが、その失敗の記録である文學の創作には大きな業蹟を舉げました。

和泉式部のやうな大きな犧牲を拂つて失敗したのは特別の例ですが、そんなに犧牲を拂ふこと無しに、戀愛の上にも獨立することの出來たのは平安朝の女子であつたのです。「竹取物語」なども、當時の女子の自覺した戀愛の尊貴の象徴として私は處女の貞潔と考へて居ます。さうして年は十五六も違つてゐましたが、父の同僚で、大學教育をも受け、式部丞から衛門佐になつた藤原宣孝の切なる戀を容れて、この唯一の戀以外に全く他を顧みる所の無かつた紫式部は、淋しいながらも清い戀愛の理想を自己の上に實現した人でした。平安朝の官人の經濟生活の手段は、私達の持つてゐる今日の思想に一致しないものですけれど、當時の女子の精神生活には八百年後の現代の女子に大なる發憤の資料を與へるものがあると思ひます。彼女等は父兄や良人の收入に護られて生きましたが、私達は何等かの勞働に由つて自分自身の經濟的保障を自ら作りながら、自己教育及び創作的生活の點に於て彼女等の後繼者にならうとするのです。

奈良時代の女性美

藤懸靜也

一

女性美と一言に云つても、その解釋には種々あつて、或は女性の肉體美、或は服飾の美、又は其の精神的の美點までをも含めて考へる場合もある。現代人の考であれば、恐らくそれ

らの總てが問題となるのであらうが、今こゝに天平時代の女性といふ制限を加へるならば、果して如何なることが考へられるであらうか。無論その何れもが多少は考へ得られることではあるが、肉體美と云つても、現代人の考へるやうなものは、此の時代には考へられなかつたのである。ギリシア古代の藝術思想の影響を受けた處であるならば、古くから確かに肉體其ものの美といふことを特に現はしたものがあつたであらうが、吾東洋にては、其の文化の成立に西洋のものと違ふ處があるので、女性の肉體美と云ふものゝ進んだ表現をされたものはない。尤も佛像であるならば、肉體の美をよくあらはして居るが、所謂女性美といふやうなものは、あらはされて居ないのである。また精神的の美を以て特に女性美の大切なものとしたのは、儒教の精神が吾文化を支配するやうになつてからのことで、此は近世に於ける女性の上に見らるゝ處である。

今、吾々が奈良朝の女性美といふことを考へる時、殊に自分の專門とする處の美術史研究の立場から考れば、服飾の美が特に目立つのである。從つて此の時代の女性美觀としてはやはり服裝の美から述べることが自分にとつて最も興味あることである。

二

乃で今、奈良朝時代の女性美を考へんとするには、まづ天平文化について一考せなければならない。天平文化は云ふまでもなく、大化の改新によつて新に唐朝の文明を攝入れ、舊來の吾が國俗を全然變化させて、あらゆる方面に、唐朝文物の横溢した時代である。然かもその中の最も華やかであつた一時期は天平であつたと云ひ得る。併しながら、その燦爛たる文化たるや、是れ實に宮廷を中心として、之れを取卷く貴族の一部分に限つた文化に過ぎないので、同じ都の內ながらも庶民は殆ど其の恩惠に與らなかつたのである。況や一歩を都の外へ移したならば、全く其の恩澤に浴せず、未開の狀態であつて、譬へば亞弗利加土人の間に、歐洲の植民地があり大厦高樓が軒を並べて全く歐都の天地と違は文の化を有つてゐても、土人は何等其の文明に與らないのと、殆ど同じ狀態にあつたのである。

かやうに奈良朝時代は、如何にも燦爛たる光輝を放つた時代期のやうではあるが、文化の範圍が一小部分に過ぎなかつたといふことは、今女性美を考へてみやうとする場合に、最

も大切なことである。尤も觀察の如何によつては、土俗の女性の間にも、大和撫子の美しい女性美が無論あつたわけであり、賤が乙女にも精神上に固有の美點を有つて居つたことも考へられるのであるが、併し今述べることは、特に上流社會に現はれた女性美觀で、それは實に唐朝文化の影響によるものである。

三

然らば、唐朝文化の影響を蒙つた女性は如何なる姿をして居つたかといふ事は、今日は委しくは判らないとしても、幸に此の時代の風俗を現はした繪畫が、僅かながら現存することによつて、大凡を窺ひ知ることが出來る。

其の材料としては、第一に正倉院に於ける樹下美人圖屛風六枚を擧げねばならね。此は一曲が高さ四尺六寸、横一尺九寸一分あつて、各、樹下に居る女が畫かれてゐるので、樹下美人圖と俗稱されてゐるが、舊くは鳥毛立の女の屛風と云はれて居る。その屛風は下繪を畫いて、その服裝などを彩色するに繪具の代りに鳥の毛で飾つたもので、今日の押繪細工に類した仕方である。恐らく非常に手數を要し、且つ當時は立派なものであつたらうと思はれるが、併し今では其の鳥毛の全部が剝落して、下繪の描線のみが現はれて居る。ただ美人の肉體だけは、元々鳥の毛が着けられてゐなかつたので、之れには彩色が施されて居て、顔は肉色に塗られ、眉間に綠色の小なる點を現はし、頰に圓く紅を差して居る。手や胸の肉體の現はれた處には彩色が施されて居る。

その圖様は、或は立つて掌上に寶玉を捧げて居るもの、岩に腰かけて手を拱くものなど種々のものがあるが、大體、樹下に一美人を現はしたものである。これらによつて觀ると、頭には大なる髷を用ひたもの丶如く、相當の裝飾を施してあるが、服飾の方は剝落して居るので、如何なるものを用ひたか判然しない。併し相當に美しいものであつたことは察するに難くない。

之れと相對して考ふべきものに、支那新疆省發掘の樹下美人圖がある。先年、本願寺の大谷光瑞師が探險隊を組織して新疆省を究めた際に得たもので、やはり樹下美人圖であり、正倉院の屛風の最もよく相似て且つ一從者を伴つてゐる。之れによつて觀ると、樹下美人の圖は、既に唐代に行はれて居たもので、その風俗はいふまでもなく、唐朝のものである。

猶、此の時代の服裝を考へるに最もよい材料としては、藥師寺の吉祥天女圖がある。此の天女は元來福德を授ける神で此の時代には吉祥會が盛んに行はれたのであるから、恐らく

世界に冠たる文明であつたかといふことを現はしてゐる。唐時代の女性美は是に依つて完全に發揮され、それが當代の理想の女性美として崇められたことであらう。

然るに我が天平時代の美人としては、傳說的には衣通姫、吉祥天女がある。一は美術に於て、一は傳說に於て、名高いのであるが、要するに奈良朝時代の貴族の女性は一際立ち勝つた美しさを有して居たので、かゝる傳說をも生ずるに至つたのであらう。奈良朝の文化は、日本文明の上の、一大發展であつて、それ以前の時代に比較すると、實に雲泥の相違がある。殊に著しい女性美の發現をみたであらう。その後、平安時代となり、純日本的文化を代表した優逸した女性の一時に現はれた時代を思ひ合せると、奈良時代の女性にも亦特殊な位置を與へねばならず。從つてそこにまた特殊な女性美を發見するのである。

元祿女繪姿

鏑木清方

華やかな時世を求むれば、元祿を距ること遠からぬ桃山時代もあり、更に溯つて平安朝の極彩色の繪卷物を展べたる如き時もあれど、それらは武家と公家との限られた一部上流が豪奢を極めたのに過ぎなかつた。

元祿のこゝろ…

元祿の…

天珉の金屛風の前に、寛宣の女繪を生のもので立たせて見たと假想する、華麗なる元祿の時世粧は彷彿として、その一端を窺ふに足る。

元祿は江戸二百餘年の徳川氏治世の中で、最も文化の榮えた時、一孕の牡丹花、今を盛りと咲き誇つた狀にも似て、望月の虧く影を知らぬ黃金時代であつた。

の爲めに奪はれてゐた人間向上の志を、[illegible]都會の文明に[illegible]ものは藝術に依つて取り返したことに於て、[illegible]の時代に於ては殆んど交渉なかつた民衆に及び、前後に比ひなき絢爛を極むるに至つた。文藝、美術、演劇の發達はめざましいものであつた。

女の髮かたちも時好に伴つて進んで來た。紋、縫、摺箔、は既に前期から次いで精巧を加へてゐるのに、更に今まで見たことのない新らしい友禪染が行はれる、振袖は大きく、帶の幅も廣くなつて來た。

平安、桃山の女裝の美しさは説くまでもないが、それは今もいつた如く、下樣の及びも付かぬ際のこと、元祿の代は西の京も東の都も、世を擧げて百花燎亂、咲き匂ふ花の粧ひを凝らし、分けても色を賣りもの、遊里の女の姸やかなるは西鶴が一代男偸言の繪卷、今にその艷容を傳へて居る。遊里は寬文の昔から江戸のかなり末期に及ぶまで多く粋の世界を造つて居た。この里のいはゆる名妓と呼ばるゝ程のものは、貞操を賣ることを除いては、その生活も人がらも大名、高家の貴婦人と毫も異なることはなく、才學、技藝、遙かに時流に抽ん出るものが尠なくない、文章に傳へ、繪にうつせるものは、作家の意匠によるものが多いとしても、衣裳

縫などとその一[illegible]

元祿の衣裳好みには有名な話が[illegible]でその當時の有德の町人の內室たちの參會があつた時、[illegible]村內藏之助の妻は何ぞ特別な趣向をして一坐をアッと言はせようと、知己の尾形光琳に相談をかけた、今でいふ成金の奧樣の好も、元より金に糸目はつけず、相談相手は名に負ふ日本第一の意匠家、どんな素晴しい衣裳が出來るだらうとは、平常中村家と光琳との關係を知つてゐる他の奧樣たちの洩れきいて、當日は誰も彼も、綾羅錦繡にあるほどの綺を盡し、恐らく華やかなる元祿の盛し能ふ限りの衣裳を盡してわれこそは衣裳自慢の中村の奧樣の鼻を明かして[illegible]髮にとむる伽羅の油の香りも高く、定紋の[illegible]飾り色美しい女乘物を、各々[illegible]屋敷へ乘[illegible]う。

內藏之助の妻は勿論、時刻を[illegible]催んだと思ふ頃、乘物を玄關へ付け[illegible]次がしてゆる〳〵と長い廊下を、[illegible]き亂るゝ花園のやうに、綺羅を飾つた[illegible]

ス

は浮き外の

人形繪なども浮

其の本尊であつたらうと思ふ。實に美しい現世的の服裝をつけたもので、唐朝美人の盛裝した姿であるらしい。模樣も相當に細緻であり、雲繝彩色を用ひて、頗る麗しく、唐朝美人の最も美しい形裝を寫したものと思はれる。

更に當代の繪として考ふべきは、過去現在因果經畫卷である。之れにも亦面白い女の服裝が描かれて居つて、例へば、久邇宮家御所藏の分には、悉多太子の妃耶輸多羅姫が、太子の出家を思ひとゞまらせやうとして、寸時もその側を離れず奉侍し、且つ太子の厭世心を和らげるために、父王が妙伎女に命じ、伎樂其の他にて娛樂せしめる圖があるが、それらは簡單な繪でありながら、如何にもよく動作だ寫されて、腰をかがめ手を動かして舞踊する姿や、笙を吹き、琵琶を彈ずる女たちの姿が面白く畫かれて居る。此の繪卷は正に天正年間に吾邦で畫かれたものであるが、現はされてある服裝は、是亦唐代の服裝に外ならないのである。

四

斯樣に考へて來ると、今まで述べた處の吾邦に存する繪畫は皆何れも唐朝風俗を寫したものであることが明らかであるが、それが日本の風俗と如何なる狀態で關係を有つかを考察しなければならぬ。時代であるから、併し前に述べたやうに天平時代は總ての文物を唐朝から攝り入れて我が國の貴族の風俗が、全く唐朝風にかはつたといふことは想像するに難くない。殊に男子の朝廷に仕出する時の服裝は、恐く唐服を模したのであるから、女子の服裝も亦唐式に變化したといふことは當然のことゝ思ふ。されば、それ等の繪にかゝれた姿はまた我が貴族の服裝と同樣であつたと考へても差支ない。從つて吾々はそれらの女の繪から、奈良時代の女性美がどんなものであるかを考へて見たい。

現今、繪にかかれる處の天平の美人は、皆以上に述べた材料に基くものであり、又天平美人は即ち唐朝美人と殆ど變りないといふ見解から、唐代の墓より發掘される所謂明器なるものを手本として寫すのであるが、それらの諸材料から考へると、天平の美人は極めて穩かな圓滿な表情を有つて居つたといふことが考へられる。之れは今遺つてゐる繪の上に認められるばかりでなく、實際さういふ表情のものであつたらうと思ふ。

何となれば、此の時代の佛像は既に圓滿なもので、前の推古時代のものに比すれば、著しく優美圓滿の相好を加へてゐる點から推すも、恐らく當代の女性美は圓滿の相を具へたものに存したのであらう。其の顏面も皆豐頰の美人であつたら

うと思ふ。顔の形式は時代によつて或は圓顔が愛せられ、或は瓜實顔が賞せられるのであるが、此は髪の形と服装の如何によつて、顔の輪廓の美に變化を生ずるのである。例へば、髪を引つ詰めて結ぶならば、ふくよかな頬を有つた顔でなくては貧弱に見えて釣合はない。之れに反して頭髪に澤山の装飾を施す場合、例へば江戸時代に於ける華魁のやうにたつぷり髪を結ぶならば、其の顔は長くなくては釣り合はない。從つて瓜實顔が賞讃されるのである。

斯樣な關係から平安朝時代の女のやうに、髪を結ばずに垂れ下げる時は、頭に何の装飾もない故に圓顔でなくてはならない。平安朝時代の女が圓顔にかかれてゐるが、それと同じく天平時代にも髪はそんなに飾られて居ぬ故に、豐頬の美人が賞讃されたのであらう。髪が簡單であると共に服装も亦輕快の趣を有つてゐる。

要するに此の時代の服装としては、特に舞の時などは長い袖を着けて居るが、大體は袖の短いものが多く、それに袴を着けて居る。今の改良服なるものは、此の天平風を模したのであるが、大體にて現代の女の服装とよほど共通點を有して居るのは、頭髪の簡單なことも共通してゐるからである。

これらの服装を着けた女たちが、春日野邊を逍遙する姿を考へると、その時代に於ける新しい女たちの散歩する有樣が想見される。かゝる女の装ひが當時の人々の目に如何に美しく映つたであらう。周圍にある女たちが、さやうな文化的の恩惠に有しも浴せなかつた折とて、これらの女性美は、掃溜に鶴といふよりも寧ろ孔雀の美しさにて臨み、人々には天つ乙女の如くに感じられ、女性美を充分に發揮したことであらう。

五

次に吾々は、此の時代に於ける歴史的人物の最も有名な女性について一考を煩はさねばならぬ。乃で第一に擧ぐべきは其の時代を代表する光明皇后である。光明皇后は、聖武天皇と共に佛法興隆に御心を盡されたのであるが、御名の示される如く、輝き亘る美しい御容貌にましましたであらうと思ふ。美しいことは單に容貌服装の上ばかりでなく、又實に女徳といふものの上からも、特に麗はしく、皇后は實に肉體美精神美との兩方面を兼ね具へられた女性でましましたことが考へられる。彼の慈善事業として浴室を設け、自ら下賤惡疾のものの垢を流されたことなど、それが單に傳説であるとしても、皇后の御徳の一端を物語るものである。甞て先例のない臣下の家から皇后として迎へられたといふことも、皇后が

如何に優れた女性であつたかといふことを現はしてゐる。唐朝式の女性美は皇后によつて完全に發揮され、それが當代の理想の女性美として仰がれたことであらう。

猶此の外に天平時代の美人としては、傳説的には衣通姫、中將姫などがあり、一は美貌に於て、一は信仰に於て、名高いのであるが、要するに奈良朝時代の貴族の女性は一段立ち勝つた美しさを有して居たので、かゝる傳説をも生ずるに至つたのであらう。奈良朝の文化は、日本文明の上の、一大發展であつて、それ以前の時代に比較すると、實に雲泥の相違がある。殊に著しい女性美の發現をみたであらう。その後、平安時代となり、純日本的文化を代表した優逸した女性の一時に現はれた時代を思ひ合せると、奈良時代の女性にも亦特殊な位置を與へねばならず、從つてそこにまた特殊な女性美觀を生ずるのである。

元祿女繪姿

鏑木清方

光琳の金屛風の前に、師宣の女繪を生のもので立たせて見たと假想する、華麗なる元祿の時世粧は彷彿として、その一端を窺ふに足る。

元祿は江戸二百餘年の德川氏治世の中で、最も文化の榮えた時、一朶の牡丹花、今を盛りと咲き誇つた狀にも似て、望月の虧く事を知らぬ黃金時代であつた。

華やかな時世を求むれば、元祿を距ること遠からぬ桃山時代もあり、更に溯つて平安朝の極彩色の繪卷物を展べたる如き時もあれど、それらは武家と公家との限られた一部上流が豪奢を極めたのに過ぎなかつた。

元祿の文化といふのはさうでない、あるか、なきかに虐げられ、虫けら同然に脫しめられて居た町人が時を得て、地位

の爲めに奪はれてゐた人間向上の志を、あるものは富にあるものは藝術に依つて取り返したことに於て、都會の文明は他の時代に於ては殆んど交渉なかつた民衆に及び、前後に比ひなき絢爛を極むるに至つた。文藝、美術、演劇の發達はめざましいものであつた。

女の髪かたちも時好に伴つて進んで來た絞、縫、摺箔、は既に前期から次いで精巧を加へてゐるのに、更に今まで見たことのない新らしい友禪染が行はれる、振袖は大きく、帶の幅も廣くなつて來た。

平安、桃山の女裝の美しさは說くまでもないが、それは今もいつた如く、下樣の及びも付かぬ際のこと、元祿の代は西の京も東の都も、世を擧げて百花燎亂、咲き匂ふ花の粧ひを凝らし、分けても色を賣りもの〻遊里の女の妍やかなるは西鶴が一代男師宣の繪卷、今にその艷容を傳へて居る。

遊里は寛文の昔から江戸のかなり末期に及ぶまで全く特種の世界を造つて居た。この里のいはゆる名妓と呼ばる〻程のものは、貞操を賣ることを除いては、その生活も人がらも大名、高家の貴婦人と毫も異なることはなく、才學、伎藝、遙かに時流に抽ん出るものが尠なくない、文章に傳へ、繪にうつせるものは、作家の意匠によるものが多いとしても、衣裳の好み、室の調度の好みなども定めし優れた好みがあつたらうと思はれる、吉野が好みで今にその名の傳はつてゐる吉野織などその一例といへる。

元祿の衣裳好みには有名な話が傳はつてゐる、京都の東山でその當時の有徳の町人の內室方の參會があつた時、豪商中村內藏之助の妻は何ぞ特別な趣向をして一坐をアッと言はせようと、知己の尾形光琳に知慧をかりた、今でいふ成金の奥樣の好も、元より金に糸目はつけず、相談相手は名に負ふ日本第一の意匠家、どんな素晴しい衣裳が出來るだらうとは、平常中村家と光琳との關係を知つてゐる他の奥樣たちの洩れきいて、當日は誰も彼も、綾羅錦繡にあるほどの贅を盡し、恐らく華やかなる元祿の爲し能ふ限りの善美を盡してわれこそ衣裳自慢の中村の奥樣の鼻を明かしてやらうものと、下げ髪にとむる伽羅の油の香りも高く、定紋つきの自動車ならぬ塗り色美しい女乘物を、各々參會の場所へ乘りつけたであらう。

內藏之助の妻は勿論、時刻を遲れさして、人々のや〻待ち倦んだと思ふ頃、乘物を玄關へ付けさせた、中村樣御出と取次がしてゆる〳〵と長い廊下を、花やかな腰元を從へて咲き亂る〻花園のやうに、綺羅を飾つた列座の女客の前に現は

れたその人の衣裳は、白を襲ねた黒羽二重の小袖、對の打懸帶付であつたのが、さしも着飾つた一座の夫人達の中に鷄群の一鶴といはうか、色を殺して色を奪つた光琳が機智、といふより彩色法の極意に、見るものハツと息を呑んだことであらう、この日も亦中村が妻の衣裳好み隨一と讃えられたといふ、興味あるこの傳說は恐らく眞實のことらしい、光琳と中村内藏之助夫婦とは親類となつた關係もあり、一代の豪富であり、風流を解した内藏之助と、豪華な作品の作者、嵐山の花見に竹の皮の裏に金箔捺して、大堰川の流れに棄てたと言はるゝその光琳とは、パトロンと作家との意氣の投合があり得べく思はるゝ。

江戸には石川や六兵衛が妻將軍の上野お成を拜むといふので、上野廣小路の仕立物師の店を借りて毛氈を敷きつめ、金屛風を廻らして、女の童を從へ、名香を燻らして、自らは高貴の内方のやうに着飾り、簾をかけて祭り見物のやうにして眺めた、その香遠方まで薰りて將軍の乘輿に傳はり、あれは何ぞとの御尋ねがあつたので事現はれ、牢舍の上財産は沒收、江戸追放に處せられたといふ。この同じ人やはり京の難波十右衛門の妻と參會の砌、黒の打懸に南天の立木を金絲銀絲に縫ひ、累々たるその實を珊瑚で飾つたゝ傳へられる。内藏之助夫婦も奢侈に長ぜる故をもつて、家は缺所、家財沒收の災を蒙つたといふ。明治、大正の代には町人がいかほど潛上な奢りを爲たところで、何の咎めを受ける氣遣ひはない、中村が妻、石川や妻が知らぬ贅澤は量り知れぬ。

江戸時代を通じて女の地位の卑しめられて居たことは現代に生れた人の思ひ及ばぬ程である、風俗の上に華美を極めた元祿時代でも女性それ自身にとつて何の惠まれたところはない、美しい綺羅もつまりは男が性的滿足の欲求から爲せるものに過ぎない。女はそれを意識して男の心を捉ゆる爲めに粧ふ、女の地位の認められざる時、異性を擒捨することは尠くも、その對手にだけ己れを認めさせることになる。女は所詮罪深きもの、前世の業と諦めて居た當代の女性は、今にして思ふほど己れの地位を不滿に感じなかつたかも知れない。

早婚のその頃、島田髷重たげに、緋綸子の丸模樣の大振袖着た娘姿、十八九とも見えるが、西鶴のお七は十六、お夏は其の年十六まで男好みて、今に定まる緣もなし。とある。今の十六はその頃の十三位に、二十位が十六七にも當るであらう、又ずつと昔には女子も竹馬に乘つて、遊んだといつて、嬌態を作る娘心を戒しめた古老もある。西鶴や近松のものを見ても、文化の普及は享樂の種を播き、色里の全

盛は都に淫靡の風を傳ふるに至つたのは否むべくもない。將軍綱吉が學を好むと倶に、甚だ色を好めるは、時世が之れを誘へるか上の好むところ、下これに從へるものか、其の臣牧野成貞が妻と娘とを姦し、有名な傳說、柳澤美濃守が妻を愛したといふのも寧ろあり得べきことである。

朝妻船は水干着た女が鼓を載せて、柳の下に泛べる小舟に在る狀を描いた。綱吉の愛妾お傳の力を描いたのだといふ。柳澤の妻おさめの力を描いたといふ例の俗說は一層劇的である。筆者英一蝶がこれに罪を被て島流しに逢つたなど、元祿の舞臺は悉く劇的であり、繪のやうである。

其の一蝶の畫に四季日待畫卷といふのがある。國華、其の他にも複製で出て居るが、その一晩に片破月に郭公啼く夏の件で、坐頭が三弦を彈き、若い娘が笠の踊を踊つてゐる、これを眺めて盃を擧げ、逸樂に耽つてゐるのは、眉を掃つた下げ髪の年增で、茶屋者らしいのが坐を執り持つて居る。

同じ人の畫で十年程前に、さる人に借りて寫したことがあるのにも、野良、色子の類を相手の大一坐で、客と見ゆるのはこれも下げ髪の女房らしく、盃を啣んだ遊樂の所である。浮世繪は凡てが風俗の實寫ではないが、一蝶の如きその派以外の人の風俗畫には寫實が大部分で、崋山の風俗繪なども浮世繪師のものより眞を寫さんと企てゝ居る、一蝶のこれらの畫を見てすぐ思ひ泛ぶのは、例の中村の妻、石川やの妻などの驕奢ぶりである、一蝶の畫がそれを寫したと斷ずるのは早計であるとしても、朝妻舟の傳說に思ひ合せてそこに何かしら思ひ當るものがあるではないか。

元祿の女を觀る時、嫁げる夫の姓にのみ傳えられて、その名さへとゞめ得ざる時代に、生島新五郎を挑嚴しい大奧へ引き入れた江島といひ、いはゆる驕婦のふるまいを寧ろ小氣味よくさへ思ふのである。(元祿といふも、これら凡て元祿年間の出來事ではない、元祿を中心としてその前後に亘るものである。

江戸頽廢期より明治初期への女性

山口剛

「女房をこはがる亭主の辭」は三馬の作「四十八癖の一節である。昨夜夜中までの大酒に目は腫れぼつたく、仏頂背にてがうてきと鬱いだ亭主は、これから女房にあふのが怖しいのである。友達は數へる。委細構はず戸をがらり、グツト睨みながら、ずつと内へ上つて、「嚊今歸つた。昨夜はあれが所へ行たア、いひ分はあるめえナ。あると云て見やアがれ、たゞはおかねえ。ヤイ酒を買て來や、迎へ酒呑べい。朝歸る事ア大概知れたもんだア、雪花菜汁でも拵とおけヱ 猿けへイめ」と無闇をきめて見さつし、のつけに先をとられるから、向が七歩の弱みだと、一切の女性はたゞ男性の隸屬と見、夫にのみ權威を持たせる世には、かゝる無理もなほ道理として通る筈である。しかし、この亭主は、從はない。理によつて、然るにあらで、たゞ何となしに女房が怖しいためである。彼は漸くの事で戸を明けて貰つて女房の枕元に畏る。女房は戸をあけてやるなり、又すぐ夜着の中へ、ころりと轉つて居る。女房は散々毒ついた擧句の果に、マア後々いつて聞かせやせうから火でも焚きつて、水でも汲んで來ねえと命ずる。女房はまたいふ「コウコウ、茶釜の中は昨夜の儘だによ、茶袋を替なせえ。コウ、茶釜を洗ふなら、中へ手を入れめえよ鐵氣が出ていかねえ。」亭主はたゞ「ヲイ」と答へる。

米櫃には米がなかつた。亭主には錢がなかつた。女房はいふ「お前錢もなくて、夜泊をするか、いい氣だの。おらア、お前の樣な氣になりてえ。」

亭主はたゞ恐縮して「コウ最うあやまつた」といふ、その言葉尻を捉へて、また「あやまつて濟むたら、ひもじい時、米にあやまつて居たら、腹がはりさうなもんだ」といふ。女

房は煙草盆のひきだしから小錢をかき集め、「サアこれで米を買ひねえ」と四文を投げ出す。なほも命じていふ。「そりや、これで歸りしなに、お汁の實を買たり。そして、きりきりして仕事に出なせえ。」亭主は例によつて、「ヲイ」と答へるばかり。

何といふ痛しい男性屈辱の相であらう。枕草紙を讀む者は一宮女に翻弄せられる平安公卿のあさましさを見る。浮世草紙を讀む者は太夫の前に跪く買手どものはかなさを見る。平安公卿の屈するは、淸少納言の鬼才縱横に抗し難いのであり買手共が却つて媚を呈するは、吉野、高尾に大なる教養があるがためである。この亭主が、斯うまで屈辱に甘んぜねばならぬのは、何故であらうか。昨夜の夜泊が惡いためであらうか、それとも平素の働きが足りないためであらうか。女房のすべてが正しいためであらうか。

その女房は、亭主が米買ひに出かけたあとで、隣の女房と高話。「おめへ程、亭主を下直にする者はあるめえ」と、隣の女房はいふ。「その筈よ、おらア亭主だとは思はねえ。お信を置た氣だ」。「へ、つまらねえ役だの。コウコウお平さん、あんな人がの、終によひよひになるんだよ。」「大詰までは見ねえはな」「その内に跡釜か」「そこは未練なしさ」「情があるのう。」「へちやむくれの開山、いくぢなしのつぺんといふ男サ」。斯くては、この女房の正しい正しからぬは論外であらう。たゞ笑ひこけるより外はなからう。そこに三馬の滑稽本の意義はある。

三馬はこの亭主と女房とによりて下層社會を描き出し、さうして、その醜惡の狀を嗤笑する。この嗤笑は、三馬の時代に於ては、今日よりもなほ大く響く。何となれば、すべての女性は、寺子屋によつて女大學、女今川を學び、また心學といふ民間教育機關によつて、女性はたゞ和順貞節たれと敎へられる時代であるから。すべての女性は、自己を壓迫する男性に對する反逆者としてその女房を謳歌する事なく、その態度に眉を顰め、その亭主の、臆氣ぶりを嗤ふ。三馬は、和順貞節に忠實なる女性等に、その笑ひの資料を呈すればよいのである。もとより社會問題について考慮するところあつて然るわけではなかつた。もし、そこに諷刺あり、穿ちありとすれば、それは これ等沒交渉なる他の意義を有するに過ぎない。この和順貞節の理想と、かの亭主女房との中間に、笑はれもせず、罵らでも濟む階級がある。そこに、江戸の多くの女性は安住して居た。三馬は、「諢話浮世風呂」に於て、一女性の口をかりて、その輪廓をうつし出した。

「惣體男といふ者は、表を勤める者だから、些つつのつき合もありうちだアな。そこを女房も得心して居ねえぢやアならねえ。目が明ずに惡くやかましくばかり云つて見ねえな。夫こそ猶さからつて出懸るはな。さうかといつて、だまつてばかり居てもすまず、諸事鹽梅物だによ。しかし又おらがかゝアだの、おらが山の神だのと云つて、かみさんをこはがる亭主も世間體の惡いものさ。なんぞの噺序には、てんでんの女房を譽ちぎるも氣障な奴さ。さうかとつて、むごくあたるばかりを能にして、ひどい目にあはせる亭主もつらの憎いもの也何でも氣の合つた夫婦が互の仕合、長い月日にやア好事ばかりもねえもんだから、兩方で不承仕合ふのさ。」かゝる夫婦觀は、江戸時代に於て最然るべきものとしてうけ取られた。武家生活の和順の理想から離れて、現實の生活から出でたものである。元祿から降つて、文化文政以降に落ちついたものである。

「四十八癖」の女房如きは、さておいて、これを一般に見る時夫婦の成立は大方親の意志により、家の都合による。まだ頑是ない子供の間にとりきめられた許嫁の習慣もかういふところから出來上る。

「春色淀の曙」の與茂七は、清八の女房のお照に横戀慕する。彼はいかにもして、その非望をかなはせようとする。清八の病に乘じ、その貧しきに乘じ、つひにわが子松五郎と、その娘とを許嫁にする。「俺が小倅も漸う七歳さ。お花坊は取つて四歳か。まだ行先は長え樣だが、まづ俗にいふ許嫁と、してみりやお前方と、俺夫婦は相舅同志、決して他人と云ふぢやアねえから、何樣なに肩を入れようとも世間で何ともいひてなし」とは與茂七の言ひ草である。何といふ犧牲であらう。しかも事情あつて、許嫁の二人は、わかれわかれて十餘年を歷ても、なほ當時四歳のお花は、夢の樣な記憶を辿つて、あてなき夫のために貞操を守る。

「春色淀の曙」は人情本である。人情本の興味は、現實生活の描寫であると共に、理想の生活の描寫といふ點にある。讀者はお花の運命を、當時に於て、まのあたり見るところの世相と照し合はせて同情もし、また世の女性たるものは、よろしくこのお花の如くならざるべからずとも考へる。人情本作者が、時に教訓がましき事をしるしたものは今日から見れば、一笑に附すべきものであらう。しかし、當時の多くの女性に於ては、なほ心學の如く、芝居の如く、一種の教化としてうけとられた。それ程、彼女の眼は明でない。故に、彼女にして、「春色梅美婦禰」の一くさりを見たら何といふのだらう。

米八は、今丹次郎がこゝに來ると仇吉をだます。仇吉は、待ちかねて、やきもきと焦れる。氣の毒さに米八はその虚言である事を話す。仇吉はなぜそんな出たらめをいふのだと詰る。米八との問答は斯うである。

米「ナニね、一寸雁木に立つて居て見たらば、斯いふ時に丹さんに約束をして、後から來て貰つた事もあつたけと思つたから、お前をも、ぢらして遣ふと思ひ付て、さういつたのサ。仇「左樣かねへ、モウ焦つてへ、しかし何樣も眞正でもある樣だは。米「ヲホ、、相變らず疑ぐり深いねへ。仇「ナンノお前だつても疑ぐり深い癖に。米「そりやアまた似たものは夫婦ぢやアないか。仇「然サ、お前と丹さんだは。米「私ばかりかへお前は夫婦じやあないのかへ。仇「そりやあ、夫婦の氣で居るけれども。米「否においひだねえ、夫婦の氣でないといへば、丹さんに言告けて遣ふと思つたけれども。マア堪忍してあげ樣ね、仇「ナニ堪忍して貰はないでも宜よ。堪忍しないのならば、どうおしだ。米「丹さんの代りに斯うして上げるヨとよいと爪捻る。仇「アレサ痛いよ、お前がさうすると、此身も負やアしないよ。サア私が丹さんの代りだよ。コレ其方丈夫を爪つて濟ふと思ふか。米「ヲヤヲヤ、否なおさん茂兵衛だ、角太郎さの所なんぞへ、誰が行くものか。ホ、、。仇「ホ、、アレサ折角、私が丈夫にならうと思つたら、お前が言紛仕舞からいけないヨ、ホ、、。作者はこれに附記していふ。和合同志が睦まじく最初の恨み引かへて心底盡の姉妹、張あふ意地の仇事も解てかたれば、なかなかに素人のおよばぬ人情なりと。

これを讀む者は仇吉と米八とは。共に深川の藝者なる事を知るを要する。丹次郎は二人の戀人なる事を知るを要する。二人は丹次郎を爭つて、互に意地を張り合つた仲なる事を知るを要する。春水の人情本の梅暦、辰巳園はその張合の經緯を說くものである。それが、互にうち解け合うて、共に丹次郎のために誠を盡さうとする。しかも、この一節は米八の夢である。米八のかくあらまほしと思ふところが夢に現はれたのである。いはゞ理想である。この場合に於て、何の三角關係の紛糾があらう。二人の女は、相よつて其の愛を二倍にして一人の男に奉仕するのである。何といふ男性の幸福であらう。「春色梅美婦禰」にはまた房吉、お粂の姉妹を擁する峯次郎の幸福がある彼は二人を張り合はせ、愛を爭はさせて、丹次郎と違つた形に於て其の幸福に醉はうとする。人情本の世界は、たゞ男性の享樂を基調として成り立つて居る。元祿の粹天明の通の推移したものと。儒教より出でゝ變質した貞操と

が相合して、かゝるものをつくり成した。これは男性にとつても勿論墮落である。女性にあつては更に大なる屈辱であるもし、それが深川また吉原の世界なるがためにといふは當らぬ良家に於ても、その要求はある妻妾居を同にうして、今なほ妬まざるを求むるはそれである。

人情本の作者は、また良家の士女の戀愛について語る。それは元祿の物語のつひに添へかねる悲しさとは違つて、多くの場合親兄弟の粹のさばきを得る。當時の世相は事實斯くの如きである。表面武家生活から、また儒教の見から出立した嚴格は、永く持續した平民の享樂生活の潛勢力に壓せられる事も少くない。人情本はその裏面について語る。但し、表を嚴格がましく飾る裏面である。江戸末期の女は此の風潮によつて戀に活きる事が出來る。しかし、その戀たるや、必ずしも、純一を男性にもとめ難きものである。人情本はすでに米八、仇吉、またお粂、房吉について語る。つひに痛ましい女性の生活である。それなのを何事ぞ。また他からも壓迫をうけねばならなかつた。その手は同性から加へられる。よめの身に對する姑の權力である。姑は家にあるもの、習慣以外何等の理由なき家風なるものを以てよめに對す。よめは生家を去つて、急に異なる家に移りゆく身の、急にその習慣に熱せねばならぬ。その熱するをも待たずして、もう非難の眼はたえず瞪つて居る。姑の嫁に對する讒訴は、風呂の中でも彼岸詣でも、嫁に對する情を說く講釋談義の席でも、相手さへあればくりかへされる。それは笑ふべきである。故に、一九三馬によつて、滑稽本の材料としていかに多く取扱はれたらう。しかし、よめの身にとつては笑ひ事ではない。家風にあうあはぬはたゞ姑の認むる事によつて決する。そこには確たる事由はない。よめゆく身は、まづはじめに、すべての家風に適應すべく、個性を沒却してかゝらねばならぬ。當時のよめ入り前の教育なるものは、たゞよめとして、夫に事ふるよりも、まづ姑に對する準備を全うするにある。自己に對する問題の如きは、しばらく與り知らざる所である。

料理裁縫の家事に關する知識、また遊藝に熱する事は女の嗜みある者として、やゝ姑の壓迫を弱うする所以である。御邸に行儀見習ひにいつたといふ事は、女の嗜ある證左として家風の適不適と批判に對する苛酷の度を緩める所以である。邸奉公に出るための稽古について浮世風呂の一人の娘は斯う語る、

「まあお聽な。朝むつくり起きると、手習のお師匠さんへ行つて、お座を出して來て夫から三味線のお師匠さんの所へ、朝

稽古にまゐつてね、内へ歸つて御飯をたべて踊の稽古からお手習へ廻つてお八つに下つてから湯へ行つて參ると直にお琴のお師匠さんへ行つて、夫から歸つて三味線や踊のおさらひさ」

この忙しさにあたふたする娘は、何故にせねばならぬかを知らぬ。彼女はたゞ命ぜらるゝがまゝになすだけである故に同じ浮世風呂の女房から「花を活けるの、琴を彈くのと世帶持のいらねえ事さ。飯を炊いて着物を縫つて、內外の者の身じんまりをして物にすたりの出ねえ樣にすりやア、女房の役は澤山だはな。それで氣にいらさア、先樣の御無理だ」と叱じたてられても、その蒙を啓く事は出來なからう。

かゝる時に、縣門の才女達の如きは、彼等の眼には畸人とのみうつつたらう。たゞ、その畸人の數は、漸く多きを加へる。元祿の當時の如く、殆ど武家にのみ限られない。今は町家からも多くを出した。一般の敎化が兎に角に進步した爲である。されど女性の全體から見れば九牛の一毛である。女房からいかねえ事だと斥けられる稽古にいそしむ娘の類は更に多かつた。これにこそ女の嗜みがあると思はれたからである。けれど、その踊や三味線が。男性の耳目には遊所の延長としてうけ入れられた事は知らなかつた。江戸末期頽廢の氣風は、良家の女をも娼婦藝妓とひとく見るに至つた。

かゝる狀態は明治にまでつゞく。明治に於ける歐化の思想は、女性の位置向上について考へさせる。日本の女性あまりに無責任の位にある。故に西洋の女性の如く責任の重きを與へ、その苦樂を大にせしめ、自ら心身の發達を期せしめなければならぬといふのは福澤諭吉である。彼はまた男女の交際についても說く。これあつて、はじめて金を美化し、社會の殺風景を減ずる譯であるといふ。男女同等を認るは基督敎である。男尊女卑を主義とするは儒敎である。外山正一は、かの儒敎をして封建制度を助けしめた如く、基督敎を以て、今日改良を助けしめねばならぬと說く。その利とする所は西洋人との交際上ばかりでなく、音樂の進步のためにも、同情心發達のためにも、男女交際のためにも必要であるといふ。

かゝる氣運は、いち早く明治政府をして、四年十二月東京女學校を設立させる。時の布告にいふ。

今度西洋の女敎師を雇ひ、共立の女學校を相開き、華族より平民に至るまで授業料を出し候はゞ入學差許し候間志願の者は向ふ申(五年)の正月十五日までに當省(文部省)へ願出づべき事。

女學校入門の心得（但當分英學の事）

一　授業料毎月二兩相納む可き事、
一　書籍等は銘々持參いたす可き事、
一　稽古時間は毎日五時間の事、
一　生徒は女子八歳より十五歳までの事(但凡て通稽古の事)

當年の倭文子、筑波の流は、進んでこゝに集まる。七年には女子師範學校の建設がある。從來の三味線踊の稽古にのみ力めて居た娘だちは、われこそ學を卒へて幼穉を撫養するの任に當らうと校門を潜るのである。あの浮世風呂の女房達は呆然たらざるを得ない。ましてや明治四年、五人の少女、中にも九歳のいたいけ盛のものまでが、黑船に乘つてアメリカ三界へ留學とやらに出掛けと聞いては、たゞ狂氣の沙汰としかうけとられなかつた。

狂氣沙汰は實際に於ては、新しく解放せられた女の側にもある。嘗ては春宵歌麿の繪筆に描かれた髷を崩し、はては髮をも斷ち切つて男姿となるものもある。五年には、その禁令が出た。嘗ては、歌舞伎役者の結び振を摸するにいそがしかつた帶も解き捨てゝ、袴姿、それも男がする縞の袴で濶歩する。身につかぬ洋裝で得意然として居る。

かゝる女性の中から幾多の政客が出でゝ國政について叫ぶ。その聲は直に、男子を凌がんとする者である。なほ維新前の狂飈中に幾多の女性が國事に狂奔したのと同じである。今の政客等は痛しい江戸の昔ながらに踏み躙られて居る、同性のために加ふる所がなかつた。その同性の多くは、何等の覺醒もなしに、江戸からのあり來りを續けてゆく。そうして二十年度に於ける國粹保存の反動期にひそかに、それ見た事かと鼻うごめかしたらう。たゞ彼女等の位置も、自然の趨勢によつて歩一歩高められつゝある事を氣づかずして。

經濟學博士

本庄榮治郎著

日本社會史

定價貳圓五拾錢

送料廿一錢

菊判上製

第拾七版

今までの日本の歴史は、それが總て戰爭の歴史であり、政治の歴史であり、そして忠臣傳であつた。そして日本の庶民社會の發達について說いた歴史は一つもない。これ單に現在までの歴史家が戰爭とか、偉人とか、政治、外交以外の頭腦のなかつた結果だ。カーライルは「歴史は英雄の傳記だ」といつたが、我國の歴史家も彼一流の間違つた考の持主であつた。

茲に於て社會問題の歴史を必要とする。我京大敎授本庄博士は我國の上古の氏族制度の社會、半自由民、非自由の爭鬪、大化改新、奈良朝時代の奴隷制度的勞働組織、班田制度、平安朝の貴族制度、土地兼併の問題鎌倉時代の五階級の間に起れる土地問題、德政問題室町時代の土一揆、德川時代の封建制、九階級の軋轢、米價調節等を詳細に說述し、上古より現代までの社會組織、社會階級、社會問題を闡明し、分析し、批判した。

本書は我國の社會史として始めての著書だけに多大の期待をかけられている。我々は本書に依りて我國の歴史の缺陷が補正さるると共に、我々「庶民階級の歴史」の誕生されたことを喜ばずにはおられぬ。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

法學博士 末弘嚴太郎著

嘘の効用

定價貳圓六拾錢

送料十九錢
四六判上製

卅五版

私どもは本書は總ての階級、總ての國民によつて必讀さるべき「國民讀本」だと思ひます。國内の保守的分子が優勢な爲めに、法令が移りゆく社會人心の傾向を充分に追隨出來ず其處に「法令」と「社會」との間に溝渠が出來た場合、「法令」と「社會」とを調和せしむるものは唯一「嘘」あるのみです。そうした深い寓意と使命とを以つて生れた本書は、道德の許した嘘、法律で保護した嘘、社會で許した嘘、親子の情をつなぐ嘘、大岡裁判に於る嘘の地位鬼子の裁判に於る嘘が社會生活に有効であるのを説いて現代人の反省を促し尚ほ「役人の頭」では法治國と官僚主義との關係を明かにし、その他過激法案、工場法、住宅問題、世界恒久平和の理想、陪審制度、婚姻と法律等を新しい法の立場から書かれた近來稀に見る有益な著書です、新しき法治國民の何人も再讀、三讀すべきものだと確く信じてゐます。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二



（第三回）

表象及概念

紀平正美

少し面倒でも、始に用語或は術語の意義を覺えてかゝらなくては無益である。然も自然科學の方に於ては、所謂定義によつて、其の用語の意義が一定せられる。而て何學でも簡單に其を會讀することが困難な樣であるが、然し定められた以上、動かないといふ便利がある。然るに精神に關し、人間生活に關した科學の方面に於ては、或る用語の意義を會讀するだけが、一寸困難であるのみならず、又其れを定義の如きもので一定することが出來ない。時代により又用ゐた學者の立場によりて、常に變化するから、更に一層困難になるわけである。哲學は學びたい、然し用語が六ケ敷いといふ事は、常に訴へ出さるゝ事件である。これはどうも致し方がない。それだけにも、既に相當の努力を要する次第である。どんな哲學上の用語に就ても、其の條件其の立場を考へる時に、即ち批評的に考察する限り、何れも根本的に間違つたものとも云はれぬ。同時にそれが動かぬ意義だと定めることも出來ぬ。それで今茲に說明せんとする所の若干の用語も、實は難中の難たるもので、少くとも余の說明が此の上もなきものと考へてもらつても困るが、さりとて余の講話を讀む間はともかく余の定めた意義を會讀して貰はねばならぬ。余は此の講義に成るべく六ケ敷い用語は用ゐぬ積りである。

それで先づ第一に、我等の心を以て鏡のやうなもので、それに外界の事物が來りて映じるものと考へて見る。それを心が印象を受けたと名づける。そして心の中には、心の動搖が起つた、一定の模樣が生じたとする、之を心像と名づける。所が此の心像は、鏡面の模樣の樣に、外界の事物が取り去らるゝも直ちに消え去るものでなく、暫時は殘存することとも

出來れば、又一旦は無くなつた樣であるが、或る機會に應じて再生してくることも出來る（記憶と呼ばれるものがそれである）と考へられる。而も又其の再生せるものは、本の儘の樣でもあるし、又種々變容せらるゝ樣にもある。そこで心理學では、種々な議論も必要となつて來るが、それは只今茲に論ずべき事ではない。斯くて心の模樣卽ち心像は、一般に事物として存在するもの丶、心の內にある、云はゞ代表と考へられる。此の意味に於て、一般に表象と名づけらるゝ。英國と佛國との經驗論は、精神の働き知識を全く經驗より得られたるものなりと解するものから、此の表象を卽ち觀念なりと見て居る、而て總て精神的の學問は、此の觀念に迄分析するにありと見た。此を觀念學者と呼ぶ。

さて精神の働きは、其の要素である觀念の、云はゞ離合集散であると見るのが觀念學者の見方であるが、更に其の觀念或は表象なるものを、我等の身體、正當に云へば眼耳等の感覺器官によりて分析して見ると、終局に色音等、更に色の內にても黃、赤等の色、音の內にても高低音色等を異にした種種の音等といふ樣に、分析せらるゝ、此れを感覺と名づける。斯く表象或は觀念を、云はゞ一種の模樣の樣に考へる所から、精神の終局的要素としては、其他に猶ほ快不快といふ樣な感情といふものがある。又感覺感情以外に、更に又欲する、爲す力としての意志といふ樣なものがある。或はなしといふ樣な議論も出て來る。然し此等の議論も亦科學的なる心理學の爲すべき事であつて、今茲に必要はない、のみならず、少し議論を進めて見ると、以上考へて來た樣な態度、卽ち事物先づありてそれが心に映じ來るものなりといふ樣な立場が顚倒せしめられなくてはならぬ。從て感覺だの、意思だの、感情だのといふ區別は、抽象的のもの、卽ち考へるのに便利である爲に、我等が任意に作つた所のものであつて其實存在するものでないといふ事が、自ら明瞭になるであらう。

ともかく表象を心の內の模樣の如きものとするならば、後に說明せんとする所の概念の各種も、亦表象の內の種類分けに過ぎないとも考へられる、同時に又考へ樣によつては、表象それ自らが概念の一種なりとも考へなくてはならぬ事、ともなる。精神的のものを考へることの困難は、實際斯る所に存在する。實際心理學的に考へれば、表象は精神的のものの要素であり、初步的のものに過ぎないのである、從て諸種の學問や、法律道德宗敎乃至哲學などは、少くとも表象の或る程度の複合物であつて、云はゞ高尙なるものであるべき

である。然るに我等は斯る高尚なるものをも、亦表象することが出來るのである。誰れでも詳細な事は知らないにしても、法律や宗教や等に就て知つて居る、此の程度に於て知つて居るのが即ち表象である。故に心理學的には、此れ等を内部刺戟より生ずる表象或は觀念であると解して居る。それに反して、それを如何なるものであると知る、例へば「人」とは「牛」とは「馬」とは、乃至「宗教」とは云々のものなり（之を云々のものなりと規定すると云ふ）と知るのを、一般に概念と名づける、概念とは捕捉（つかまへる）の義である。

そこで既に明了となることは、心理學的には表象が精神の終局且つ初歩的のものであつたが、哲學といふ樣に、思考を本として考へる場合には、概念が其れの終局であり、且つ初歩的のものとなる、從て又考へるといふ事が人間の特色であるとするならば、人間は表象を常に概念の形ちに變化しつゝあることを以て、其の特色とすると云はねばならぬ。それで比喩を取つて云ふならば、我等の身體は常に外物（食物及び空氣日光）を内に攝取して、之を同化しつゝある、此の同化力が一瞬時でも止まれば即ち我等の死である。此と同樣に、我等の思考は絶えず表象を概念化しつゝある、而して概念化することが哲學的に考へることであるが故に、昔から云はれるが如く、人は哲學的の動物である「合理的の動物である」と云はるゝのも又其の意義である。從て哲學的に考へる以上は『大學』に引用してあるが如くに、苟日新日日新又日新を以て、思考の生命と認めなくてはならぬのである。否なそれが哲學である、哲學には、其故に所謂終局或は休止があつてはならぬ。然しそれは先づ後の事として置いて、概念の上で、表象を規定する、換言すれば表象を概念したならばどうなるかといふに、表象とは個々並立的のものである、木も馬も人も猿も、乃至道徳も宗教も、心の内にいくらでも並んで存在するものであつて、同時にそれは事物そのものでなくして「我のもの」即ち我が心で其等を代表して居るものであるといふ事である。それ故に事物を表象するといふ事は、我が心の内で、既に多少の順序組織はある（此の多少といふ意味は後に明かになるであらう）が、未だ十分なる秩序組織がなくて、只並べられて、存在せしめられるだけの程度のものであると云ふべきである。一般に云ふ常識とは、即ち此種の程度に止まるものと見てよろしい（勿論常識にも又程度があり、更に英國人が我が國は常識に富める國などと自慢する場合のものは、日本人が我に日本魂ありといふ如くに、更に深い意義のものがあるが、それは後に説明する）。

表象の説明は先づ此れ位に止めて置いて、次に概念に移らう。概念は表象を材料とし、それを更に秩序附け組織したものといふ事が出來る。從て我等が言語に出し、文字として書くものは皆な概念であると考ふべきである。即ちそれは一の思考である。更に詳細に云ふならば、言語は概念の記號であり、文字は更に其れの記號、即ち思考に對して云へば、記號の記號である。然し其等記號の保助なければ、思考を正確に導くことが出來ないといふ事の關係から、其處に哲學的思考に關しては、國語の尊重といふ事が出て來るのであるが、其は又後の機會に論ずる。ともかく言語なくば思考も亦十分でないといふ關係からして、概念と言語とを混同して、言語を取扱ふ事が即ち思考を取扱う事なりとも輕く考へられた場合もある。即ち形式論理學といふ樣な學問は、大體その樣な學問であると云ひ得る。

概念を其の組織の程度（或は種類の差とも見られる）上から、便利的に區別すると、次の三として考へることが出來る。

一、抽象的概念
二、形式的概念
三、具體的概念

抽象的の概念とは、普通一般に概念と云はるゝ所のもので、人、馬、動物等、辭書にあるだけ語によつて表明せられて居る思考は、皆なそれで、共通的なる一般性によつて表象を組織したものである。例へば「机」といへば、無數に澤山ある机（表象）の内から、机の机たる共通的の性質を抽き出して、机といふ一思考にして置く、そしてそれが其等無數の机を代表して居る。然る限り、此の概念は猶ほ表象の範圍を脫しては居ない、即ち「我のもの」といふ規定の猶ほ殘り居る所のものである。此の意味での概念は、我等は之を全く便利の爲に作つて置くもので、正當には分類的のものである。故に此は思考經濟に本く產出物なりと考へられる、多くのものを其の一々に就て考へずに、概念だけに就て考へて置けば、それで事足るからである。そこで斯る概念は又抽象の產物なりとも云はれる。即ち机の机たる性質（これを概念の内包といふ、内包に對して、其の概念によつて代表せられる表象の總てを概念の外延といふ）だけを抽象して、（同時に他の不必要なる諸性質を捨象して）作り出されたものと考へられるからである。此の場合、抽象も捨象も同一の働きである、即ち一面に抽象せらるれば、他面には捨象せられて居るのであるが、概念構成の上から見て、抽象的に作られる概念と、捨象的に作られる概念とは、自ら性質の相違を來す、即ち意識

的に或は學問的に會讀する所の概念は抽象的であるが、子供が言語の意義の自然に學ぶ場合、其他一般に無意識の内に作られた概念は、捨象として作られたものである。流行語は捨象的のものである。「ハイカラ」だとか、今日流行する「文化生活」だとかいふ意義は、積極的にハイカラとは何か、文化生活とは何かを示すことは、普通人には出來ない、然し其意義は大體分つて居て、其れに反對するバンカラとか、古い生活樣式を拒否するだけの力を有つて居る。然し一般的に云うて、其が抽象的の概念である限りは、例へば火と云ふ概念は、如何ほど明了に考へたとて、消えかゝりのマッチの火ほども熱くない所のものである。即ち火といふ概念は、火の代表であるのみであるからである、此の意味に於て、概念は既に直接性を失うて居る故に精神的にはそれだけ無力である。從て又言ひ得る、如何に學問をしたとて、實際的の力にはならぬ、例へば倫理學を學んだとて、爲善の力とはならず、宗教的の信仰に詳細に知ればとて、それはもう信仰ではない、或は美の事を如何に知り盡した所で、藝術創作の力又は鑑賞の力とはならないと考へられる。如何にも概念を抽象的のものに限る限りは、斯る考へは正常である、從て倫理學者必ずしも道德家たるを要求せられること、醫學を學んだとて、そは醫者としての技藝とは別なのと同樣である。然し此れが果して正常であらうか、若し正常とするならば、學問することは無用であるといふ事になる、之は其故に更に深く概念其のものゝ性質を考へなくてはならぬ。

それで我等は先づ如何なる性質が抽象せられる（同時に捨象せられる）かを考へて見なければならぬ。即ち何が一般的、本質的の性質であり、何が個別的、非本質的の性質であるかは、概念其れ自らでは定まるものではなしに、我等の見方による、而してそは畢竟我等が多くの表象を纏めて置くに、便利なるが爲めであると解せなくてはならぬ。例へば机といふ概念を取つて考へて見ても、西洋風が入つて來なかつた時代の机は、椅子といふものを考へずに、考へ得られた。即ち座つてゐて役に立つ所の机が考へられてゐたのであるが、今日の日本人は、小學校の生徒と雖も、和洋二種の机を考へて居るであらう。然し西洋の小兒には、決して日本流の机は考へられて居まい。それで斯る意味での概念は、便利といふ條件によつて、即ち時代の變化と共に變じ、又同時代の人でも、動植物學者の馬といふ概念と、騎兵が有する馬といふ概念とには自ら相違があると考へなくてはならぬ。更に善惡といふ樣な概念になると、其の相違が更に著るしいことに氣が附

くであらう。そこで更に此の場合考へて置くべき事は、如何にも細かな點に置いては相違するであらうが、馬の馬たる所、或は善の善たる所は、普遍的なものがあるであらうと考へられることである。即ち一般には、眞理なるものが、如何なる差異を以て現はれやうと、本質に於ては同一であるとこ然し斯る考へ方が即ち抽象的の考へ方である。如何にも漸次抽象して行けば、最後何ものかゞ殘るであらうが、それは最早「或者」であつて、眞理でも何んでもないものになる。此の事は實は重要なることであるが、今は先づこれ迄に止めて置く。それで玆には此れだけの事を記憶すべきである。英米の哲學者の内に、プラマティズムといふ學説を唱へ、眞理とは實際に役立つといふ事によつて定まるといふ考へ方である。如何にも概念を以つて以上に述べ來つた意味に限つて云ふならば、此の主張は正しいと云はねばならぬ。然し同時に考へて置かねばならぬ、斯るもののみが概念であるとするならば、所謂見所によりて議論はどうでも云へる、甲の主張も乙の主張も其の立場によつて何れも正しい、墨筆は白き形象を畫くものなりといふも、否、黒き色を消すものなりといふも、墨筆の本性には何等關係なく、然も議論としては、矛盾し反對して居る。同時に、人間の意志も自由なりと見ようが、不自由なりと見ようが、意志其れ自らの本性に何の頓着なく、然も其の一方をのみ取つて主張する時は、互に死活問題であるかの如く論爭しなくてはならぬ、即ち斯る論爭を詭辯論といひ、蝸牛角上の爭とも云ふ。哲學は正に斯る論爭に最後の止めを刺すべく生れたものである。

蓋し抽象的の思考、即ち經驗論的に考へられたる限りは、概念の構成は事物の比較より爲される。例へば(勿論人により、場合によつて相違はあるが)林檎といふ概念は、梨との比較に於て、机は椅子との比較により、善は惡との比較によりて考へられて居る。簡單に云へば、或る性質を有するものと有せざるものとの比較對照によつて作られる、故に抽象的の概念は、結局對立的たるを免れぬ。人だの馬だのは、一見獨立的のものである樣に思はれるが、人の人たる所が獨立に考へられて居るかどうかは、甚だ疑問であらう。若し人の人たる所が考へられて居るとするならば、それは哲學的の思考であり、それが後に云ふ、眞の概念即ち具體的概念である最早相對的のものでなくて、絶對的のものと云ふべきである。然るに一般には、人は禽獸に對して考へられて居り、馬は例へば牛に對して考へられて居るのである。親子、君臣、因果等は、勿論親がなくては子ではない、子がなくては親でない、

故に此等を特に相關的（相對的）概念と呼ぶのであるが、よく〳〵考へれば、抽象的である限りは、どんな概念でも何等か他のものに對して考へられて居ることは、相關的の概念と同樣であると見なければならぬ。其故に、抽象的に考へられて居る限りは、或る必要といふ限りに於て、普通は用ゐられて居るから、何人にも判つた樣に感ずるのであるが、一步深く考へるときは——それを常識では、哲學者や論理學者は、いらぬ事を考へる。又却て人を迷はせ、判つた事をも判らなくするのであると云ふ、——必ず矛盾や反對に陷らなくてはならぬ、卽ち判らなくなつてしまうのである。例へば善を惡に對立せしめつゝ、善の善たる所を考へようとして、例へば善とは共同の利益であると定めるとした所で、共同の利益の爲には、自分が犧牲にならなくてはならぬ場合に、其の善は自分には惡になるといふ事にもならなくてはならぬ。斯くして抽象に抽象を重ねて往けば、上記の如くに、其處に「或者」は殘るであらうが、それは最早何とも云ひ得られないものになる、（然も或る場合には斯るものを眞理だと誤解した事もある）。實際自然科學は便利的のものであり、分類的の知識である限り、抽象的概念に據つたものである、然る限り未だ眞理其のものではない、プラグマテイツクといふ條件の下に成立したものである、從て今日の眞理は、必ずしも明日の眞理たることとの保證は出來ない、只同じ條件が續けば眞理なりと云ひ得る程度のものである。從て其の條件を變へ、又は無視するなれば、自ら矛盾反對に陷らなくてはならぬ。それで哲學は其の矛盾反對を回避してはならぬ。反て其に陷りつゝ、其を利用して、更に一步高い所へと進まねばならぬ。例へば親を子に對して考へて居る限り、親と子とは全く相違した態度に立たねばならぬが、親の親たる所は、子を包括せなくてはならぬ、子に對して、然も子を己が內に包括する所に、眞に親の働きがある、同樣に子は親にあらず、然も親を包括した所に、子の働き卽ち孝道が存立する。善は惡を排斥しつつ、然も惡を包攝して、眞の善がある、（惡には其の力がない故に惡である）。斯る概念を具體的の概念といひ、哲學の對象とする所のものがそれである。其故に、哲學は此の點に於て、科學と相違する、科學は抽象的のものである、哲學は抽象的のものに止まり居ることを嫌ふ、少くとも抽象的のものに止まり居る限りは、未だ哲學ではない。（一三、七 二一）

島二題

若山牧水

その一

ある時、私は瀬戸内海の島に渡つて行つたことがある。備前の宇野港から數里の沖合に在る直島といふのであつた。

　夏のはじめ、やゝもう時季は過ぎてゐたがそれでもまだあたりの内海では盛んに鯛がとれてゐた。その鯛網見物にと、岡山の友人I——君から誘はれて二人して出懸けたのであつた。直島附近は最もよく鯛漁のあるところと云はれてゐるのださうだ。

　附近に並んでゐる幾つかの島と同じく、直島も小さな島であつた。名を忘れたが、島の主都に當る某村に郷社があり、其處の神官M——氏をI——君は知つてゐた。そして網の周旋を頼むために、こんもりと樹木の茂つた神社の下の古びた邸にM——氏を訪ねて行つた。

　M——氏は矮軀赭顔、髮の半白な、元氣のいゝ老人であつた。そして私は同氏によつてその島が崇徳上皇配流の舊蹟で、附近の島のうちでも最も古くから開けてゐた事、現にM——家自身既に十何代とか此處に神官を續けて來てゐる事等を聞いた。内海の中に所狹く押し並んでゐる島々のうちにも、舊い島新しい島の別のあることが私には興深く感ぜられた。

『では、參りませう。網は琴彈の濱といふ所で曳くのですが、途中を少し廻つて上皇の故蹟を見ながら參りませう』

『でも、たいへんではありませんか』

『いゝえなに、島中くるりと廻つても半日とはかゝりませんからな、へゝゝ』

私も笑つた。その小さな島にさうした歴史の殘つてゐることがまた面白く感ぜられた。多分、船着場や潮流のよしあしなどの關係から出てゐることであらうとも思つた。

耶の前から漁師の家の間を五六十間も歩くと直ぐ山にかゝつた。とろ〳〵登りの坂ではあつたが、早くも汗が浸み出た。晴れてはゐたが、空には雲が多かつた。

『あそこに見えますのが……』

杖をとつて先に立つてゐた老人は立ち止つた。まばらに小松が生え、下草には低い雜木が青葉をつけ、そしてところどころそれらが禿げて地肌の赤いのを露はしてゐる樣な山腹を登つてゐた時であつた。老人にさし示されたところは我等より右手寄りの谷間に當つて其處ばかり年老いた松が十本あまり立ち籠つてゐた。

『上皇のお側に仕へてゐた上臈がおあとを慕うて島へ渡つて參り、程なく身重になつた。で、身二つになるまであそこの谷間に庵を結んで籠つてゐたと云ひ傳へられてゐる處です』

むんむと蒸す日光の照りつけたその松林にははげしい蟬時雨が起つてゐた。

『さうして生みおとされたお子さまなどは、どういふことになつたのでせう』

『さア、どうなられましたか……、まだほかに上皇の姫宮も父君のおあとを慕つて參られましたが、どうしたわけか御一緒におゐでずに、此處とは別な谷間に上臈と同じく庵を結んで居られたと申します』

程なくその島の背に當つてゐる峠を越した。そして少し下つた處に崇德上皇を祭つたお宮があつた。あたりは廣い松林で、疎ならず密ならず、見るからに明るい氣持がした。お宮もまた小さくはあつたが、がつしりした造りで、庭も社殿も淸らかな松の落葉で掩はれてゐた。ことにいゝのは其處の遠望であつた。眼下の小さな入江、入江の潛んだ潮の色、みな綺麗であつたが、やゝ離れた沖の島の數々、更らに遠く眺めらるゝ四國路の高い山脈、すべてが明るく美しくそれこそ繪の樣な景色であつた。

其處から二三丁下つたところに所謂お宮の跡があつた。其處も前の上臈の庵のあとゝ同じく小さな谷間、と云つても水もなにもない極めて山襞の一つに當つてゐた。松がまばらに立ち並び、雜木が混つてゐた。平地と云つても、ほんの手で掬ふほどの廣さで、M――氏に云はるゝまゝに注意して見るとその平地が小さく三段に區分されてゐるのが眼についた。それ〴〵の段の高さおよそ三四尺づゝで、茂つた草を掻き

分けて見ると僅かに其處に石垣か何かの跡らしいものが見分けられた。段々になつた一番下の所に警護の武士の詰所があり、二番目が先づお附の人の居た場所、一番上の狹い所が恐らく上皇御自身の御座所でゞもあつたらう、といふM――老人の解釋であつた。とすると、御座所の御部屋の廣さは僅かに現今の四疊半敷にも足りない程度のものであつたに相違ないのである。そして、一番下の警護の者の詰所から十間ほどの下には、黑い岩が露はれて波がかすかに寄せてゐた。あたりを見廻しても嶮しい山の傾斜のみで、此處のほかには一軒の家すら建てらるべき平地が見當らない。同じ島のうちでも全然、家とか村とかいふものから引離された斯うした所を選んで御座所を作つたものとも想像せらるゝのであつた。斯ういふ窮屈な寂しい所に永年流されておゐでになつて、やがてまた四國へ移され、其處で上皇はおかくれになつたのだつたといふ。

其處からは路もない磯づたひを歩いて、入江に沿うた一つの村に出た。玉積の浦といふた。其處を右に切れて田圃を拔けるとまた一つ弓なりに灣曲した穩かな入江があり、廣々とした白砂の濱があつた。濱を際どつて一列の大きな松の並木が並び、松の陰に四五軒の漁師小屋があつた。其處が琴彈の濱といふのであつた。

丁度、晝前の網を曳きあげたところであつたか、一疋の鯛もかゝつて來なかつた。次ぎの網は午後の三四時の頃だといふ。途方に暮れて暫らく松の陰に坐つてゐたが、やがてM――老人は急に立ち上つて漁師共の寄つてゐる小屋へ出かけて行つた。そしてにこ〳〵と笑ひながら歸つて來た。

『えゝことがある、今に仰山な鯛を見せてあげますぞ』

老人からこつそりとわけを聞いてI――君も躍り上つて喜んだ。そして、時計を出して見ながら、

『早う來んかなう』

などゝ幾度となく繰返して私の顏と沖の方とをかたみがはりに眺めては笑つてゐた。その間に老人は一人の漁師を走らせて酒や酢醬油をとり寄せた。

程なく右手に突き出た岬のはなの沖合に何やら大きな旗をたてた一艘の發動機船の姿が見えた。

『來た〳〵』

さう叫びながら漁師たちは慌てゝ小舟を濱からおろした。譯のわからぬまゝに私も促されてそれに乘つた。二人は漕ぎ、一人はせつせと赤い小旗を振つてゐた。

入江の中ほどに來ると、その發動機船は徐ろに停つた。我

等の小舟はそれを待ち受けてゐて、漕ぎ寄するや否や一齊に向うに乗り移つた。私もまた同樣にさうさせられた。そして、引つ張られてとある場所にゆき、勢ひよくさし示された所を見て思はず聲をあげた。

この大型の發動機船の船底は其儘一つの生簀になつてゐた。そして其處に集めも集めたり、無數の鯛が折り重なつて泳いでゐるのである。I——君は機船の人に問うた。

『なんぼほど居ります』

『左樣、千二三百も居りますやろ』

おゝ、その千二三百の大鯛が、中には多少弱つてゐるのもあつたが、多くはまだいき／＼として美しい尾鰭を動かして泳いでゐるのである。

その中から二疋を我等はわけて貰うた。小船の漁師たちと機船の人たちとの間に何やら高笑ひが起つてゐたが、やがて漁師たちは幾度も頭をさげて小舟へ移つた。機船は直ぐ笛を鳴らして走り出した。聞けば彼女はこの瀬戸内の網場／＼を廻つて鯛を買ひ集め、生きながらに船底に圍うて大阪へ向けて走るのださうである。

濱の松の蔭では忽ちに賑やかな酒もりが開かれた。うしほに、煮附に、刺身に、鹽燒に、二疋の鯛は手速くも料理されたのである。

いつか夕方の網までその酒は續いた。そしてたべ醉うた漁師達の網にどうしたしやれ者か、三疋の鯛がかゝつて來た。よれつもつれつ、我等三人は一疋づゝその鯛を背負うて、島の背をなす山の尾根づたひの路を二里ばかりも歩いた。歩いてゐるうちに月が出た。折しも十五夜の滿月であつた。峠から見る右の海左の海、どこの海にも影を引いて數多の島が浮んでゐた。斯くて今朝早朝に發動船で着いた船着場とは違つた一つの船着場に着いて、其處から一艘の小舟を雇ひ、漕ぎに漕がせて宇野港へ歸りついたのは夜もよほど更けてゐた。可哀相に、其處まで送つて來てくれたM——老人は其處からまた島まで一人で歸るのであつた。晝間の酒をほど／＼に切り上げて午後の定期の發動船に間に合ふ樣に老人の村まで歸つて居つたらば斯うした苦勞はせずとも濟んだであつたのに。

その二

船子よ船子よ疾風のなかに帆を張ると死ぬるがごと／＼に
叫ぶ船子等よ

大うねり傾きにつつ落つる時わが舟も魚とななめなりけり

次ぎのうねりはわれの帆よりも高々とそびえて黒くうねり寄るなり

はたはたと濡帆はためき大つぶのしぶきとび來て向かむすべなし

やと叫ぶ船子の聲に驚けば海面黒み風來るなり

舳なるちひさき一帆裂くるばかり風をはらみて浪を縫ふなり

色赤くあらはれやがて浪に消ゆる沖邊の岩を見て走るなり

かくれたるあらはれにたる赤岩に生物の如く浪むらがれり

友が守る燈臺はあはれわだなかの蟹めく岩に白く立ち居り

赤岩の十丈にあまる斷崖を這ひつゝやゝに友のおり來る

むら立てる赤き岩々とびこえて走せ寄る友に先づ胸せまる

あはれ淋しく顏もなりしか先つ日の友にあらぬはもとよりなれども

別れゐし永き時間も見ゆるごとくさびしく友の顏に見入りぬ

たづさへしわがおくりもの色燃えしダリヤの花はまだ枯れずあり

ダリヤの花につぎて船子等がとりいだす重きは酒ぞ友よこぼすな

歩みかねわが下駄ぬげばいそいそと友は草履をわれに履かする

友よ先づわれの言葉のすくなきをとがむな心なにかさびしきに

相逢ひて言葉すくなき友だちの二人ならびて登る斷崖

石づくり角なる部屋にたゞひとつ窓あり友と妻とすまへる

その窓にわがたづさへし花を活け客をよろこぶその若き妻

語らむにあまり久しく別れゐし我等なりけり先づ酒酌まむ

友醉はずわれまだ醉はずいとまなくさかづきかはし心をあたゝむ

石室のちひさき窓にあまり濃く晝のあを空うつりたるか

な

これらの歌は今から七八年前、伊豆下田港の沖合に在る神子元島の燈臺に燈臺守をしてゐる舊友を訪ねて行つた時に詠んだものである。

神子元島は島とは云ふものゝ、あの附近の海に散在してゐる岩礁の中の大きなものであつた。赤錆びた一つの岩塊が鋭く浪の中から起つて立つてゐるにすぎなかつた。島には一握の土とてもなく、草も木も生えてはゐなかつた。其處の一番の高みに白い石造の燈臺が聳え、燈臺より一寸下つたところに、岩を繰り拔いた樣にして燈臺守の住宅が同じく石造で出來てゐた。暴風雨の折など、ともすると海の大きなうねりがその島全體を呑むことがあるので、その怒濤の中に沈んでも壞れぬ樣にと、たゞ頑丈一方に出來てゐた。謂はゞ一つの岩窟であるその住宅は、中が五間か六間かにくぎられてゐた。階級は一等燈臺で、燈臺守の定員は四人とかいふのであつたが私の行つた時には一人缺員のまゝであつた。臺長といふのはもういゝ年輩で、夫婦に小さい子供が二人かゐた。私の友人はその少し前に郷里で細君を貰つて其處へ連れて行つてゐた。そしてそのほかに廿六七歳の獨身の人が一人ゐた。

その友人を知つたのはそれよりも六七年前、私が早稻田大學の豫科生の時であつた。當時私は讀み耽つてゐた『透谷全集』を教室にまで持ち込んで、授業中にも机の下に忍ばせて讀んでゐた。或る時、偶然同じ机に隣り合つて坐つたのがその友人で、彼も亦同書の愛讀者であつた。それが緒で折々往來する樣になつたが、別に親しいといふ程ではなかつた。そのうち半年もたつと忽に彼の姿が教室から見えなくなつた。一年たち二年たちする間に、同級生であつた彼の同郷人から聞くとなく彼の噂をとび〳〵に聞いてゐた。彼は佐賀縣の或る金滿家の息子で、急に學校が厭になると郷里に歸つて、以後一切關係を斷つ約束のもとに家から數萬圓の金を分けて貰ひ、肥前の平戸沖あたりの小さな島を全部買つ切て一人して其處へ移り牛や雞を放し飼にして樂しんでゐた。それもほんの暫くでいやになり、二束三文で全てを賣拂つた金で大盡遊びを續け、金が盡きると或る炭鑛の鑛夫になつた。それも僅かの間で、親類たちに多少の金をねだつて米國へ渡り、昨今はあちらで鑵詰工場の職工をしてゐる相だ、といふ樣なことを。が、それも學校にゐる間の事で、學校を出ると同時に彼の同郷人の級友ともすつかり別れてしまつたので、其後の噂をば聞くたよりもなかつた。

學校を出て一年あまりもたつた頃、私は或る新聞の記者と

なつてゐた。其處へ突然見すぼらしい風をして訪ねて來たのが彼であつた。いきなり私の前へ五六圓の金を投げ出して云つた。

『僕は今度、亞米利加から船中で團扇で客を煽ぐ商賣をやつて歸つて來た。これはその金の殘りだ、これで一杯飲まうよ』

　それから幾日か私の下宿にころがつてゐたが、多少繪の心得のある所から自分からたづね歩いて或るペンキ屋に入り込み、キヤタツを擔いで看板繪をかいて歩いてゐた。それもほんの數日で、或日またふらりとやつて來た。

『いまペンキ屋の親爺を毆つて飛び出して來たよ』

　程經て市內電車の運轉手になつた。これは割合に永く續いたが、何かの事で首になつた。其後、彼に似氣なく入學試驗といふものを受けて入學したのが橫濱に在る航路標的所何とかいふ、つまり燈臺守の學校であつた。六ケ月間の學期を無事に終へて、初めて任命されて勤めたのが、この神子元島燈臺であつたのだ。そしてかれこれ一年あまりもたつたであらうか、漸く自分も從來の放浪生活の非をしみ〴〵覺つて、今後眞面目にこの燈臺守の靜かな朝夕の裡に一生を終へようと思ふ樣になつた、さう決心すると同時に鄉里に歸つて妻をも貰つて來た、この心境の一轉を見るために一度この島に遊びに來ないか、といふ風の手紙を二三度も私の所によこしてゐたのであつた。

　彼ほど徹底してはゐなかつたが、私もまた彼のいふ放浪生活の徒の一人であつた。學校を出て、一箇所二箇所と新聞社にも出て見たが、何處でも半年とはよう勤めなかつた。轉じて雜誌記者となつたが、これも三四ケ月でやめてしまつた。自分等の流派の歌の雜誌を自分の手で出して見たが、初めは面白くやつてゐても直ぐ飽きが出た。さうかうしてゐるうちにいつか自分もひとの夫となり親となつてゐた。さうしてその日の米鹽すら充分でない樣な朝夕をずつと數年來續けて來てゐたのである。さういふ場合だつたので、今まではさういふ島があるといふことすら知らなかつた。この島からの友人のたよりは、割合深く私の心にしみたのであつた。そして、終に其處に出かける氣になつた。

　秋のダリヤの盛りの頃であつた。一本の木草すら無いといふその島には恰好の土產であらうと私はそれを澤山買つて行つた。先づ靈岸島から汽船で下田まで行き、其處で彼も吾も好物の酒を買つて第二の手土產とした。下田からは一週間おきに燈臺通ひの船が出ることになつてをり、その船で水から

米、其他燈臺守たちの必需品を運ぶのであつた。前に友人からよく様子を知らして來てあつたので、都合よくそれに便船する事が出來た。下田を出ると、船は忽ち烈しい波浪の中に入つた。何處でも岬のはなの浪は荒いものであるが、其處の伊豆半島のとつぱなは別してもひどかつた。それは單に岬だけの端といふでなく、其處には無數の岩礁が海の中に散らばつてゐた。形を露はしたものもあり、僅かに其處だけに渦卷く浪によつて隱れた岩のあるのを知る所もあつた。それらの岩から岩の間にかもされた波浪は、見ごとでもあり凄くもあつた。船には大勢の船頭が乘り込んでゐた。

　多分今日の船で來るであらうと、友人は朝から双眼鏡を持つて岩の頭に立つてゐたのださうだ。船の島に着いたのは午前十時頃であつた。そして、つれられてその岩窟內の彼の居間に通つて、二年振ほどで彼と對座したのであつた。彼の妻とは初對面であつた。まだ年も若く、何も知らない田舍の娘と云つた風の人であつた。

　氣のせいかいかにも從來の彼としてはおちつきが出來てゐた。おちついたといふより、急に老けて見えた。それにそうした變つた場所のせいか、私自身が浪や船に勞れてゐた爲か、それとも初對面の細君が側にゐる故か、久し振に逢つたにしては今までの樣に調子よく行かなかつた。彼もそれを感じてゐたらしく、大きな聲で先づ酒を出す樣にとその妻に云ひつけた。

　年若い妻は案のごとく大輪のダリヤの花を見て驚喜した。そして珍客の接待よりも先づその花をあり合はせの器に活けてその部屋にたゞ一つしかないガラス窓の所に持つて行つて据えた。窓のツイ向うには刳り取つた岩の斷層面がうす赤く見えてゐた。そしてのその岩の上僅か一尺ばかりの廣さに空が見えた。何といふ深い色であつたことだらう、今でもそれを思ひ出すごとに私にはその空の色が眼に見えて來る。照り澄んだ秋の眞晝であつたとは云へ、まことに不思議な位ゐの藍色が其處に見られた。そして、この深い藍の色は一層私の心を沈んだ、浮き立たぬものにした樣に感ぜられた。その色の前にあるダリヤの花はすべてみな褪せさらばうたものにさへ眺められた。

　直ぐ始つた酒は一時間二時間と續いて行つた。が、最初にそれ始めた私の心の調子はどうしても平常の賑やかな晴々しい所に歸つて行かなかつた。友人とても亦たさうであつた。そしてどうかしてその變調子を取り除かうと努めてゐるのがよく解つた。

其處へ、積荷を上げ、晝食をとり、一休みした船頭たちの一人が顔を出して友人に云つた。

『ではもう船を出しますが、別にお忘れの御用はございませんか』

それを聞くと私は突差に決心した。

『K――君、では僕もこの船で歸らう、たゞ顔を合せればそれで氣が濟むと思ふから……』

さう云ひながら、居ずまひを直さうとした。不意に彼は立ち上つた。これは、と思ふ間もなく彼の烈しい拳が私の頭に來た。慌てゝ身をかはす間に二つ三つと來た。呆氣にとられた船頭は漸く飛びかゝつて彼を背後から抑えた。隣室からは臺長夫婦が飛んで來た。

『何だと、……歸る、……、ひとを散々待たしておいて、來たかと思ふと歸るとは何だ、歸れ、歸れ、直ぐ歸れ、この馬鹿野郎……』

彼はなほ立つたまゝ私を睨み据ゑて、息を切らしてゐる。たうとう私は平あやまりにあやまつて、改めてこの次ぎの船まで、その島に滯在することにきめてしまつた。

燈臺は島で一番の高い所に立つてゐた。燈臺の高さ十六丈、その根から直ぐ斷崖になつて三十丈ほどの下には浪が寄せてゐた。で 燈臺の最頂部、燈明の點る燈室から眞下を見下す事は私の樣な神經質の者には到底出來なかつた。たゞ、其處からの遠望はよかつた。伊豆半島が案外の近さに眺められた。半島の中心をなす天城山が濃く黑く、どつしりとして眼前に据つてゐた。半島から島までは例の白渦の流れてゐる狹い海、それを除いた三方にはすべて果しもない大きな荒海があつた。晴れた日には黑潮の流が見えた。見えたといふより感ぜられた。動くともなく押し移つてゐる大きな潮流が、その方面を眺めてゐるうちにしみ〲として身に感ぜられて來た。伊豆七島のうち二三の島がその潮流のうへにくつきりと浮んで見えた。丁度西風の吹き始めた季節で、黑ずんで見ゆるその濃藍色の大きな潮の上にあまねくこまかな小波の立ち渡つてゐるのが美しくも寂しかつた。夜は、燈臺の火を眼がけていろんな鳥が飛んで來た。そして燈室の厚いガラス板に嘴を打ちつけては下に落ちた。朝、燈臺の下に行つて見ると幾つかのそれを拾ふ事が出來た。海鳥が多かつたが、中には伊豆から飛んで來るらしい山の鳥も混つてゐた。

燈室の床はその四壁と同じく厚いガラス張となつて居り、その下に宿直室があつた。ガラス張を天井とするこの宿直室は、一尺四方ほどの小さな窓を二つか三つ持つてはゐたが明

りは主としてその天井から來た。一脚の卓子と椅子とが、燈臺の形なりの狹い圓型のその室內にあり、圓いなりの石の壁には小さな六角時計がかけてあつた。海上四十餘丈の上の空中にぽつつりと置かれたこの部屋の靜けさは、また格別であつた。私はこつそりと螺旋形の眞暗な階子段を登つて來てはこの不思議な形をした小さな部屋の椅子に凭る事を好んだ。よく當る風にしろ、よほど强く吹いてゐない限りは四尺厚さの石の壁を通してその薄暗い室內には聞えて來なかつた。

その空中の宿直室に居なければ私は多く事務室にゐた。それは燈臺守たちの住宅の岩窟の一角に、他の部屋よりはやゝ廣目に造つてあつた。壁には日本地圖世界地圖、萬國々旗表、といふ樣なものが張つてあり、その一方の戶棚には僅かの書物や書類と共に、幾品かの藥品が入れてあつた。この寂び古びた壜や箱の藥品が私には常に氣になつた。凪いで居ればこそ一週間ごとに船が來るが、荒れたとなれば十日もその上も一切他と交通のきかぬこの離れ島に住んで居る幾人かの生命をば僅かにこの幾品かの藥品が守つてゐるのである。大きなテーブルの一部の埃を拂つて凭りかゝりながら、同じく埃でよごれてゐる大きな地圖を見、棚の中の藥壜を眺め、または窓から見ゆる蒼空を仰いで、靜かな樣な、そして何となく落ちつかぬ時間を私はその部屋で過ごした。

でなければ、釣であつた。よほどの銳い角度で海底から突つ立つてゐるらしいこの岩礁の四周の磯は到る所が深かつた。浪さへなければ、餌をおろせば大小さま〴〵の魚がすぐ釣れた。餌はそこらの岩の間に棲んでゐる蟹であつた。

或る日、私は獨りでとある岩の角に坐つて釣つてゐた。其處へ友人がやつて來た。何か用ありげに私の側に腰をおろしてゐたが、やがて、

『若山君……』

と呼びかけて

『どうだね、一つ、君も東京あたりにいつまでもぐづ〳〵してゐないで、いつそ諦めてこの燈臺守にならんかね』

と云ひ出した。彼自身これまでに通つて來た境遇の繁雜なのに飽いて、何處か斯う目をつぶつて暮せる樣な靜かな境地はないものかと考へて、他にもかくして航路標識所の試驗を受けた、そして實地此處に來て見ると前から空想してゐた靜かな生活といふことよりも先づ身にしみたのは暮しむきの安全といふことであつた、今まで自分も隨分といろんな事をやつて來たが、要するに頭には故鄕があつた、親や親類の財產があつた、いよ〳〵それらから見離されたとなると、自づと

歩へらるゝのはその日〳〵の生活である、それもはつきりと具體的に考へてゐたのではなかつたが、此處に來て見ていよいよさうであつたことが解つた、それにまたどうしても自分の歳や健康のことも考へられて來る、それにはこの燈臺守位ゐ安全な生活法はないのだ、月給にした所が他に比べては非常にいゝ、早い話が君が四五年かゝつて大學校を出てから新聞社に勤めた月給より僕が六ケ月の學期を終へて此處に勤めてのそれの方が多いではないか、また、貰つた月給は殆んど貰つたなりに殘つてゆくのだ、見給へ此處で斯うしてゐる分には自分等の食ふ米味噌代のほかには金の使ひようがないではないか、此處に限らない、燈臺の在る所は大抵似たり寄つたりの場所ばかりなのだ、現に此處の臺長なども幾個所か勤めて歩いて來たのだが、その間に溜めた金と云つたら素晴らしいものだ、今では伊豆の方に澤山な地所も買つてあり家をも建てゝ、其處から長男長女を中學校女學校に出してゐる、君もいつまでも歌だの文學だのと云つて喰ふや喰はずにゐるよりか一つ方角を變へてこの道に入らないか、入つたあとでまた歌なり何なり充分に勉強出來るではないか、見給へ、僕等は四人詰で此處に斯うしてゐるが、職業に就いて費す時間と云つたら朝の燈室の掃除と夕方の點火と二三行の日記を書く事と、全部で先づ毎日三四十分の時間があつたらいゝのだ、あとは何をしてゐようと自分の勝手ではないか、いろいろ慾を考へずにさうきめた方が幸福だと思ふよ、と私の顏を見い〳〵いつもの荒つぽい調子に似合はず、ひそ〳〵として說き勸めて吳れるのであつた。そして、私の身體に目をつけながら、

『それに第一、遠方から來るといふのにそんなにきたない風態をして來る奴があるものか、君の細君も細君だ、僕は最初の日、羽織袴で出迎へて吳れた臺長の手前、ほんとに顏から火が出たよ、其處へもつて來ていきなり踊るなんか云ひ出すもんだからあんな騷ぎになつたのだよ』

と云つて苦笑した。

私もいつか竿をあげて聽いてゐた。島に來てから見るともなく、其處の彼等の生活がいかに簡易で、靜かであるかを見てゐたから、多少それを羨む氣持が動いてゐたところなので、一層友人のこの勸告が身にしみた。同じく苦笑しながら、

『ウム、難有う、まア考へておかう』

と云つてその日は濟んだ。が、それからといふもの、例の空中の宿直室に在つても岩かげの事務室にゐても、釣糸を垂

れながらも、私の心はひどくおちつきを失つてゐた。燈臺守になるならぬの考へが始終身體につき纏うてゐたのである。なつての後、いかに其處により善く生活してゆくか、木を買ふ、讀書をする、遠慮なく眼を瞑ぢて考へ且つ作る、さうした樂しい空想もまた幾度となく心の中に來て宿つた。

が、何としても今までのすべてと別れて其處に籠る事は、寂しかつた。よしそれを一時の回避期準備期として考へても、とてもその寂しさに耐へ得られさうになかつた。その寂しさに耐ふる位ゐなら其處に何の生活の安定があらうとさへ思はれた。そして、或る日、見るともなく事務室の藥品棚の中にある古錆びた藥品を見詰めながら、私は獨りで笑ひ出した。そして自分に云つた、斯うしたものに預けておくには自分の身體にはまだ〳〵少々贅が多過ぎる、と。

さう思ひきめると、急に東京が戀しくなつた。其處にゐる妻や友人たちが戀しくなつた。そして豫定の日が來ると、私は曾つて私の來る時に友人がしたといふ樣に、朝早くから双眼鏡を取つて岩の頭に立ちながら、向うの方に表はれて來るであらう船の姿を探した。

いよ〳〵船に乗り移らうとする時、何となく私はこれきりでこの友人ともう逢ふ機會があるまいだらう樣な氣がした。そして、固くその手を握りながら、

『どうだ、臺長に願つてこれから一緒に下田まで行かんか、あそこで一杯飲んで別れようぢやないか』

と云つた。一年も續けて土を踏まずにゐると脚氣の樣な病氣に罹りがちなので、折々交替に二三週間づゝ陸地の方へ行つて來るといふ話を思ひ出してさう云つた。

『フヽツ』

と彼は笑つた。

『まアよさう、行くなら東京へ訊ねて行かうよ、君もまたやつて來て呉れ、今度はもう毆らんよ、ハヽヽヽ』

『ハヽヽ』

自分も笑つた。送つて來て呉れた燈臺中の人も、船頭たちも、みな聲を合せて笑つた。



貧賤を愛す

――芋錢畫聖におくる――

山村暮鳥

ふるさとを想ふ

淙々として
天の川がながれてゐる
――すつかり秋だ

とほく
とほく
豆粒のようなふるさとである

小景

松の葉がこぼれてゐる
どこやらに
一すぢの
　風の川がある

おなじく

芭蕉はともかくも
火をこしらへて
茶をいれた
それからおもひだしたように
かたはらのお櫃を覗いてみて

さびしくほほゑみ
その茶をざぶりぶつかけて
冷飯を食べた
さらさらと
朝顔よ
さうだつたらう
渠には、妻も子もなかつた

蝶々

青空たかく
たかく
どこまでも、どこまでも
舞ひあがつていつた蝶々
あの二つの蝶々
あれつきり
もうかへつては來なかつたか

ある時

よくよくみると
その瞳の中には
黄金の小さな阿彌陀様が
ちらちらうつつてゐるようだ
玲子よ
千草よ
とうちやんと呼んでくれるか
自分は恥ぢる

いつとしもなく

いつとしもなく
めつきりと
うれしいこともなくなり
かなしいこともなくなつた
それにしても野菊よ
眞實に生きようとすることは
かうも寂しいものだらうか

中條百合子論

作家として

千葉龜雄

一

こゝに、若い夫婦の會話がある。

「冗談はあと、私は眞面目よ、貴方本當に私共の生活が、充實して居るとお思ひになること？　大丈夫、完全なものだとお思ひなさる。私はこの頃……ひどく不安なの」

「我儘だらう？」

「左様ではなくてよ、決して左樣ではありません、……私はね、この頃貴方が判らないの、貴方の心持の中心が、生きて行く恣が、私とまるで別な、遠い處にあるやうで苦しいの……例へば、今、私が斯那ことを云ふ迄、貴方一寸もさういふ心持は感じて居らしやらなかつたでせう？　自分が感じないばかりでなく、私が感じて居ることも、まるでお感じにならなかつたでせう？──それが離れて居ると私が云ふところです」

「ふうむ──然しそれは君が僕の氣持をよく理解しないからだらう。……それに……君の言葉は捕まへどこがまるでない、遠いとか、寂しいとか云はずに、何處か惡いところがあるなら、明暸に指摘すべきだ。それが君に出來ないなら、僕は君の云ふことに、はつきりした土臺がないとしか思へないよ」

すると妻のさよ子は　それを說明して、「それはつまりもつ

と「心の底に入る」ことであるが、いつも貴方は、「私のこの心持を論理の上で正しい形をとつて說明させようとなさる、それが淋しいのです。判つたでせう？　心のことよ、心直接に感じることなのよ――」

と答へるが、夫の俊夫は「それぢや堂々廻りで、結局、僕に云つても駄目だと云ふことぢやないか」と「冷やかな事務的態度」を示したといふのだ。

　そしてこの會話は、妻のさよ子の側から見たものであることも注意したい。

　これは中條百合子夫人が、六月號の「改造」に出した「心の河」の一片である。そして大體において、近頃での文壇で、珍らしいほど評判のよかつた作物でもあつた。

二

　評判のよかつたわけには、いろいろと理由もあつたらう。夫婦も華やかな新婚生活を通りぬけると、そろそろ戀ざめの空虛が待つて居る。これはその感情のギャップをねらつたとか、もしくは、大がいの夫婦生活は、誰でもがかうしたものだとして、感激の心の動きもなく、惰性的に生きて行くのだが、さすがにこの作家だけは、どこまでも、やはりその夫婦生活に、何等かの意義を求めずには暮して行けなかつたとか、そして、大抵の女性が氣づかぬ筈の、夫婦の間の、大きな心の河をあばいて見せたとか、云々。

　が、自分はこゝで、何もこの創作を批評しやうといふ興味をちつとでも持つものではない。また、いかに藝術は作家の分身だといつても、この夫婦の生活を、すぐ百合子氏の生活だなどと、ジャナリスチックに、當推量するほどの無禮を働らく積りでも少しもない。たゞ、ありやうは、私が百合子氏が近頃書かれるものを讀んで、「心の河」のさよ子に私の持つやうな不滿を、いつも同樣に持つものだといはうとするのである。

　たとへば「心の河」に對しても、まゝ事のやうに泣き笑ひだとか用事がないためのまぎらかしの刺激だとか、または、女學生が考へてさうな夫婦觀だなどと、きめて了ふ見方も他方に多かつたが、たとへば見かけは何と見えやうとも、あの生き方は、さよ子にとつては、全く眞劍であつたには相違ない。で、それほど眞劍でつきつめて居るのに、なぜ、そんな風に甘つたるい遊戲のやうに見ゆるかとなれば、それはこの作家が物を見るに、凡てを概念の上でおつかぶせる弊害にあるのぢやないかと思ふ。なるほど愛とか、直接の心が感ずると

か、生活の充實とか、言葉の上だけでは一々尤もらしい。そして、作家は、その尤もらしい概念を、感情の上で馬鹿に誇張して言ひ張つて居るがさて、この言葉の中實に、どれほどしつかりした内容がふくまれて居るか。第一、その生活の充實も、心の感じも、つまり生きる事實といふものがこゝにあり、その事實のいろいろとちがつた形に反射してこそ、始めて實も花も咲くべき筈であるのに、百合子さんのものには、いつもその裏付けが乏しい。「心の河」のさよ子は、「心が直接に感ずる」心持を、いつも「論理の上で説明させ」ようとする良人保夫の心がわからぬといふが、元來が論理で裏付け得られない感情などに、正しい豐富な感情があるものではない、それは内容を持たないむだ花のやうな感情だからだ、感傷だからだ。

三

で、百合子氏の書かれた物によつて、自分の感ずる印象を正直に言へば、それは氏の作物には、氏が、そんなに意氣込んで云ふほどに、心の直接感などがはつきり浮んで居ないといふことである。むしろそれと反對に、始めに一つの概念をきめて置き、その理窟におし固めて物を眺め、その理窟の型へ、物を押しこまうとすることである。形をかへて言へば、自分といふものを、向ふのものにすつきりと融し込んで、そこから純な自分を引き上げやうとはせずに、むしろ自分の狹い概念で、始めから物を自分流儀に解釋しやうとするところにある。つまり、自分といふものを、自分そのものから思ひ切つて解放し、物のなり行きに任せて自由に押しながすことが出來ない。だから、ぎごちがなくて窮屈だ。どうものびのびしたところが無い。また云ふところの心の動きや感じなどといふものは、かう出て來られると、始めから働きやうがない。感情がそこで凝化する。

けれども、いくら用心深く、意怙地に自分の殼に立てこもつてもよい。まだ作家その自己に、何か知ら、大きな體驗を持つて居る限りでは、かへつて變つた珍らしいものが生れるかも知れないからだ。それには作家が、相應に苦勞人であることを條件とするのであるが、それが百合子氏の場合においては、たとへば氏にどんな經驗があつたにしてもどうも、體驗として、作物をうるほすところが極めて稀薄である。だから、それが氏自身の主觀だけに狹められた限りでは、たとへやんちやさでも、良家に苦勞知らずに育てられた娘らしさでも、相應に浮んで來るのではあるが、さて一度それが客觀

性なものになつて來ると、たとへ、うぶで、眞劍ではあつても、どうも幼稚で、どこか苦勞の足りないところが出て來る。自然「心の河」などを讀んでも、保夫といふ良人ではないがどうも「はつきりした士稟がないとしか思へないよ」と、つつ放す外には無い仕義ともならう。

で、これはあまり餘計な御接介かも知らぬが、もし百合子氏の作物がもつと生長するためには、どうかすると、その小さく固まらうとする自分の殼を出て、もつと自由に外界への巡禮を敢てする冒險が大切なものではないか。「心の河」のさよ子は、「私が感じて居ることも、まるでお感じにならない」と不平を述べて居るが、彼女は果して、自分が感じたものの正體が、他人を心の髄から動かすやうに、そんなにたしかなものであるか、それをはつきりとつかんで物を言つてるのであらうか。或は自分が感じたと思つたものが、よく吟味して見たら、たゞ「感じたと思つた感じ」だけでなかつたらまだ見つけものである。

どうも苦勞が足りない。夫人は名家の出である聰明なお母さんを持たれ、學識に富んだ中條工學士を御父さんにして居る。家庭の寵兒としてはまことに申し分のない仕合せな身分に生れたのだが、そこがまたどうしてもその生活にお孃さん氣分の拔けきらない故でもあらう。

四

百合子氏のものは、自分はその處女作から讀んで居る。「日は」何とかいふその長篇や、第二作の「宮樣禰宜」などは、たとへあの頃にはやつたやうな、武者氏の人道主義の影響を大分うけたにしても、それはまつたく自分といふものを解放して、處女らしい、純な涙ぐましい人道愛を、思ふまゝに放射した劃時代の作物であつた。あれだけは、今ま見ても、相應光つて居るものといつて宜しい　とりわけ、あのアンビシアスな長篇を、何の苦勞もなく、のびのびと展開して行つた手際などは、たしかに將來を約束したものであつた。が、氏がアメリカへ藝術修業に行くと聞いて、私は自分の耳を疑つたものであつた。アメリカへ小說修業に？あの廿五錢雜誌の通俗小說萬能のアメリカへ、何の修業をするのだらうと思つたのだ。果してアメリカから「太陽」へ寄せた小說は、筋のめまぐろしさと、通俗さと、その描寫の荒つぽさにおいては、完全にアメリカ小說の見本であつた。何か鐵道の椿事か何かを描いたもののやうに記憶するが、讀んで、今さらおやおやと思はせられた。氏はそこで戀を獲たが、折角の藝術の

芽は、そこで一寸しぼんで了つたものではないかともおそれられた。

孃で行つて、夫人として歸朝してからももう何年にならう。かつて「太陽」に出たやうなヤンキイ仕込みの創作は、氏自分でも氣がさされたものだらう、歸朝後はふつつり止して了つた。そしてもつぱら夫人の身邊の雜事や、家庭の內部を思ひきつて題材にしたやうな作が現はれた。娘に對する愛着を、娘の良人に奪はれた母親の焦燥、そんな作物では、部分的に光つた名殘りを見せたが、それにしても、また何として、あの處女作時代の、淸新さやと感激をどこへ振りおとして來たものであらう。さうして、題材の上から見ても、たゞのんびりと落ち着いて、生き、働らく苦勞も惱みも無いブルヂョアの生活がたゞそこにある。さうした生活も、またわれ等にとつては、あまりに退屈で交渉の無いものであつた。またその作物にあらはれた作家の心境そのものが、大した生長をしないことも堪えられない退屈であつた。いや、たとへ生活內容がどんな平凡であつたとしてもよい。その生活に對する批判なり、意識なりは、もつと、きらきらと閃めいて、欲しかつた。かくある自分の心境を辯護するよりも、もつと、變つた形に生き、生長し、伸びて行かうとする活力が強く働いてほしかつた。

五

が、私は大部惡口ばかりを述べて來た。私は夫人とは、四五回も、集まりなどで同座したが、あまり御話したことは無い。しかし、夫人が同性の人々との談話などを聞いて居ると、口數は少ないが、聰明に快活に話して居られる。あの七三に分けたふんだんな髮の下から、無底邊三角形に、廣い白い額がのぞいて居るのも、どういふ譯か私には、サミュエル・ジョンソンの肖像を想ひ出させるが、下目に、ちつと物を見すえてるその大きな眼は、やゝ朗らかではあるが、やはり自己に閉ぢこもる享樂に醉ふ女性の眼だ。あどけなく感られた豐かな頰も、夫人とは思はれぬ子供らしさを暗示するのだが、そのお孃樣らしい單純さから離れ、妙に萎縮し、こはばつたその概念趣味から開放されて、心から、その子供らしい純眞と、新らしい感激に素直に燃え上るやうになつたら、氏の作物も、始めてもつと強い迫力を宿すやうになることだらう。そして氏の今までの成績だけで云へば、氏は事實を描寫し個性を創造するよりも、細々しい心理關係を描く方がどつちかといへばすぐれて居るやうに見える。

中條百合子の印象

三宅やす子

一

中條百合子さんの噂をきくことは大分前から度々であつたが、お逢ひする機會はなかつた。私の想像は世間があの方の實際以上に大きく云つて居るのではないかといふやうな極くありふれた考へさへあつた。

しかし、今から三年位前に、偶然ある處でその氏の御夫婦に御逢ひした時、私は氏から深い印象を受けてしまつた。

「あなた、おからだはどう？ほんとに御大切にね」さういはれた言葉が當時の私には何ともいへない勇氣をつけられたものだつた。

それは、それまで多くの婦人から受けとつたどの言葉の中にもそれと同じものをみいだせない、凡てに拘泥しない氏自身のほがらかな心の聲だつたからである。

その頃私は、激しい心の動搖の岐路にたつて、人生に對する無限のうたがひと苦しみを身にひきしめて居た。けれど、その私の境遇に向つて、向けられた眼は、言葉は、干渉はあまりに常套な、あまりに、暢氣な、そしてひどく見當の違つたものだつた。

人生の苦しみを見る人の心持は、火事場に向ふ蒸氣ポンプの後影を見送る人の心持みたいだと思つた。直接責任のある消防夫だけが器械的に事に當り、それを知つた人は、ポンプの行先によつて、火事を想像して、自分の家はやけないといふ安心で好奇心の眼を向けて居るのである。

しかし火事場の人達は懸命だ。命がけに働いて居る。

中條百合子氏は、蒸氣ポンプを見送る群集の中に、ひとり火事場の光景を描き、考へその苦しみを身に感じるといつた

人である。

それは、かつて、自身火災に遭つた事のある人の、大まかな考へ方よりも、もつと深いものに達して考へ得られるだらう。

多くの私と同じ苦しみに逢つた人から受ける慰撫や激勵の言葉が、却つて、私を寂しがらせ憤らせ、人間全體を淺ましく考へさせた時に、全く其反對の境遇の氏から——女性の中では只氏一人から——透徹した。純粹の感情を受けとる事が出來たのはどういふわけであらう。

私は此處に氏の作家的素質といふものが、世間で夙に持てはやしたもの以上に、大きく惠まれて居るといふことを深く感じるのである。

二

氏は普通に女性の持たないものを多く持つて居られる。

たとへば、人の心持を忖度して、自分の云ひ度い事を十分に云へないといふ女性の弱點などは少しもなく、どんな時にも、面をおかして、所信を發表される。

それが、少しの遲疑もなく勿論憶病もなく、明快に、即座に、斷言されるところは、到底女性に容易く見られないものである。

勿論、其斷言に到る前に、非常に緻密な考慮が敏捷にめぐらされて居るのだといふ事を更に驚く。

此小氣味のよい、敏捷な觀察力が、氏の小說に見られる微細な描寫になつて現れるのである。

「小說をかくといふことは、三十位になつて何もかもわかつてからだと思ふ」と云はれた氏は、遂に其境に此頃入られて、最近の「心の河」などは、今の婦人の境遇なり考へ方なりに、大きな波紋をなげかけた傑作であつたが、勿論、平淡な一日の生活にも、見のがさない人生の一片を味ふ氏としては、むしろこれからがだん〳〵本當の途に進まれるのであつて、「心の河」の好評は、いやな氣持ではなかつたにしても、大して氏を喜ばせるものではないことは想像するに難くない。

氏の持たれる大きな力は、世評に超然たることである。男性の作家に對抗しようとか、女性の力を見せびらかさうとか、さうした狹いものでなしに、此人生全體が氏の對象で、どこまでも、わきめもふらずに藝術に精進しようとする純な熱でみたされて居る。

だから、沈默してしまつたといはれることも傑作をかいたといはれることも氏にとつては小さな事であらう。本當に自分でこれならと氣のすむものを一生のうちにいくつか書けたらそれで可い、といふやうな、遠大なのぞみがあるのであらう。

さうした純な途に進み得るには、氏の素質が、對世間的に小成を安んじぬものであり、氏の境遇が、藝術に精進する途を沮止するものをあまりもたぬといふことがどれほど幸して居るであらう。

今の處では、凡ての女性に氏の創作に現はれた女性の心持はよみこなし切れないかもしれない。男性にはと云へば、性の相違から、或は必ずぴつたり共鳴し得ないかもしれない。さうしたものであるところに氏の使命が大きくかけられて居り、氏が開拓してゆくべき途は興味が多いのだと云へる。

三

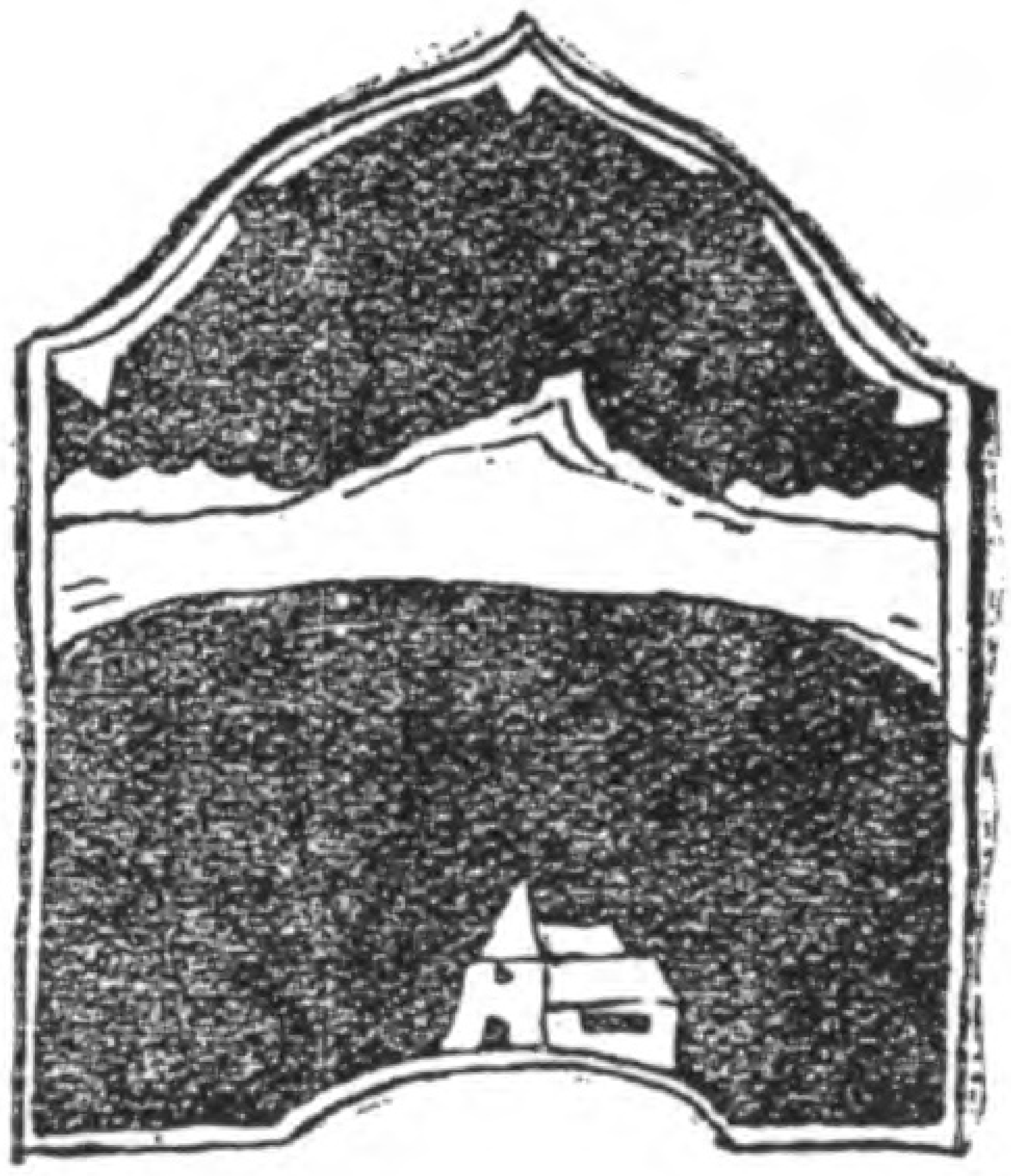
氏は自由な新らしい父母君のもとにあつて、のびらかに成ひ立ち、やさしい夫君と共に生活の苦なく愛されて居る。

だから書いたものを金にする必要に迫られない、藝術家としての最大の條件を具へて居られる。

或人は、それを云つて、生活の苦しみを知らない人のかくものはしみ〴〵としないといつたりするが、私は左樣は感じない。

食べること衣ること、只それ丈けの苦しみは、苦しみの度が強いとしても單純である。今日一日を生き切れない貧のどん底にある人の安易な生活がくり返されて居るではないか。もつと、複雜した惱みが人生にはある。殊に女性には痛切にある。どこまでも現實の世界に生きてゆく男性の見のがして居るかもしれない女性の心の世界が、此世のかぎり、ひろがつて居るものなら、これをどうときほぐしてゆかうといふことは、一升の米と、一枚の着物の勞苦を最大とする人に企て及ばぬことであらう。

はじめ私は中條百合子氏の印象をかくつもりで筆をとつた。そしていつかこんな文章になつた。實は氏についてもつと私の印象や感じをかけば澤山あるけれどさういふことは私は下手なので、もうこれで筆を止め度くなつた。



春香傳

——廣漢樓記——

呂圭亭 作
中西伊之助 抄譯

（解說）朝鮮の文學を、私はいつか日本へ紹介したいと思つてゐた。その最初の試みとして、この春香傳をえらんだ。

春香傳は、一名廣漢樓記と云つて、朝鮮の最も有名な小說である。春香と云つても、彼女は決して賣笑婦ではなく立派な處女である。ここで朝鮮のいろんな、小說を解說するひまはないから、この春香傳について、かんたんな評釋を加へて置く。

この小說は、婦德の中の、烈を描いたもので、『沈清傳』は孝を描き、『燕脚』は友を描いてゐる。朝鮮では、この三つの小說が、最も有名なクラシックとなつてゐる。日本で云へば、まづ忠臣藏、仙臺萩、太閤記等に比ぶべきもので、常に演劇に上演されてゐる中にも春香傳はその濃艶な戀愛を取扱つてゐる點に於て、他の二者の首位にある。朝鮮の婦人にはとりわけて春香傳が熱狂的に歡迎されてゐる。日本の小說は、最初小說となつてそれから演劇になるのが多い。ところが、この小說は、最初『春香歌』と云つて、俳優が演劇にしてゐたのを、作者が小說にしたのである。そこでプロットはかなりドラマチカルになつてゐる。

が、とにかく、日本で云へば德川文學時代の產物であるから、かなり幼稚と思はれる點もあり、また、八犬傳式な、ロマンチツクな點もあるが、八犬傳などよりは、ずつとリアルである。

戀愛問題を取扱つたと云つても、この小說は、また一面に朝鮮近古の政治裏面史である。そしてなかなか新しい民主思想が盛られてある。この點、日本現文壇などよりも進步してゐると云つてゐゝ。小見出しは、私が便宜上つけた。

とにかく、朝鮮文學を、日本へ最初に紹介することは、私にとつて甚だ愉快である。どうか讀者は、この私の微衷を諒として戴きたいと思ふ。私の譯は、抄譯と云つても、甚だルーズなもので、筋を近代の日本文で書いたと云ふ方がいゝかもしれない。

（序）緋桃の精

絕世の美人は、常に江山の精氣を受けて生れるものだとは、昔から言ひ傳へられてゐる。たとへば、西施は、苧蘿山の若耶溪から生れた。王昭君は、群山萬壑の赴荊門から生れた。そして綠珠は、秀麗な雄角山の精を受けこの世に生れたと云ふなどとは、皆その著しいれいである。後には、俠艶を千古に傳へられた、名妓生春香も、やつぱり美しい花の精であつた。彼女の生れたのは、朝鮮でも、暖かい南國の、全羅南道、南原郡である。

南原郡は東に智異山が高く聳えてゐた。明るい水淺黄の空の下に、いつも青々と針葉樹の繁つた山の柔らかい線が、若い女の翠髮を思はせるやうに美しかつた。西は、赤城江が流れてゐる。水は、なだらかな平野のまん中を、銀蛇のやうに蜿蜒と、遙かな地平の彼方に沒し去つた。

母の月梅と云ふのは、もと、妓生であつた。が、三十を越えてから、春香を生んだ。彼女は、ある夜に、夢を見た。——一人の天女が、李の白い花と、桃の紅い花を、各一枝づつ兩手に捧げて、天から降りて來た。そして、その紅い花だけを、月梅に與へた。

『この花を、よく培養して、後日李花に接木すれば、將來必らず幸福を得られるであらう。私は今ここに持つてゐる、も一枝の白い李の花は、まだ他の者に渡してやるのであるから、これから急いで行かねばならぬ……』

天女は、かう云ひ終つて、とび去つた。月梅は、この夢を見てから、十月の後に、娘を生み落した。夢の中の桃花を思ひ出して、桃は春に香ふから、それに因んで、娘を春香と名づけた。

春香は、妓生の娘ではあつたが、天性非常に怜悧であつ

た。七歳の時には、一通りの文字を知つて、詩歌を作つた。漸く長じては、裁縫、刺繍、繪畫、音樂と、諸藝に巧みで、何一つ通ぜないものはなかつた。彼女の名は、その美しい姿と共に、遠い都の人々へも傳はつて行つた。

（一）春怨

一

丁度、その頃であつた。朝鮮の都である京城の三清洞に、李翰林と云ふ名門があつた。李翰林は、王の命を拜して、南原郡の府使となつたが、赴任以來、熱心に政務を執つたので、治蹟は大に擧つた。そして僅か一ケ月程の間に、郡内の處々に善政碑が建てられると云ふ有樣であつた。

李翰林には、一人の息子があつて、名を鈴と云つた。今年十六の青年であつたが、風采は、杜牧之を偲ばせるやうに秀麗で、顏は冠玉のやうに美しかつた。そればかりではない。彼は諸學に秀でて、また詩文に堪能であつた。が、彼はさうした學文にばかりの才があつて、性質の優柔不斷な、世に有りふれた小公子ではなかつた。彼の一面には、稜々たる氣骨があつて、態度も常に豪宕たるものであつた。

ある長閑な春の朝であつた。若い李鈴は、あたりの名勝を探つてみたいと思つたので、房子を呼んだ。房子とは、郡廳の小使である。

『今日は非常に暖かいから、一つ郡内の名勝を探つて見ようと思ふのだが、どこが一ばん佳いかね、お前はここだ生れたから、よく知つてゐる筈だ』

鷹揚に、彼は華奢な顏を、房子の方へ向けた。と房子は、以外だと云はぬばかりの風で、容を改めて云つた。

『若さま、あなたは、まだ御修業中のお身分ぢやございませんか、それに景色のいゝところなどをお聽きになるのは、まあどうなすつたのでございます』

それを聽くと、鈴はほゝ笑みながら、云つた。

『ばかを云ひなさい、お前は何んにも知らないだらうが、昔、巣父や許由は、箕山や穎水に遊んだことがある。また蘇子瞻が赤壁の秋月を賞したことは誰知らぬものはないぢやないか。それにあの黃鶴樓や姑蘇臺、それから滕王閣、鳳凰臺などみんな古人の遊んだ文章名筆の跡があるよ。俺も一個の豪傑だ、この花の咲く春に、邸の中で愚圖愚圖してゐられるものではない。まあ餘計なことを云はずに、早くどこかへ案内してくれないか』

かういろんな故事まで引出して說明されると、無學な房子

は唯恐縮するより他になかつた。
『さう若さまが仰有るのなら私もやむを得ませんから、どこかへ御案内申上げませう。さあ、まあこのへんで名勝と申しますと、北の方では朝宗山城、西では關王廟でございます。どちらも申分のないところでございますよ。しかし南門を出ますと、有名な廣漢樓があります。これは小江南と云はれるくらゐの形勝で、前の地よりもずつといゝ景色でございます。その近くには烏鵲橋もあれば、また瀛洲閣もあります。それにこの二つは、三南屈指の名勝でございます。』
『さうか、よし、それでは、その廣漢樓にしよう』
鈴は、青年らしい張り切つた聲で、すぐかう答えた。それから間もなく、鈴は、房子の案内で、邸を出た。
鈴は、輕快な、水色の周衣を羽織つて、紫の唐草のある色緞靴をはいてゐた。二人の房子は、酒を擔つてそのあとからついて行つた。
碾茶色に煙つた古柳の影に、五彩の樓閣があつた。その太い圓柱は風雨にさらされて、巖石のやうに古びてゐるのに、紫や、丹朱の彩りばかりは、春の日に鮮やかに照り映へてゐた。白い李が、廻廊を取りめぐつて咲いてゐた。樓の前には、流洲があつた。後には、武陵桃源がある。房子は、そこへ席を設けて、酒宴をする用意をした。
『では若さま、ここでごゆつくりと召しあがつて下さい、私共は、あちらでお待ちいたしてをります』
用意がすつかりできあがると、房子の一人は、さう云つた。李鈴と同席するのは、あまりに身分が違ふからであつた。
『なあに、構はないよ、お前たちも　ここで一緒に酒を飲むがいゝよ』
『いえ、どういたしまして、私共は……』
『酒は一人で飲んではうまくない。ぜひお前たちもここにゐて、俺の酌をしてくれ。』
『はい、ではお酌をさせて戴きませう。』
房子たちは、さう云つて、席の片隅に、恭しく座を占めた。かれらは、この若い主人の舊い儀式に拘泥しない磊落さを、心の中で感歎した。そこで、酒宴は賑やかにはじまつた。

二

『若さま、こんな風景のところで、かうして上等なお酒を戴いてをりますと、まるで酒仙になつたやうでございますね』
房子の赭黒い顏にも、艶めかしい東風が吹いた。
『うむ、實にいゝ氣持だ。あの智異山の雄々しい姿はなんと

も云へないね、英雄が春駒に跨つて三軍を指揮してゐるやうぢやないか、それに向ふの赤城の流れも美しい。輝いてゐる長江があの霞の末に消えてしまふあたりはまるで夢を見てゐるやうだ』

『全くでございます。若さまも、終日書齋で御勉强をなすつてゐらつしやるのですからたまにはかうしたところへゐらつしやるのもお體に藥でございますよ』

『うむ………』

と、鈴は口の中で答えたが、いつの間にか彼はどこかへ眼を放つて、凝つとそこを見つめてゐた。房子は、ふとそれに氣がつくと、怪んで、その方向を見た。そして彼も思はず眼を瞠つた。

樓閣の屋根の一端が、蔽手になつたあたりへ、丁度美人の垂髪をかけたやうになつて、大きい楊柳があつた。その楊柳の枝に、鞦韆をかけて、繪のやうに美しい女が遊んでゐた。曾て、高い城壁にかかつた楊柳の枝に鞦韆をかけて、安祿山と逢曳をしたと云ふ楊貴妃のやうに美しかつた。

女は、端麗な顔に、匂はしく淡粧をしてゐた。漆黒の髮は、花瓏（蒔繪）の櫛で、艶々と梳つて、髮の端には、たんきと云ふ、幅廣ろの紫巾紡（りぼん）を結びつけてゐた。吉祥紗の肌衣、水紬綿紬の袴(刺繡の袴)光月紗の上衣、鸞鳳亢羅の緞裳などが瀟洒と裝はれて、三承木綿（木綿の上等品）の襪（足袋）に、紫毛綃の唐鞋を穿いてゐる。前髮には、民竹節（笄）後髮には、金鳳取（岐笄）を挿して、右の手には、玉手環を嵌め、耳朶には、月貴彈を垂き、胸には、くさぐさの名香を入れた匂袋、巾着、珊瑚の枝が飾られてあつた。——その美しい女は、春香であつた。彼女も、やはり今日は、ここへ遊びに來てゐるのであつた。

鈴は、魂を奪はれて、しばらくその姿に見惚れてゐた。が、ふとわれにかへると、手に持つてゐた扇子で、春香を指しながら、房子にきいた。

『あすこに遊んでゐる女は、あれは何者だらうね？』

房子は、それが春香であることに、氣がついてゐた。が、わざと知らぬ顔をして答えた。

『若さま、私の眼には、何んにも見えませんが………』

『なに、見えない。そんなことがあるもんか、俺の扇子で指す方を見ろ』

『いえ、いくら見ても何も見えません』

『お前たちは何を云つてゐる。たとひお前たちと俺たちとは身分は違ふかも知れんが、眼まで違ふわけはないぢやないか、

それとも俺は慾心のない人間だから金が變化して見えるのかしらん？』

『いいえ 金は昔楚漢の時、陳平が范亞父を捕へようとして、黄金四萬兩を楚軍に與へました。それ以來、金のある筈はございません』

『ふむ、さうか——金でないとすれば玉かな？』

房子は、心のうちで、をかしく感じられてたまらなかつた。が、彼はあくまでもしらを切つて云つた。

『いいえ、玉でもございません。それは鴻門宴の時でございます。范増が毀した玉は白雪になりましたし、また、崑岡山は山火事で玉石共に燒けてしまひましたから、今頃玉なんかある筈はございません』

『ふうむ、それでは鬼神か知らん……』

『どういたしまして、こんな白晝に、鬼神の出る譯はございません』

『なるほど……………それなら、一たいあの女はなんだらうね？』

鈴は、他愛なくこんなことを云ひながら、尙ほうつとりと見惚れてゐた。房子たちは、その無邪氣な鈴の容子を見ると、いゝかげんなことを云つて瞞してゐるのが氣の毒になつた。

そこで正直にかう云つた。

『若さま、あの女は、この郡の月梅と云ふ妓生の娘の春香でございますよ』

『なに、あれが有名な春香なのかい、なるほど美しい女だね、では早速あの女をつれて來てくれないか……』

鈴は、柔かい頰を火照らせて、さう云つた。が、房子はすぐ手を振つた。

『若さま、どういたしまして、それはだめでございます』

『なぜだめか、俺はあの女を呼ぶだけの値打のないものだとお前は云ふのか』

鈴は不平げに云つた。

『いえ、だめでございます。あの春香の花容と雪膚は、三南の名譽でございまして、監使でも兵使でも、また府使でも郡使でも、唯春香を一人近づけようとしない人はないのでございます。けれども若さま、あの女は本來妓生ではございませんし、また父親は相當身分のある人ですから、なかなか應じようとはしません。その上に、あの春香は、綠珠の容色と、薛濤の文章と、それから木蘭の禮儀とを兼ね備へた當世の女君子ですから、あれを連れて來るなんてことは、とても容易ではございません』

それを聽いてゐた鈴は、あでやかなほゝ笑みを顔に泛べてすぐ云つた。

『は、は、は、お前には何も解らないお前にはあの女がさう見えるかも知れない。それはあの女は才色兼備の佳人であることは確かであらう。荊山の白玉と麗水の黄金は貴く美しいから、誰でも欲しがるには違ひないが、しかし、それを取るものは別にちやんと決つてゐるのだ。まあさう心配せずに呼んで來なさい……』

『いえ、それは若さま、何と仰有つても、あの女を呼んで來ることはできないと思ひます』

『お前はまだそんなことを云つてゐる。お前は唯だ俺の云ふ通りすればいゝのだ。』

若い鈴は、房子の云ふことをきかなかつた。

三

房子は、やむを得ず主人の命に從つて、春香のそばへ行つた。そして李鈴の言葉を傳へた。と、春香は、美しい首を振つて、淑やかなうちに、毅とした口調で云つた。

『私はまゐるわけにはゆきません……』

『それはどしてだね?』

『どうしてと仰有つても、よくお考へ遊ばせ。そのお方は青年のお身でありながら、學問を忘れて物見遊山などにゐらつしやる方ではございませんか、それもただ名勝を探つて浩然の氣をお養ひ遊ばすと云ふのならばまたしもでございますが、他人の娘などを呼び寄せるなどは以つての外ではございませんか。たとひ呼ぶのは殿方の御勝手でも、女としてはすぐまゐるわけにはゆきません……』

房子は、鈴にたいしてあゝは云つたが、しかし、春香へは、身分もあまり違はないところから、揶揄氣味で、笑ひながらまた言つた。

『お前はそんなことを云ふがね、府使さまの若さまはなかなかの美男子だよ。風采はまづ杜牧之だらうな、そして又文章の立派なことは李太白に比べてもよからう。書のお上手なのは王羲之も裸足と云ふくらゐだ。その上に代々忠孝のお家柄で、門閥地位は云ふまでもない。どうだ春香、お前がもし若さまのお嫁に行かうかと云ふ氣があるなら、今のうちに若さまの處へ行つて近づきになつて置くのがいゝぜ。がまたお前が幾ら厭だと云つても、若さまが腹を立てて一言府使さまに話されたら、明日はお前のお母さんが役所へ曳き出されて、きつとひどい罰を受けなきやならないぞ』

房子は、なんと云つても小役人にありがちな權威を笠にき

てゐた。けれど、春香は少しもそんな言葉を恐れなかつた。が、彼女は鈴の美貌と學才を傳へられると、さすがに顔を赧らめた。

『房子さま、たとひあなたがなんと云はれようとも、私はどうしてもまゐることはできません。』

と、彼女はまだ房子の言葉に從はうとはしなかつた。

『春香、お前はどうしてそんな頑固なことを云ふのだ。お前は若さまがそれほど嫌いなのかね？』

『いゝえ、私は今若さまが嫌いだとは申してはをりません。房子さま、お聽きなさいまし、蝶は花に來るものでございます。花が蝶を探すものではございません。私風情を若さまから呼んで戴くのは嬉しうございますが、どうぞ若さまにさう申上げて下さいませ、雁は海に隨ふものではございますつて…………』

春香は、さう云つて行つてしまつた。

『雁は海に隨ふものでございますつて……』

房子は、春香の後姿をながめながら、口の中でくり返した。しかし、彼はその謎が解けなかつた。

鈴は、廣漢樓のあたりを、ひとり徘徊しながら房子の歸るのを、いらいらして待つてゐた。そこへ、房子がひとりでぼんやりとしながら歸つて來たので、非常に落膽した。そして遙か向ふに、春香の歸つて行く姿を、恨めしげに見送りながら、一詩を作つた。

君は歸りぬ
洞天に
君は歸りぬ。
殘れるものは柳の煙。
鳥の聲。

そして鈴は房子をにらみつけた。

『お前はなぜ春香を歸してしまつたのだ』

「はい、まことに申わけがございませんが、私は春香の云ふことがわからないのでございます』

『なに、春香の云ふことがわからない？』

『はい、春香は若さまへ、雁は海に隨ふものだと申上げてくれと申しました』

『うむ、春香がきつとさう云つたか？』

『はい、』

鈴はその確かな返辭をきくと、俄かに憂欝から醒めて、よれしげにうなづいた。

『若さま、その春香の言葉は、一たいどう云ふ意味でござい

ますか、私にはさつぱり解らないのでございます。』

『お前には解らないかも知れないが、その言葉を聴いて俺は全くうれしいのだ』

『さようでございますか。それは結構なことでございます。で若さまは、春香の言葉をどうお解りになつたのでございます』

『春香は俺に家へ來てくれと云ふのだよ。女の方からは行けないものだと云ふのだよ』

『は、はあ、さようでございますか、さすがに春香は淑女でございますね』

『俺は今晩春香のところへ行くぞ、』

鈴の全身の血は躍つてゐた。彼は、今晩の、彼女との逢瀬を想像すると、あまりに艶やかしい歡喜に胸を息窒らせるのであつた。

(二) 麗人艶語

鈴は、夢のやうに空想を逞ふしながら、家に歸つて來た。が、彼は黄昏になるのを、どの位待ちのぞんでゐたことであらう。彼は自分の部屋には入ると、そのしばらくの間を、書見することにした。

鈴は、自分の前に書物はあるけれど、眼には、美しい春香の姿が幻の中からほゝ笑んでゐた。そしてその美しい顔が、彼を惱ましてならなかつた。

『あゝ、早く見たいなあ……』

彼は、嘆息するやうに、幾度も聲を放つた。そしてその聲は、度重なると、次第に大きくなつて行つた。

奥の間では、父の翰林が、靜かに書見をしてゐた。翰林の耳に、その聲がふとは入ると、彼は怪しんで使令を呼んだ。

『鈴は先刻から見たい見たいと云つてゐるが、なにを見たいと云つてゐるのか、お前ちよつと行つてきいて來い』

そこで、使令は、鈴の部屋へ來た。

『若さま、今あなたは、大きな聲で何を見たい見たいと云つてゐらつしやるのですか、父上がきいて來いと仰有いましたので、私が承はりにまゐりました』

鈴は、使令の言葉をきくと、頭をかいた。

『そいつあ弱つた。では仕方がない。父上にかう云つてくれ、俺は詩の七月篇を見たがつてるのだつてね……』

『さようでございますか、それは結構なことでございます。』

で、使令は、父の翰林にその旨を傳へた。
『うむ、鈴はさすがにわしの息子ぢや、もう七月篇を見たがるほど學文が上達したのか、たのもしい奴ぢや』
翰林は、うれしさうにほゝ笑んだ。家の軒には、圓い月が上つた。そして犬の啼聲が、鈴の耳には若さを唆るやうに聞えて來る。

二

鈴は、房子をつれて、春香の家の前まで來た。そしてためらひながら云つた。
『房子、俺はどうしたらいゝのだらうね？……』
房子は、その言葉をきくと、につと笑つて、
『若さま、なにもこの場でそんなに考へることはありませんよ、そのまますつとお入りなさい』
『いや、それはいけないよ、相手はあの厳格な春香のことだもの、──誰か紹介してくれるものがなくてはね……』
『は、は、は、あなたもお弱くおなりでしたね、それでは春香にすぐ會はないで、母の月梅にお會ひなさい。』
その時、家の中で、月梅は春香と話をしてゐた。
『春香や、今私が居睡りをしてゐたらね、妙な夢を見たのだよ』
『まあ、お母さま、どんな夢をごらんになつて？』
春香は、母へ、美しくほゝ笑みかけた。
『いえね、それはお前の寢てゐる錦閣から、五色の雲が起つて、青龍がお前を取り卷いて天に上つたと思つたら、わたしは眼がさめたのだよ』
『おや、それは大へんいゝ夢でございますことね』
『えゝ、わたしもいゝ夢だと思ふよ。もしお前が男の子だつたら、きつと文科に及第するに違ひありません ──おや、表へたれか來たやうだね』
母はいぶかしげに門の扉をあけた。と、そこには、見たこともない美しい氣品のある總角が、一人の供をつれ佇つてゐた。
『あなたさまは、どなたでゐらつしやいます。仙童でございますか、それとも人童でございますか、でなければ、蓬萊の探藥童でございますか？…………』
『いや、いや、これは府使さまの若殿だ、ずつとお通し申すがいゝぞ』
房子は、そばからかう言ひきかせた。
『あらまあ、府使さまの若殿でございますか、これはこれは、老人と申すものは、眼うといものでございますから、とん

でもない疎忽いたします。どうぞお赦し下さいませ、でもまあこんなむさくるしいところへお出下さるとは思ひもよらぬことでございます。どうぞまあこちらへ』

月梅は、自分の室に案内しようとした。

『僕は老母の室には、は入りたくないのだ』

鈴は、快活に云つた。

『おや、さようでございますか、なるほど、お若い殿方でございますから、ごもつともでございます　ほ、ほ、ほ、ほ、』

月梅は、その青年の、他愛のない快活さにほゝ笑まれた。そして春香の室へみちびいた。

『春香や、この方は府使さまの若殿さまだよ、今晩はわざわざわたしの宅へお微行び下すつたのだから、御挨拶をなさいな』

母の言葉をきくと　春香は、静かに黙禮した。その風情は、露に匂ふ秋海棠のやうな艶麗さがあつた。朝日に輝く白芙蓉のやうな端正さがあつた。金歩揺ぐの飾はないが、雲鬟花顔、頭を回らして一たび笑めば、白媚生るの容姿に、若い鈴は恍惚としてゐた。

鈴は、すすめられた煙草を、夢のやうに喫んでゐた。そして、紫色の朧けな煙の中から、あたりを見廻した。室は、さまで贅澤ではないが、三方の壁には、巨匠の名蹟が懸けられてゐた。玳瑁の机、翡翠の硯、珊瑚の筆挿などが、配置よく飾られてある。本棚には、四書三經、その他の珍書が奥床しく積まれてゐた。

鈴は、かうした若い婦人の室に入つたのは、今宵がはじめてであつた。彼は、噎ぶやうな強い異性の香につつまれて、心もそぞろに羞かんでゐる。

母の月梅は、その姿を見て、きいた。

『若殿さま、あなたは尊いお身分でありながら、かうした私風情の者の家へお微行になりますのは、なにか御用がおありになるのでございませうね……』

鈴は、ふと顔をあげた。その頰は、桃の花のやうに染つてゐた。

『いや、今夜は月が良いので、觀月がてらにお前の家へ來たのだが、――』

鈴は、しばらく口ごもつてゐた。が、彼はすぐまた素直に云つた。

『實はお願ひがあるのです……』

『まあさやうでございますか、若さまのことでございますもの、なになりと、私共で勤まりますことなら、どうぞお申つ

け下さいませ』

月梅は淑やかに頭をさげた。

『それでは僕は云ひます。僕はあなたの娘さんと結婚がしたいのです……』

鈴は、臉を火のやうに輝かせて云つた。

『若さま、あなたさまの思召しは、ほんたうに有がたうぞんじますが……』

と、月梅は、端然と襟を正して云つた。

『實は若さま、私は元は妓生こそいたしてをりましたが、娘はこれで歴とした人のたねでございますから、どうぞ私の申すことを一通りお聽き下さいまして、それから若さまの御決心をおきかせ下さいませ』

月梅はかう前置きして、春香の身の上を語つた。

春香は、京城の成參判が、本郡の府使になつた時、月梅に生ませた子であつた。成は、京城へ榮轉したが、程なく病歿した。月梅は、女の手で、涙ながらに彼女を育てあげた。七つの時には、小學全部を終つて、修身齊家の道から、三綱行實、仁義禮智等、男子に劣らず修めさせた。

『かうして私の手一つで、婦人としては一人前に仕上げたのでございますから、年頃でもございますし、似合の人があればと存じてゐるのでございますが、まだこれと思ふ人はないのでございます。そこへあなたさまのお話を承つてまことに有難くはございますが、でも一時のおなぐさみに遊ばすやうであれば娘もこの上ない不幸でございますから、はつきりとお斷りいたします。そのへんのことをよくお考へ下さいまして、今夜はここで暫くお遊びの上、一まづお歸り下さいませ』

鈴は、月梅の言葉をきくと、意外にも考へられた。が、その氣位の高さが更に彼の強い愛着を春香にたいして感じさせるのであつた。

『僕は決して、一時のなぐさみにしやうなどとは思つてゐないのです。たとひ六禮は備へることが出きなくとも、兩班の子として決して二枚の舌を使ひません』

鈴は、熱心に、月梅に說いた。

三

鈴は、また夢龍と稱つた。月梅は、宵の青龍の夢をおもひ出した。彼女は、鈴の意に從つて、春香と結婚させる心になつた。

『では若さま、六禮は備へなくとも、せめては婚書禮狀の代りに書付けだけでも一通りお願ひしたいと存じます』

月梅はかう云つて、起ちあがると、硯を鈴の前へ置いた。鈴は、いそいそしながら硯を引き寄せると、筆に墨を含ませて、かう書いた。

天長地久、水は涸れ石は磨するとも二人の縁は断つべからず。天地神明よ、這の誓を證せよ。

鈴は、美しく書きあげると、母の月梅に渡した。月梅は、それをぢつとながめて、恭しく、しかしうれしさうに頭を叩げた。

燈盞の灯は、琥珀色に輝いてゐる。青春の情熱に燃えてゐる二人の間に、酒肴がはこばれた。月梅は、悦びにあふれて、愛らしい婿をながめながら云つた。

『若さま、なにはなくとも、心祝ひでございます。どうぞ一つ召しあがれ、さあ春香や、そんなに羞かしがらないで、若さまにお酌をしておあげ』

春香は、ふくよかな頬を、珊瑚のやうにしながら、銚子をとつて、鈴に進めた。鈴は、もう夢を見てゐるやうであつた。彼は、春香に酌をさせながら、月梅に云つた。

『お母さん、僕は文科に及第したより嬉しいですよ』

『ほんたうでございますよ、若さま、私も今晩のやうに嬉しいことはございません。この娘は父親の顔も知らないで育てられたのですもの、私はどんなに可愛いか知れないのです。それに天の祐けと申しませうか、あなたのやうな名門の若殿さまと百年の契りを結ぶやうになつたのは、この上もなくめでたいことでございます』

月梅の瞼には、涙の露さへ宿つてゐた。

『それにつけてもね、若さま』

彼女は、喜悦の窮極から、そぞろに悵然として、云つた。

『死んだ父親の成参判令監に、今晩の容子を、一目見せたら、どんなに喜ぶことだらうと思ひますと、私は悲しくてならないのでございますよ』

それをきいた春香も、美しい顔を曇らせるのであつた。その淡い愁ひを含んだ姿に、鈴は一しをの愛慾をそそらせないではゐられなかつた。

『お母さん、今晩はめでたい席だから、過ぎ去つたことはすつかり忘れてしまつて、あなたもお過しなさい』

鈴は、月梅に盃をさして、やさしくなぐさめた。そして

供の房子も一緒に、しめやかな宴に、夜は更けて行つた。庭では、牡丹のくずれ落ちる音がする。

房子は、明朝迎へに來ると云つて、歸つて行つた。

月梅は、二人の床をのべた。緋緞子の色が、鈴の閨へ、歡樂の華のやうに沁み滲む。

『では若さま、ごゆつくり……春香、御きげんよう……』

月梅は、あいさつをして、出て行つた。若い二人は、ほつと吐息を吐いた。

二人は、今日の、廣漢樓の話から緒がほつれた。そして相思の情をこめた色彩り濃やかな艶語は、寢息のやうなしめやかさでくりかへされた。

鈴の脱いだ衣服を、春香は簞笥の中に仕舞ふとする時、かたわらに立てかけてあつた伽耶琴の糸に、袖がふれた。そしてすらりんと鳴つた。

『なんてい〻音だらう』

と、鈴は感歎した。

『黃鶴樓の笛の音も、寒山寺夜の鐘聲も、恐らく今宵のこの音には及ぶまいね』

彼は、かう云つて、春香の姿を見あげた。

『さあお前もお脱ぎ……』

が、春香は、羞かんで、容易に衣服を脱がうとしなかつた。燃えんばかりに赧くなつてゐる春香の細い腰を抱へて、緋色の上衣や、紫紺の裳を脱がせた。そして、こみあげて來る法悅の胸騷ぎに、全身を顫はせるのであつた。



ペルシヤ人の泉に對する信念

荒木茂

私の生れた一農村から僅かに數町を隔てた處には低い丘陵が續いて居る。その或る麓に、鬱蒼とした森に圍まれて綺麗な冷水を湛えて居る瓢簟形の淺い池がある。その池の中には處々に淸水が湧き出て居る。其等の一つだけは特に三尺程深く堀り下げられ、直徑三尺もあらうかと思はれる石管で圍まれ、湧き出る冷水は、池の水面より四五寸も高く積み上げられて居るその石管を超えて溢れて居るのである。私が七八歲の頃、或る夏の日、初めてその池の邊に連れられた時、その石管の底の方で、周圍の細かな砂を盛り上げながら湧き出て居る泉を見詰めながら、ひどくその不思議に打たれたことがある。勿論その年頃には、たとへ學理的な說明を與へて呉れるものがあつたにしても、了解し得るだけの豫備知識もなかつたが、又合理的な說明を試み得るものも私の周圍にはなかつたのである。斯樣にして或る年齡に達するまでは、泉と云ふものは實に不思議なものであると云ふ感を持つて居た。否寧ろ泉に就いて一種の恐怖心さへ懷いて居たことがある。

水は人に淸潔な感を與へる。この感念は恐らく總ての人種に共通なものであらう。進んで、水は人に神聖視される。これも人類の發達史上に常に現はれて居る事實である。尙更に、いろ〳〵な種族が殘して居る神話、傳說などにも「水の神」に就いて多くの話を傳へて居る。又殆ど總ての國語に「水の神」と云ふ言葉がある。此等を見ても、人種の何たるを問はず、原始的信念の內には、水の神性を認めると云ふことが共通に存在して居るやうである。

ペルシヤ人も亦、古くより水は清淨なものであり、神聖なものであると云ふことを深く信じて居るやうである。而して彼等が殘して居る歴史上の古い記錄、宗敎上の經典等に誌して居る處を見ると、彼等も水の神性を認めて居たことをも明かに知ることが出來る。今日彼等は昔と全く異なる種類の宗敎の信奉を强制されて居て、しかも尙その新宗敎に水に對する彼等傳來の信念を害ふ何物をも存在せざるのみならず、幾分か共通なる點さへ認め得るやうになつたことは、新宗敎の侵略的布敎に一大得策であつたことは云ふまでもないのである。

さてペルシヤ族の歴史あつて以來彼等が歸依して居た最も古い宗敎はそも何んであるか?「拜火敎」と誤稱されたゾロアスタ敎がそれである。このゾロアスタ敎は、たとへ他の總ての宗敎に於けるが如き隆盛、衰微の時代を繰返したとは云へ、西紀前第八世紀頃(第十世紀以前より數ふる學者もある)より、西紀第七世紀、アラビアより侵入したムハムマッド敎の信仰を强制せらるゝまで、拾數世紀間、ペルシヤの人心を收攬して居たのである。そのゾロアスタ敎は水に就いて如何なることを敎へて居るか。

先づその經典「アヴェスタ」を繙いて見ると、その內の到る處に水はアウラ=マツダ(ゾロアスタ敎の主神)が造つたものであつて、決して汚がさるべきものでないことが誌されて居る。更に詳しく調べて見ると、少くとも二つの顯著なる獨立した「水の神」の存在に就き誌して居ることを知ることが出來る。一はアパーム=ナパートと呼ぶ男神であり、他はアルドゥヰ=スーラ=アナーヒタと稱する女神である。

このアパーム=ナパートは「水の裔」と云ふ意味であるが、風の助に依り物質界の要所〱に水を分配した神であつた。彼は又駿馬の如く迅速であつて、丈高く、光輝ある神で、多くの女性から主として崇められたことなど經典アヴェスタに傳へられて居る。然しこのアパーム=ナパートはペルシヤ族が未だ印度族と分離しない太古から此等兩族の間に崇拜された水の神であつたことが、印度族が古くより傳へて居る吠陀文學に彼に就て誌して居る處を見ても明かである。而してこのアパーム=ナパートと云ふ水の神は、ゾロアスタ敎の他の諸神と關係極めて薄弱であり、主神アウラ=マツダと殆ど何等の關係もないことより推しても、彼は兩種族分離以前よりの遺物であつて、ゾロアスタ敎以外のものであることが明かである。而してこの男神は、既に述べたやうに、多くの女性より主として崇められたと傳へて居るに係らず、次に述

ぺんとする女神アルドゥヰ＝スーラ＝アナーヒタと何んの關係もない。唯一度アジ ダ ヅダーと稱するもの、かつてこの女神に犧牲を捧げやうとした時、このアパーム＝ナパートが取次の役を勤めたと云ふことのみが誌されてある。これを見ても、アパーム＝ナパートは古くより知られて居た水の神ではあつたが、少くともペルシャ族の間には女神アルドゥヰ＝スーラ＝アナーヒタが高位の神であつて、後ます〳〵顯著になつたと云ふ事が明白である。

この女神アルドゥヰ＝スーラ＝アナーヒタは、經典アヴェスタ中に、單にアナーヒタと呼ばれ、又はアルドゥヰと稱せられ、少くとも五樣に誌されて居て、アウラ＝マツダの造りし「汚れざる井戶」であり、「源泉」であり、「水の源」であると誌されて居る。遲くとも西紀前第五世紀の頃には、この女神は、主神アウラ＝マツダと同位に崇拜される程顯著になつたことも、當時アカメニアン朝の王アータザークシーズが銘刻して今日に傳へて居る楔形文字碑文に依り明かである。卽ちハマダーン附近に發見された碑文の一つに、

「……（前略）……アウラ＝マツダ、アナーヒタ、ミトラの恩惠に依り我等この宮殿を造れり。願くばアウラ＝マツダ、アナーヒタ、ミトラ我等の王領を護り給へ。我等の事蹟を守り給へ」

と刻んである。斯樣にしてアナーヒタ崇拜はペルシャ內地に於て誇張された許でなく、一時西亞細亞諸國を風靡した形跡もあるのである。卽ち歐洲各地にミトラの浮刻として傳へられて居る有名な彫刻と共に、經典に誌されてあるアナーヒタに酷似する石造又は金屬製の像も彼地此地に知られて居るのである。

この女神の人格化せる形像に就いては、經典は次の樣に述べて居る。彼女は處女のやうに肉體美しく、肉逞しき白き腕をもち、最も强く、丈高く、腰に堅く帶を締めて胸の形をよく整ひ、踝まで深き靴を穿いて居る。純潔にして榮ある種族に生れたものゝやうに、黃金を以て豐かに縫箔してある上衣で彼女の美體を被ひ、常儀に習ひ聖枝を手に持ち、耳には四角な黃金の耳環を着け、美しい頸のまはりには黃金の頸飾をかけ、頭上には星のやうに輝く多くの寶石を鏤ばんである八つの黃金の支柱よりなる冠を戴いて居る。更に彼女の使用する毛皮につき經典が述べて居る處によると、四匹の子を生んだ三十四の海狸の皮から製つたもので、水中に棲んで居る海狸の毛皮は總ての毛皮の中で最も奇麗なものであつて、正しき季節に精製したものは、白銀黃金の光澤を持つて居ると

信じて居たものと見える。

彼女の權能に就いて、主神アウラ＝マヅダは次のやうに述べて居る。アナーヒタはマヅダの泉であつて世の隅々にも達し、健康を與る女神である。總ての惡魔を憎み、主神マヅダの律に遵ふ女神である。彼女は物質界に於て供物を捧げられ、又祈禱を捧げらるゝに適はしい女神であつて、長壽を與へ、家畜を增し、羊を殖し、富を增進し、國を富ましむる女神である。又總ての男性の種を淸め、總ての女性の胎內を淸めて生產に適せしめ、總ての女性に安產を與へ、總ての女性に適量にして純質の乳を與へる女神であるのである。

更に、アナーヒタは全世界に流れる河の水流であることを述べて、「大地に流るゝ總ての水を集めて尙餘ある名にし負ふ大河は、フカイリヤの山頂より流れて、ヴオウル＝カシヤの海に注ぐ。その偉大なる海も一たびこの女神降り來る時、その岸邊は激し、又總ての海面に激浪起る」位偉力ある女神であることを說いて居る。而して彼女は、駿馬に乘り四十日間馳せて漸く遂し得る位な廣さを有する一千の洞窟と一千の運河とを所有して居る。卽ち多くの大なる支流を持つて居る大河の流であつて、その河域には、百の窓と千の柱とを以て一萬の廻廊を有する礎固き宮殿であり、彼女はそれ等の宮殿にある芳香馥る狀に、心地良き枕を置いて休ふのである。斯く主神アウラ＝マヅダは心を盡してこの河を地上にもたらし、家を富ましめ、村を富ましめ、町を富ましめ、國を富ましめて、彼等を守護し彼等を保護して共に住ましめるのであると敎へて居る。

彼女が天界にある時は、地球を隔てた三界――太陽界、月界及び星界――の中にて、最も近き星界に常の座を置いた。而して大地に水を分與する時は、同種の眞白な四匹の馬に引かれた馬車に乘り、自ら手綱を採つて種々なる惡魔を踏みつけながら彼方此方をかけ廻はるのであつた。斯樣にして水は七界全土に及び、夏冬を通して分與されたのであつた。これ等の純白な四匹の馬と云ふのは、アウラ＝マヅダが彼女の爲めに造つた風、雨、雲、霙を意味して居ることも、經典に誌されてある處に依り明かである。卽ち彼女は大地に雨を降らせ、雪を降らせ、霰を降らせ、霙を降らせて、アウラ＝マヅダの造つた聖なる萬物の保護を委託されたのであつた。故に彼女の光輝と光榮とに依り萬物が地上に生存することが出來るのであると敎へて居る。

總ての崇拜者がこの神格化したアナーヒタに捧げた犧牲は一定して居て、何時も「一百の牡馬、一千の牡牛と一萬の小

羊」とであつた。希臘の旅行家ストラボーの傳へて居る處によると、犧牲に捧げられた獸は、川邊又は湖邊に伴はれ、附近に造られた溝に於て刺されてその肉を桃金孃又は月桂樹の枝の上に載せ、蜜と乳とを混合した油を注ぎ、聖歌を稱へつつ捧げるのである。勿論斯る場合に一滴の血液をも水中に滴らぬ樣非常なる注意を拂ひ水を汚がさぬやうにするのである。

又彼女に捧げる灌禮に就いても嚴重な律が定められてある。即ち灌禮は常に日の出より日沒までに捧ぐべきものであつて、日沒後の灌禮は總て惡魔のものに屬するのである。而して灌禮に用ふる飲料は總て正しきもののみこれを飲むことが出來、熱病のもの、虛言者、臆病者、疾妬心あるもの、婦女子、聖歌を唱へざる不信者、遮斷さるべき癩病患者、駝背者、腹の張出したもの等は飲むことが出來ないと禁じて居る。更に、盲目者、聾、不義なるもの、破壞心の所有者、吝嗇なるもの等は皆惡魔の奴隷となつたものであるから、彼等の灌禮は嘉納せられないのである。

斯樣にして最高位にあるアウラ＝マヅダさへ惡魔よりは敵視されたに係らず、水の源であり、水の商であり、水の流であり、泉であるアナーヒタには極惡の惡魔に到るまで犧牲をもたらし、祈禱を捧げて彼女の恩惠を希願したので、ペルシヤ族の崇拜した諸神の內で、水の神程多くのものに禮拜され崇拜されたものは外になく、最も神聖な最も偉大な全知全能の主神と崇められたアウラ＝マヅダさへ自ら彼女の前に來る、選んだゾロアスタを此世に送らんとするに當り、彼が「マヅダの律に從ひて考へ、マヅダの律に從ひて語り、マヅダの律に從ひて行はんこと」を祈つた位である。

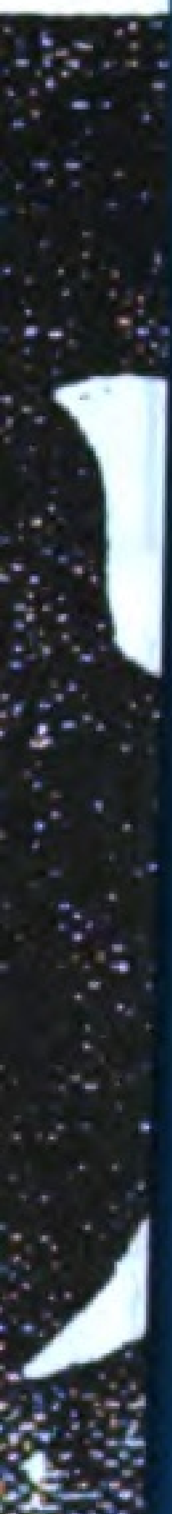
斯樣に水の源を崇め、水の神を禮拜したペルシヤ族は、ムハムマッド教の信奉を强制されてから、更に實利的な信仰に導かれるやうになつたのである。即ち、ムハムマッド教の教典コラーンには到る處に、

「神はその慈惠の豫報として風を送り、次に雨を含める重き雲を死地に送り、それより雨水を降らしめて百果を生ぜしむ、」

又は、

「天より雨水を下せるは神なり、われそれを以て萬物の萌芽を膨らませ、綠のものを生じ、列れる穀物、累々たる果實、葡萄、橄欖、石榴等互に相類似し、又相類似せざる幾多の物を生ず。その實の結ぶを見よ、その熟するを見よ、實に信ずる民に對する表徵は此處にあり。」

又は



災誌

△災害と思潮・流言蜚語と殺傷……長谷川如是閑
△鮮人問題及社會主義者問題……法學博士 吉野作造
△自警團の發生と其殺傷事件・大杉事件……內田魯庵
△災害の心理的考察……文學博士 桑田芳藏
△社會現象雜記……杉村楚人冠・千葉龜雄
△震火災と文藝上の影響……片上伸

遭難手記

德富蘇峰　谷崎潤一郎　宇野浩二　與謝野晶子　山本有三　德田秋聲　久米正雄
芥川龍之介　里見弴　島崎藤村　藤森成吉　有島生馬　室生犀星　正宗白鳥
外文壇名家二十余家

△演劇及民衆娛樂……中村吉藏、河竹繁俊、權田保之助
△藝術の破壞と復興……片山伸、久米正雄、竹久夢二
△輸入風俗百態
△復興計畫の經過と結果
△震火災の產める詩歌、俳句
△自由畫、漫畫

△災害と私法上の諸問題……法學博士 穗積重遠
△財政金融と當局の處置……國債課長 青木得三
△地方農村の影響……本社調查部

◎體裁　四六倍大判最近型背皮クロース金文字天金函入

◎特價拾五圓也　外に送料市內十二錢、地方四十五錢、滿鮮樺太、南洋、臺灣七十五錢

刊行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社

埃及人ビシヤラ・ナハス著
高瀬毅譯

ツタンカーメンの生涯と時代

定價壹圓六拾錢
送料十五錢
四六判

最新刊

現代文明と比肩すべき或はより以上の文明が紀元數千年前の古代に於て物質的にも精神的にも花を開いたとゝのある埃及の地はスフインクスの如く不思議な國である。四千年の間何人の手にも觸れず眼にも觸れず其儘に古代文明を地下に保存せし王陵の谷の發堀は世界の耳目を聳動せしむるに充分であつた。本書は佛國で高等教育を受けた埃及人ビシヤラナハス氏の著で此の王陵の他に發堀を主題とし埃及古代文明を語りつゝ現代の生活の一端を示してある。讀者をして一讀悠久なる人類歴史の過程に誘導し卷を掩ふ能はざらしめる趣がある。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

「天より雨水を下し、爾曹をして飮ましめ、爾曹の家畜を養ひ、植物を養はしむるは神なり」などと數へてゐるのである。勿論ゾロアスタ敎が說いて居る程神話的な話は餘りに多く誌して居ないけれども、モーゼが十二族の爲め飮料を求めた時「杖を擧げて岩を擊ち、其處より十二の泉」を湧き出さしめたこと、又神は最初水の助力により人を創作つたことなどが誌されてある。

水が物を淸めると云ふ信仰から見ても、ゾロアスタ敎の敎ふる處によると、水は物を淨め得る最後のものであるとして居るが、ムハュマッド敎は水なき處では淸き砂を代用しても良いと說いて居る。如何にも後者の發達した土地を思はしめ、實際的な敎であることを思はしめるのである。勿論ムハュマッド敎の敎會に於ては、泉は祭壇と共になくてはならぬ最も樞要なものと數へられ、泉なき敎會はなく、祈禱に先だち必ず、「先づ手を洗ひ、口中を漱ぎ、次に顏より水をかけて顏の全面を洗ひ、腕と足を洗ふ」順序を數へて居るのである

之等を要するにペルシャ人は太古より拾數世紀の間、水に對し、泉に就き、神秘的な神話的な信仰に導いたゾロアスタ敎に背景づけられ、更に彼等はムハュマッド敎に入りて、水に對して所謂「死地」同樣な土地に住む多くの民を導くに適はしい實利的な崇拜の念を持たしめられるやうになつたのである。

斯くて彼等の多くは科學的說明を與へられても解し得ず、又合理的な說明を試み得る人も數少なく、否彼等の大多數は斯る說明を敢て口にし得ない不可思議な信念に導かれて居るやうである

トーテムの奇習

横山又次郎

(い) トーテムとは何

北アメリカの西部から、南洋諸島、さてはアフリカ洲の土人部落に參りますと、鳥・獸・人などの彫物をした棒や柱が立つてゐますのみか、土地によつては、家屋その物にまで、上記のものが刻み込んであります。一見甚だ奇であります。或は土人が拜む神樣の類かと思へば、さうでもありません。或は裝飾かと思へば、亦さうでもありません。是れぞ卽ちトーテムと稱へまして、或る意味では、吾が定紋のやうなものですが、その實それよりずつと意味の深いものであります。

トーテムの字は、今は西洋人も皆之を用ひてゐますが、本はアメリカの土人の記章といふやうな字から出たものであります。字典には「蠻人が一家一門の標章としてゐる天然物」としてあります。それでこゝには假に印章・記章・紋章・勳章等の字に倣つて、之を閥章と譯しておきます。

(ろ) 閥章の種類と意味

能々取り調べて見ますれば、閥章には三種あります。(一)個人のもの、(二)男性又は女性の何れかに共通のもの、(三)男女を合せた全族に共通のものであります。此の中で、個人のものは一代限りで、その子孫には傳はりませんが、他の二種は、之に傳はるものです。そして此の二種中、全族共通のものが最も大切と見られるものですから、此の種に就て、左に少しく說くことにいたします。

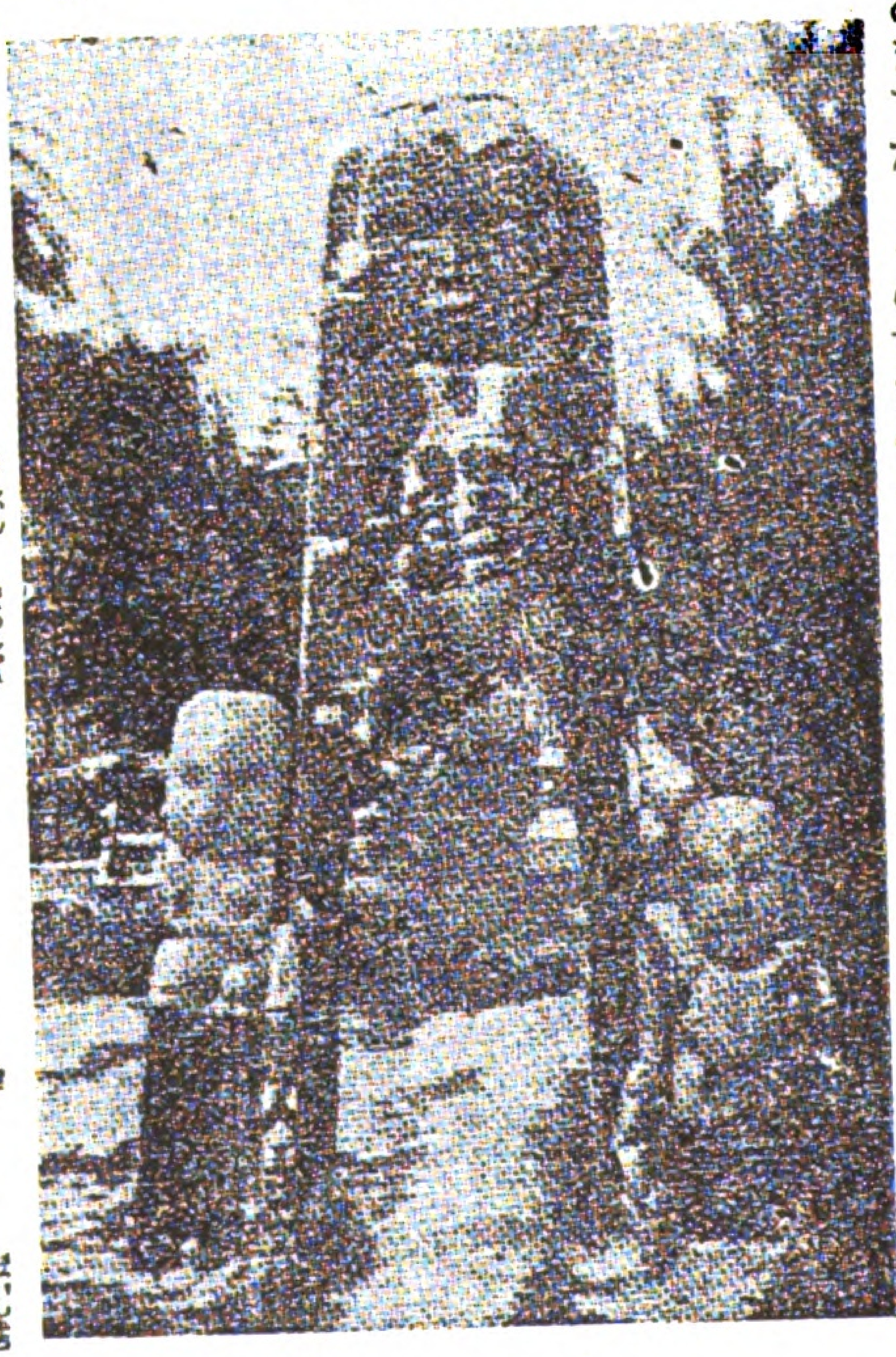
何れの蠻族中でも、同じ閥章を有つてゐる者は、皆同じ先祖から出たものと思はれてゐます。北アメリカの土人のイロ

コイス種族中の龜の閥章を有つてゐる者は、その先祖が龜で、その龜が人間に化したのは、その重い甲から拔け出すことが出來たからと申してゐます。

英領コロンビヤのクヰーン、シヤーロット島のハイダといふ士族は烏をその先祖としてゐますが、その言ひ傳へが面白いのです。乃ちその先祖の烏が或る時濱邊から烏貝を咬へて來て、これと夫婦になつて、一女子を生んだが、その女子が成長しますと、更に之と夫婦になつて、その生んだ子孫が卽ち自分等だと言つてゐます。

（は）閥章の動物は大切

蠻人は以上のやうな考を有つてゐますから、自分の閥章は皆之を大事にします。すなはちその閥章が或る獸であれば、その獸は、出來るだけ之を傷けたり、殺したりいたしません。もし又閥章が草木であれば、その草木は之を食べたり、利用したりしません。



ニュージーランドの閥章標

英領コロンビヤの士族は、決してその閥章の動物を殺しません。もし他人に之を殺すものがあれば、顏を背けて、之を見ないやうにします。そして後から、之を殺した者に、損害の賠償を申し入れます。

或る士族に至りましては、猛獸のやうに、人に害をするものは、よしそれが猛獸であつても、之を殺します。又飢餓に迫れば、猛獸でなくとも、殺します。しかし是れは止むを得ずすることですから、よろしいやうなものゝ、それでも、後で罪滅しの爲に、沐浴・齋戒・祈禱等に依つて、精神身體の淸淨法を行ひます。

印度ベンガルのオラオン族は、クジラル樹をその閥章としてゐます所から、その影に入つて、休息もしなければ、又その果實から取つた油をも食べません。

南アフリカのベチュアナ族は、その閥獸の肉を食べないのみか、又その皮で造つた衣服をも着ません。又鰐閥の者は、

鰐を見ることをさへ忌みます。そしてその故を問へば、眼病にかゝるからと答へます。是れは恐らく鰐を嫌ふ爲ではなく、尊むからでせう。その證據には、彼等は祭りの時には鰐を自分等の親だと稱へて、之を拜みます。

(に) 閥章動物を粗末にする時の罰

閥章を粗末にしたり、之に對して不敬をしたりしますと、必ず罰を蒙るものと見られてゐます。その罰は土地によるし、種々に違ひますが、北アメリカのオマハ族の鹿閥の者は、鹿の肉を食べれば勿論の事、ちよつと鹿に觸れても、その罰を受けて、全身に白斑や黒斑が出たり、厭ふべき吹き出物がしたりすると信じてゐます。

南洋のサモア島の龜閥の者は、龜の肉を食べると、その肉が體内で生きた龜になつて、「此の人は俺を食つた俺はその報に此の人の生命を取る」と鳴き出すと申します。



英領コロンビヤ土人の閥章標

オーストラリヤの土人中にも、病氣と死とは、閥獸を食べた報と見てゐる者もあります。

(ほ) 閥章の鳥獸は守護の神

オーストラリヤ洲ウイクトリヤのクルナイ族は、鳥をその先祖としてゐますが、此の鳥は絶えず自分等を守護してゐると信じてゐます。そして何事でも、之を鳥に問へば、必ずその啼き聲で、之に答へてくれると申してます。

サモア島の木兎閥では、木兎をその守護神として、拜んでゐます。

アフリカのブシリ族中の蛇閥の者は、產があると、赤ん坊を蛇に見せて、その果して正當な自分の子であるや否やを取り極めます。

自分の閥章の鳥獸の保護を享けんとしますには、成るべく之に接觸するのがよいとしてあります。それで北アメリカのミニタリース族の 狼閥の者は、戰爭に出る場合には、必ず

狼皮の衣服を着るか、さうでなければ、その形を身體に畫いて出ます。畫くには、繪具を用ふることもありますれば、又入墨ですることもあります。稀には又以上に代へて、頭髪を獸形に結ぶこともあります。

　現にアイオワ族の水牛閥は常にその髪を二條の辮髪に別けてゐます。是れは水牛の二本の角に似せたものです。

　その他、印形を閥獸の形に作つたり、帽子や武器に之を畫いたり、時には之を柱に刻んで、家の前に建てたりすることまであります。そして極々念を入れる場合には、實物を剝製にして、之を竿のさきに突きさして、家の前に立てゝおきます。

（へ）閥と儀式との關係

　出產、死亡、婚姻等に當つて、何か儀式があります場合には、必ず閥章がそれに纒はつて參ります。例へばオーストラリヤのウヲジヨバロクの族中には、熱風閥といふものがありますが、死骸を埋葬するには、必ずその頭を熱風の吹いてくる方に向けます。又太陽閥では、これを日の出の方卽ち東に向けます。

　ジヤワ島のカラン族には、赤犬閥といふものがありますが、婚姻の際には、その席で、新夫婦の身體に、赤犬の骨を燒いて灰にしたものを摩り附けます。又男女が、丁年に達した時にも、同じやうなことをします。

（と）同閥の者は結婚禁制

　閥章制度の行はれてゐる種族中では、同閥の者の結婚は、堅く之を禁じてあります。もし之を犯せば、その罰は輕くて破門、重ければ死です。

　閥章は必ず入墨その他の方法で、之を身體に畫いておかなければなりません。それで禁を犯した時に、噓をいふことにはゆきません。

　同閥禁婚には偶には除外例もあります。便ち中部オーストラリヤ洲のアルンタ族は、同閥結婚をもいたします。しかしながらその子は兩親の閥章を受けません。然らばどうするかと申しますと、母親が、結婚後、新生活に入つて生計の爲に、最も盛に活動した土地から新章を取ります。例へばその土地が山猫の多い土地なら、山猫を閥章とするやうなわけです。されはアルンタ族中には、血筋の關係もなくして、同閥のものがあります。

　オーストラリヤの土人間には、親近者の結婚は、同閥禁婚

となつてゐる關係上、どうしても出來ないことになつてゐます。何故なれば一族中では、必ず二大閥のどちらにか入らなければならず、又血筋の近いものは、皆閥が同じと決まつてゐるからです。

（ち）同閥者は何故結婚しないか

同閥の結婚を禁じてある理由は、無論あるには違ひありますまいが、どうも門外漢には、之を知ることが困難です。それで學者の說も岐れてまゐす。或る學者は下のやうに申してゐます。「初めの間は、結婚に制限を置く必要もなかつたが、長い年月の間には、血族結婚の弊害が現はれたから、止むを得ず、之を制限することになつた」のだと。然るに他の學者は斯ういふ風にも申します。「初めは無論の事、その後でも、制限は全く措いてなかつたが、しかし家族の多い家庭では、男女では、男女混棲をしてゐれば、つい戀愛關係が生じて、家庭に風波を起さないものでもないから、家父はこれらの事を顧慮して、その男の子を家に置かないことにした。それでその者は他へ行つて、妻を娶るの外なかつた。是れが原因となつて、同閥禁婚の制が現はれた」と。

學說は兎も角として、親近の血族結婚が生む弊害は、長い間には、必ず現はれますから、蠻民も自分等の經驗で、之を禁ずることにしたのかも知れません。さうしますと、吾々文明の者共は、學問や理屈を究めて、初めて之を知り、蠻民は天然自然に、その本能で、之を知つたやうに思はれまして、その間の對照がちよつと面白いものになります。

（り）異閥結婚の奇結果

異閥結婚の結果は、時によりますと、隨分妙な事實となつて現はれます。オーストラリヤでは、夫婦で、その言葉が違ふのがあります。しかも、どちらも、他方のに改めようともいたしません。又同洲のウイクトリヤには、わざ〳〵同一の言葉の者の互に結婚するのを禁じて居るものさへあります。兩親が各自異閥であればその子はどちらの閥を取るかと申しますに、一般に母のを取るのが例となつてゐます。しかし又罕には父のを取ることもあります。此の閥の讓り渡しの規定は、結婚規定のやうに、嚴重ではありません。それで戰爭か、流行病のせいで、父の閥の者が大にその口數を減じてゐる場合には、父はその子をその姉妹の許に養子にやつて、之に父の閥を授けることもあります。

（ぬ） 金錢で妻を買ふ場合

印度のベンガルには、男子がその妻とすべき女子を金で買ひ入れることがあります。此の時には、その間に出來た子は、皆父閥を受けます。

ニウギネア島附近にワトベラといふ小島があります。此の島では、男子が女子を買つて結婚する習慣になつてゐますが、場合によつては買はずにすることもあります。買はない時には、妻は夫の家族ではなく、矢張妻の本家の家族です。そして夫は妻の家族を養ふの義務があります。乃で二人の間に生れた子は、妻を買つた場合には、夫の所有で、買はない場合には、妻の所有であります。此の所有權の何れに在るかによつて、子の閥も決定します。但し子が妻の所有である場合にでも、新に妻に對する代金を拂へば、子は夫のものになります。それで父の閥を授けることも出來ます。

（る） 男子が産蓐に就く奇風

閥章問題で、最も奇習と思はれますのは、生兒が母のものである場合に、父が之を自分のものにしたいといふ考から、クーワードに入ることです。クーワードとは夫が産婦の眞似をして、蓐に就くことです此の時には、家人は之を眞の産婦同樣に取扱ひますが、これが終ると、子は父のもになります。それで閥章を續がせることもできます。

中央アフリカのマサイ族には、上記のものと同一轍と思はれる奇習があります。それは結婚後男子は一個月間女裝をしてゐることです。

佛國のアルサス州に、葡萄祭の際に、男子が女裝し、女子が男裝する奇風があります。是れは太古の未開時代の、前に類した習慣の遺物と見られてゐます。

（を） 閥は血筋より大切

父がその子を同閥にしたいと思ふのは、無理もないことゝ申しても宜しいでせう。一體閥制を重んずる種族では、その土地々々に必ず少なくとも二閥はなければなりません。さもないと、結婚は出來ないことになります。又此の制のある蠻族は、何か爭が起つた場合には、必ず閥によつて合つて、血筋にはよりません。それで戰爭でもおこるときには、子はその父と敵味方にならないものでもありません。一體かやうなことは甚だ望ましくないことですが、しかし閥に最も重きをおく場合には、いたし方がありません。

世界婦人欄

フエミニズムの話

千葉　龜雄

"Feminism and Sex-Extinction,"
Ambella Kenealy.

「性は一つのパラドックスである。結び付くためにそれは分離する」と、ドラモンド教授が言つたのは眞理である。男女兩性が、理法として、必らず二つに分れて居らねばならぬわけは、それは、お互ひがお互同志に一つの刺激劑として働かねばならぬからである。「ところが、始終中、その刺激の中にばかり居ると、つひその緊張がゆるんで了ふ。」近代から現代にかけての男女兩性唯一の女權主義が、將來の文明を危ふくする危機がそこにある。

まづ女性が、あまりに自由に男性の世界へ侵入するとなると、男性の女性化がそこに起る。そしてかゝる兩性のめちやくちやな混合は、男性をして、彼等の性は特質であつたところの、環境の剛健な征服や、道德の清淨さといふものを失はして了ひ、從つて、男らしい行爲とが、男らしい理性とかがつひに求められなくなる。――そして、ことに男性の道德は、女性といふ異性の監視や、存在によつて始めて高く守られることが多いのであるから、その女性の女性らしさを失つたことが、一方は男性の男性的道德をも墮落さして了ふどんづまりになるのだ。わが國（イギリス）の水夫や、兵士や、飛行家が、まだ Men であり得るのは、女性が、まだ、この海軍や、陸軍や、飛行隊にだけには侵入して來ないお蔭である。

○

學校、大學、藝術、政治、經濟、運動のどの畑にでもの、近代女性の大げさな男性界侵入は、疑ひもなく、わが男性の男性らしい纖維素を弱め、また男性的事業の能率を弱めつゝある。一言すれば、それは男性の强さを弱めるので、男性が弱くなるといふことは、進化の代りに退化を置くことになる。またこれを一面から見ると、それは男性が、出來るだけ自分とちがつた性を忌避して、自分達と同じような性格に女性を作り上げやうとする努力であるが、その結果、そうなれば、そうするほど、なほと、彼等自身の特性と刺激を自分から失なう事になるのだから不思議である。

この機能は女性の方面にも同樣に働いて行く。即ち女性が、あまりに多く、あまりに自由に男性とまぢり得る傾向は、おろしく、女性の價値と本質を頹廢して了ふ。

なぜなら、生物學上から見ても、兩性が分れて存在することは、お互ひがお互ひ固有の氣風や道德を持ちつづけ、お互ひの適應によつて、始めてお互ひが生長して行くことを意味するからだ。たとへば今日の兩性は、二人一緒に逢つた場合――も彼し等がひどい道德頽廢者でない限りは――お互ひに、控へ目であり、どこか謹んで居る。そこによいものがある。然るに、どちらかゞ、あまりに我まゝ放題になるといふと、性はその他刺激が、全ゆく新らしい感激を失ひ、異性拘制の力をるめて了ふ、これが此性の異性的のものが、永久に衰弱して了ふ元になる。一面から見ればそれは性が一つの催眠狀態に陷ゐつたことで、かくて兩性が絕えず、催眠狀態の威力の

下にあることは、とり直さず個人の性の破壊である、またその完成の運命的な失敗である。

○

かゝるヂレッタントの精神や、性混合の享樂が、イギリス商業界に入り込んだ腐敗の一例は、女性の商家侵入の一個から起つて來た。たとへば、たゞ若くて、綺麗だといふ理由だけで、何の能率もない娘達が、店員として、或は何として、凡ての商店に、使用され。他方に經驗もあり、充分に働らきもある老婦人達が、みんな追拂はれるなどがそれである。それは疑ひも無く、人をひきつけるやうな若い異性に包圍されて居るのは、男性の顧主達にとつて、愉快でもあり、誇らしいものであらうが、しかし商業的企業にも、成功にもそれは決して好ましい傾向では無い。

○

それよりもなを惡い傾向は、Feminism に對する Femininism の起つて來た事である。フエミニニズムとは何か。一言で言へば、フエミニニズムの女權主義に對する、極端な女性化主義である。女性がとうとうとして男性化する。そこでその女性の一部が、極端に女性化する。こゝに極端な二つの分化がある。フエミニニズムの女性の特質は何であるかとなれば、それは一口に現代の頽廢した階級と呼ばれる性格を持つ女性である。たわいがなくて、なまけ者でたゞ飾物と、ぜい澤と、歡樂だけに心を抛げ込む、そしてその媚びと、美しさと、魅惑だけで男性をひきつけやうとする。ところが女權主義が盛んに叫ばれる近代現代では、この極端な女性化主義者が、ぺらぼうに多く殖えて來る。

しかし之れな不思議でも何でもない、なぜなら、男性が女性化する結果は、女性は自分と似た女權的な女性を撰ばずに、どこまでもいわゆる女性らしきを極端に裝はうとするところの、フエミニニストを撰ばうとするのは當然な話だ。元來兩性が反撥し、異なるものであるために、相牽くといふ自然の理法から見て、これは止むを得ない。

○

かうして考へて來る。たとへこれだけの例證でも、女性の男性化である女權主義の高調は、つまり女性にとつても、また男性にとつても、乃至文明の將來にとつても、怖るべき脅威でこそあれ、決して歡迎すべきものでは無いところがわかるだらう。

○

以上にはイギリスの、アラベラ・ケ子エリイ嬢が近著女權主義と性的絶滅によつて、熱烈に近代女權主義のばつこに抗議した理論の一部である。それは私が前々號かに紹介した、オリイヴ・シユライ子ル夫人の「女性と勞働」に、正面からぶつかつて行かうとした企圖から出た點からも興味がある。ケ子エリイ嬢は、ダブリン大學の出身であるが、前號に擧げた、イタリイのジイイナ・ロンブロゾオ夫人の、「The Soul of Woman」と同じやうに、三夫人とともに、生物學、醫學、社會學その他の立ち場から、議論を進めて行つたところに、それぞれの確實さがある。たとへ、個個としての議論の内容には、それぞれ違つたものがあるにしても、そして、シユヌイ子夫人が、どこまでも、女性が性の差別を別として、凡ての機能において、兩性は、同じ地點に發達する可能性があるとして樂觀するのに對し、ジイナ夫人と、ケ子エリイ嬢は、人類完成の目的は、肉體にも また精神的にも、兩性がそのちかつた機能を、完全に發達させる一點にあるを强調する。ことにケ子エリイ嬢

はどこまでも、女性を種族直接の保護者であり、生育者であるとし、男性を、その保護者を更に保護するための、間接の保護者として、缺け得ない重要な役目を持つものだと主張する。然るに女權主義は、その二つの差別を撤廢することによつて、性と母性の双對性を退化せしめ、その結果、性の絶對的絶滅を呼び來すに終るものだと結論するものである。全篇を、「人類進化における婦人の割り前」と「人類頽廢における婦人の割り前」と二つにわけて居るが、少くとも極端女性主義の點出などは、一考すべき價値がある。女權論是非ばかり紹介するやうだが、三著とも、婦人としての有力な著述である上からも、日本の女性にとつて何等かの對照を與へないとは云へぬであらう。

印度婦人の獨立運動

アール・ピー・ボーズ

現在世界的に重大なる政治的試みが印度に於いて行はれつゝある。即ち世界人類五分の一が奪はれたる生得權を取戻さんがために全力を注いで奮發しつゝあるのである。表面より見れば獨立運動に參加して居る者は男子のみであるかの如く見えるが實際に於いては女子も印度の政治運動によほどの貢献をして居るのである。印度のナイチンゲールと稱せられて居る有名な詩人ソロヂニ、ナイドウ女史、先頃來朝せられたるタゴール翁の令姪ソロラパラ、デビ女史、ガンヂイ夫人、ダス夫人及七十を越したアリー兄弟の母等は今ガンデイの非協同運動にたづさはる女性の重なる者である。ソロヂニ、ナイドウ女史は今南アフリカに赴き無道なる英國の虐待から印度人を救ふために働きつゝある。其他多くの婦人達が印度獨立運動に力を盡して居る。又英國の監獄生活の苦を味ひつゝある婦人もある。

註、此英領アフリカは印度人のみでなく有色人凡てに對して非常なる迫害を加へて居るところで、日本領事館員にさへ家の貸手なく、自動車に乗りたくも止まらないといふやうな狀態にあることは世間周知の事柄である。去る五月のこと英領南アフリカの日本領事が視察のために英領東アフリカのケンヤといふ所へ出發した。到着に先だつて其地に二軒しかないメトロポールとマノールといふ兩ホテルに室の交渉をしたところがどちらからも拒絶された。メトロポールの支配人は豪語して曰く「彼が此處の知事であつても東洋人なら御斷りだ」と。大學に東洋人の入學を許可しない規定を作つたについて「これは當然であつて有色人が白人と同等にならうと思ふのは僭越である」と或政治家が演說したといふ電報が都下の新聞に載つたのはつい最近のことである。又ガンデイが辯護士として印度勞働者のために戰ひ獄裡に數年をおくつたも此頃であつた。

今年の春ゴピナツト、サハといふ印度青年が政治的目的のためにカルカツタの警視總監（英國人）を暗殺しやうとして、誤つて他の英國人を射殺したことがあつた。其のため死刑の宣告を受けた。判決をきいてこの青年は誤つて警視總監の代りに代の人を殺害したのは殘念である。私のあとに印度青年は誤たずに警視總監を殺すことを希望する。今日は私にとつて非常に吉日である。何故ならば私は私の義務を果すことが出來た。又私にこの世の中を始めて見せた私の母は子として私の

義務を果すことが出來たことを喜ぶからである」と云つた。此青年の母は其子の死刑のことをきいて涙を流しながらも「私の子供は國のために死んだので悲しみのうちにも喜びを感じると云つた。

數年前私が印度に於いて革命運動を導いて居た頃私の部下のサニヤルの母に逢つた時次のやうに云はれたことがあつた。「私の長男サルニヤは國のために貴下にあげたのであります。もの必要があればもう三人の子供も印度のために捧げてもよい」と。

印度に於いては所謂女子教育は一向普及して居らぬ。併私のいふところは教育といふものに二つある。一つはか語でいふ Literacy もう一つは Education である。

Literacy の意味は讀み書きである。この點に於いては印度に於ける英國の教育政策の結果として百人女子のうち讀書きの出來るものの數は只二人に過ぎぬ。之を見れば、卽ち Literacy の方面から見れば印度の女子は他國の姉妹より非常に遲れて居るやうに見える。併眞の教育は Education である。

Education の意味は英語でいへば Education is the manifestation of perfection already in human beings である。つまり旣に人間の中にある完全を現はすことが眞個の教育である。此點に於いてはよほど進んで居たので無學であつても國のために或は人類のために人間として犧牲とならなければならないといふことを知つて居るのである。そのために印度婦人等は印度獨立運動に參加して居るのみならず英國より許されて居る範圍内での印度の自治制度、例へば市會などにも干與して居るのである。

印度の立法議會、上院下院、これは名前だけの議會であつて、實權は全く持つて居ないのである。上院議員の多數は官選であり、下院議員の多數は民選である。併下院を通過した法案を總督は否決することが出來、否決した例もたくさんある。下院で否決された法案を印度總督は施行することが出來また施行した例もいくつもある。今婦人は上院及下院の選舉權、被選舉權を持つて居たり。それで下院の印度人議員ダース氏は婦人に男子と同樣な選舉權、被選舉權を與へるやうに法案をこの次の立議會の開會中に提出するといふことを總督に通知した。此決案が通過すれば、又印度總督が之に署名してくれゝば印度の女子は男子と同樣に政治的權利をもつのである。

運動の流行

大橋　房子

オリムピックの勇者
スカンヂナヴィア

「一に運動、二に酒、三に女」
「一にも二にも三にも女」

前者はスカンヂナヴィアの男の好みであり、後者は佛蘭西人のそれを示す。朗かな北歐スカンヂナヴィアの空氣は、人間の心を煩惱の惑溺から救うて、其處に底を洗つたやうな命其物を躍り立たしめた。此處では兩性の間に何らの秘密も拘束もない。彼等は自由にその欲するまゝを語り、行ふ。近代文藝界に婦人問題の烽火を點じたのがスカンヂナヴィアであると同時に、此の半島の婦人等がその問題の實際的解決に於いて諸國の先鞭をつけつゝあるといふ事實も、かうした國民性の背景があるからであらう。

彼等が何物にもまさつて運動を愛すとるい

ふのは、半才の夜から俄かに白夜の春に目覺めた時の反動にも原因してゐるに違ひない。彼らは欲する限り諸種の競戲をはずませ、疲れては裸體のまゝ山邊や砂丘のほりに身を横へる。白日の下に男女混合の群裸を見ることは、過剩な情熱の捕虜となつた佛蘭西人の之堪へることでない。佛蘭西婦人運動の歩み遲々たる所以も此の邊にあるのではないかと思ふ。

そこで目下巴里に開催中の萬國オリムピック大會の記事を讀む。芬蘭土、瑞典等のスカンヂナヴィア半島諸國が優勢なのは怪しむに足りないことになるのである。

巴里の運動

力と力、技倆と技倆との白熱戰――運動競戲ほど男らしく、壯快なものが他に又とあらうか。私は其處に滅びかけた中世騎士道の返り咲を見る。

由來英國人は運動愛好者を以つて聞えてゐる。實際運動は彼等の生活の一部である。ただ謂ふところの紳士道の約束の下にある彼等は運動をさへ常識化する傾向がある。私の觀るところを以つてすれば、民族的に頽廢しかけてゐる佛蘭西人は生來運動家たるに必要な素質を缺いてゐるやうであるが、一つの流行としての運動は、倫敦よりは却つて巴里に榮えつゝあるもののやうに思へる。殊に今回のオリムピック大會が燃え易い巴里人の流行熱を今後は運動に集中させるであらうことは、火を見るよりも明かである。

巴里に於ける運動の流行を系統的に見れば、それは疑ひもなくドーヴァ海峽を越えて英國から渡つて來たものである。それは巴里人が運動に際して用語を全部英語で通すことによつても容易く知られる。歐洲大戰は兩國の關係を太くしたと同時に、從來は少數のものゝ模倣に止つてゐた運動を英兵手づから佛蘭西の土に植付けて行つたといふ意味に於いて、運動の流行を焚付ける役にも立つたといふことが出來るのである。

現在巴里に行はれてゐる一番一般的な運動はゴルフと庭球とであらう。ゴルフは主として三十代の紳士淑女間に、庭球は三十以下の青年男女の間に行はれる。それだけゴルフはいさゝか時勢おくれの觀がある。其他乘馬短艇なども盛んである。運動よりは行樂に近い自動車の遠乘遠來も想像以上に行はれてゐる。

運動服

一つのものゝ流行には必ず瀟洒な外觀が伴ふ。流行であることが社交機關となる巴里に於いては、殊にもその外觀を重視する。運動が實際に於いて盛んな倫敦よりも倫敦ほどでない巴里に於いて却つて流行らしく見えるのは、此の外觀の美が他の如何なる國にも立ちまさつてゐるからであらう。

ゴルフは主としてブルヂョア社會の遊びである上、ゴルフ場が相當の距離ある近郊に在る爲、往復の自動車からして問題になる資格がある。婦人の服裝に就いていへば、競戲の性質上日中長時間炎天に晒されてゐなければならないので、着物は日を彈く毛物類、帽子は比較的鍔の廣いソフトが選ばれる。一番よく見あたる出立は、霜降のセルかラシャのスカートに腰の下までかゝる鳴編のブラウス、或ひは全身編絲のワン、ピース、それに帽子の鍔の前だけ上にそれたのを被つてゐる。裾がいつたいに狹い流行なのに、足を過激に働かせなければならないので、下部だけ日本の着物のやうに重つて切れたのが用ひられる。テニスと白衣とはつきもののやうである。

青年男女は純白の装ひすがすがしく、これも近郊のコートへと車を走らせる。コートへはゴム裏踵無のテニス靴でなければ絶對に入るを許されない。スカートは白いセル地に一面の細い縦襞を通したものなど、運動に便なのと外見が美しいのとでよろこばれる。ブラウスは一般の流行と等しく長さ腰の下に及ぶ。袖は短いものを選ぶ。ゴルフと違つて、テニスの場合には帽子を被らない。日本の女學生は女白虎隊のやうな鉢卷をするやうであるが、巴里の女は同じ鉢卷でも前を擧げて眉の邊まで額を隱し、背後に行くにつれ順次細くして結んだ末を髷の下に捲きこむ。でなければ毛髪と同色の、或ひはよい對色のあらい網で頭を被ふ。此の網は頭の大きさに編んで周圍に護謨を通したもので、銀絲などで手際よく造つたものは劇場や舞踏會などでもよく見かけた。

乘馬の服裝はゴルフのそれと男裝との中間を行くやうなもの。帽子はゴルフの場合と等しく鍔の比較的廣いソフト、服は暗色毛織のスート。輪廓の端正なものが選ばれる。いつたい軍人は何處でも薄給なものと定つてゐる。だから佛蘭西では、皆歐西洲でさうであつたやうに、良家の子弟が一種の俠氣から軍籍に身を置く。社交婦人間の乘馬流行はさうした遊人との接觸から起つてゐたものではないかと思ふ。その上巴里はブア・ド・ブーローニユといふ絶好の遊步場を持つてゐる。社交の夜に疲れた婦人等がきりゝとした乘馬服に身を堅めて早朝の森に踏み入る爽快思ふべしである。

自動車はオブンがよろこばれるところから、遠乘の服裝は風に對抗するものでなければならぬ。袖も胴もゆるやかな外套の衿を合せ、潜水夫でも被りさうな頭巾で髮を包む。道路の完備してゐることも手傳つて、夏期は殊に數日の自動車旅行を試みることがはやつてゐる。

運動の民衆化

以上述べた運動は有產階級の餘技或ひは餘戲的興味の强いものであるが、運動競戲は其性質上多少の生活の餘裕と資力とを要するもののやうに思へる。日本の運動が學校を離れて存在し得ない觀のあるのも、實社會が運動に必要な設備と餘裕とを與へないからであらう。が運動は決して少數有產者の行樂や學校生活の餘戲に止るべきものでない。今後の時代を築き上げるものは運動によつて鍛へられた健康な男子でなければならないとさへ私は思ふ。此の意味に於いて私は運動をその生活の一部としてゐる英國人を、更に何物にもまさつて運動をよろこぶ頑健なズカンヂナヴィア人を、羨みそして怖れずには居られない。

だから富豪よ、愛國の士よ、どうか若い日本の爲運動の一般化に必要な助力を與へて下さい。そして日本選手が芬蘭土や瑞典の勇者を向うに廻して相撲のとれるのは、いつのオリムピツク大會に於いてゞせう。

最近の米國婦人界

市川 房枝

▼黨内で男女平等權を獲得した共和黨の婦人

去る六月十日クリーブランド市で、次期大統領の候補者を選ぶ爲めに催された共和黨の全國大會は、婦人の立場からみて可成意義ある大會でした。

一九一六年の共和黨の全國大會の時には僅かに二人に過ぎなかつた代表者が、一九二〇年の時には三十何人かに增し、更に此度は一躍して四百二十五名といふ數を示して居ります。

一九二〇年の大會の時に否決された黨內に於ての男女の平等權が、此度は通過し、昨年來全國委員會に准會員として列してゐたのが、男子同樣に各州から選擧されることになりました。民主黨の婦人は此の權利を已に一九二〇年に獲たので、今回迄共和黨の方が婦人に對してよくないといはれて來ましたが、これで民主、共和兩黨とも同樣になつた譯です。

ペンシルバニア州から代表者として出席したマルテイン夫人が、大會の委員會の委員長に選ばれた事、カリホルニア州からの代表者ポーター夫人が、現大統領クーリッヂ氏を次期大統領の候補者に指名するに際し、最初に贊成演說をした事等も特筆すべき事でせう。

此の大會に際し、婦人會の或るもの例へば婦人有權者同盟及婦人黨等は各々この事務所を臨時にクリーブランド市に設け、大會で決定される筈の共和黨の政綱中に各々の主張を採入されるやう運動しました。直接のその結果かどうかははつきりしませんが、兎に角有權者聯盟其他の婦人團體が主張してゐるものの中『法律の勵行（主として禁酒法の勵行を指す）』『禁酒勵行官は文官任用令によつて採用する事』『ヘーグの常設裁判所に加入する事』『私刑禁止の法律の制定』『文部省の創設』等は共和黨の政綱の中に揭げられました。然し婦人黨の主張は採用されませんでした。

▼共和黨內に於ける婦人首領の交迭

も一つ共和黨の全國大會で特筆すべき事は、一九二〇年來共和黨全國委員會の常任委員會の副會長として、黨內に於ける婦人を代表し、その牛耳をとつてゐたヘリエット・テイラー・アプトン夫人が辭任した事です。夫人は今秋オハイオ州から合衆國の下院議員候補者として出馬すると發表しました。

アプトン夫人の後任として新に常任委員會副委員長に推されたのは、ケンツタキー州のハート夫人です。夫人は同州の共和黨の首領であつた夫のあとをうけて政治界に這入つた人で、同州に於ける共和黨婦人の首領であると同時に、夫の殘したケリオソーーの會社及大きな農園を經營してゐます。

▼農民勞働黨男女平等を政綱に揭ぐ

ミネソタ州の農民勞働黨大會が、昨年末米國合衆國議會に提案された『男女平等權憲法修正案』に贊成する旨決議した事は、七月の本欄に述べましたが、去る六月十九日セントポール市で開かれたその全國大會は、その政綱の中に『男女に對して政治上經濟上の平等權を要求する』事を揭げ、更に議會に提案されてゐる憲法修正案に贊成する旨の決議を通過しました。尤も通過する迄には多少の波瀾がありましたが、婦人黨の幹部及農民勞働黨の會員で又婦人黨の會員である人達の熱心な努力に依つて遂に成功しました。

この大會で次期大統領の候補者に選ばれたマクドーナルド氏及副大統領に選ばれたバック氏も此の憲法修正のために盡力するであらう事を宣言しました。

▼大統領選擧戰と婦人黨の對策

ペルモント夫人を會長にアリス・ポール女史を副會長にいたゞき、男女平等權憲法修正案通過に全力を注いでゐる婦人黨は『此度の大統領の選擧戰は、婦人が參政權獲得後最初の選擧である。我々は他の國々に於ける婦人の政治的活動―特に可成多數の婦人を議會に送つてゐる等の例にかんがみ、我々が持つてゐる選擧權を最も有效に行使しなければならない。男女平等權獲得運動を促進させるために如何に我々の選擧權を行使するか、それが此度の大會の問題である』といふ主旨で、來る八月一日から三日間ニューヨーク州のメドウ・マウントで選擧會議を開く筈です。

この地は同黨の幹部の一人で、かの婦人參政權獲得運動時代にそのために倒れたミルホランド女史の生れた土地で、會議のプログラムの一つには昔から男女平等權獲得のために働いた人達のペエヂエント（芝居のやうなもの）があげられてゐます。

▼婦人政治運動委員會は進步的政治運動委員會の別働隊

去る三月に新らしく組織され、五月の八日から十一日までワシントンで創立總會を開き、バーチ夫人を委員長にケンデイグ女史を常任幹事にあげた同會は、これも最近組織され七月四日クリーブランドで次期大統領候補者を選擧するために、進步的政治運動の大會を開く事を計劃してゐる進步的政治運動委員會に加入する事を聲明し、さうしてその全國大會に各州から代表者を送る事に決定しました。

▼國際勞働婦人同盟から脫退し新に東洋の勞働婦人と握手しやうとしてゐる米國婦人勞働組合聯盟

六月十二日から二十一日までニューヨークで開かれた米國婦人勞働組合聯盟の第九回隔年總會は、婦人の勞働組合運動に興味を持つてゐる人達にとつて特に興味の多いものでした。

同總會は婦人及兒童の勞働問題を初め其他敎育、平和等に關する幾多の決議案を可決した外、兼てからの懸案であつた國際勞働婦人同盟との關係につき『國際勞働婦人同盟から脫退する、ヨーロッパ洲各國の勞働婦人團體とはそれ〳〵直接に聯絡をとるにとどめ、婦人の間に勞働運動が盛になりつゝある中央アメリカ、南アメリカ、及東洋の勞働婦人の團體と聯合するやうにしやう……』といふ意味の決議を通過し、米國勞働同盟同樣、歐洲の勞働運動から孤立してしまひました。

國際勞働婦人同盟といふのは、一九一九年ワシントンで第一回の國際勞働會議が開かれた折、米國婦人勞働組合聯盟の主唱の下に第一回の會合を開き、昨年八月ヴイエンナ市でその第三回大會を開きました。その第三回の席上アムステルダムに本部を有する國際勞働組合同盟に合併しやうとの議案が提出され、米國の代表者が反對の意志を表明して棄權したに拘らず、その議案は可決され、アムステルダムの方へ交涉することになりました。已に合併されたか否かは詳報の來るまで不明ですが、當然合併されるものと見て差支へはないと思ひます。

▼兒童勞働憲法修正案と婦人の力

米國の上院は去る六月二日兒童勞働憲法修正案を三分の二以上の多數で可決しました。同案は已に去る四月下院を通過してゐるので、これが憲法としての效力を生ずるためには、米國四十八州の內の三十六州が批准すればいゝ事になりました。

此の案の內容は合衆國の議會は十八歲以下の兒童の勞働を制限し、規律し、禁止する事が出來るといふのです。

一九二〇年の調査によると米國には現在十歲から十五歲迄の子供で勞働してゐるものの數が約百萬人以上あり、その勞働狀態は可成ひどいものです。兒童勞働の罪惡を一番痛切に感ずるのは婦人です。したがつて婦人會といふ婦人會は殆どすべてこの兒童勞働の制限のために熱心に運動して來ました。此度の此の修正案はまだ全然成功したとはいへないけれど、兎に角婦人が參政權獲得後議會を通して獲た一つの大きな收穫だといはれてゐます。

▼七千餘名出席した婦人クラブ總同盟の總會

約二百萬人の會員を持つてゐるといはれてゐる婦人クラブ總同盟の隔年總會が、六月二日から十三日までロスアンゼルス市で開かれた事は前號に記しておきましたが、最近着した詳報によると、その大會へ出席した婦人の數は實に七千三百七十二人であつたとの事です。

勿論それ等の人達は米國の隅々から何百哩何千里と集つて來た人達で、中には巴里、上海、ハワイ、キユーバ等から來た人達もありました。

決議の中では男女平等權憲法修正案反對、禁酒法勵行贊成等の外別に特筆する程のものはありませんでした。

過去四年間同會の會長とし令名のあつた、又ワシントン軍備縮少會議の際大統領から婦人委員の一人に任命されたことのある。ウインター夫人はやめ、コロラド州のシエルマン夫人が會長に選ばれました。

▼婦人會近況一束

職業婦人聯盟――七月二十一日から二十六日までインデイアナ州のウエスト・バデンで、その第六回年次總會を開いた筈です。

婦人美術彫刻家協會――最近その年次總會を開き、會長にハツチ女史を再選しました。

デトロイト市婦人クラブ――市內だけに約五千名の會員を持つて居りますが、此度約四十八萬弗で新會館を建築しました。會館には會のための室以外に、圖書室、食堂、寢室、洗濯室等迄備へて居ります。

婦人農園及庭園協會――最近ワシントンでその年次總會を開きました。席上米國農務大臣ワーレス氏が歡迎の辭を述べました。

シカゴ市婦人クラブ――本年一月の朝日新聞紙上で詳しく紹介したことのあるとのグラブでは、此度今迄第一副會長をしてゐたラングウオーシイ夫人を會長に選びました。それは過去十年間に亘つて會長をしてゐたボーエン夫人が、同一の人が長い間續いてするのはいけないと辭退したからでした。

生理學講座

（第十回）

男の體と女の體

永井潛

私は前講に於て、人體美を説いて、人間禮讃の聲を放つた。さりながら、人間の花には男花と女花がある。私は今斯の二つの花を比較して、其の美の特質を描き出さんが爲に、改めて私のペンを動かさなければならない。

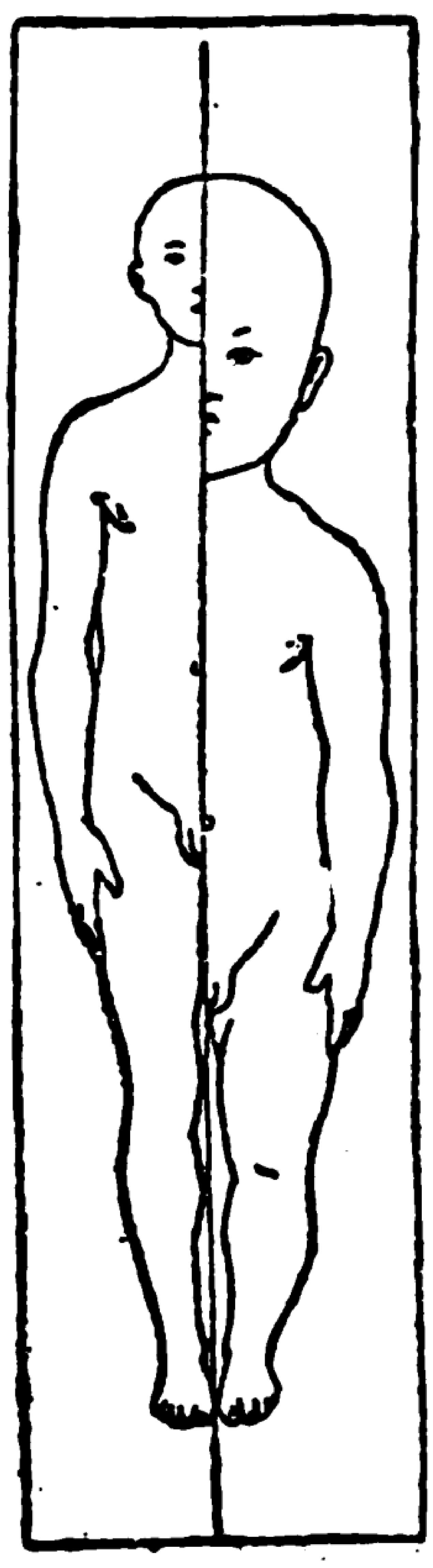
青い男花と、赤い女花、夫れは共に眞白い子供の蕾から咲き出づるものである。私は花を語る前に、先づ蕾に就て述べなければならない。凡そ身體の構造は、機能の要求に應じて決定されるものであり、而して又、一定の構造は、更に一定の機能を完全ならしむるものである。抑人間の人間たる所以は、其の卓越せる智能である。而かも彼れは、生れながらにして優秀なる智能を示すものでない。否な、生れた儘の赤ン坊は、如何にも頼りなきものである。今卵殼を破つて此の世の光を見たばかりの雛でも、自から働いて餌を求めたり、恐ろしき敵から逃れることさへも知つて居るが、生れたばかりの人間の子は、自からの生命を維持すべき能力のないのは、勿論のこと、殆んど見ること聽くことすら出來ない憐れなる狀態である。而かも此の極小は、やがて極大たり得べき運命を有つて居る所の極小である。凡ての動物が、一生、本能に終始して、一歩も其の上に出づる能はざるに反して、極大たるべき素質を稟けつゝも、極小の狀態に於て生れ出でたる人の子は、彼の不斷の努力によつて、歩一歩、極大に登るべき雲階に彼の足跡を印しづける。最も低き土に在る告天子が、彼れの休みなき羽叩きによつて、最も高き蒼穹に凱歌を奏する樣に、高きより更に高きに上ること、是れ即ち人間の尊き一生である。其の意味に於て、人間は、生れながらにして已に大なる頭腦の所有者である。其の腦髓は、たとひ現在に於ては

優秀なる智能を現はさないとしても、將來に於て拔群の才能を示すべき爲に必要なる準備を具備して居る腦髓である。斯くて小兒の頭は、體の割合に頗る大いのである。大人の典型としては頭の長さの七倍半乃至八倍が身長に等しいことは、已に述べた通であるが、之に反して、初生兒では、頭の長さを四倍すれば、身長に等しくなる。而して又た、子供の頭に於て、腦髓を容れて居る頭蓋部と、顏面をなせる顏面部とを比較して見ると、前者は後者よりも著しく大きい。是れ畢竟、子供に於ては、其の腦髓の比較的大なることが、頭蓋部を大ならしめ、咀嚼器官殊に下顎骨の小さいことが、顏面部を小さくする結果に外ならぬ。

次に小兒の身體の特徴として、大人と著しく相違するのは、胴特に腹部が比較的長大なることである。腹部の內容物の主なるものは、言ふ迄もなく、胃・腸・肝臟・膵臟等、消化吸收を行ひ、直接榮養に關與する器官である。卽ち盛んに發育生長すべき小兒に於て、斯等榮養器官が比較的大きいのは、當然のことである。

更に又た小兒の體に於ては、手と脚、就中、脚の比較的に短いことが大に眼に立つ。斯く脚の短いことは、子供の胴をして、身長の大部分を占めしむる原因をなすのである。大人では、脚は身長の半或は時としては半以上の長さを有つて居るのであるが、初生兒では、僅に身長の$3/8$しかない。卽ち生長が行はれる場合、脚が著しく延びるものであることが分かる。抑々手と脚とは運動の主要なる器官である。人間の小兒は、自己の生命を維持すべく、自から勞動せずとも、親によつて安全に養育されてゆくのである。そこで運動器官たる筋骨が薄弱であり、特に手や肺の發達が不十分である。榮養作用が旺盛で、而かも筋骨の發達が少ない結果として、皮下に脂肪が澤山蓄積され、體の輪廓をして稲よかに優さし味

(第 一 圖)



を帶ばしめる。之を要するに、子供を其の儘大きくしたものが大人でもなく、將た大人を其の儘小さくしたものが子供でもない。この兩者には、體の各部の割合に於て、甚しい相違がある。このことは、右の圖に示す樣に、大人と子供とを同一の身長のものとして比較する場合、一目瞭然たらしめることが出來る。

子供の體と大人の體との間に見られたる差別は、或る程度迄、又た男と女との間に見らるゝ差別に於て繰り返へされて居る。先づ第一に、男女の間には、身長に於て著しい相違がある。勿論人種によつて其の絶對の數は同一でないが、兎に角、成年男子の平均の身長が毎に成年女子の夫れを凌駕することは、誰しも知つて居る事實である。獨逸では、成年男子の平均身長が一七二糎であるに對して、成年女子のは一六〇糎であると、フイヤオルト氏は言つて居る。テノン氏は、巴里に於て、一六六糎對一五一糎を擧げ、ケトレー氏は、白耳義に於て、一六九糎對一五八糎であると言つて居る。身長の偉大である北歐の住民に就て、クラウゼ氏は、一七三糎對一六三糎と云ふ成績を得て居る。アルサスの住人に於て、フイツネル氏の確實なる調査によれば、一六六糎對一五五糎になつて居る。即ち歐羅巴人では、男女身長の差は、平均一〇乃至一一糎と見てよいのである。日本に於ける成年男女の身長の平均は伊東氏の測定によれば男子一五八、八糎で女子一四七、〇糎である即ち其の差は矢張一一糎である。男女の間に於ける身長の差別は、早く既に初生兒に於ても見らるゝもので、約五〇糎の身長を有する初生兒の中、男は女よりも約一糎だけ長い。又た體重を見るに、伊東氏の測定によると、日本人の成年男子は五二、八瓩で、女子では四六、一瓩である。白耳義人に於て、ケトレー氏は男六〇—七〇瓩、女五二—五六瓩を擧げて居る。重量も亦幼生兒に於て早く已に差別があるもので、ケトレー氏は、一〇〇瓦の相違を擧げて居る。

併し凡ての年齡期に於て、女子の身長が常に男子の下にあるべきではない。元來思春期は、女子に於て男子よりも稍早く始まるものであるが、思春期に於ては、生殖腺の發達につれて、恰も春至つて木の芽が延びる樣に身體の發育が俄然目覺ましく行はれる。そこで女子の思春期が男子のそれに先き立つて居る年齡期に於ては、身長體重共に女子が男子を凌駕する。斯の年齡期は、人類により、氣候其の他の狀況によりて一樣ではないが、約九歲乃至十四五歲の間である。日本の兒童では、文部省の統計によれば身長は十二歲にして男女殆んど等しくなり、十三歲十四歲の間に於て女子が男子を拔き體重は十三歲十四歲十五歲の間に於て女子の方が却つて男子を凌駕する。其れ以外の年齡期では、男子の方が常に女子の上に位する。而して年々の身長增加率を見るに、其の最高價は男子に於ては一四—一五歲、女子に於ては一二—一三歲で

あり、又た體重増加率の最高期は、男子では一四―一五―一六歳の間であるが女子では一三―一四―一五年の間である。斯くて身長は男子に於ては十九歳にして殆んど完成するが、女子では十八歳にして殆んど終を告げる。又た體重は男子が二十一乃至二十二歳にして成熟を示すに反して、女子は十九歳にして殆んど最大價に達する。卽ち女子の發育は男子よりも早期に終を告げるものである。

何故に男子の身體が女子より大きくなるかに關して、メービウス氏は、一般生物界に於て行はるゝ雌雄淘汰の、優勝者たるべき順應現象に外ならずと說明して居るが、併しそれは必ずしも當つては居ない比較的高等なる物例へば猛鳥の如きものでは、雌の方が常に雄よりも大きい。さうするとハブロックエクス氏の言つて居る樣に、發育の終を告げる時期の早晚と云ふことに其の說明を求めるのが、寧ろ妥當であらうと思はれる。エリス氏の說によると、女子では發育の潮時が俄然として男子に先立つて起つて來るが、又た男子に先立つて早く頓挫して終を告げる。そうして夫れから先きは、あり餘るエネルギーが、專ら身體の建設的方面に振り向けられ縱に延びることの代りに、橫に充實する。さうして過剩の養分が、脂肪の形に於て、主として皮下に蓄積される、斯く女子の新陳代謝が、男子に比して一層建設的方面に傾く事は、生殖を天職とする女性に取つては大切なる資格でなければならない。

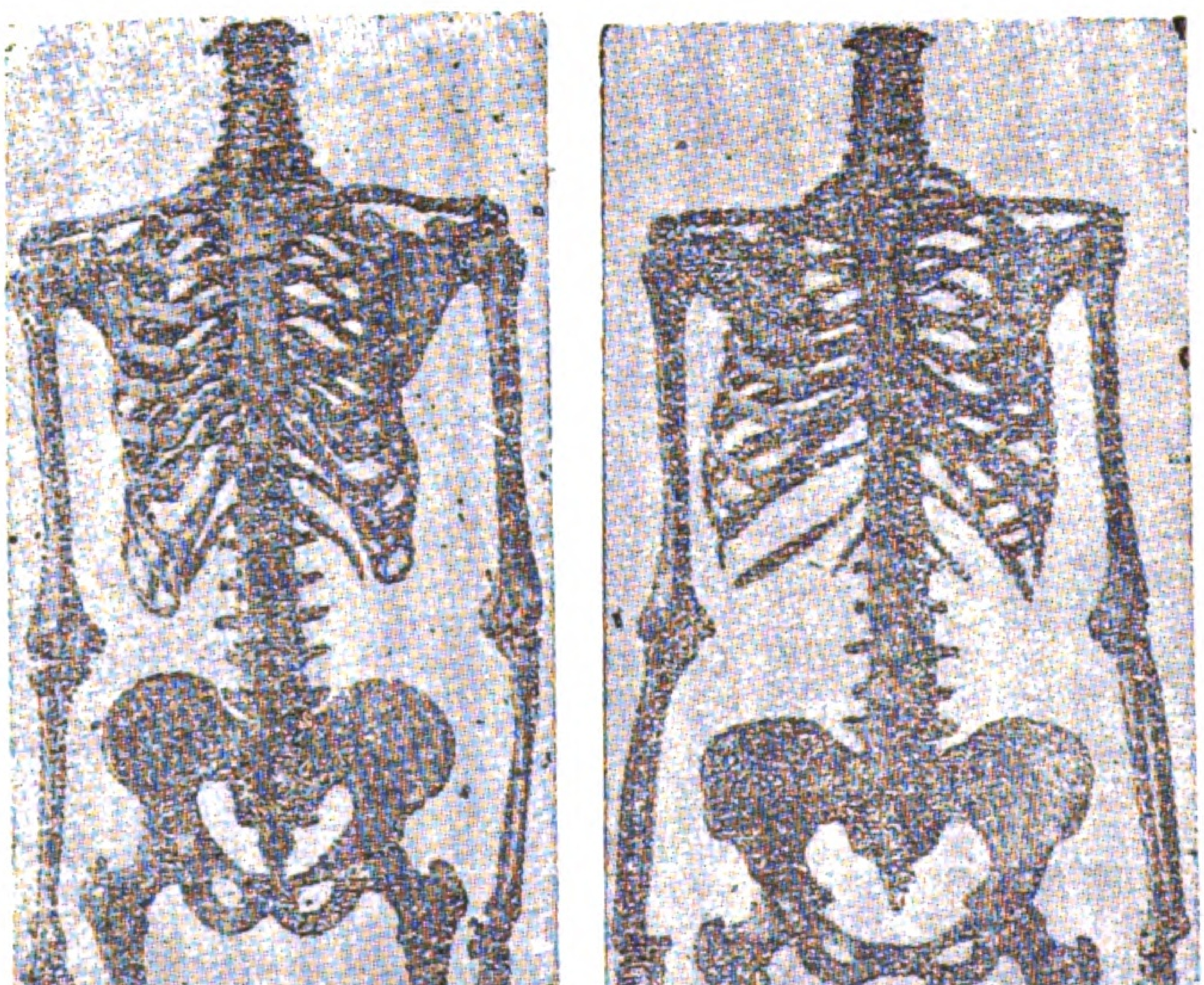
最も大切であるのは、身體各部の割合に關して見らるゝ差別である。全身を上下の兩半に等分すべき水平面は、女子では丁度恥骨縫合の下緣にあるが、男子ではそれよりも尙ほ下方に位する。是れ男子の脚が、女子よりも長い爲である。卽ち女子は男子よりも比較的脚が短く、胴が長い。隨つて女子の坐高は比較的に男子より高い。この關係は夙に知れ亙つて居たことで、且つ是れ迄餘りこの點に重を置き過ぎた感がある。近時フイツネル氏の精密なる測定によると、中等度の身長の婦人の脚は、中等度の身長の男子の脚に比して、平均一・五糎だけ短かく、又た胴の下端は、男子に比して、身長の〇・五%に相當する長さ丈け下位にあると云ふことである、して見ると、身長一五五糎の中等大の婦人で、僅かに〇・八糎丈け、胴の長さが、男子の割合に較べて長くなるに過ぎないのである。

加之、元來身長が延びるのは、主として脚が長くなるのであり、反對に長の低くなるのは、胴の短かい割合よりも、尙ほ一層著しい割合に於て、脚が短かいものであることを考の中に入れて見ると、女子に於て比較的胴が長く脚が短い

と云ふ事實も、之れを或は女子の性徴であると見做すよりも寧ろ女子の身長が、絶對の價に於て、男子よりも小さいといふことから喚び起されたる、當然の結果であるかも知れない。そこでフイツネル氏は、同一身長の多數の男女に就て、脚と胴との割合を比較して見た所が、別に顯著なる差別を見出すことが出來なかつたと云つて居る。フイツネル氏は、この事實から、女子に於て、脚が短かく胴が長いのは、女子の性徴でなく、女子の身長が小なる爲であると言つて居る。併しハルレス氏は　同一身長の男女に於ても、矢張男子の方が比較的長い脚を有つて居るもので、其の差は　身長の〇・八%であると云つて居る。之を要するに、其の原因が何れにあるにせよ、女子は比較的胴が長く、脚の短いのは事實である。併し夫れは、一般に想像せられて居る樣に、さ程著しいものではないのである。尤も胴と脚との比例は、人種によつても、將た個人によつても、差別のあるもので、人種的に云へば、男女を問はず、黄色人種は胴に比して脚が短かく、之れと反對に、黑色人種は　脚の割合が著しく長い。白人は丁度其の中間に位して居るもので、良い釣合が保たれて居ると云はれて居る。

手卽ち上肢の長さに於ては、脚に於けるよりも、より顯著なる差別が、男女の間に認められる。フイツネル氏の非常に多數の男女に就て測定せる成績によると、男子の手の長さ

（第二圖）



と、女子の手の長さとの比例は、前者を一〇〇とする時、後

者は九一、五となる。是れは男女の身長の比例が、一〇〇對九三、六であるに較べて、可なり著しい差別であると言はなければならぬ。若し身長を一〇〇として、手の長の比例を求めると、男子では四六、六％になるが、女子では四五、五％にしかならない。又た男子では、直立し上肢を下垂すると、腕關

(第三圖)



節は、恥骨縫合部上緣の下方に在る樣になるが、(第二圖參照)女子では、丁度其の上緣の高さに腕關節が位する。フイツネル氏によると、男女の間に於ける手の長さの相違は、同一身長の男女を比較する場合、幾分か少なくはなるが、併し夫れでも猶ほ明瞭に之を認めることが出來る。男子に於て斯く手が比較的長いことは、夫れと類人猿(猩々類)との間にある似よりを想像せしめる。猩々類の手は、人間に較べて著しく長いものである。又た指を見るに、男子に於ては、紅刺指(第四指)の方が、人示指(第二指)よりも長いのが通常であるが、女子では普通夫れが反對になつて居る。

次に頭蓋骨に就て觀察すると、男女の間に大切なる相違が認められる。先づ女子の頭が比較的大きいことは、頭蓋骨を測定すればよく分かる。ハルレス氏によれば、男子の頭の高さ(頭の頂上に設けた水平面と、下顎の下緣に設けた水平面との距離)の平均價は、身長の一〇〇〇分の一三四に相當し、又たトピナール氏によれば、一〇〇〇分の一三三に相當する。卽ち頭の高さを七倍半すれば身長に等しくなる。頭の高さの男女の相違に關して、ホフマン氏は、男子の平均價を一〇〇とする時、女子の平均價は九四となつて、絕對的には女子の方が稍小なること、而して身長に割り宛てた價を比較すると、女子の方が稍大きくなつて、其の比は一〇〇對一〇〇・八となると云つて居る。卽ち此の點に於ても亦、手脚の短いこと、胴の長いことゝ共に、女子と小兒との間に似よりのあることを認めなければならない。併しフイツネル氏が、近頃身長の

影響を除外する爲に、同一身長を有する男女を選んで精確に測定比較せる所によると、女子は絶對的にも比較的にも男子よりは小さき頭を有つと云ふ結果になつて居る。さうすると、女子の頭が、男子のよりも比較的大きいのは、畢竟身長が低い爲であると云はなければならない。而して同一身長の者に就いて測定すると、女子の頭と脚とが、男子の夫れよりも小さくなるのは、要するに女子の胴が、男子の胴よりも長いからである。

そこで胴に就いて男女の比較をみて見る。ホフマン氏によると、男子の肩幅は平均三九、一糎であるが、女子のは三五、二糎である。然るに腰の幅(左右腸骨櫛の最遠距離)の平均は、男子の三〇、五糎に對して、女子は三二、四糎である。卽ち男子は肩幅が廣く、女子は腰幅が廣いことが分かる。更に委しく云へば、胴の下部の最も幅員の大なる部位は、兩側の腸骨櫛間でなく夫れよりも下部で、大腿の上端(左右の大轉子間)に位して居る。そして其の部の幅は、女子に於ては往々にして肩幅を凌駕するものである。而してこのことは、後に述ぶる樣に、女子の體姿をして甚しく安定ならしめ、靜的美を發揮せしむる重要なる原因をなすものである。

さて人體の構造を考ふるに、骨格によつて其の基本が與へられ、之れに肉と脂肪とを着け、皮を被らせて出來て居る。今此等の物に就いて、男女の比較を試みて見たい。女子の骨格は、男子に比すれば一般に細かく、小さく、優しく出來て居る。骨格の表面には、筋肉の附着すべき爲に疎なる面や鋭い角や著しい突隆があるものであるが、夫れらは男子の骨格に於ては十分に顯はれて居るが、女子の骨格では、夫れが一般に不明瞭であつて、表面は平滑であり、花車である。此のことは、直ちに女子の筋肉の發達が、男子に劣つて居ることを示すものである。蓋し筋肉がよく發達して、夫れが爲收縮する際、力強い牽引を骨格の附着部に行ふと、斯の機械的刺戟の爲に、筋の附帶部に於ける疎面や隆起等が、益々著しくなる。男子の場合が夫れである。乾燥した骨格の重さを比較すると、男子の平均が四二六四瓦であるに對して、女子のは二九一八瓦であり(ダフナー氏)生の骨格を比較すると、九八一四瓦對五八六六瓦である(ダルシー氏)のを見ても、如何に骨格の發達が男女によつて甚しく相違するかゞ窺ひ知れる。

次に筋肉と脂肪とに關して比較して見ると、前者が男子に於て佳良なる發達をするに反して、後者は女子に於て遙に餘

計にある。ビシヨフ氏が略同一體重を有する二十五歳の男子と、二十二歳の女子とに就て測定した所によると、男子は體重五五、七五瓩であり、筋肉二三、〇六瓩、脂肪六、一六瓩であつたが、女子は體重五五、四〇瓩であり、筋肉一九、八五瓩、脂肪一五、六七瓩であつた。そこで筋肉は男子では、體重の四一、三%を占むるに反して、女子では、三五、八%しかない。之れと反對に、脂肪は、男子では、體重の僅かに一一%しかないのに、女子では三五、六%に達して居る。ハブロック、エリス氏の擧げて居る價も、之に類して居て、男子（三十三歳）では筋肉が體重の四一、八%脂肪が一八、二%をなすに反して、女子（二十三歳）では、筋肉が三五、八%、脂肪が二八、二%をなして居る。

斯く男子の筋肉は、量的に女子の夫れに勝つて居るのみならず、又た質的にも優れて居る。卽ち女子の筋組織は、男子の夫れよりも水分が多い。フイヤオルト氏によると、女子の筋肉の水分は、七四・四%であるが、男子のは七二・五%しかない。

脂肪は專ら皮下に存在するもので、随つて女子にあつては、細き骨格と、弱き筋肉とは、全く脂肪の爲に被覆され、表面には現はれない．此のことが、女子の體の輪廓をして、如何にも纖細優美ならしめ、所謂曲線美を呈せしめる。女子に於ては、多量の脂肪が、特に乳房と臀部とに蓄積する。是れ亦た、女性の形體美に大切なる意義を有つものである。

次に全身の表面を爲せる皮膚に就て見ると、女子の皮膚は、薄く如何にも木目細やかに、如何にも嫋やかである。此の纖細非薄なる皮膚を透して、女子では、男子よりも、皮下毛細管の血色がよりよく透き通つて見える。又た皮膚の色素が、女子では一般に男子よりも少ない　然るに毛髮と虹彩とに於ては、女子の方が餘計に色素を有つて居る。是れは女性の色彩美の發揮に、密接の關係を有つ。

皮膚の附屬物である羽毛や爪角が、動物に於て第二次性徵として重要なる意義を有つと同樣に、人間に於ても、毛髮が、男女によつて著しく趣を異にする。女子に於ては、一般に男子よりも毛髮が少ない　殊に髭髯・腋下・胸部・前膊下腿の伸側等、男子では毛髮が生へる場所でも、婦人では甚だ少ない．但し頭部丈けは例外で、婦人の毛髮は、此部に於ては遙に男子を凌駕する。男子の頭髮の毛は、之を刈らないで置ても、到底婦人の如く長くは延びない．恰も婦人では、毛髮の發生の力が悉く頭部に集中されたかの如き感がある。

陰毛も亦、男女に於て趣を異にするもので、男子では其の生へる領域が菱形をなして、腹部に上つて居るが、女子では底部を上にせる三角形をなして居る。

日の下に新しきものなし

—震災後一年間の回顧—

賀川豊彦

一年後の今日になつて去年のことを思ひ出すと、市民の緊張味は段々薄れ行き、大阪の如きは、反動的に非常に不眞面目な現狀を示すやうになつた。

眞面目な人が無いわけでもあるまい。然し目につくのは洲崎と吉原の復活の早やかつたことと、向島玉の井の私娼窟の大繁昌である。

日本人の弱點はあまりによくこの度の震災によつて暴露した。その救濟事業に、その復興計劃に、その精神的反撥に、日本人は存外無能だと云ふことを、つくづく思ふた。

日本はまだまだ苦しまねばならぬ。日本はまだほんとに困つては居らない。まだまだ獨逸人よりも贅澤だし、まだまだ節約すべきものを持つてゐる。

今の日本人は東洋人でも無く、西洋人でもない。あいの子の墮ちきりんである。私は日本にあまり多く成金主義の惡習の浸み込んでゐるのを見て驚いてゐる。

町の角の酒屋は復興したものの最も早いものの一つであつた。淺草は本所よりも早く復活した。遊び場所の方が、勞作場より早く復活するところが如何にも日本人らしい。

復興の脈搏は妙なもので、細胞が分裂するようなものである。家の殘つてゐる近くから立つて行く。神田、淺草、芝はその例である。銀座は日本橋より遲れた。深川は本所よりも遲れた。

本所に十月の初旬から關係を保ち、十月十九日にテントを

張つて住んだ時には、まだ被服廠と私の住ひとの間には一軒の家も建つてゐなかつた。それで夕べの祈禱の太鼓が眞直に聞こえた。それが、私のバラックが立つと、近所に家が立ち出した。

十二月になつて、バタ／＼家が立て詰つた。然し、一月元日に旗の出て居る家は實に稀れであつた。それが皇太子の御成婚式にはみな旗をかゝげた。復興はそれだけ早く進行した。殊に七月十九日の兩國の川開きに、私は人出の多いのを見て東京は完全に復活したと思つた。十一月の初め本所の業平橋から、美しい富士を見た私達はもう今日では富士を見ることが出來なくなつた。それほど本所は復活したのである。

私は毎晩宗教講演に急しく驅け廻つた。そして、五千人の同志を得た。私はそれらの人々が復興の爲めに相當に働いたであらうと想像してゐる。然し彼等は組織を缺いた。私は眞面目な靈の動くのを見ないわけでもなかつた。然し、道德的創造の新しい運動を震災によつて見出すことは出來なかつた。

震災の恐怖にかけられて、府下大島町では、四日間も打續けて燒かねばならぬほどの多くの××××××××××××××××　それを贖なふだけの宗教的、道德的覺醒は民衆に來なかつた。

日本は外國電報で動く國民で、地震も、火事も、不景氣も、國民を呼び醒す手段とはならないらしい。

東京は復舊した——善にも惡にも。東京は復舊した、たゞ二階建がバラックに建代つただけで。

東京は復舊した——外國からの借金で。然し精神的復興は遂にそこに希待することが出來なかつた。

東京は仕事のしやすいところだ。殊に本所の人間には善い人が多い。私は永年の貧民生活から本所の勞働者街に住んでみて、氣のさくいわかりの早い江戸兒に非常な親しみと、尊敬を持つようになつた。

本所の人々は地震によつて、非常な打撃を受けた。そして、多くの人はその爲めに奮起した。私は此處で三百數十名の同志と宗教的に心易くなつたが、それらの人々は皆地震を宗教的に受取つてゐる。

本所は私に取つて住み心地の善いところとなつた。そこに私は一生の友人を多く與へられた。その多くは地震前から本

仕生活を思ふてゐて、地震によつて感奮した人々である。

私は本所の人々を見て居るなら東京は頗る強くなつたと考へさせられる。然し、恐らくは、本所を標準として、東京を測定することは間違つてゐよう。

たゞ頼もしく思ふのは學生である。學生は地震の爲めに頗る眞面目になつた。然し學生等の胸に秘められたその眞面目が露出するのは十年後である。私は地震の影響を十年後に希待しよう。

堅實なのは矢張り勤勞階級である。彼等は東京、横濱復興の中心人物である　彼等の眞面目な態度を随所で聞く。

然し東京は兎に角、復活した。その貧民窟までをも完全に復活せしめた。

然し貧民窟の救濟は一人の仕事では無い。一代の仕事では無い。合衆の力と、數代の忍耐を必要とする。

東京の物的復興は存外早かつた。屢々火事に經驗を持つ東京人は存外火事に平氣である。應急的な救濟は完了した。曲りなりにも震災救護事業は完了した。

たゞ不幸なことには、防暑設備の充分出來なかつたことであつた。その爲め、バラックは今大に難んでゐる。私のバラックだけでも四人寢てゐる。近くの帝大セツトルメントにも二人寢てゐる。賛育會施療院にも溢れてゐるものがある。うちの診療所を通じて觀察するとバラックに病人の無い宅は珍らしいように見える。トタン屋根の下は百度を越える。私は官憲に今年の二月に防暑設備をするようにと忠告したが、當局者はそのことを笑つた。そして、もう既に五萬五千人の傳染病患者が東京市内だけに出た。今年中には昨年の二倍の傳染病が出ることであらう。

然し、國民は、もう救濟に疲れて了つてゐる。忍耐の無い國民は眞の救濟が此處一、二年間引續き行はるべきを意識して居らぬらしい。そこに日本人の弱點がある。地震による緊張の反動は、五月末から六月五日までの大阪と神戸との祝典踊りに現れた。彼等はまだ、東京では七萬人が公設バラックに、十萬人が私の燒トタンとそれに類似の不良住宅に露命を繋いでゐることを忘れて踊つた。踊り狂ふて壹萬二千人からの警察事故を出した。

一體に震災地は緊張してゐるが、關西は上調子である。私は出來るだけ早く震災地を切りあげてだれ氣味の關西を呼び醒ましたいと思ふてゐる。

映寫幕

―震災以後の東京情調―

河井醉茗

睡眠の足りない眼で何を物色する？
私の洋傘か、風呂敷包みか、二十年前の眼鏡か。
お前と私との間に言葉はなからう。
お湯にでも行つておいで、そして二階の隅で晝寢でもするのだ。
表には「女給さん入用」の札が貼つてある。
來るべき體が自由であるやうに、お前も自由だ、
夜に疲れる體は晝に休むことだ、空いてゐる椅子のやうに

晝食

晝食にはハムとサラダとパンと
コーヒーさへあればいゝ、
コップも、蓄音器もいらない。
フオークとナイフを紙ナフキンで拭いてくれるウエートレス、
マッチをすつてくれる、そのあとの手持無沙汰。

——。

波の戯れ

發車毎に人間の波がきれいに浚はれ、
またあとへ人間の波がよせてくる。
波の中にいつでも一人か二人は居る人魚のやうな女！
たゞよふ羅衣、乳のふくらみ
尾鰭を振つて泳ぐ。
藍と金との水たま。
人間の中をわがものがほにおしわけ、おしわけ、
「私は王女よ」と歌つてゐる。
捕へたいが上手に逃げさうだナと、若い男たちが見てゐる。
ほんたうだ！
彼女は巧みに逃げ廻りたいのだ、人間の波の間を人間に觸れたり、逐はれたりして——。

勝利

「さあ、もう乘れませんよ」と歌のやうに云ふ車掌。
乘れないと云つても平氣で五六人押合つて乘る。
また一人、片足かけてぶらさがる。
怪我でも何でも勝手にするがいゝと車掌は知らん顏。
急行の札がパタリとさがる。
機械は盲目的に走つて行かうとも、
人間には機械より優れた業があるぞ——と、
勝利を得たやうなふりで急行電車にぶら下がつて行く人！

階段

無數の人が停車場の階段を昇つて行く
歩調を揃えて無限に昇つてゆく鐵橋の階段。
立ちどまると恐ろしくなる。
併し階段に足をかけた以上は、立ちどまつてはゐられ

い、ただ昇つてゆくのだ。
人と人とが密接し、一人を容れる隙間もなく
入り雜り、織り雜り、
個個の人間ではなく、人といふ大き生な物の旋渦が昇つてゆく階段。
離れてゐてもつながれてゐる、つながれてゐても離れてゐる。
無限につゞいた一つの生物！

朝の十時すぎ

まだ朝の十時すぎ。
土間に撒いた水も乾いてゐない。
入口をふさいでゐる鉢植の棕櫚。
急ぎ足で入つてきた大きな靴の主は中學生、帽子も脫がず、カルピスを呑む、
默つて、金を置いて
本包みを大事さうに抱えながら出て行く。
入れちがひに自轉車を表に置いて、小僧さんが入つてくる。
「アイスクリーム」とおちついた口調。
おかはりを誂へるでもなく、
ゆつくりと帶革を締めなほしてゐる。
また一人、脊廣のありふれた男。
そのあとへ顏のきれいな若夫人、呉服屋の買物の歸りでもあるらしい、
ケーキと、冷しコーヒーを前に置いてホツと一息つく。
その隣りへ腰かけたのは勞働者、印袢纏にはだし足袋、
泥のあとの乾いた——紺やら淺黄やら分らぬよろよろの木綿と、
折目の新しい明石縮の袖とがすれすれになつても
若夫人も氣に掛けない、勞働者も氣に掛けない。
互ひに夏の飮料をおいしさうに飮んでゐる。

まだ朝の十時すぎ。往來にはこれから熱い塵埃が立つだらう。

幻滅

晝間とはいへ、圓右の話を聞いてゐると、
何のかざりもない舞臺に、
江戸の町町が浮び出し、
物うり、あんま、萬歳、こはいろ、八さん、熊さん、
それぞれの身ぶり、ものごし、
表現される何の人間も
現在を生活することより外考へない、ほんたうの人間、
一人の僞善者も居ない世界。
魂を底拔けの無反省にしてくれたが、
圓右の話が濟んで、さびしい晝間の光りに返つたバラック
の名人會——
——會場の外に出ると、
まだ今日の太陽はあかるい。
さはさはと跫音のつづく人通り、
香水の匂ひ、女の匂ひ、男の匂ひ、現代の匂ひ、
けばけばしく、めまぐろしく、
刷り立ての夕刊の匂ひに、江戸情調はあとかたもなく幻滅
した。

牛

トンネルのやうな大鐵管を一つだけで一ぱいの荷車、牛が
三頭、太い綱で曳いて行く
交通巡査の手一つで、からくりの絲が引かれる。
群集も、機械も「進め」「止れ」と自在になる電車交叉點。
あらはれたのは牛!。
「進め」と手をふつても牛はのろのろ、
「止れ」と手をふつても牛はのろのろ、
牛は田圃のまんなかにゐるときと同じやうな優しい眼をし
てゐるのに、

都會の雜音に逆上した牛飼は、何をいらただしく鞭をふるのだらう。

「右」へ行け、「前」へ行け、「左」へ行け、「横」へ行け。とうとう三頭とも線路の上に立ちすくんだ。牛は動かない。

片側は牛で往來止、電車は立往生。

田舍紳士の乘つてゐる自動車を先に、製本屋、木材、石材、引越し、乘合、否の運送、呉服店、看板、砂利、自動車と荷車があとへ、あとへと、つゞいて止る。

その間に人間がはさまる、犬がはさまる、彌治がはさまる。

交通巡査は大手をひろげて牛飼に加勢する。

電車の運轉手はハンドルを持つて降りてくる。

自動車がむやみに警笛を鳴らす。

人の山をきづく、きづいては崩れる。

交通の亂れた都會の一角、

牛は少しばかり動いた。

生き殘つた木

よくも燒けた、これだけの木が。

一本、一本、燒けた立木の骸骨。

枯木の林、それが町のあとだ。

煉瓦の屑、人造石の碎片、あらゆるものが粉碎された燼灰、かなくそ。

その上に立つてゐる木、まつくろな木。

燒けたものは、みんな枯れたかと思つたら、

たつた一本、青い葉をつけてゐる。

焦た木が生き返つたのである。

生命があつたのだ、火炎の渦に捲かれても――

一旦、火の海の底に沈んでも、

小枝も、葉も、みな焦げつくしても、

なほ生きる力があつたのだ。

けれども、誰もそれを大切さうに思つてゐない。

焼灰の中に立つたままで枝には大きな木札が懸つてゐる、
スレートの廣告。

書物を持つてゐる人

賣子らしい若い白粉の女が新作家の小説を、會社員らしい
三十男が節の附いたポケット用の謡曲本を、
新形の丸髷に結つた奥さまが婦人雜誌を、
フランス式の洋服を着た女學生が少女雜誌を、
夕刊賣らしい田舎出の少年がリーダーの一を、
私立大學の先生らしいのが勞働問題を
制服の學生が丸善の包み紙に包んだ書物を、
みんな讀んだり、見たり、持つたりしてゐる。電車の中は
まるで移動圖書館だ。
通りを歩いてみても
ステツキ代りに本を下げてゐる人、
半分袖にかくしてゐる女、
ポケツトから見えてゐる洋装の日本婦人、
凡て歩くにも書物は持つべきもの〻やうになつた。
たとへ装幀がバラツクのやうでも、
人に見えるやうに持つて行く。

はりがね

セメントの粉が舞ひ立つので
避けようとするはづみに足に引掛つたはりがね、
何かの宣傳ビラも引掛つてゐるはりがね、
見ると、まだまだはりがね、
空中にもはりがね、地上にもはりがね、地下にもはりが
ね、
無限につづくはりがね、短く切れたはりがね、
まつすぐなはりがね、曲つたはりがね、
屑のはりがね、燒けたはりがね、
都會は表現派のはりがねだ。

『日本美』に就いて（應募入選）

尊き感情の特異性

吉原公平

一

日本美といふものに就いて想ひ感ずる時、私はいつも小泉八雲先生を想ひ起さずには居られない。日本人こそ却つて、日本美の神秘と尊さを氣づかずに過ぎるのではないかと私は思ふ。先生が我等の母國に對してあの審美を爲し遂げたのは、外國人であつた故とさへ考へられる。『こころ』或は『Glimpse of Japan』などに依つて『あゝ、日本人にもこれ程に美しいものがあつたのか！』と歎聲をあげた人は數へきれない。兎に角それ程日本人が自家の美に無頓着であつたとも言へやう。日本個有美の上に嚴しい觀照の眼が向けられるのは、その人が一旦他國人の生活と心理の美醜を味ひ脫し得た後に多いのは當然のことかも知れない。

二

由來日本人の心理には特異な逆說性が多分にある。そこより日本的の美と興味が薔薇の花とその刺の關係に於て生え顯れて居るのではなからうか。『きもの』の著者にとり鼻持のならない日本人特有の『謎の微笑』が、とりも直さずラフカデイオ・ハーンの心を魅した一つの日本美であつたやうなものである。如何に我等の祖先等がこの『謎の微笑主義』の歸依者であつたかは考證を俟つまでもない。内心に

湧く最大の悲哀――例へば肉親を喪ふやうな悲――の中にあつても、彼等は少くとも他人の面前では涙を見せないのを一般の嗜としてゐた。もしその人が『謎の微笑』を湛へ得たならば、彼または彼女は先づ『氣なげな』といふ讃辭を贈られる、そして聲をあげ涙を放つて訴へたより遙かに深い悲の同情を周圍の人々の心の奧底にそゝつたであらう。つまりかう言ふ風な逆說性が私等の血の中に潜んで絕えずその働をつゞけてゐるに違ない。最も憎い相手に對して最も慇懃を盡す心根や負けて勝つといふ氣持を擧げることは手近い例にすぎまい。

三

もし英國かフランスの著述家の中で『趣味の哲學』といふやうな本を書きあげる人が居るならば、その人はたとひ三頁なりと所謂日本趣味といふものに說き及ぼさなければその種の著書として品格が備らないかも知れない。どれ程までに日本趣味といふものが世界に響いてゐるかはわからない。が、日本趣味の眞の觀賞者は案外に少いのかも知れない。簡楚に心の神秘を盛る日本趣味の本質を解するには、先づ深く靜かに開かれた心の眼の用意が必要である。果してどれ程までに歐米人が日本趣味の姿をその碧い眼の底に映し得るかは疑問である。趣味は心の表れであるから先づ日本人の心持が解らなければ日本趣味も解らないと言ふのは當然である。枯淡、寂、床しさなどの趣味の傾向は日本人の忍從的な（或は武士道的な）道德の信條と脈絡をもつてゐることは言ふまでもない。憤怒を微笑の中に裹み『むき』になることを大人氣なく思ふ心の中に、けば〳〵しさ、あくどさ等を下とする傾、沈などを上とする趣がある。趣味に於て生地の露出を嫌ふ傾は表情に於て露骨な迸りを惡むと一般である。君看雙眼色不語似無愁。衝動的な感情の表白しか出來ない西洋人が歌舞伎の舞臺に『大義親を滅す』と叫んで我子を手打にした『さむらい』の眉毛が動かないのを觀て、『でも無表情な！』と嗤つたらうか。しかし軈て幕切近くに唯一人舞臺に殘された主人公の冷い頰に涙が潸潸と流れ落ちてゐた筈である。

四

壯大といふものには乏しいかも知れない、しかし『幽寂なるもの』は日本の自然である。自然と人生を結びつけるならば日本人は『物の哀れ』を懷しむ國民である。日本人ほど人生の無情なるものに感じ易く寂しい自然の中に融合と安住を

見出したものがあらうか。それは現世の離脱と自然の憧憬の流に貫かれた日本文學によつてすらうなづかれやう。佛敎と支那思想の影響は多分に受けたことであらう。しかしその物に對する纖細な感情に於て日本人ほどの所有者はない。物の雜駁と散漫を嫌ふ彼は一尺の盆栽の中にもよく悠久な自然の姿を映した。我等が往々感傷的の譏を蒙り易いのはこの淋しさの感受力が餘りに豐な故ではあるまいか。直感と靈感に於てならば日本人は傳統的天禀を備へてゐるに相違ない。物の哀れを知らぬ中は眞の武士と言はれないならば、さびしい謙虚な情操の中よりこそ武士道も育まれて來たのである。芭蕉や熊谷蓮生坊の自然人生に對する諦觀があらゆる日本人の心にインスピレーシヨンを賦與するのは、彼等の魂がこの比類のない日本人の幽寂な精神美を最も深く體驗し表し得たが爲であらう。

五

盗物のことも忘れ赤兒の笑顏に見とれてゐた昔京の押込强盗の語草は古いことである。が、私は最も尊い日本人の心の美をこの最も卑しい京の盗人の中に見るのである。ものの哀れに觸れ得る日本人であるならば、いかなる惡人も無心な小兒の前には自ら頭が垂れる筈である。私は今一度『こころ』の卷頭に"Dia Atation"の一篇を讀んで彼の憎むべき熊本の殺人犯人の悔恨の淚の底に映る日本人の心の姿を眺めやうと思ふ。死刑を受ける前に號泣して被害者の嬰兒に罪の赦を乞ふた彼れは立派な日本人であつたに違ひない。日本に於ける强盗殺人事件を通じて小兒までが共に殺された場合は稀である。多くの場合呪はしい血の海の中に兇刃を免れた小兒のみが安かに明方の夢を辿つてゐるのが常であつた。或殺人事件にあつては犯人は最後に一人の幼兒の頭上にのみは慘酷の手を下しかねて其儘立去つたが、程なく彼は生き殘つたその小童の口より人相を確められ捕へられた。

歐米人の美を知るに從ひ却つて懷しみを增すものは我等の內に籠る精神の美である。

酒泉壺

木母寺晴子

酒泉壺―灘五郷の古物店から、探し出された壺を、私は恁う呼んで居ます。

久しい前からです。周圍の總ゆる人々が、無意味な心で、西洋のものをとりいれるのに反して、私の心は常に、その反對の力に向つてゐました。

一つのモデルを求めるにも、いつも日本在來の平凡なものに、心を引かれてゐました。

周圍の人々が、無暗に綺麗なフランスの色彩を、その儘にとりいれる時、私は平凡な古い壺の前に坐つて居ました。

繪にも、讀書にも厭いてしまつた時、私は灘五郷の古物店に、古い壺、甕を探ねるのを何よりの樂しみにしてゐます。

あの攝州灘の五郷には、異邦めいた神戸のいやらしさもなく、唯物質のみを生活の目標とした大阪のけばけばしさもなく、單純なそして特長のある酒庫が、軒を並べてゐます。

茅渟の海にも、白赤に腹を塗られた船も見えず、紀州の山が廣重のそれのやうに延びて居ます。(今の日本人はこの一人の人間がした程も日本美をとらへては居ない)

私はその景色の中に、日本の壺を求めます。

軒の低い薄暗い古物店に、怖る〳〵入り込んだ私の眼に、粗末な然し力のある壺が見出された時、私の心は躍るのです。

「どうしてこんな美しいものを、日本は持つて居るのでせう」私は質素な顔の爺さんの手から、その壺を取上げます。

それを私は「酒泉壺」と呼びます。それは私達の先祖が、非常な注意を集めつゝ、監督を怠らないで、どこかの陶工に燒かせたものでせう。澤山造り出さうとする心はなく、唯落付いた良きもののみを、造り出さうとする心が、親しみ深いもののみを與へてくれます。(こんな心はもう永久に去つてしまつたのですが)

造り出された壺には、自慢の銘酒が盛られて、高貴な席へ運び出されたものらしい、酒造り――それは夜の間も眠らず、その器に盛らるべき水の爲に、この酒庫に見張つてゐたものらしい。そしてこの壺に盛らるる酒の出來た時、酒造の心は喜びの火のやうに燃えて、送り出されたものらしい。

海を越えて來る南國のリキユールも美しいしその壺が心地よい酒場の臺に並べられてゐるのに。電燈の映えてゐるのも、近代文明の華のやうに美しいと云ふ人もあるでせうが、かくして生れ出た古壺は、私にはもつと美しい。眞實の日本美には、深い心がある。かう云ふ壺は、多くの場合、なだらかに出來た口を持つてゐる。そこから靜かに流れ出る水を受けた時、私達の先祖は樂しんだのであらう。

おりおり、そうした店の中から、朝鮮のものを見出すことがあり、支那のものを見出すことがあるのです。

それはその村の先祖が、遠く支那や、朝鮮から酒の見本を取寄せたものかも知れない。

それらの壺は何と云ふ靜かなものであつたらう。美しい飾りも、色彩もなくとも、そこに充分の心が現はれてゐます。靜かにそれを凝視してゐると、比較的大きいその口から羅浮仙が飛び出します。力強い姿をした朝鮮型の飛龍の口から、泉が溢れ出しさうです。

私達の餘り遠くない先祖は、こう云ふものに深い愛を持つて居たのでせう。そして自分達の國を嗣ぐ子等も、彼等と同じ心にのみ生きるものとのみ考へて、彼等の仕事に力をそゝいだのでせう。

私の想像は、それらの店にある間は、自由に幸福に、擴げられてゆきます。私はそこにじつと立つて居る間は、眞實に日本の美しさと深さとを愛する心で一盃になつてゐます。

餘りに安い値段で(古物商には相當なのでせうが)求めて歸る度々に、古道具そのもののやうな爺さんは、異樣な眼付きをして、オランダ渡りと云ふギヤマンの器などを勸めます。

私達の近い親達が、好奇の眼を見張つたそれらの器に、何

の喜びをも見出さない私達の心、世の流はこのことを不思議がつてゐるかも知れません。

虚僞と空疏な色彩が、思ひ存分に、この國に侵入して、總ゆるものを「西洋化」させないでは置かないのに、灘五郷の古物店に、誰もが見返さない容器を、樂しみにして求めに行く私の心を笑つてゐるものがあるかも知れません。

私はそれを携えて、私の貧しい書室に歸ります。そして紅い支那毛氈の上に、置いた時の嬉しさ、そこには日本人でないと樂しめない喜びがあります。

藝術は國境を越へると云つても、支那の文字の美しさは、その間に幾百年と住んだ人間でないと分らぬやうに、黑い墨のもつ巧みな濃淡は、この中に久しく住んだ人間でないと分らぬでせう。

墨繪の美しさは、この東洋に血を引いた人間でないと、ほんとうに分らぬでせう。こてこてとした、そして無意味な油のもつ色彩と形體とに、すつかり厭きを感じてゐる私は、靜かに、動かす墨の中から、幼稚な宗教に近いあるものを感じ出します。

この墨のみがもつ雲の綾のやうな動き・その中からは奥床しい香りが放たれます。そして私の眼の前には傳說に富んだ「酒泉壺」が座つて居るのです。

青い墨の上には、細竹の簾垂が、やさしい陰を落します。

東洋の美術を語る者で、この墨繪のもつ靜かな味に、心を躍さない者があるなら、それはごまかしものだと私は申します。

生活の倦怠に惱む私に、唯一の窓を與へてくれるものは以上の喜びであり、灘五郷の古物店が、貧しくも永久に生きてゐてくれることは、何よりの喜びです。

空虚な模倣の遊戯、厭氣を感じて、逃げ出した私に、東洋の墨のあることは、何たる慰めであり、感謝であると思ひます。この世は如何に流れて行くとも、私は私が今踏止まつた位置から、世界を眺めてゐるつもりです。

今もこの「酒泉壺」は香り高い東洋の匂ひを、この私の心に送つてくれます。私の落付かない心は、それを手にとる時、新らしい喜びを與へられます。

軒の低いあの灘の古物店に、又別の「酒泉壺」が氣儘者の私を待つてゐてくれることでせう。

私は日本人の餘り遠くない祖先のもつた飾り氣のない生活と事業を次いでゆきたいと思つてゐます。（一九二四、七、十六）

（選評）隨分佳作のあつたことを喜びます。「女性改造」の讀者がこれほど精選されて居るとは思ひませんでした。吉原公平氏の作品は大體に於て首位を占むる作品ですが、終りの二三行はあまりに慌しくそれが爲め全體を打こわした感がします。木母寺晴子さんのものは、美の沈潜に於て聊か練られない所を發見します。選外佳作として柳城哲夫、小川濟子、六山陽鳳、西田なほ子四氏を擧げます。もう一息といふ所でした。その他の應募作品も大體に於て駄作のなかつたことを嬉しく思ひます。尚ほ十月號の懸賞論文にも奮つて應募さるることを希望いたします。（選者）

國產品奬勵展覽會

十月二十一日から、二十六日迄、日本女子大學内で、國產品奬勵展覽會が、開催される。

日本女子大學では、近來我國の貿易狀態が、年々輸入超過を增す一方で、我國經濟界の前途は實に憂ふべきものがあるので、此際可及的輸入を抑制して、進んで輸出を促進せねばならぬといふ見地から直接、消費者、殊に婦人の覺醒を待つ可く、かねて家政學部その他の學生に課して、國家經濟の問題に就いて、調査研究中であつたが、今回、時局に鑑み廣く世間に紹介して、一般婦人の協力に俟ちたいと云ふことを、趣意としてゐる。

現下、我國經濟家政界に於いて、覺醒の警鐘が亂打されてゐる折柄、一般婦人の進んで同大學の催會に參與されんことを勸告する。

流行・奢侈・必要

贅澤品等の輸入税に關する法律に就いて

黑田英雄

今期の特別議會に於て論議された、贅澤品等の輸入税に關する法律は、七月十七日議會を通過し、愈七月三十一日公布せらるゝこととなつた、法律は公布の日より施行することになつて居るので、七月三十一日以後に輸入せらるゝものは、此の法律に依りて、從價十割の高税を課せらるゝことゝなつたのである。

此の法律案が議會に提出せられると、議會では勿論、社會の各方面に於て、種々論議せられたのであるから、私は立案に干與した一人として、改造社の依賴により、一應本法立案の趣旨を述べ、併せて希望を述べて見たいのである。

文化の進むに伴つて、人々の生活も漸次向上せられ、從つて日常生活上に於ける必要品も改善せられ、其の種類も增加し行くことは爭はれないのであるが、近來一般の風潮を見るに、其常規を逸して居る感なきを得ないのである。

歐洲の大戰以來、年々輸入超過を例として居た我國も、急に輸出超過國となり、大正四年より大正七年迄に、十四億八百余萬圓の輸出超過を見、從て我國保有の正貨も、大正三年來の三億四千余萬圓より、大正九年來には二十一億七千余萬圓と云ふ巨額に逹し、國民各自の收入も增加したので、……勿論國民全體ではない其の一部分に過ぎないのであるが……國民の氣風が、所謂成金氣分となつて、其の生活が奢侈贅澤となり、安逸放縱に耽るの弊風を助長したのである。

昨年の大震火災は、前古未曾有の大慘害を來し、一時人心に大なる刺激を與へたるに拘らず、僅かに半歳をも經過せざるに、早く既に、以前にも增す安逸奢侈の風盛なるを見るに至つたことは誠に痛嘆に堪へない。

奢侈安逸の風が、道德的方向より見て戒むべきものたるばかりでなく、一國の資本を浪費し、產業の堅實なる進展を阻害し、經濟上憂ふべきものあるは云ふ迄もなきことながら、近來、奢侈の風潮は、輸入超過の勢を助長し、漸次我國保有の正貨を失ひ、爲替相場は、益我に不利となりて、我經濟の基礎を危からしめんとするのである、世間、殊更に新しきを求めて、何でも西洋の物さへ用ゐれば、それで時世に遲れざるものであるかの樣に、考ふる人が非常に多い樣である。外國品卽ち良品なりとの誤れる觀念も、可なり多い樣である、甚しきは、消費者の虛榮心を迎えて、內國生產品も外國品の如く裝ひ、全然歐文を使用して、一見其の舶來品なるかを信ぜしむることを努むるに至る、化粧品等に多くその例を見るのである。

斯くの如く、贅澤奢侈の風は、一方外國品の盲目的尊重となり、若は殊更に高價なる外國品に依つて虛榮心を滿足せしむるに至りたる爲、此等の品物の輸入は、近年著しき增加を見るに至り、今回の法律に揭げられ居る品物に於て見るも、(昨年の震火災の爲書類燒失して不明なるものを除きて)大正三年二百三十八萬餘圓ありしもの、漸次增加して、大正九年には三千萬圓となり、大正十一年には三千八百餘萬圓となつて居る。

一方では戰時我國に受けたる、一時的の好景氣は、平和の克復と共に、漸く其の影を失ひ、貿易は、大正八年以來再び逆調となりて、本年七月下旬までに、二十二億九千餘萬圓の入超(勿論昨年秋の震火災の爲輸入稅を減免せられたる復興材料等の一時的輸入激增を含む)を見るに至つて、正貨は漸次減少しつゝあるのである。此の秋に方りて、國民尙往時の一時變態の好景氣時代に馴致せられたる奢侈安逸の夢に耽りつゝ速かに覺醒することなければ、國家の前途洵に寒心に堪へないのである。

贅澤品等の輸入稅に關する法律は、此の際大なる使命を以て生れたものである。奢侈安逸に耽る人々に對し、其の迷夢を醒し奮起を促すの警鐘となり、國民をして緊張せしむべく強き刺激を與へんとして制定せられたるものである。

法は、別表に揭げられたる百數十種の品目に對し、一率從價十割の高稅を賦課するのである、然しながら、之れに依つ

て國の收入を增加せんとするものではない、又高稅に依つて內國產業を保護せんとするものでもない、國民をして之れ等贅澤品等の消費抑制の念を起さしめ、一方貿易逆調緩和の一助たらしむると共に、奢侈贅澤に耽れる人々の覺醒に依つて、內國品に依る奢侈贅澤をも抑制せんとするのである。

何をか贅澤と云ひ、何をか奢侈と云ふ。其の觀察の仕方によりて、種々の標準を作ることを得べく、極めて困難な問題である、從て何が贅澤品であり、何が奢侈品であるかを定むることは、更に至難のことである、勿論法律は奢侈品贅澤品の定義を與へんとしたのではない、然し別表に揭げられた物品は、或は全然これを缺いでも差支ないものか、或は其の消費を節約し得るものであると思ふ、或は或る人々には必要であつても、大體に於て今日濫用せられ居るものである、故にこれ等の物品の使用消費を廢止し、若は節約し、餘り必要もなき人は其の使用と消費と差控ふることは、疑もなく奢侈贅澤を抑止することゝなるのである、今列記の品物を分類して見るときは、先づ茶、罐詰の果物、菓子等の飮食物の如き所謂嗜好品と云ふべきもの、次に寫眞器、小銃、蓄音器等の所謂娛樂品に屬すべきものゝ如き、勿論之れ等は絕對に不必要なる品と云ふことは出來ざるも、決して缺くべからざるものではないと同時に、今日餘りに濫用されて居るものではなからうか、例へば寫眞器、フキルムの如きもので、これら有要に使用せらるゝものも少くないのみならず、寫眞術の普及、決して排斥すべきものではないが、然し全然玩弄物として、若は一種の見得の爲に使用せられ消費さるゝもの、極めて多數であることも、爭はれない事實である。

次に、何人が見ても、奢侈品に屬するもの、貴石眞珠の類である、これとて或は婦人の裝身具として、其美を保つ上に於て必要なるものとも云へやう、然し指に數個の「ダイヤ」を光らせたとて、自ら其の虛榮の心を滿足せしむる外、必しも其の人を美化せしむるとも思はれない。

尙その外、直ちに奢侈贅澤品なりと云ふことは適當でないものがある、これ等は、外國より來る品が多くは高價贅澤なるものであるが故に、それを實用的な內國產のものに消費を移すか、若しくは其の消費を節する必要があるものである。

例へば襟飾、袴釣又はシヤーツの如き、今日の洋服生活に於ては勿論必要の品である、然し何も高き代價を外國に支拂つて、舶來品を買ふの必要は、多くの場合ないのである、又夫れ等の品物を使用する人々の多くは、流行を追ふて屢々之れを取り更へ、充分の使用を爲さゞる人々なれば、少しく注

意してそれを節することゝ、決して無理ではないと考ふるのである。

斯くの如く、日常生活に實用的必用なる物品につきては、輸入品と雖、努めて之れを除外し、其の價格の騰貴を避けたのである、例へば洋服地の羅紗等の毛織物に付ても、唯絹入の織物を掲げたのみにて、一般の毛織物はそれを除外し、蔬菜に付ても、白菜蓮根の如き生の野菜は之れを除外し、革類に於ても、普通の靴、カバン等の材料たる染革の如き、又は貴金屬等を用ゐざる革製品の如きを除外し、手巾に付ても、絹製絹入か、又は上等なる麻地や麻製に限り、メリヤスの肌衣に付ても、絹製又は絹入のものに限りて、毛又は綿のメリヤス肌衣を除外したるが如き、懐中時計は、金側又は白金側のものに限り、寫眞器は、小形携帶用のものに限りたるが如き、充分注意を拂はれてゐるのである。

更にそれ等を選定するに方り、特に注意されしは、前に述ぶる如く、元來此の法律が、收入增加の目的に非ず、又産業保護を目的とするものに非ず、夫れ故、關税引上の結果、直接に國内産業の保護となるべき、即ち例へば外國品の爲に、其の價格の競爭上壓迫せられつゝありしものゝ如きは、假令贅澤品等に屬すべきものにても、之れを避けたのである。又此の法律實施の爲、直ちに内地産品の價格を引上ぐべき結果を來す虞あるもの、例へば外國品と同樣又は之れに代るべき品の、國内生産が獨占的なるもの、又は其の生産額少くして、其の多くが、現在外國品に依り供給せられつゝありしものは、外國品の價格引上げられたる爲に、擅に内地品の價格を引上ぐるか、又は需要が一時に内地品に向けらるゝ爲、勢ひ其の價格を高からしむるが如き虞あるものは、努めて之れを除外したのである。

次に、法律に掲げられて居らない品物でも、同樣に輸入を制限しなければならないものも少くない。これらは、色々の事情の爲に、已むを得ず、省かれたのであるから、一般に奢侈贅澤を、戒むる法の精神より、充分なる注意を喚起したいのである。例へば、毛絲の如きそれである。近來編物が急激に流行し來つた。尤もこれが爲に、輕便なる防寒衣等を得て誠に結構ではあるが、その濫費せらるゝものも亦極めて多い樣である。婦人の襟卷の如き、其の長さ膝を過ぐるものがある。防寒から云ふも、必要の程度を超越し、美の點より云ふも、私は決して美しいとは思へない。此等の毛絲は、毛織物に織らるゝものを含むが故に、正確なる數は不明なるも、大正八年十萬六千斤六十萬九千圓のもの大正十二年には六百四

十八萬斤千八百四十萬圓となり、(一月より六月迄橫濱港より輸入の分を除く)數量に於て六十一倍餘、價格に於て二十六倍餘に增加して居る。其の內編物の流行が、その增加を誘致したる重なる原因であることは疑ひないと思ふ、徒らに流行を追ふて、知らず識らず濫費しつゝある婦人は、此際大に反省せられんことを望むのである。

此の法律制定せられたる精神、前述の如くなりとしても、此の法律の實施が、果してどれ丈けの効果を齎らすであらうか。それを貿易の方面より見ても、これ等の品物が、全然輸入なきものとなつても、……それは期待することは出來ない……僅かに四五千萬圓であつて、數億圓の輸入超過に對しては、必ずしも其の影響大なりとは云へない。又世間で頻に唱導せらるゝ如く、內地產奢侈品に對し、それが消費を抑制すべき、適當の方策を取らざる以上、輸入品のみ防止しても、奢侈抑制の目的を遂すること困難なりとの論も、亦一應尤もである。然れども其の一方法たる奢侈品課稅の如きは、極めて困難にして、種々攻究を要するものであるが故に、先づ其の實行し易き、輸入品に對する制限的課稅をなし、國民の覺醒を促すと同時に、政府に於ても、之れに伴ふ諸般の施設を爲すは勿論、社會各方面に於ける共助を得れば、自然輸入贅澤品等のみならず、內國奢侈品の消費を減ずるに至るべく、更に進んで、獨り奢侈品のみならず、普通の必要品に對しても、其の贅澤的浪費を愼むの美風を馴致することを得れば、此の法律の結果、亦決して少しも云ふを得ないであらう。

要するに、われ／＼の生活を、文化的ならしめ、其の改善を計ること、固より急務であらう。然しながら、生活の文化改善、必ずしも、歐米品の使用、若は高價なる贅澤品の消費を意味するものではないであらう。自己の資力を顧みず、國の力を無視して、徒らに理想の現實にのみ走れる改善は、恰も砂上の樓閣に等しきものではあるまいか。

婦人は、生活の改善に關しては、重要なる地位を占むるものである。家庭に於ける消費を支配するのみならず、社會の流行を左右する力を有するのであるが故に、私は、特に婦人が、速かに現下の我國情を自覺せられ、奢侈贅澤の風を斥け、徒らに外來品を尊重するの陋習を去つて、消費者としての健全なる覺醒をなし、國家經濟上の難局打開に協力せられんことを切望する次第である。

(一三、七、三一、法律公布の日)

當為と批判

千葉やすら

一　問題の起り

1　贅澤品關税法案の制定

六月廿八日から開會せられた第四十九回特別議會は、七月六日に政府から提出せられた「贅澤品等の輸入税に關する法律案」を審議し、衆議院に於ては、八月之を上程し、濱口藏相より說明、數名の議員より質問の後、之を十八名の委員に附託し、委員會は數回の會合の後、十一日に大多數を以て原案通り可決し、貴族院に於ては、十三日上程、同じく濱口藏相より提案の理由說明の後、數次の質問に及び藏相外相內相等答辯の上、十五名の委員附託となり、此の特別委員會は數回會合審議の上、十七日午前、全會一致で原案通り可決、更に十七日午後の貴族院本會議に於て、大多數を以て原案通り可決確定せられ、愈々明三十一日を以て法律として公布せられ、即日効力を生ずることゝなつて居る。

2　該法案の內容及び由來

此の新定の法律案に依ると、現行の關税定率法別表の輸入税中に掲げられてある物品中、十三類二百餘種の指定品に對して、當分の內、該輸入税表によらないで、從價十割の輸入税が課されることとなり　外國製のチース、麥酒、珊瑚、眞珠、麝香、麻織物中の精巧なるもの、毛織物の一部、メリヤス、單製テーブルクロース、手袋、衣服用ベルト、靴其他の履物（ゴム製を除く）アルバム、寫眞、寫眞帖、繪ハガキ、懐中時計（金側又は白金側のもの）寫眞機（大體カビネ型以下

のもの）蓄音機及その部分品附屬品、寫眞用フイルム（活動寫眞用のものを除く）玩具其他二百余種の所謂贅澤品は、之れを輸入する時には、その原價と同額だけの重税を納めねばならないこととなつたのである。つまり、それ等の二百余種の物品は、外國製のものを買ふには、原價の二倍の價を支拂はねばならぬことゝなつたのである。そして、又、其の後の報道によれば、此の法律は、啻に我國內地に施行せられるばかりでなく、朝鮮臺灣其の他の植民地にも之を適用して、植民地を經て來る奢侈品の輸移入をも防遏することと期待されて居り、廿六日には、既に六稅關長が召集されて、該法實行上の手筈等に就き打合はせがあつたと傳へられて居る

元來、今回の贅澤品關稅案が、政府案として議會に附議せられたのは、決して、新內閣の匆急な思ひ立ちからの事ではなくて、今春全國稅關長會議に諮問せられた輸入防遏に關する具體案の一案として「震災後、國家非常の秋、奢侈品の輸入抑壓につき、適宜對策を構ずべし」との答申があつたので、既に前內閣の時以來、大藏省に於て、種々調査を進めつつあつたのを、現內閣成立後、濱口新藏相の牢固たる決意によつて、今回の特別議會に法律案として提出せられたのであつて、貴衆兩院に於ける藏相並びに政府委員の說明によれば、此の法律案は「國家奢侈の弊風を抑壓すると同時に、我が對外貿易の逆調の趨勢を緩和する一助たらしめん」とするものであつて、其中でも、國民の奢侈防止を第一の目的として定められたのださうである。

8　該法案に對する世評及び當局の決意

從つて、六月廿八日頃に、本案が今議會に提出されるであらうとのニユースが傳へられて以來、是等の物品を取扱ふ商店や、是等の中の或物を原料の一部に使用して居る製造業者達、及びそれ等二百餘種の指定品を、日常生活のどの部分かに、即、衣食住及び硏究娛樂上の物資の幾分として使用して、比較的それ等の物品に親しまされて來て居た都會人中の或る人々は「これは！」と刺戟された。その結果は、商人及び製造業者達の運動となり、又は、諸新聞の論說や短評に度度論議せられ、更に、議會に於ける賛否兩方面の論戰の華を咲かせて、或は、趣旨は贊成であるが品目に至つては、必要品と贅澤品とを混同して居るとか、諸外國からの報復的の關稅引上げを見はしまいかとか、密輸入や價格吊上げの暴利等の不心得商人の不正に對する制裁はどうするか、とか、國產品價格騰貴助成案であるとか、內地製奢侈品の保護獎勵案で

あるとか、香料等の若干の輸出製品の原料品を包含して居るのは不都合であるとか、一部輸入品を禁遏することによつて、奢侈の風を改め得べしと信ずる如きは餘りに淺薄な考へであるとか、今回の指定品輸入總額は三百萬圓位に過ぎないのに、之れを我國の總輸入品累計二十億圓の巨額に比すれば、殆んど物の數でもないから、これによつて、輸入超過及び爲替不況の貿易の逆調を挽回し得べしとは豫想されないとかいふ種々の論戰に對して政府側では、「たとひ本法案によつてのみ奢侈を矯正する事は困難であつても、國民の氣風を振興し得ることは確實と考へる」(十六日貴院特別委員會、黑川主税局長答辯)「指定品目中に、若干の輸出原料があつても、政府は極力輸出貿易を奬勵して之を盛ならしめる方策を構ずる」(同上、濱口藏相答辯)「諸外國の關係者は、本案は目下の我國の外國貿易、國民經濟生活の上から見て、必要已むを得ざるものと見て居る」(十三日、貴族院本會議、幣原外相答辯)等、熱心に原案の成立に盡力されて、遂に議決を見る樣になつたのであつた。そして、昨日午後には大藏省主税局から、「税率を引き上げられる物品に誤解の無い樣に」といふことと、「關税の增率によつて直ちに、それ等の品物が、現在の市價の二倍になるのではない。」といふことにつき、一々の品種に就いて、明細な説明書を發表された。

二　當爲と批判

1　現下當爲の態度

以上は、今回の贅澤品關税引上げの法律案成立に關する事件の經過であるが、今や、我々國民は、自分達の上に更に一つ加へられたる新らしい事件として、此の法律案の我々を强制する力に就いて、十分に考慮すべき時となつた。

凡て、國法に對しては、快く之れを遵守し尊重するのが言ふまでも無く私共の當爲であり倫常である。論爭と非難とは法案確定以前の仕事あでつて、確定後の問題は、その法の完全なる實行と、實行後の效果の觀察とに努むべきのみである。まして、今回の關税引上げ案は、その主旨に於て、國民の奢侈生活を抑壓することと、我國對外貿易の逆調の趨勢を緩和するに在るといふことと、昨日發表の説明書を見ると、實際、嚴密な意味での生活必需品は含まれて居ない點から見て、我々は、どこまでも、該案制定の精神を十分に同意し貫徹に共力しようと覺悟せずには居られない。殊に、此の法律案が、直接的にそれ等物品の賣買や輸入を禁止するもの

でなくして、重税を課する事に因つて、警告的に、我々の生活を反省せしむるものである事を思へば、其處に十分に各人に考慮し批判する餘地が與へられて居るのであるから、我々は一層自由な心持ちを以て厳粛に自己を律し、又、お互ひに社會全體の人に注文し合つて、切角設けられた新法の精神を十分に貫徹するやうに努めねばならぬと思ふ。

殊に、大藏省と共に該法案制定に盡力した農商務省の佐々木課長の談によれば、此の法律を設けた第一の理由は、奢侈を禁止する爲で、第二は、外國品を買はずに内地品を使ひたいが爲、第三は、日本が最近非常な輸入超過となつて、日本の金貨が海外に多く出で、遂に我國は借金國となつて、外國の信用は落ち、爲替相場は惡くなり、國内は不景氣に陥つたので、之を防がうといふのにあるといふ。又、新聞に發表されて居る本年六月末現在といふ我國債の總額を見ると、内債は三十一億八百萬餘圓、外債は、十八億六千萬餘圓、併せて五十億圓の國債を有し毎年二億二千餘圓は、此の利子として國家が支拂はねばならぬのだとの事。さういふ事を知つて見れば、國民全體は、中々浮々としては居られないわけで、各一人割に、約七十圓の國債を負つて居る次第、それに加へて、昨年の震火災による國富の消失は、或は八十億といひ或は五十億といひ、これも又、實に容易に恢復されさうにも思はれない。日米問題が例のやうな成行きになつたとしても、何しろ、我が國の總輸出額の約四割五分は米國に向けられ、殊に生絲の如きは、その全生産額の十分の九以上は米國に輸出せられ、又、我産業界の必需品である繰綿や鐵板、木材、機械類、石油等は、年々米國から三億圓以上も輸入されて來て、是等の輸入品は、何れも、我邦の産業開發に必要な品ばかりで、之等の品種を輸入しない事となれば、我國の産業は忽ち萎靡不振となるのであるから、一面には、日米問題に關して、我等が徒らに浮腰になつて騒いではならないと共に、一面には、必要品の輸入はどうしても止める事ができないのであるから、假令、所謂贅澤品等二百餘種の總輸入額が我國年總輸入額の何百分の一位にしか當らぬ額であるとしても、此の國家非常の秋に當つては、一毫の微といへども、我國の正貨の海外に流出するのを防ぐのこそ、國民としての現下當處の態度でなければならぬと覺悟される。我等は一面に於て、前年來の、我社會に彌漫せる萎靡放漫の氣風に慊らず、國民全民全體が、更に〳〵眼光を明かにし希望を大にして、なほ一段の進展を期せねばならぬと考へて居た處へ、昨年の關東大震火災で、人々の心は、一時に緊張の極度に達し、失

はれたる國富と家産とを恢復すべく、國民は十分に覺悟した筈であつた。それにも拘はらず、災後僅か半歳を出でざるの頃からして、國民生活の奢侈に流るゝ事が新聞紙上等に指摘せられ初め、我々の見聞する所に於ても、夙く、緊張の反動的現象を觀るに至つたのは、遺憾千萬である。私は、昨年の震災に際し、幸ひにも火災は免るゝを得たが、幾萬の人命を犧牲に供したあの凄じい劫火の印象は肝に銘じて忘れ難く、何を買はうとするに當つても、必ず「燒けて了つたと思つて」とその際に決心した事を思ひ出して自己を節制して居る。

　國家として、積極的に國民の康福を增進する施設を爲す方面でなくて、消極的に奢侈を禁遏しようとする樣な立場に立たなくてはならぬといふのは、當局者としても、全く、悲しむべき眞面目であるに違ひない。我々國民の一人一人は、皆、此の悲しむべき眞面目を深刻に體驗せねばならぬ。そして、「當分の內」といふその當分の期間を、できるだけ短く切り上げる事の出來る樣に、各自の生活を緊縮して、少しでも餘財を貯畜する事に心がけようと思ふ。之が、我々の現下當面の態度である。

2　贅澤に就いての批判

か、併し、我々は、常に、物の兩面を見る事を忘れてはならぬ。前段に述べた所は、全く我々の現實の生活を律するストリクトな事實である。處が、人間の生活には、現實のストリクトなる事實の他に、その現實生活に指針を與へ色彩を與へ活力を與ふる智慧の洞察と想像の働きとがある。此の兩者は合して、行動の批判となり將來の希望となつて、刻々に我等の生活を愉快に色づけて呉れる。そこで、此の方面から、今回の贅澤品關稅の事を考慮して見たい。

　贅澤といひ奢侈といふ字義は、兩方とも決して感じの好い內容を有つ言葉ではない。贅澤とは無益な分外のおごりを言ひ、奢侈といふ語も同樣に身の程に過ぎて費し又は飾ることを稱する。おごるといふのも、やはり、分に過ぎて衣食住の事に費し飾るのをいふのであるから、贅澤奢侈といふ事柄それ自らは、全く、批評も考慮も加へる餘地は無い惡德であり不必要事である事は今更言ふまでもない事である。たゞ、然し、問題は、然らば、何が奢侈であり贅澤であるか、及び、どこまでは身分相應の事であり、どこから限外の分外のおごりといふ事になるかといふ事實に在る。

「私にとつては」といふ事は、個々の人々の考へる筈の事である。一般的に論ずる場合には、「國民一般の生活にとつては」として考へて見なくてはならぬ。

すると、玆に、人間は、米味噌醤油ばかりで生きて行けるものではないといふ考へが浮んで來る。我々は常に、あらゆる生活の斷面に優越と豐富とを祈念するものであるといふモツトーが働きます。近代精神の洗禮を受けて、あらゆる感覺の世界に、あらゆる情操の斷面に、あらゆる意識の十方性を肯定して、人生を享樂し進展せしめようとする自由人の態度が頭を擡げて來る。「第二文化の世」に於ては、新らしき人間態の世に於ては、民衆の全部が、常に享樂し常に動行しつゝあるべき筈であるからといふ理想が輝き出す。そこで、服部蒼外氏の所說のやうに「二本以上の葉卷は贅澤であるが、ただ一本の煙草には罪は無い」といふ考へが成立する。蓄音機も寫眞機もただ單純に贅澤品とのみ言ひ切つて了ふべき性質のものではない。それ等は、營業上敎化上の必要品であり、執務能率調節上の大切な方便品であつて我々の文化生活を向上させる上に、殆んど缺くべからざる必要品とも見做される。吾人の美的享樂の對象となるものをも、生活上の必需の事柄の中に計上して差し支へないと考へることが、感受性の銳敏になり、美的享樂や娛樂を生活上の一要件と思惟する私共の判斷であると」といふ私自身の見解も肯定せらるべきこととなる。甘しい麥酒は、假令外國製でも、經濟が許すならば、國民の全體が飮み得る可能性を有する樣に。つくりのよいブラッシュや帽なら、それが外國製でも、國民の誰れでもが買つて使へるやうにそして更に將來は、その外國品を必要としない迄に、堅牢な品質の良い品を造り出すことのできるやうに。(現在でも、メリヤスなどは我國製のに隨分品質の良いのがあるさうだが)我國民全體の富力と商工業其他の生產業が發達するやうにと、私達は批判し祈願する。

三　結論

要するに、我々は常に然あるべき如く、今回の贅澤品等の輸入稅に關する法律案の制定に際しても、その當爲と判斷とをはつきり區別して、それによつて、各自の生活の實際を律することを忘れてはならぬ。我々日本人は、今、本當に謙虛なる心情を以て、自己の實質實力のなほ如何に貧小なるものであるかを顧ると共に、常に、一刻も早く豐富堅實の彼岸を將來することに、節度ある心で努力せねばならぬと思ふ。

實に、此の結果の制定こそは、日本人が己れ自らを節度する深刻なる法繩である。

今日は丁度七月三十日で、明治天皇祭の當日である。節度剛健そのもの丶權化の如く存しまして、我日本國を、今日の地位にまで引き上げて下さつた大帝の御事蹟を回顧すれば、此の稿を草するに際しての感謝と感慨とは、本當に量り知られないものがある。

（一九二四、七、三〇）

贅澤と必要と社會制度

高橋龜吉

「それに相當する收入があつて、その收入に相當する生活を營んでゐる間は、假令その生活が如何に奢侈であらうとも、それは單に社會道德上の問題になるばかりであつて、經濟上から言へば贅澤とは云へない、つまり、贅澤とは收入以上の生活をしてゐることを意味するものである。」これは去る臨時議會で、濱口藏相が、贅澤品等の輸入關稅引上に關する議案に關連して述べた要旨である。この意見は、我が國支配階級の抱懷する贅澤に關する見解を、最もよく代表するものと見て差支へない。併し若し贅澤と云ふことを斯の如く解するならば、貴族院の壇上で山脇玄氏が左の如く叫んだのは洵に尤もであると云はねばならぬ。曰く「金の有るものが金殿玉樓酒池肉林の生活をしたからとて、彼等金の有る者は、何も我々は奢侈贅澤な生活をしてゐるのではない、當り前の生活をしてゐるのであると云ふかも知れない、又、さう考へて平氣の平座で居ても是亦仕方がない」と。

事實、資本主義の消費に對する精神は正に山脇氏の云ふ通りであるにも拘らず、右の山脇氏の說に對し、濱口藏相は

「…それは政府の干涉すべき限りでありませんが、上流の人

々がさう云ふ生活をすればこそ、國民全體が風儀が惡くなるのであります」と抗議せざるを得なかつた。之れ、濱口氏の口にする贅澤に關する見解は資本主義的であるにも拘らず、氏の本心は之れをそのまゝ是認し得ないことを語るものに外ならぬ。

この矛盾は「贅澤」と云ふ觀念の本質を見誤つてゐるからである。元來、贅澤と云ふことは、個人の消費の選擇と、生活の保證とを、各個人めい／＼の自由と責任とに委してゐる資本主義制度の下に於ては決して存在し得ない觀念である。蓋し、贅澤とは、一定の個人の生活程度の保證を、何等かの形式に於て、社會的に責任を負ふ場合に於て始めて起る純社會經濟的觀念であるからだ。然り「その費す所のものが、それに相當する社會的効果を伴ふか否か、及びその費用のために社會の福利の增進がどれだけ阻められるか否か。」と云ふ社有經濟的消費の規準のみが、贅澤と必要とを分つ唯一の標準である。然るに、左樣な社會的な觀念は、何人の利害を中心とする資本主義の下に於ては決して起り得ないものである。にも拘らず、資本主義の代辯者たる濱口藏相、及び我が多くの支配階級の人々から「贅澤」と云ふ聲を聞くわけは、それは彼等が過去の封建時代の考へ方を無意識に遺傳してゐるからである。封建時代の思想は甚しく國家的であり、從つて極めて小範圍ながら著しく社會的であつた。自然、其所には常に贅澤と云ふことが議せられたのである。併し乍ら、今日、贅澤と云ふことが、社會の問題となるに至つたわけは社會が昔の封建時代へ復古しつゝあるのではない。實際の社會が漸次に進化して、無意識ながら、すべての愛國者の胸に社會主義的見解の必要なることを教へたからである。即ち、今日「贅澤」と云ふ問題が新に社會的に議せられるに至つたわけは、資本主義制度の缺陷を補塡せんがために、社會主義的消費規準に賴ることを必要とするに至つたからである。

要するに「收入に比例する生活」と云ふ資本主義の消費規準からは、贅澤と云ふ社會經濟的觀念は決して出て來ない。それからは、最善に於て、よき所帶持ちと惡しき所帶持ちとが生れ得るだけだ「それに費す所のものが、それに相當する社會的効果を伴ふか否か」といふ社會主義的消費規準に於てのみ「贅澤と必要」との社會的觀念が生れ得る。而して流行の巧罪も亦、同じ消費規準で計らるべきである。

贅澤とは何か

三宅やす子

×

贅澤といふことがまた此頃考へにのぼされて居る。奢侈品關稅引上のことか云はれはじめてからである。意識して贅澤をする人が、——し得る人が、——どれだけきるだらうか。

左樣考へると私は、ひきしめられるような痛さを感じる。富豪其他一生の生活をどれだけ豐富にしても、財產の減らない人は特別として、現在社會に働いて居る最大多數の人は、これほど生活の苦しみを強く味つて居るではないか。生きんがために血みどろの戰ひをつゞけて居るではないか。何處に贅澤をする餘裕がある。どこに贅澤を喜ぶほどの氣持にさへなれるものだらう。

それでも或人は云ふかも知れない。電車でゆけばすむものを自動車に乘る必要はない。國產の食物が澤山あるのに輸入品を使ふことはいらない。婦人の服裝や化粧品にはもつと節減を加へなければいけない。

いろ〳〵の場合にこうした節約論はよくきかされる。けれども、私達の生活は、時間を惜しむべく强いられて、しかも社會の施設はそれに伴はず乘換場で三十分も待たされる電車を柔順に待つて居なければならない。其時、タクシーは電車より經濟になる場合がある。自動車が生活萬般に對する趣味が次第に世界共通になつて、各國の特徵あるものを嗜好に合せて喜ぶようになつたこともまた自然で、江戸の人が長崎の料理を食べられないといふ譯はない道理と同じである。又更に、婦人服裝については、最も贅澤な階級だけを取りのけに

して、次第に實質的になり、衣服の數を揃へて土用干の番人になることが少くなつただけでもよほど進化して居るとおもはれるのに。

×

今贅澤といふやうに多少考へられて居るものでも、よく考へれば贅澤でないものが多いかとおもふ。

昔は「舶來」といふ言葉は「上等」といふ意味に通用した。「それでよい、上等舶來だ」などといふ言葉を今でも老人などは使ふ。まさか今の世に輸入品を上等品と考へるほどの人もあるまいと思つて居たが、それは只國内で出來ないものを國外に求めるといふ意味で、都會に作れないものを田舍から供給を仰ぐと考へ方によれば同じでよいものも澤山あつたのに（勿論例外は多くある）此頃、舶來品などは皆粗惡なものだといふことがことさらに云はれはじめた。

さう角ばる事はいるまいと思ふ。

紅茶をのんでパンで簡單な食事をすませ得る現代人は、玉露の點滴を味つて午睡の後を樂しむような閑人の贅澤は夢想だも許されないところである。

食品にしても、牛乳とバタは口にしませんといつた老人の趣味がいつまでも低滯して居るものでもなく、寫眞を贅澤品視することは、寫眞をとると壽命がちゞまるといつた硝子板寫眞時代の昔に返つた氣分がする。まして、居ながら耳の練習が出來る高尚な娛樂といふより趣味藝術品である蓄音機が贅澤品では、國民の嗜好を浪花節まで引き下げる必要があらう。

今生きて居る人の老人と、中年者と、それから若い者と子供と、皆それ／＼に嗜好の度が違ひ、年の少いものほど、年の多いものから贅澤だと見られる事が自然の要求になつて來て居る。一面には、これはます／＼激しい世の中になつて來たからだ。

殊に都會生活者の激しい疲勞、絕間なき神經のつかれは、色や音や感覺の世界にます／＼細くくひ入つて、僅に、自身の頭の中に感じるごく纖細な感情で、少しはとげ／＼しく勞れた神經をいたはらうとするのであるから、鈍感ではあり得ない。其ために趣味が洗練されて來るのもまた自然である。

それを只、頭ごなしに無用の事と云つてしまふことがどうして出來るものだらう。

×

婦人服裝は華美になつた。然し、決して一般に前より金のかゝるものを用ひては居ない。女性から服裝のたのしみまで取り去つてしまふといふことは、生きてゐるのは不經濟だから死んだほうが金がかゝらないと云ふのと同じ事である。只どうしたらむだな費用なしに、效果ある裝飾をすることが出來るかは女性自身の頭の働きによる。

私が贅澤と思ふものは、學生が氣むづかしい好みをしたり、カフエの女給を相手にする濫費、女學生が、自己流の審美眼で賣るために作られた高價なレターペーパーなどに憂身をやつすあの心持、通學用品にしても他人の模倣で、高價なものをほしがつて親を困らせるやうな風習、これは時代に伴つた弊風の一つである。

今更明治時代の質素さで勉強せよとは云はれまい。けれども自ら勞力をもつて金錢を得た事のない學生時代の濫費は他日の苦しみが恐ろしい。趣味を活かして、出來るだけ自分の作つたものなどをかしこく用ひて、經濟と趣味とを合せてほしい。學生時代にはそれだけの心と時の餘裕はある筈である。

家庭に於ての贅澤は、いらないものをそなへつけること、いつか又役にたつかもしれないものを澤山しまつておくこと、「禍も三年たてば役にたつ」と無暗に物を捨てることを惜しんだ非現代的氣分が、思ひの外に、生活費をかさませるものだといふことを云ひたい。

よんでしまつた書物を澤山並べておくことさへ、置場や手數の點で、贅澤の部に考へられると思つて居る。

婦人の趣味教養に俟つ

三須裕

奢侈といふものは論じつめれば心からのものでありますから

法律が定めてこれ〳〵は奢侈品であるとした所で、それ

が實際に奢侈品であるといふ譯のものではないし、又それにいくら税金を掛けた所で、その所謂奢侈品なるものが廢れなくなるといふ譯のものでもないのであります。その事は徳川の頃、時の政府がやつた奢侈制限の失敗に見ても、又日常私共が經驗することから考へてもたやすく判ることであります。贅澤の癖は一旦ついたらコンリン取れるものではないので、乞食でも、私共の店で肉とパンの片を拾ひつけると、他所の溜は覗かれないといひますが、實際、いゝ物、美しい物、おいしい物は、本當にいゝ物美しい物、おいしい物で、いくら國産奬勵でも、又輸入防遏でも、内地系が絶對にかなはないといふ點に於て舶來品の入つて來る强味、舶來品を買はせる强味があるのであります。のみならずそのいゝ物、美しい物、おいしい物の價値が——内地品のそれと比較してより價値のあるものが可成り多く舶來品にある上、中には全く内地品にはくやしくつてもないものさへあるのでありますから、絶對に舶來品を買はぬといふやうなことは今の所、何うしても實行しうるものではありません。

一體今回の地震のやうな大天災のあつたあとは、世の中が浮は調子になつて、かつて贅澤になるといふことは兎角ありがちのことで、ないが意見の總仕舞ひで、捨てゝ置いてもそれは自然に本に戻るものでありますが、さういふ呑氣のことを爲政者はいつてゐる譯にも行きますまいし、又實際今日國の財政からいへば由々しいことですから、奢侈を戒めるといふことは至極結構なことだと思ひます。而しこれによつて奢侈を止めうると考へることは出來ません。又さう奢侈といふものを一概に止めて仕舞ふことも考へものでしやう。

何故かといひますと、人といふものは何處かに餘裕といふものがあるから生きがひがあり、又何となく人間らしいので、餘裕がなくなつて了つたら、それこそ又震災當時のやうになつて了ふのでしやう。唯其餘裕のつけ方の如何で、それが過ぎればいけないでしやうし、又贅澤にもなるのでしやうから、その度々を能く考へることが、必要なのであります。所が此度々の考察といふものが誠にむづかしいばかりでなく、それを考察する教育といつたやうなものが、何うも此國には行はれて居ないやうに思はれます。

私は此事を私が從事してゐる仕事の一端から考へて見ましやう。例へば婦人が一本の洋傘を買はれるとする。一體洋傘といふものは、それが何んな種類の布で張つてあつたにしても、毎日日光に當るものですから、大抵大事に挿しても一年もすれば汚れて了ふものです。從て洋傘は其初めから一年だ

け揮すといふことを目當に置いて、その人の顏や着物の色にそう色氣や、感じのものを買へばよいのに、それ等の選擇は二の次にして、生地に工風をしてあるために高價となつてゐるものを買うといふやうなことが屢々あるのであります。これは頗る無駄なことで、洋傘といふやうな物は、假りに永持がするものとしても外でさすといふことが目的でありますから、細かい細工や工風より、全體の色の調子さへよければ、すぐに引立つて、而かもよい感じを出すものですから、選擇の目當を確定と其所に置いてさへ居れば、廉くつてよい調子のものを買うことが出來るのを、兎角にいらぬ洋傘屋の贅澤に眩惑されて態々高いお金を拂つて無駄をするのであります。

斯うした例は婦人が着物を買う場合などにも中々あるのであります。さうして凡て斯うした原因は婦人に趣味教育がないといふことから來るのであります……もう少し論じつめていへば婦人には兎角に必要といふものと、不必要といふものがはつきり判つてゐないといふことにもなるのであります。

これには斯うした物をやたらにこしらへて、やたらに賣り出す私共商人――又流行を作るものが惡るいからであるといふことも原因しますにはしますが、私自身だけの經驗からいひますと何うも一般婦人は、前お話したパラソルのやうに、其目的を十分に發揮したものは喜ばず、反つて末節に工風したものを喜ぶ傾向が多いのであります。これは獨り品物の上ばかりでなく、お化粧、結髮、着物の方にしてもさうです、そうして私は常に之れを恨みとして居ります。

私は往年「耳かくし」といふ束髮の結ひ方を日本に初めて紹介しました。それが何んなに流行つたか、それは兎に角にして、此頃米國の問題が起つて「耳かくし」攻撃が初つたら、すぐそれをよす人が出來たのはよしとして、洋裝に帽子の婦人までが「耳かくし」をよして帽子の下からちよきんと耳を無細工に出してゐる人が少なからずあるのを見受けます。そうしてそれが洋裝に何んな格好をするかは考へず、唯「耳かくし」といふものをしないから攻撃されないといふ安價な安神に甘んじてるのを見受けます。是等は眞に流行に對する婦人の無節操で「耳かくし」といふ束髮のよい所と惡い所とを辨へぬ人のことであらうと思ひます。

私は又最近埃及式化粧といつて眉のぬり方と、紅のつけ方を紹介しました。所が、それを顏の形と、眉の形のどうあるかにかまはず、眞似る人がふえましたそうして中には無理に

おかしな顔にして了つて平氣でゐる人も少からずあるやうに見うけます。是も亦、私の紹介したお化粧の仕方を穿違えてゐる一例であります。

凡て流行にはよい所と、一方に、面白くない所とを備えてをります、それでその缺點を甘く逃げて、よい所ばかりを取入れるのが利口で、且理解ある人のすることとです、そうして無理解は實に趣味の現表から來るのであります。

而しこの流行を追ふといふことは、恰かも人が、そこに何んな制限があつても贅澤〳〵と流れて行くやうな、とめてもとまらぬものでありましやうが、今日相當敎育ある婦人までが、流行といふものを無差別に追ふといふことは悲しむべきことであると思ひます。

そこで私は奢侈とか贅澤とか、いふものを防ぐには法律で制限するといふことも無論一策でありますが、それよりか婦人に對して物に對する意識と趣味の敎養を深く與へるといふことが必要であるかと思ふのであります。そうして婦人が物に對して最もはつきりした判斷をして、これだけはいる物、これはいらぬ物、これは高くとも買つて置くべき物、又安くとも買うべきものでない、そうして高いものよりは安い物の方が反つて趣味がある……………といふやうなことを十分に飲み込めるやうにしたいと思ひます。そうして尙商人が利のために、又は習慣のためにその希望に添はぬものを生産する場合には、婦人は進んで不買同盟のやうなものを作つて商人の反省を促すといふことも必要のことであらうと思ひます。一體日本の物、殊に婦人の使用するものは其種類が多すぎるのであります。これは日本人の生活の狀態から自然に生れ來たものでありますが、大に改良する餘地があります、例へば婦人の着物の縞柄のやうなものでも、其數は無數で、而かもそれは決句柄を變へさせた苦心ほど變へばえもしなければ必要もないもので、唯無數の種類を少しづつ作らせるといふために、その品物を高價にしてゐるだけの値打しかないほどのものであります、勿論手に取つて能く見ればそこに所謂澁い手の込むでゐる面白味もあるかも知れませんが、それは縞物のやうに日常實用的に着るもの〻上には、先づ顧る必要のない價値でありますから、新柄のものは二三種かに制限して仕舞へば、反つて丈夫で、見えもよく、値段も安いものが手に入ることになるのであります。又縞物の如き（日常品）ものは斯うした風に奬勵してこそよき奬勵になるのであると思ひます。それを一般の婦人は日常のものにすら、やれ色氣の、縞柄のと、細かい好みを入れて考へる結果、あれでもないこ

れでもないといふことになるので、商人は生産の能率を妨げられるため自然に其物の値段が高くなつて來るのであります。之れでありますから、普段着の如きものは色も成たけ汚れ目の立たぬ二三種の色にして、縞柄などは二枚に制限して、多數生産をさせるといふやうにしても少しも差支はなく、又その方が着た上に於てもよく、値段も安いことになるのであります。

斯うしたやうに婦人の心掛け一つで可成り徹底した贅澤防止も出來れば、國産奬勵も出來ると思ひます。唯それには何うしても婦人に物に對する意識を與へると共に、趣味の教養を十分に與へる必要があると思ひます。其一端として女學校の科外講義などに學者でなく實際家の智識を入れる必要があると思ひます。

資本主義に培はるゝ奢侈心理と流行心理

下田将美

一

護憲三派の内閣によつて開かれた臨時議會は財政經濟上何等根本的の新政策をも見せずに、たゞ曲りなりにも所謂奢侈關税の引上を通過させて七月三十一日から實施を見ることになつた。經濟上から見て奢侈關税の引上が何等の期待をも持ち難いものであることは既に世上に散々論議されたことであつて今更こゝに繰返す必要を認めない。しかし乍ら既に同案が議會を通過して法律となつた以上、果してそれがいかなる影響を經濟上に又社會上に及ぼして來るかを考へるのは無駄

なことではない。

これを純粹の經濟的立場から考へて見る。先づ貿易から云へば改正された關稅品目に該當する輸入品の總額は多く見て一ヶ年三四千萬圓以上には達しないので、その輸入が多少阻止された所で莫大な全貿易の上に根本的の變化等を與へる筈もなく、これによつて貿易の逆調を防止したり、國際貸借の均衡を回復して、爲替關係を有利ならしめ樣などと考へたならば、考へる方が間違つて居やう。寧ろ一時的の現象から云へば關稅の引上は商人の思惑を助長して多量の貨物を引上前に一時に輸入させる結果になる。現に今度の場合でも案が世上に傳はつてから實施迄に相當の時期があつたので思惑注文も可成に發せられ、實施前一日の七月三十日には輸入申告を急ぐ輸入業者に强いられて横濱の稅關は祭日であるにも拘らず臨時開關をして手續をした程、入荷は輻輳して居つた位である。

次に奢侈關稅の引上によつて生產と消費の方面にいかなる影響があらうかと云へば、これによつて奢侈品の消費を思ひ切つて減少せしめ得ると考へるのは愚の骨頂であらう。德川時代に行つたやうに徹底的に絹物を着ることを禁止してしまふやうな眞似をしても、やはり表は木綿に見えてて實質は絹である結城紬のやうなものが流行し出して、法律の力で所謂贅澤を抑へるとの不可能なことを立證して居る。しかるに今度はそれが、たゞ輸入品の關稅を引上げるに止つて、國內での奢侈には何等の干涉の手をも伸ばして居らない。それ故、今後事實上の成果として現はれて來るものは恐らくは保護關稅の恩惠を蒙つた、國產の奢侈品製造奬勵と云ふことだけに止つてしまふに違ひない。保護關稅は幼稚產業の保護と云ふ理由の下には一應受け入れられる施設であるけれども、奢侈品製造の保護奬勵と云ふ名の下には恐らくは、どんな名分も立て難いであらう。安い外國の奢侈品を防遏して、高くして粗惡な內地の奢侈品を國民に購はせることを奬勵するやうな、かやうな矛盾した結果に導いたのは、外國品だけの輸入を阻止して、內地の奢侈品に對して何等施すの策なき愚なる政策から生れた悲劇である。

更に奢侈關稅引上の國民經濟上に及ぼす惡るい影響は一般物價の騰貴の原因とならうとしつゝあることである。濱口藏相はこれが決して物價に影響せず、寧ろ物價低落の一因となるであらうとまで樂觀的意見を述べたが、事實はこれを裏切つてゐる、奢侈關稅の引上が單に一部の外國製奢侈品の價格を昂騰させるだけに止るならば何のことはない、しかし、アノ品目の中には原料品もある。又利に敏き小賣商や卸賣商

は、奢侈品關税の引上を一般外國製品の關税引上のやうに消費者に誤認させることによつて、總ての所謂舶來品を値上するの傾向と事實の存することと否めない。かうなつては一般物價に何等影響無しとすまして居るわけには行かなくなる、國民の經濟生活上最も寒心すべきは此一事である。

たゞ最後に奢侈關税の引上實施によつて現實に國家經濟上有利となることは關税收入の增加である。尤も關税引上によつて輸入は減少するから、其減少の程度如何によつて關税收入總額はいかに變化するかはわからぬが、何れにしても引上によつて税收の增加する計算になる可きは事實である。私は奢侈關税の引上は、これを他の理由の下に行ふよりも寧ろ國庫收入の增加を考へてと云つて行つた方が、より正直な、又それこそ理由らしい理由ではなかつたかとさへ思ふ。

さて純粋に經濟の立場から云へば奢侈關税の引上はかやうに大して效果を期待することなどは出來難いものであつて、濱口藏相もよくこれを自覺して居つたものと見え、最初此法案を議會に提出した時にも、其主旨とする所は國民の奢侈贅澤の氣風を一掃し、勤儉力行、消費節約の美風を涵養するのが目的であつて、輸入防遏や、國際貸借上の均衡を期するなどは寧ろ副たるものであるとの旨を説明した。かうなつて來ると問題は少しく經濟眼から離れて、社會的立脚地から見ればならなくなつて來るが、しかも此所謂精神的の效果なるものが果して輸入税の引上によつていくらかでも期待し得ることが出來るであらうか。國民の奢侈心と云ふものは果してかゝる外的の干渉によつて自由に左右され得るものであらうか。表面から見ると何となく經濟問題から離れてゐるやうに見える此問題も、實は寧ろ經濟生活の根本の出發點である、人間の慾望に深く根ざしてゐる。私はこゝにも筆を改めて、所謂奢侈防止の精神的效果を經濟的に見る必要を認めてくる、

二

そも〳〵奢侈とは何であるか、奢侈と必要品とはどこで區別せらる可きものであるかと云ふとそこに絶對的の分界線を劃して、はつきりと分けることは六かしくなつて來る。今日では物價が經濟界の一つのバロメーターと目せられるやうになつて、殊に勞働運動の盛んになるにつれて、勞働者が人間として生きる權利を當然の主張とするやうになつてから、勞銀と生活費とは極めて密接な伴侶となり、英國の勞働省でも、獨逸の勞働市場でも、濠洲の勞働裁判所でも、何れも物價中の、生活必需品の物價なるものゝ消長を勞銀消長の目標

として實際施設に利用するやうになつて來て居る。

そこでこの生活必需品なるものは何であるかと云へば、これは必ずしも、人間が露の命を支へ行くに足る可き最少限の衣食住の必要物ばかりをさすのではない。人間が一人生きて行くのには醫者に云はせれば、何カロリーかの熱量があれば足りるであらう、しかし、生活必需品とはこの最少限のカロリーの食物とたゞ寒暑をしのぎ得る衣と住とだけで足ると云ふのではない　その社會に住んで人並に人間らしく生くるに必需なものを指して云ふのである。從つて必需品なるものは時代の移るに連れ、環境の異るに連れ、文化の程度の變るにつれて、それ／＼に相違してくるのである。今度の奢侈關稅中にも、コーヒは奢侈品と見做されて八割五分の稅率引上を見て居るが、片田舍の山里ではコーヒも奢侈品であるかも知れぬが、今日の都會生活にあつては、コーヒは勞働者にとつても生活の必需品と稱しても一向差支へないであらう。かやうにどこまでが必需品で、どこからが奢侈であるかと云ふことは、はつきりと定めることが六つかしい、單に時と所によつて異るばかりでなく、更に階級によつても、富によつてもそれ／＼に相違して來るからである。若し又各個人の收入を目標として收入に不相應なものを奢侈とするならば百萬千萬の富豪によつては、ダイヤモンドに一萬金を投ずることも奢侈とは云へなくなつてくるであらう。こゝに於てか、コーヒが奢侈であるとか無いとか蓄音機が奢侈であるとかないとか、それ／＼の特定のものを一般的に、ある分類の中に入れてしまふことは無理である。單に個人を本位として分類することが無理なばかりでなく、社會的に見ても矢張り無理だからである。

然らば社會的に見て、奢侈、非奢侈を云々することが何故に無理であるか。國民の奢侈心を抑制することが何故に無駄なことであるかと云へば、それは現在の經濟組織が、奢侈を母とした資本主義の下に行はれて居るからである。營利を目的とした資本主義は奢侈によつて發達したと云つてもいゝ。尠くとも奢侈がなかつたならば資本主義は今日のやうな發達は來さなかつたに違ひない。今日、人は國民の氣風の輕佻を嘆じたり、奢侈の風の盛んなのを痛嘆したりして、勤儉力行して大に堅實な社會制度の下に國富を增し、產業を盛んにして、生產を增大せしめよと云ふが、實は過去の產業が盛んになり、生產が增したのは、富めるものは愈々高い奢侈生活に入らうとし、貧しきものは、どうかして富める者と同じ奢侈生活に入らうと、相競つて、消費し、生產した結果に他なら

ないのである、資本主義經濟はかくして發展したのである。

奢侈の心理は、一面から云へば又流行の心理である。ゾンバートは流行は資本主義の寵兒であると云つたが、新らしきものを追ひ、珍らしきものに向つて人々の欲望が動き、富めるものは流行の衣服を追ひ、貧しいものは貧しいなりに富めるものに似て非なる分相應の流行の衣服を追つて、社會全體が同一の趣味、好尚に向つて、大量貨物の需要を喚起して行き、それが、やがて又すたれて次の流行に從つて大量貨物を需要して行く所に資本主義的生産の發達が遂げられて行くのである。しかも消費者側はいつも從となつて、生産者側が主として作り出す流行の浪のまに／＼乘つて行くのである。

それ故、今日の如き經濟組織の下にあつては、云ひかへれば社會が資本主義經濟の下に組織されて居る限りは奢侈や流行を法律の手で抑へやうとしても到底出來るものではない筈である。法律の手ばかりではない、消費者側の精神的自覺でも矢張出來やうがない。何故ならば、奢侈は、流行は、消費者によつて左右されるのではなくして、資本主義の生産者なり商人なりによつて左右されて行くものだからである。

三

ハートレー、ウキザース氏の「貧窮と浪費」は奢侈を社會問題として露骨にきめつめた書物である。氏の所論は社會に貧窮が存在して居るのは一方に奢侈があつて、其爲めに必要品の生産が制限されるからだと云ふのである。ある一定の期間と一定の場所に於る經濟上の生産能力は無限である筈がなく、資本にも勞働にも自ら限度がある。此限られた生産がいかに利用されて行くかと云へば、生産者の立場から云へばただ利益の多い物を目的に生産すると云ふことになる。そこで自然、生産者は最も利益の多い奢侈品――それは國民の大多數の生活には不必要であつて、たゞ一部の人々の慾望を滿足させるにのみ役立つものを作りたがる。其結果限りある一國の生産力は少數の人々の爲めに犧牲となつて大多數の人々の必要な品は、奢侈品の製造に費されるだけの生産力を減ぜしめられる。かうして國民必需の食料や原料は常に尠く、騰く勞働者は常に生活苦から免れない運命に陷るのである。

ウキザースの例にとつたのは自動車で、今假りに半打の自動車を買はなければ慾望を滿足させることの出來ない人があつたとすると其人は實は貧しく餓えた人々の何ケ月分かのパンを奪取して居るのである。さう云ふ人は自分のして居ることが惡るいとは夢にも知らず、寧ろ自分が六臺の自働車を購

ふお影で勞働者は仕事にありつける。と考へて居るであらう。しかし勞働も資本も限りがある以上は生産さる可き貨物にも制限がある。一臺の自動車を作れば、それだけ富の一部は其の方に移動する。もしこんな奢侈物を作らないとすれば、使用さる可き富の一部は奢侈品から必要品の製造の方に移されて、それだけ生産が殖える。殖えれば需給の原則で安くなる。だから云ひかへて見れば、今日社會で奢侈品を需要すればする程、必需品の生産力は減少して貧乏人の生活は苦しくなるばかりなのである。

私はウヰザースと同樣に今日營利を目的とする資本主義はどうしても奢侈品を製造せずに居る筈がない事實をはつきりと認めたいと思ふ。恐らくは資本主義の下に生産が行はれて居る限り、奢侈關税の引上位で、奢侈が減少するものでもなく、又政府の力によつて國民にいかに勤儉の美風が鼓吹せられた所で、根本的に奢侈が改まるなどとは夢にも望まれないことであると考へる。何故ならば奢侈が完全に失はれた所には資本主義的生産の枝葉は枯れ衰へねばならないからである。

戰鬪の生活から

秋田雨雀

資本主義制度の道德は、自由競爭の觀念から生れる。奢侈は自由競爭の正當な息子であり、流行はその兄弟である。今日の社會制度に於いては、皆、この息子や兄弟の樣な氣持で生きて行き度いと思ふのは、自然の人情である。資本主義制度の存在する限り、奢侈も流行も、決してなくならないであらう。寧ろ制度は奢侈と流行を、奬勵し、又それに依つて支持されて居ると云つていゝ。

奢侈又は流行を、法律又は道德に依つて、矯正しようと云

ふことは、これ一個の空想に過ぎない。唯、形を變へるにすぎない。(假りに、さういふ法律や道徳が効果を奏したとしたところが)流行は、美の上から云つて、個性の死滅を意味し、奢侈は掠奪の事實を示す。流行に從はない者は、自己と社會との不調和を感ずる。奢侈を求むることも出來ない者は、自己の被掠奪階級に生きてゐることを感ずる。

流行と奢侈は、一方は調和の性質を持ち、一方は不調和の性質を持つて居るけれども、その實、奢侈は流行の兄弟であり、流行は奢侈の妹である。二ツは、同じく不調和の兄弟である。

流行や奢侈は、醜くいものである、しかし、人はその醜くいものを掩ろうとする。それは人々が、自己の屬してゐる、社會制度に、反省のないか或は、それに對して戰つてかく力を、缺いてゐるからである。流行や奢侈を求める心持の最も醜くいものは、所謂、プチブルジョアの生活態度である。かつて、彼等は、その制度の爲に、苦しめられないながら、今は、その制度の保持者、阿諛者、或は、妥協者として、生活しようとしてゐる。貧窮に慣らされた藝術家が、自動車を、乘り廻したり、賭博をしたり、株を買つたりする氣持が、卽ちその最も好い例だ。自動車を乘り廻すことは、文明を驅使することだと云つた私の知つてゐる文學者があつたが、斯ういふ人の心理は、自動車に乘り廻してゐる人よりも、一層、憐れむ可き心理狀態だ。

我々は、流行や奢侈の外に、出なければならない。我々は、少くとも、我々自身の生活樣式を、持たなければならない。我々自身の衣裳哲學を、持たなければならない。我々自身の生活方法を、もたなければならない。そして、その生活は、絶えざる一種の戰鬪の生活でなければならない。

文藝講座

（第三回）

小說作法講話

森田草平

（二）作中の嘘

前回の研究では、兎も角も小說の目的は人生の眞を寫すにありと斷じて、その必要と效果とを力說した。そして、最後に作者がそれ〳〵の用意を缺いだために、そこに生ずる作中の嘘の場合を五つ六つ擧げて、出來るなら實例に依つてそれを說明しようと約束して置いた。處が、いよ〳〵それを實行する段になつて、はたと當惑した。と云ふのは、名も知られない、幼稚な拙い作の中には、さう云ふ嘘は幾許でもある。が、名も知られない、誰も記憶してゐないやうな作の中から嘘の例を引いて來た處で、何にもならない。では、有名な傑作は――さう云ふ嘘がなければこそ、そして人生の眞實をあらはして居ればこそ、有名でもあれば傑作でもあるのである。妙なヂレムマに陷つたものだ。が、幸ひなことには、有名な作家の有名な作にも、搜して見れば、隨分さう云ふ嘘が少なくない。殊にその作家の初期の作には、それが多い。で、以下私の記憶する範圍に於て、さう云ふ嘘が含まれてゐると思はれるものを二つ三つ擧げて見たい。勿論、たゞ例證として擧げるまでゝある。故らにその作家を傷つけようとする意志の自分にないことだけは、豫め諒とせられたい。

武者小路實篤氏の「その妹」は、私の記憶する限りでは、藝術家としての生活と實生活との矛盾を描いたものである。主人公は最初畫家にならうとしてゐたが、從軍して失明したために、更に作家として世に立たうと決心した。彼は藝術を以て自己の生命とも天職とも信じてゐるのである。處が、世間は彼自身の信ずる程彼を買つてくれない。生活が逼迫す

る。盲目の作家は、その妹と共に陋巷に呻吟して、世を恨み、運命を呪ふ。最後に、その妹は兄を窮境から救はうとして、かねて自分が嫌つてゐる。又兄も輕蔑して已まない金持と結婚するために家出をする。それを見ながら、主人公はたゞ「俺には何うしていゝか分らない。止めていゝか、やつていゝか分らない」と云ふやうな意味の白を述べて、頭を掻き挘るに過ぎない。そこでこの芝居は終つてゐる。尤も、止めていいか、やつていゝか分らないと云ふのは、妹の家出には、他にもう一つの動機があるからで、彼等二人は或人から乏しいながらも補助を受けてゐた。その人の彼等二人に對する同情は、だん〲その妹に對する戀愛に移つて行く。又妹の方でも、最初は純粹な感謝の念であつたのが、だん〲愛情に變つて行く。終ひには恩人の家庭を破壞しさうな形勢になつたので、それを恐れて、到頭最後の決心をしたのである。で、主人公がそれを止められないのも、一應は點頭かれる。が、再應は承認されない。何となれば、その妹は一つの不道德を避けるために、他のより大いなる不道德に陷つてゐるからである。それも兄を扶けてその志を成させるために自己を犧牲にしたものとすれば、妹としてはその心根を可憐らしいとも見られよう。が、兄としては、そんな犧牲を甘んじて受けられるものでない。受ければ、自分が無頼漢になるばかりである。しかも主人公は手を空しうして、たゞ「俺には何うしていゝか分らない」としか云つてゐない。分らないことはない。すぐに妹を取り返して、例の恩人からも見られない所へ、二人で姿を隱せば足る。それはたゞ自分が藝術家たることを斷念しさへすれば出來るのである。しかも主人公は藝術家たることを最高の道德でもあるやうに思ひ込んで、決してそれを斷念するやうな氣振りは見せない。想ふに、作者は自己の生命とする天職のためには、何物を犧牲にしても構はないと云ふやうな作意の下に、この一篇を書かれたのではあるまいか。それならば明かに間違つてゐる。自己の生命を全うするために他人の生命を犧牲にすることは、人間には許されない。藝術家だからと云つて、特別扱ひにはされないのである。あの自分でナポレオンになるために――委しく云へば、自分の超人であることを立證するために――敢て人殺しまでしたラスコリニコフ（「罪と罰」の主人公）ですら、妹のツーニヤが自分を扶けるために金持と結婚することは、憤然として峻拒したではないか。それが人間性の眞實である。私は「その妹」を主題に嘘のある、少なくとも不徹底な所のある一例として擧げて置きたい。

次は性格描寫の上に生ずる嘘の例だが、私はそれを倉田百三氏の「出家とその弟子」から取つて見たい。あの第二幕を見ると、主人公親鸞は弟子どもに對して、又參詣の同行衆に對して、しきりに「歎異鈔」からその儘取つて來たやうな法話を試みてゐる。それは宜しい。親鸞上人を生かすためなら、いくら「歎異鈔」から取つて來ても構はない。たゞその親鸞が、今の本願寺の法主でも見るやうに、金殿玉樓の裡に起臥して、多くの侍者に傅かれながら、妙に納まつてゐるのが不思議である。そんな生温い親鸞の口から「歎異鈔」の中で見るやうな、あの切實痛烈な徹底した言葉が聞かれようとは、どうも思はれないではないか。史實に據れば、歸洛後の上人の生活は物質的には隨分窮乏したものであつたらしい。「われ死なば、亡骸を鴨川に投げて魚の餌食とせよ」と云はれたとまで傳へられるのも、その窮迫の一面を語るものである。勿論、常住の御坊なぞがあつた譯ではない。文字通りの草の庵から庵へ、他人の家から家へと轉々して廻られた。西洞院の庵室（劇の中では御坊になつてゐる、第二幕、三幕）と云ふのも、その一つに過ぎない。そして、最後には弟尋有僧都の善法院（第五幕）に寄食人となつたまゝ、寂しく世を果てられたと云ふことである。かうした一生を本願寺の第一世としては知らず、「歎異鈔」の作者としては、誠に似つかはしいものがあるではないか。いづれにしても、さう云ふ史實があるのに、何と思つて作者は故らにそれを變更せられたのであらう？私は史實を變更せられたこと夫自體を咎めるものではない、變更せられたがために、却て親鸞が親鸞らしくなくなつてゐるのを遺憾とするばかりである。

が、それよりもゝつと甚しい性格描寫の上の嘘を、私は上人がわが子の善鸞を勘當された一事に見るものである。あの「歎異鈔」の作者が、いや、「歎異鈔」の作者であるばかりではない、この劇の中でも極重惡人を以て自ら任じて、「人を裁くな、敵を赦せ」と敎へて倦まない親鸞が、そして、第一幕では自分を雪の中に突き出した日野左衛門をも赦して、人を裁かない實例まで見せてくれた上人が、いかに道樂をすればとて、又その昔どんな過失があつたかと云つて、世間並にわが子を勘當しようとはどうしても考へられない。縱しんば、それに似た史實があるにしても、吾々には考へられない。然るに「出家とその弟子」の作者は、この前親鸞らしい史實を捨てられた代りに、今度はこのどう見ても親鸞らしくない史實を採つて自家の題材とせられた。いや、この親鸞らしくたい史實を採られたゝめに、前の親鸞らしい史實をも捨てなけ

ればならなくなつたんだと云つた方がいゝかも知れない。即ち作者は善鸞の勘當をあり得べきことのやうに見せるために、親鸞上人を本願寺の法主にしてしまはれた。(私はさう見る。そして、恐らくこの臆測は誤つてゐない)成程、本願寺と云ふやうな、大きな財團、大きな生活機關の法主であつて見れば、そんな不都合な子供が出來たら、世間の手前、同行衆の手前、弟子どもの動揺を防ぐためにも、わが子を勘當しなければならないかも知れない。そして、眼と鼻の間まで來てゐながら、「浮世の義理に拒てられ」て、親子が會はずに別れると云ふやうな、不自然な芝居も演じて見せなければならないかも知れない。が、それと同時に、親鸞は最早親鸞でも、「嘆異鈔」の作者でもなくなつてゐる。そして、法主といふ俗人以上の俗物になり切つてゐるんだと覺悟しなければならない。想ふに、作者は上人を法主にする位の勇氣があつたら、あの「嘆異鈔」の拔書きのやうなことは一切云はせないで、序に第一幕も削つてしまへば可かつたのだ。さうすれば、別に矛盾も撞着もない、恰好の家庭悲劇が出來上つたのである。

ではどうしても「嘆異鈔」の親鸞を捨てるか、善鸞を勘當された上人を止めるかする外に、この二つの史實を結び着けて、しかも親鸞上人その人を生かす道はないか。その事に就いて、少しく考へて見たい。或上人の傳記者は、善鸞が東國に於て一向念佛の教義に異を立て、巫女神子の群に入つて、病を癒し、幸ひを祈つた。それに心を動かされて、同行衆の中大分歸依する者を生じたので、上人はわが子に勘當を嚴達された。そして、臨終の前に同人の勘氣を許されてはと勸める者があつても、「あの子憎しとて隔つるにあらず、目の當りわが法の仇と知りながら、由なき事を申すものかな」と云つて、終に諾かれなかつたとある。これは世間を恐れる法主よりも、いさゝか宗教家らしい。しかし法敵を裁くことは「嘆異鈔」の嚴禁する所ではないか。いづれにしても、自己の計らひで、人の子を勘當すると云ふことが、吾々の考へてゐる上人とも、上人自身の言葉とも一致しないのである。その矛盾はいくら胡魔化しても、到底胡魔化し切れるものではない。で、已むを得ずんば、それをその儘承認してはどうか。さう云ふ矛盾した性格の持主として、新に親鸞上人を認識するのである。所謂「人間としての親鸞」がそれである。たゞその場合上人は飽くまで自己の矛盾を意識して、常に自ら責めて已まない人でなければならない。さうすることに依つて、始めて統一のある人格となり得るからである。「出家とその弟子」の親鸞も、最後にわが子を赦してはゐる。が、勘當した

其事に就いては、別段悔いてもゐなければ、自己の矛盾を意識してもゐない。それが不可ない。そこに皷を鳴らして、彼の非違を――道徳上からではない、小說作法の上から――糺彈しなければならない理由があつて存するのである。

それから性格に對する註釋の噓にいつて一言して置きたい。これ迄は、別に故意でもなかつたが、噓の實例を二つながら戲曲から取つて來た。一つは戲曲の方が純客觀的な形式だけに、小說よりも噓が目立つからだと思つて貰ひたい。が、この註釋の噓だけは小說にあつて、戲曲にはない噓である。卽ち作者が地の文で作中の人物を評して、これ〳〵しかじかの人物だと云ふやうに、一定の註釋を加へてゐるに係らず、その人物の行動から直接に讀者の受ける印象がそれと喰ひ違つてゐるやうな場合を指して云ふのである。そして、さう云つたやうな作者の註釋は、又一種の性格描寫に過ぎないから、これを二種の性格描寫の間の矛盾と見ることも出來るのである。私はこの實例を菊地寬氏の舊作「小說擂」の中から引くつもりでゐたが、今その雜誌を手許に持ち合せないから、どうも擧げる譯に行かない。尤も、あの作は一人稱で書いてあつたから、主人公と作者が一緒になつてはゐた。しかもあの主人公の行動から受ける印象は、決して主人公自身の考へてゐるやうなものではなかつたのである。なほこの註釋の噓は、作者自身の經驗を題材にした場合に、最も陷り易いものであることを附け加へて置きたい、從つて私の舊作「煤煙」の中にも、私自身には氣が附かないでも、さう云ふ噓が澤山あるかも知れない。讀者の中、敢てそれを指摘するだけの勞を取つて下さる方があつたら私は光榮とするものである。

なほ對話の噓、時代の背景の噓と云ふやうなものも考へられるが、思ひの外に長くなつたから、一切省略して、たゞ脚色上の噓についてだけ一例を擧げて止めることにしたい、處で、その實例なるものが、どうも現代の作には餘り見當らない。少なくとも、有名な作には流石に見掛けないやうである。が、在來の、特に看客本位には多過ぎる位ある。例へば「忠臣藏」の五段目にしても、勘平の筒先にかゝつたのは、猪ではなうて舅の與一兵衞であつた。舅かと思つて腹を切つたら、親の敵の定九郎であたなぞと云ふのは、どうしても作者がその場の場當りを覘つた結果、脚色上の噓に陷つたものと云はなければならない。尤も、鐵砲だから誰に中るか分らない、と云へば云へる。しかし作中の出來事は、單にあり得ると云ふばかりでは不可ない　必ずさうあらねばならぬと云ふものでなければならない　作者がさうしたいと思つたから起

るのでなく、必ず起るべくして起るものであらなければならない。同じ事が性格描寫についても云はれるのである。いくら作者でも、その人物をして、その人物自らしようと思はないことをさせる譯に行かない。強ひてさせれば嘘になる。(「出家とその弟子」の主人公の場合もそれである。)一體素人の中には、どんな事をさせるのも云はせるのも、その人物を造つた作者の勝手だと思つてる人が多い。いくら作者だつて、さう思ふ通りになるものでない。私なぞの乏しい經驗から云つても、作中の人物が自分の手に負へなくなつて、どうしても豫定して置いた行動を取せられないことが往々にしてある。筆が澁るのは、多くさう云ふ時である。が、時には又、作中の人物が作者たる自分の手を離れて、一人で駈け出してくれることも稀れにはないでもない。脂が乘るといふのは、先づさう云ふ時である。そして、さう云ふ時に書いたものは、人物も事件でも、多く力を勞せずして、自づから人生の眞實を失はないやうに出來上つてくれるものである。

で、最後に主人公や女主人公の運命を決するものは、作者の意志ではなうて、人生の法則でなければならない。これが小說作法の上の鐵案である。いくら作者がその主人公を助けたい、女主人公を殺したくないと思つても、人生の法則が命ずれば、手を束ねて死なせなければならない。逆に又、いくら死なせたいと思つても、人生の法則が要求しなければ、無理に殺す譯に行かない。それだけは分つてゐる。問題はただ「人生の法則とは何ぞや？」と云ふことである。

人生の法則と云つても、決して吾々の外にある、吾々の知らないやうな法則のことではない、吾々の內にある、吾々の持つてゐる法則のことである。これは實例に當つて見ると、よく分る。例へば、こゝに普通の精神狀態にあつた或會社員が、何事もなく勤先から歸つて、直ちにその妻を射殺したと云ふ記事が新聞に出たとする。それだけでは、吾々には解らない。吾々の持つてゐる人生の法則に照して、そんな事があり得ようとは考へられない。で、若し實際さう云ふ事があつたと云ふことが吾々に信ぜしめようとするならば、新聞社はもつと吾々にも解るやうにその原因なり動機なりを說明してくれなければならない。吾々の持つてゐる人生の法則がそれを許し得るやうにしてくれなければならない。事件其者について云へば、それが吾々に解るやうになつた時、始めて吾々に取つて眞實となるのである。

こゝに又十歲になる男の子が自殺したと云ふことが新聞で報道せられた。これも萬有の心から見れば、或ひは解ることかも知れない。即ち吾々の知らない人生の法則では許されることかも知れない。もつと具體的に云へば、廣い世界の隅には、何處かに一人位はさう云ふ子供もあり得るかも知れない。が、吾々の心には解らない。吾々の持つてゐる人生の法

則では許されない。つまりそんな事はあり得ないとしか、吾吾には考へられない。で、吾々が萬有の心を以て心とすることが出來ない限り、吾々の持つてゐる人生の法則は、實人生のまだ知られない法則よりも、遙に制限された論理的なものであると承知しなければならない。從つて現在の世界に於ける多くの偶然の出來事が知的に整頓された創作の世界には入ることを許されないのである。一言にして云へば、小說家たるものは、その原因と結果とに於て、讀者をして了解させることの出來ないやうな事件の系列を作の中に挾んではならないのである。

で、私は今や初學者には容易に點頭いて貰はれないさうな作法上の要點に觸れてゐるのである。始めて創作に筆を染めた青年に對してその一節を噓だと云つて指摘しても「いえ、これは噓ではない、現に私の友達の屈服しないものである。が、上來述べて來た理由に於て、實際の出來事といふものは必ずしも小說の目的に副つた眞實ではない。好い小說の中の捕へた事實は、それが人生の一般的法則を代表してゐればこそ、そこに並べて置かれるのである。いくら實人生から取つて來た事實でも、それが人生の法則を代表してゐない限り、斷じて作中に取り入れべきものでない。前に親鸞上人のわが子を勘當したことがたとひ史實であつても許されないと云つたのは、眞個この理に外ならない。

隨分長く眞實の必要を說いた。が、これから小說修業の鹿島立ちをしようとする人々に對しては、いくらその必要を繰り返して置いても差支へあるまい。何となれば、たゞし眞實を捕へて離さないことに依つてのみ、小說や戲曲は百代に生きることが出來るからである。いかなる國のいかなる時代にも、必ず通俗作家といふものがあつて、氣の利いた發明や、華やかな背景や、思ひも寄らない新奇な冒險に依つて一代の人氣を一身に聚めながら、次々の時代に依つて、後から〳〵と捨てられ、忘れられて行くのは、目の當り吾々の見て來た所ではないか。しかもそれがたゞ眞實を掴むことを忘れたためだと云ふのは恐ろしい。同じ近松巣林子の作でも、生前はその時代物の方が人氣を呼んでゐたと云はれる。が、今日に及んでは、世話物は爭つて讀んでも、あの時代物を讀むものは、近松の研究家位を外にして、餘りないと云ふことも振返つて考へて見なければならない。馬琴の「八犬傳」は、その當時にあつては洛陽の紙價を高からしめたものである。しかしあの長たらしい傳奇小說を今後何人卒讀するものがあるだらうか。シヤトオブリヤンの「ルネ」は一時青年子女の狂熱的歡迎を受けたものだ。しかも今日に於ては誰一人彼の作を顧るものがない。彼の感傷主義が「喰はせ物」であることを讀者に看破されたからだとは、佛蘭西の文學史上に名高い話である。

戀と詩の生

——ブラウニング夫人の生涯——

矢野峰人

古今を通じ、言ふに足るべき女流詩人の數極めて少なき英吉利の騷壇に一際高く聳え立ち、其才藻の自由奔放なる發揮に有髯者流をして啞然たらしめ、以て弱少なる同性のために萬丈の氣を吐けるものは、ブラウニング夫人エリザベス・バレットである。急激なる近代思潮の變遷と趣味の革命とは、流石、其生時にありては夫君ロバトの聲名をも全く壓せしかの觀あるエリザベスの光輝をも多分に奪ひ去れるものの如く、今日、詩人としては、むしろ、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッテイが妹クリスティナの方を、ブラウニング夫人よりも優れりとなすのが一般の定說となつて居るやうではあるが、兎に角この二人こそは英吉利の產んだ閨秀歌人の双璧として、其業蹟前後未だ其比を見ざる所である。一は優婉につゝましく、あく迄もたしなみある女性としての面目を鮮に保ち、聲低けれども純に素直なる調に人の心を魅し去らんとし、一は大膽熱烈に、時としては粗豪にも陷らんばかりに男性的の聲朗に高く、人の心を壓せんとする。若し前者をば夕暮の野邊に咲く可憐なる月見草にたとふれば、後者はたえず光を望んで生きる向日葵にも比すべきであらう。

向日葵は陽性の花、光の花、即ち生命の花であり、歡喜の花である。その求むるものは、常に、赫耀たる生の炎に身を燒く事、換言すれば潑剌たる生命感の把住である。そこには、どこまでも全我を開放的に持して、おのれを訪れ、おのれ

に關る」一切のものを抱擁し、燒きつくさんとするの強き意志と熱望とがある。かれを貫くものは「生」に對するのはげしきあこがれである。そこには、たとひその爲に身を燒きつくさんとも、光を求むるなくしては生き得ざるものの姿がある。

ブラウニングとの戀愛完成にからまる事件を除いては、さまで波瀾曲折には富まされ、エリザベス・バレット女史が五十三年の生涯は、まさしく光を追うて生きる向日葵の生であつた。いはゞ彼女は、英吉利の暗い父の家から、光を追うて、南歐伊太利亞の、而も花の都フイレンツエまで奔つたのである。文字通に、風にもえ堪へぬ程の病弱繊奢なる身を以て、否、常に身を横へた病室から隣室迄歩を運ぶさへ殆んど至難の業と思はれた程の人が、多年恩愛の老父に背き、遂に戀人の腕に身を投ずるに至つたのは、一に、眞に生きん事を冀つたがゆゑではなかつたか。不斷に死と面接して居る身でありながら、相識る事僅に二十一個月の友——而も相合ふ事よりも寧ろ文通によりて語る事多かつた友と、單に結婚するのみか、共に見知らぬ國に趣くといふ事は、如何に考へても此上もなき大冒險と言はざるを得ない。實は、彼女が今日迄の生活は、既にそれ自らに於てすべて死を前にしての冒險であつたに違ないのであるが、而もブラウニングの許に走らんとする決心を固めた時程、彼女が生死の岐路に佇む冒險者の心を強く深く感じた事はあるまい。彼女は死を決する事によつて殆んど奇蹟的の生を贖ひ得たのである。(病褥にある四十女が戀人と遠くへ飛んで、愛兒を儲けたのみならず十五年の結婚生活を完うし得たといふ事を、奇蹟と言はないで何と言はう!)まことに彼女の生に對する意欲は、全く、死の意識によりて一層強く培はれたのであつた。即ち、彼女の一生は、死を恐れ死を憎むがゆゑに、一層強く激しく生に執着したものの生活であつた。この意味に於て彼女は正しく、刹那主義の數の不言實行者であつた。

今我等にとつてブラウニング夫人が特に興味あるのは、彼女が、死の壓迫と脅威との下に於て、如何に、與へられたる僅少の時間を擴大し充實しつつ生きたかといふ事、並に、眞に自己に生き自己を生きんとするには、人は如何に多大の犧

爲を拂はねばならないものであるかといふ事、また、かゝる際、奈邊迄、人は眞に曇りなき幸福を味ひ得るものであるかといふ事、さうした痛切なる重大問題の多くを提供するからである。

私はこれから、與へられたる紙面の許す範圍に於て、死を常に背景として生きた彼女の戀と詩との一生に就きその戀愛を中心として語らうと思ふ。

後のブラウニング夫人エリザベス・バレツトは千八百六年三月六日英蘭土ダムラのコクスホウルに生れた。父は西印度の富裕なる地主でエドワアド・バレツト・モウルトンと呼び、母はメアリと呼んだ。彼女が二歳の時一家はヒアフオウドシアのレツドベリに近きホウプ・エンドに移し住む事となつた。それはこのホウプ・エンドがバレツトの所有に歸してから、まだ間の無い頃の事であつたが、この地は風景の絶佳を以て世に知られ、小高い丘、小山を周圍に繞らして居るので眺望は遠く迄利かなかつたけれども、バレツト家の前には數流の小川を控へ、其岸には多數の灌木、常盤木の類生ひ繁つて、如何にも裝飾的の風致を備へてゐた。エリザベスの自然に對する愛はこゝで培はれたのである。バレツトは其住宅をば東洋趣味のものに改築し、土耳古風の窓のある樓なども建てた。エリザベスの下には相次いでエドワアドをはじめ八人の弟と二人の妹とが生れたが、彼女は特に父の愛する所となり、其敎育に對してはあらゆる犧牲が快く拂はれたのであつた。彼女は勿論弟妹と嬉戯する事もあつたけれども、それよりも更に深く孤獨を愛したらしい。彼女は特に小さ室を與へられてゐたが、其室は天井が高く、色硝子の嵌つた室があつて、それを洩れ來る月の光は壁に凭れたエリザベスの丈長髮に漂うて、彼女の姿をさながらに妖精の如く浮出させた。

エリザベスが九歳の時。(九)といふ所謂神秘數によりて彼女の暗示されたものは、彼女自分の語る所によれば、かのトロイ戰爭に於て、希臘軍が、敵都イリアムを攻圍するに九年を費したといふ一事であつた。彼女が此頃の娯樂の思ひ出は『花園の勇士ヘリトオル』と題する一篇に詳しい。

エリザベスが早熟の少女であつた事はいふ迄も無い事であるが、彼女の告白に從へば、八歳に滿たずして夙くも既に詩作に耽つたらしい。『マラソンの戰』と題する一篇は、全くかゝる早熟の才を反映するもので、十一歳を終らざる中に完成したといふ。父は大に之を得意とし、直に五十部を特に印刷せしめ、知人の間に頒つた程である。全篇四部七十二打よりなれるもので、彼女自分の認むる樣にポウプの譯したホオマアの改作ともいふべきもの、千八百十九年の日附を以て父に獻げられて居る。當時の心狀を記して彼女はいふ――「ポウプ譯ホオマアに對する愛は一方自分をポウプに傾倒せしめると共に他方希臘語に向はしめ、希臘語に對する補助として羅甸語にも向はしめた」と。恐らくこの言葉より推せば、彼女が八歳にしてホオマアを原文で讀んだといふのは眞實ではあるまい。

エリザベスの祖母は、この孫娘が詩作に耽るのを見て喜ばず、病氣と產兒と育兒とに追はれてゐた母はまた娘の物する韻文の題を顧みる暇無かつた際に、不斷の父の賞讚と激勵とは幼いエリザベスの心を、どれだけ明るく強いものにしたか。彼女の眼には殆んど唯父あるのみ、其耳はまた父の褒辭のみ常に快く鳴り響いたのであつた。この頃の彼女の父に對する愛情は、「誕辰の佳節にあたり父上に獻ぐるの詩」と題する初期の作に最もよくあらはれて居る。また數多き弟妹の中、彼女と最も意氣相投合したのは彼女よりも一年下のエドワアドで、二人は諸共に勉强もし戲れもした。這般の消息「弟に與ふる詩」に於て窺ふ事が出來る。

彼女を敬愛する多くの弟妹と、彼女を愛撫激勵する父の寵とを身一つに受けたエリザベスの前途は、幸福至極のものと思はれた。かうした中に彼女の唯一の快樂は讀書にあつた。「わたしは善い本も惡い本も讀んだ」と自ら語れるが如く、彼女は苟も書物の形を備へたものは、其種類と內容との如何に論無く、手當り次第に讀破した。而も一方乘馬の如き運動も甚く彼女の氣に入つた所であつた。彼女が十五歳の頃、野原で馬に獨りで鞍を置かんと試み、誤つてその鞍の下敷となつて脊髓に重傷を負ひ、數年間病床に呻吟する身となつたのも、全く乘馬熱の結果なのであつた。而もかうした餘儀無き

蟄居生活と病弱とは、却つてます〱彼女の讀書欲を增進せしむるに至つたのである。

エリザベスは或は樹蔭に、或は書齋に、ポウプ、コールリッヂ、バイロンを讀み、或は希臘の戯曲をはじめプレイトオの哲學を讀んだ。この少女は、かくして習作と熱意とによつて次第に詩歌の道奥深くわけ入つたのである。「私の生涯の大部分の事件は思想界に於て起つたのです」とは、彼女自らの告白であるが、彼女はかうした思想をば、詩形を借りて表現せんと努むるに至り、更に年を經るに從つて、「幼時の空想は遂に一つの意志となるに至つた。さうして其日より自分にとつては詩歌がはつきりとした目的となつてしまつた——讀書思索の目的及び生活の對象として。」

されば、彼女は既に千八百二十五年頃より諸種の刊行物に時々詩を發表するやうになつたが二十六年には匿名を以て詩集一卷を公にするに至つた。「心意論 及び その他」即ちこれであつて、正に詩人としての第一期を劃するものと言ふべきであらう。この頃彼女の特に愛讀した英詩人はポウプとバイロンとであつたが、既に「心意論」なる表題がポウプの「人間論」を粉本とせる事を示せる樣に、其詩形も五歩對句體を取つて、八十八頁の長きに亙り、「倫理的な詩歌こそあらゆる詩の中で最も優れたるものである」といふバイロンの言葉を敷衍解説せるものである。この作は其内容形式の兩方面に於て特に取立て丶いふべき何物も無いので、十七歳の少女の作とは言へさまで驚くに足らないが、唯當時彼女の讀書思索範圍が奈邊迄及んで居たかを示すと共に、其序文に於て彼女が詩歌を如何に見て居たかを窺ふ事が出來る。

エリザベスが生れてはじめての而して最も大きな悲哀ともいふべき母の死が起つたのは千八百二十八年十月一日の事であつた。行年四十八、夫より數年長じてはゐたが往々にして暴君的なる彼によく仕へ、默々として犧牲的の生涯を送つたのであつた。茲に於て、エリザベスはいよいよ、自ら一家の主婦たる位置に立つて、一方父の寂寥を慰むると共に、數多き弟妹の面倒をも見ねばならなくなつた。

當時の社會に於てはキルバアフオースを急先鋒として奴隷解放の呼聲非常に高かつたが、時の流には抗し難く、ジャメ

イカに於けるバレット家の富の一大財源たる奴隷勞作による收益は、その解放によりて全く失はるゝに至つた。エリザベスにとつては特に思ひ出深きホウプ・エンドの家を引拂つて、この一家がシドマスに移らざるを得なくなつたのは全く其影響の爲である。シドマスに留る事僅に二年、こゝでは第二詩集『縛られたるプロミイシュウス及び雜詩』を自費出版した以外に記す事はない。この『縛られたるプロミイシウス』は、希臘イースキラスの作の飜譯なので、譯者の語る所に從へば全篇十二日間に譯了されたといふ。譯者がこの飜譯に對して如何に自信を有しなかつたかは、後年これを改譯した時、この初譯の世間から全く忘れられん事を希つたに徵して明である。この一卷に收められたる他の創作に就ては、「多少取るべき點が無いでもないが、イースキラス譯の拙惡を償ふに足らない」と語つて居る。

エリザベスの一家はやがてシドマスから倫敦に轉じた。風光明媚の地より紅塵萬丈の都に出て來た事とて、家族のものは誰も皆塵埃に塗れた生活に惱む事甚しかつたが、わけてもエリザベスの上には其影響著しく、彼女の健康は頓に衰ふるに至つた。而もこの健康の衰弱は彼女を驅つてます〳〵詩歌に執着せしむるに至り、彼女はたえず創作に耽つたのみならず時折はこれを雜誌などに發表した。

彼女の友人中、彼女に最も接近して多大の影響を與へたのは、遠縁に當るジョン・ケニヨンであつた。彼は西印度の生れではあつたが、其趣味教養の點に於ては全く歐洲風で、財力豐に悠々自適の生活を營んでゐた。好んで文士藝術家と交り、時折は自らも詩作したが、知名の士の間に立つて相互を結びつける事に特に興味をもつてゐた。コールリツジ、ワアヅワス等皆彼の友人で、人々彼に對して「獅子の飼養者」といふ綽名を奉つて居た程である。彼はエリザベスを「從妹」と呼ぶ事を喜んで居たが、彼女も亦此人に指導さるゝ所非常に大であつた。エリザベスが後年、未來の夫たるべきロバト・ブラウニングにはじめて與へた手紙の中に「ケニヨンさんがよく貴方の事を申します、あの親愛なるケニヨンさんが——わたしの友人であり援助者であり、又わたしの書物の友人にして援助者！さうして批評家であり同情者であり、不

蘭の親友である人」と背いて居るのを見ても彼女がこの「從兄」を何に見てゐたのがわかるであらう。エリザバスがメアリ・ラッセル・ミットフォード孃と相識るに至つたのも、全くケニヨンを通してであつた。この兩孃が相識つた翌日、ケニヨンはこの二人をはじめ、ワアヅワス、ヲルダア・ザヱエジ・ランダア等の如き詩壇の巨星を自然に招待し晩餐を共にしたが、この日の印象をミットフォード女史が家郷に書き送つたのを見るとエリザベスの當時の面影躍如たるを覺える。「エリザベスの君は優にやさしくまた可憐なれば、さながらに燦爛たる花眺むらん心地して」と、まづ全體の印象を叙し、やがて筆を繼いで「其姿がかぼそに華奢に、いと表情に富みたる顏の兩側には烏羽玉の黒髪長く垂れかゝり、眼はつぶらにやさしく、黒き睫毛もて縁どられ、微笑はさながらに日光のやうなり」と細説して居る。ミットフォードが他の一友に送つた手紙の中には、「いみじき手足、秀でたる額をもてる圓顏、形美しく表情にみちたる大いなる口、口開けし、珊瑚の如き唇、大きくして歯並正しく、すこやかに白く輝ける歯、顏色の淺黒さはさながらに佛桑花を偲ばしむ。云々」とも見えて居る。

『新月刊雜誌』の六月號に掲げた『マアグレット物語』と題する長篇こそ、彼女が今迄に物した中の最も勝れたる作品で、長足の進歩を示すと共に、彼女をして、一般公衆の眼にも、一躍新進詩人の列に加はらしむるに至つたものである。これは純粋に想像的な作品で所謂二重人格を描けるもの、即ち人の將に死なんとするやわが分身を見るといふ事を歌つたもので、怪奇凄愴の氣分全篇に漲りあふれ、殊に其各節の終に繰返した「マアグレット、マアグレット」といふ覆唱詞こそ、エリザベスがこれを試みたる最初の例として有名である。

エリザベスが重病に罹つたのは千八百三十七年頃の事である。俗説には肺の血管が破裂したのだといふが、兎に角彼女の健康が益々且つ急に險惡に傾いた事は確である。父の唯一人の兄弟なる人が死んだのもまた此頃の事であつた。晩冬から早春へかけての氣候が彼女にとつては最も苦痛にみちたものであつたが、暖くなれば健康も大に恢復するだらうとい

ふ醫師の言葉に力を得て春の訪づれを待つた。千八百三十八年の春は來る事特に遲かつたらしい。而も彼女は病間詩集刊行の事を企てなどした。其年の秋になつて彼女の健康は益々危殆に瀕するに至つた。そこで最後の手段として、醫師の勸告に從ひ、轉地を企てたが、目下の病狀では到底遠隔の地に赴く事を許されないので遂にトーキーに愛弟エドワアドを從へて行く事になつた。南海の微風に吹かれて、最初しばしば健康も幾分恢復した樣にも思はれたが、而も離床は勿論不可能なると共に談話すら囁の程度に止つてゐた。かうした間にも彼女はミットフォードに宛てゝ一週少くも二回は長い手紙を書いた。又、下は雜誌より上はプレイトオの哲學書に至る迄、凡そ手に入る限りのものをばあらゆる方面に亘つて讀んだ。

千八百四十年七月十一日、それは土曜日の事であつたが、愛弟エドワアドは二人の友と共に、快速力で名を得たる快走船「ベル・ソーヴアジュ」に數時間の舟遊を試みるつもりで沖邊迄に漕ぎ出でた。彼等はティンマスのあたり迄行くつもりであつたらしい。土曜日は暮れ果てたがヨットの人たちは誰も歸つて來ない。生憎父はトーキーに居なかつたので、家にはエリザベス唯一人、不安と焦燥との中に悶え苦しんだ。日曜日となつたけれどもヨットは歸つて來ない。兎角するうちに流言しきりに行はれて、「ベル、ソーヴアジュ」號とおぼしき舟がテインマスの沖で沈むのを見た人があつたといふ。然し、これら三人の青年は或はエクスマス迄遠漕したのかも知れないといふので探索の人を派して取調べさせて見たが依然として彼等の消息は不明である。が、遂にエクスマスの二人の船乘は、四人の——水先案内を加へて——若者を乘せたヨットがティンマス沖で沈むのを確に見たといふ事を告げた。茲に於て、各人の遺族は屍體搜索に着手すべく、準備萬端整へたる二艘の船は、ヨットの沈沒せりとおぼしき所に送られたのである。

父バレットは倫敦から馳せ參じ、他の二人の青年の親と共に莫大の賞を懸けて死體を搜索せしめたが、容易に發見されず、遂に十八日になりて、遭難者の一人なるカアライル・クラアクの死體のみ、先づ、ダアトマスから四哩ばかりの所で

繩舟によりて引き上げられた。死沒後既に數日を經て居るにもかゝはらず、死體は毫も損傷されず、上衣の鈕穴には出立の日挿した花さへ尙も殘つて居たといふ。エドワアド・バレットの死體が上つたのは越えて八月四日の事であつた。トーベーの沖を漂つて居るのが船夫によつて發見され直に引き上げられたのである。水先案內ホワイトの死骸も次で發見されたけれども、殘る一人のチヤアルズ、ヴンネックの死體は果して發見されたか否か今以て疑はしいのである。

この珍事がエリザベスの精神上に如何に大なる打擊を與へたかはいふ迄も無い事である。「常日頃からかよわきわれは瞬く間に打ひしやがれぬ、淚流さん暇もなく」とは、この時の彼女の述懷である。

最も愛する弟を失つて、今は唯悲しき追憶にのみ滿ちたトーキーの胸は、最早彼女にとつては悲愁堪え難いものになつたので、一日も早く倫敦に歸り、父弟妹等と團欒の生活を送りたいと希ふ事切であつたが、遂に醫師の許可を得ておのが家にと歸り着いたのは四十一年の晩夏であつた。その歸宅後幾日ならずして彼女を見舞つたミットホオード女史の言葉によれば、エリザベスは「想像したよりも元氣であつた」が、而も紅顏は全く褪せて昔日の面影見るべくもなかつた。

エリザベスが此の如く、自ら生死の境に彷徨ひ、或は肉親知己の死を眼前に見つゝある間に、詩人としての彼女の聲名は漸く高まり來り、「クオータリイ・リギニー」九月號に彼女の著作に對する批評を揭げられ併せてその秀逸を載せるに及んで、彼女の位置は益々確定的のものとなつて來た。

四十一年の初頃には寒氣の爲一寸惱んだ事もあつたが幾日もなくして癒え、徐に健康の囘復するにつれて文學上の友との文通も繁くなり、時としては特に親しい人を病室に招じ入れる事もあつた。讀書と執筆とはいふ迄も無く彼女を慰むる唯一の糧であつて、若しこれ無くんば彼女は恐らく長く生きる事は出來なかつたであらうと思はれる程であつた。而も、かうした心理の機微に通じ得ざる醫師は、彼女が希臘語の書物を手にする事を極力斥けたので、彼女は遂に。プレイトオの哲學書をば小說風に製本させ、以て醫師の長談議から纔に免れる事を得たといふ。兎に角、ケニヨンが彼女を目して「何

でも喰べる從妹」と呼び、彼女自らも「私は主義も方針も無く讀んだ」と語れるやうに、彼女の讀書欲には極限が無かつた。

四十二年の二月頃には大分元氣も出て、寢臺から長椅子迄は歩く事が出來る樣になり、四月頃には隣室迄位は歩を運び得る樣になつた。四十二年も無事に暮れ、四十三年の二月には詩集發行の意志があつたが、遂に發行書肆を見出し得ず、四十四年の夏を過ぎてからはじめて世に出づるに至つた。エリザベス・バレットの名が北米で有名になつたのも、さうしてそれには當時「グレイヤム・マガジン」の編輯をやつてゐたエドガア・アラン・ポウの推奬が與つて力あつたのも、全くこの二卷の新詩集によつてゞあつた。否そればかりではなく彼女が、當時は未だ一般に認められてゐなかつた詩人ロバト・ブラウニングの天才を公に賞揚したのも、この詩集に收められた長篇「レデイ・ゼラルデイーンの求婚」の中に於てであつた。エドマンド・スペンサアの田園詩、ペトラルカの小曲、ワアツワスの牧歌、テニスンの夢幻體と、順次に彼女の尊敬する詩人と作とを舉げた後で「或は更にブラウニングが『柘榴』を取れよ、その眞中二つに切らば、人間の血潮に染みし心を見む」と極めて簡勁適切なる語を以てこの新進詩人の特色を評し去つた。こゝに『柘榴』と言へるは、ブラウニングが千八百四十年から公にし始めた詩集『鐘と柘榴』を意味するのである。

この時以來、彼女が友人に宛てゝ書いた手紙の中には、ロバト・ブラウニングの名前が屢々見出される樣になつた。ロバト・ブラウニングの父はエリザベスの「從兄」ケニヨンと同窓の友だつた關係から、ケニヨンはこの年少詩人に對して我に厚意を示してゐたのであるが、今や我をばエリザベスに紹介せんとするに至つた。

ブラウニングがエリザベスに宛てゝはじめて書いた手紙には千八百四十五年一月十日の消印であつて、本文は彼一流の卒直さを以て、「私は心からあなたの詩を愛します、親愛なるバレット孃よ、——私がこれから差し上げる手紙は決して口から出任せのお座なりではありません」と始まり、中央に至つては「私は衷心からこれらの詩集を愛します——さうして

またあなたを愛します」と書いて居る。これに對する彼女の返事は翌十一日に認められたが、その中には流石感謝と歡喜とにあふれんとする心をば抑へた跡著しく、「かかる人よりかゝる玉章賜はらんとは。同情こそは有り難けれ――この身にとりては殊更に。さはれ、詩人の同情は、かゝるうたびとの同情は、わが身にとりて同情の眞髓とこそ思はれて」となどといふ文字が見出される。十三日にはブラウニングが又もや手紙を書き十五日にはエリザベスからも返事するといふ調子で二人の文通は間斷なく行はれる樣になつた。從つて二人が互に相見るの機運も日一日と熟して來たのであるが其年五月六日エリザベスの書いた手紙を見ると、「十二日にはあなたはケニヨンさんを御訪問の由、妾の弟妹たちもあなたと妹君とに御目に懸りに參る筈です。妾にもあなたに直とお目に懸る勇氣が出るでせうか？云云」とあり、十二日の手紙には、「火曜日にはお目に懸れる事を考へてゐました――妾の妹の眼で――おはじめて」とも書いて居る。これに對して同日認めたブラウニングの手紙には「いつか私も私の眼で、私自身の眼で貴女にお目に懸ります」と記し、更に翌十三日書いた手紙には、「御不快である間はお會ひ下さいませぬ樣に」とも念を押した。エリザベスはこれに對し「若しお越し下さるおつもりならば御出で下さい。妾こそきつと得る所があるのですから、若しあなたにとつては何の御利益にもなりませんが」と書き、更に、ケニヨンと一緒に來るか、それとも一人來るか、若しお一人ならば不時の差支がない限り何時にてもお目に懸る、但し二時以後六時以前の事。萬一ケニヨンと御一緒ならば、彼は月曜日に玆を立つて旅に出るから六月迄お待ちを願はねばならないといふ事を書き添へた。然し六月迄年月を辛抱するといふ事はブラウニング如き性格の人には堪へ難い事である。彼はエリザベスを單獨に訪問しようと決心して、五月十六日金曜日の夜「來週の火曜午後二時お伺ひ致します、萬一差支がおありの節御知らせ下さる時間が無いと困るから、それより早くはお伺ひ致しませぬ」と書き送つた。エリザベスからは翌日直に返事が來て、御差支無くば二時よりも三時の方がよろしいと記してあつた。

（以下次號）



芥川龍之介

四　木村巽齋（承前）

巽齋はかう云ふ名聲のうちに悠々と六十年の生涯を了した。この六十年の生涯は無邪氣なる英雄崇拜者には或は平凡に見えるかも知れない。巽齋の後代に傳へたものは名高い蒹葭堂コレクションを除けば、僅かに數卷の詩文集と數幀の山水とのあるばかりである。しかし大正の今日さへ、帝國大學圖書館の藏書を平然と灰燼に化せしめた、恬淡無欲なる我等の祖國は勿論蒹葭堂コレクションをも無殘なる散佚に任かせてしまつた。アルコオル漬のダアラカは何處へ行つたか？　大雅や柳里恭の畫は何處へ行つたか？　クレオパトラの金髮は、——そんなものはどうなつても差支ない。が、畢竟蒹葭堂

主人は寥々たる著書と畫との外に何も傳へなかつたと言はなければならぬ。

何も？——いや、必しも「何も」ではない。豐富なる蒹葭堂コレクシヨンは——殊にその萬卷の藏書は當代の學者や藝術家に大いなる幾多の先例を示した。是等の先例の彼等を鼓舞し、彼等を新世界へ飛躍せしめたのは丁度ロダンだのトルストイだの或は又セザンヌだのの我々を刺戟したのも同じことである。このペエトロン兼蒐集家たる木村巽齋の恩惠もやはり後代に傳へた遺產、——謹嚴なる前人の批判によれば、最大の遺產に數へなければならぬ。けれども冷酷に言ひ放せば、それは丸善株式會社の我々に與へた恩惠と五十步百步の間にあるものである。少くとも所謂趣味に富んだ富豪或は富豪の息子の我々に與へ得る恩惠と五十步百步の間にあるものである。僕はかう云ふ恩惠の前に感謝の意を表するのを辭するものではない。しかし唯その爲にのみ蒹葭堂主人を賛美するのは——第一に天下のペエトロンなるものを已惚れさせるだけでも有害である！

もう一度便宜上繰り返すと、巽齋の後代に傳へたものは僅かに數卷の詩文集と數幀の山水とのあるばかりである。もし蒹葭堂コレクシヨンの當代に與へた恩惠の外に、巽齋の眞價を見出さうとすれば、どうしても是等の作品に——少くともちよつと前に擧げた一幀の春山圖に立ち歸らなければならぬ。あの叢中に磅礴する春はたとへば偉大なる大雅のやうに、造化を自家の鍋の中に溶した無上の甘露味には富んでゐない。と云つて又蕪村のやうに、獨絕の庖丁を天地に加へた俊爽の風のないことも確かである。が、少しも凡庸ではない。丁度大きい微笑に似た。うららと明るい何ものかはおのづから紙の上に溢れてゐる。僕はその何ものかの中に蒹葭堂主人の眞面目を、——靜かに人生を樂しんでゐるディレッタントの魂を發見した。たとひ蒹葭堂コレクシヨンは當代の學者や藝術家に寸毫の恩惠を與へなかつたとしても、そんなことは僕の問ふ所ではない。僕は唯このディレッタントに、——如何に落寞たる人生を享樂するかを知つてゐた。風流無双の大阪町人に親しみを感ぜずにはゐられないのである。

我々はパスカルの言つたやうに、ものを考へる蘆である。が、實はそればかりではない。一面にはものを考へると共に、他面には又しつきりなしにものを感ずる蘆である。尤も感ずると斷らないにもせよ、風にその葉をそよがせるのは風を感ずるのと似てゐるであらう。しかし我々のものを感ずるのは必しもそれほど機械的ではない。いや、黄昏の微風の中に萬里の貿易風を感ずることも案外多いことは確かである。たとへば一本の糸杉は微風よりも常人を動かさないかも知れない。けれども天才に燃えてゐたゴッホはその一本の糸杉にも凄まじい生命を感じたのである。この故に落寞たる人生を十分に享樂する爲には、微妙にものを考へると共に、微妙にものを感じなければならぬ。或は腦髓を具へてゐると共に、神經を具へてゐなければならぬ。果然古來のディレッタントは多少の學者であると共に、多少の藝術家であるのを常としてゐた。物産の學を究めると共に、畫道に志した巽齋も正にかう云ふ一人である。微妙にものを考へると共に、微妙にものを感ずる蘆、――さう言へば巽齋は不思議にも蒹葭堂主人と號してゐた！

しかし棘のない薔薇はあつても、受苦を伴はない享樂はない。微妙にものを考へると共に、微妙にものを感ずる蘆は即ち微妙に苦しむ蘆である。この故に聰明なるディレッタントは地獄の業火を免れる爲に、天堂の莊嚴を捨てなければならぬ。更に手短かに言ひ換へれば、あらゆる惡徹底を避けなければならぬ。無邪氣なる英雄崇拜者は勿論かう云ふディレッタントの態度を微温底とか何とか嘲るであらう。けれども微温底に住する可否は享樂的態度の可否である。享樂的態度を否定するのは、――古來如何なる哲學と雖も、人生の使命を闡明するのに成功しなかつたことは事實である。昔はその不可なるを知つて、しかも仁を說いた孔丘さへ微温底なる中庸を愛してゐた。今はカフエに出沒する以外に一事を成就しない少年までも灼熱底なる徹底を愛してゐる。が、それは兎も角も、貪慾に歡喜を求めるのは享樂を全うする所以ではない。巽齋も亦この例に洩れず、常に中庸を愛してゐた。巽齋自身行狀を記した一卷の「蒹葭堂雜錄」は如何にその心の秤の平衡を得てゐたかを示すものである。由來貧富のロマンティシズムほど文人墨客を捉へたものはない。彼等は大抵清貧

を誇るか、或は又豪奢を誇つてゐる。しかしひとり巽齋だけは恬然と儉素に安んじてゐた。

「余家君の余貲に因つて、毎歳受用する所三十金に過ぎず。其の他親友の相憐を得るが爲めに、少しく文雅に耽ることを得たり。百事儉省にあらずんば、豈今日の業を成んや。世人は余が實を知らず。豪家の徒に比す。余が本意にあらず。」

一年に三十兩の收入と言へば、一月に二兩二分の收入である。如何に寶暦明和の昔にもせよ、一月に二兩二分の收入では多錢善く買ふ譯にも行かなかつたであらう。しかもなほ文雅に耽つたばかりか、蒹葭堂コレクションさへ殘したのはそれ自身豪奢の俗惡なる所以を示してゐるものと言はなければならぬ。(生憎今は旅先にゐるから、參考する書物を持つてゐない。が、寶暦明和の昔はざつと米一石に銀六十匁位の相場である。假に金一兩を銀四十匁位に考へた上、米價を標準に換算すれば、當時の一年に三十兩は僅かに今日の千圓未滿であらう。尤もこれは當推量以上に信用の出來る計算ではない。)

「寶歴六年余廿一歲、森氏を娶る。生質微弱にして余が多病を給するに堪へず。況や十年を歷と雖も、一子を產せず。故に家母甚だこれを愁ふ。明和二年家人に命じ、山中氏の女を娶り、給仕せしむ。(中略)三年を歷て妻森氏明和五年冬一女を產す。又明和八年一女を產す。妾山中氏より妻の微質を助け、二女を憐愛す、故に妻妾反更和好にして嫌惡の事なし。」

儉素に安んじた巽齋の偏愛を避けたのは勿論である。恐らくは妻妾の妬忌しなかつたのも貞淑の爲ばかりではなかつたであらう。

「余弱冠より壯歲の頃まで、詩文を精究す、應酬の多に因つて贈答に勞倦す、況や才拙にして敏捷なること能はず。大に我が胸懷に快ならず。交誼に親疎あり。幸に不才に托し、限つて作爲せば、偶興の到にあひ、佳句を得て快樂の事とす。」

詩文は巽齋の愛する所である。しかも巽齋はその詩文にさへ、妄に才力を弄さうとしない。たとひ應酬の義理は缺いても、唯好句の陶然と懷に入る至樂を守つてゐる。かう云ふ態度の窺はれるのは何も上に擧げた數節ばかりではない。巽

齋の一生を支配するものは實にこの微妙なる節制である。この己を抑へると共に己を恣にした手綱加減である蒹葭堂主人の清福のうちに六十年の生涯を了したのも偶然ではないと言はなければならぬ。

　前にも度たび擧げた春山圖は老木や巨巖の横はつた奥へ一條の幽徑を通じてゐる。その幽徑の窮まる處は百年の雪に埋もれた無人の峯々に違ひない。天才と世に呼ばれるものはそれ等の峯々へ攀づることを辭せない勇往果敢の孤客である。百年の雪を踏破することは勿論千古の大業であらう。が、崖花の發したのを見、澗水の鳴るのを聞きながら、雲と共に徂來するのもやはり一生の快事である。僕の愛する蒹葭堂主人はこの寂寞たる春山に唯一人驢馬を歩ませて行つた。春山圖の逸趣に富んでゐるのも素より怪しむに足りないかも知れない。……………

秋季の好讀物

改造社藏版

著者	書名	體裁	版	定價・送料
法學博士 福田德三著	社會政策と階級鬪爭	四六判 上製	廿六版	定價參圓 送料廿一錢
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	四六判 上製	新刊	定價貳圓 送料十七錢
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	四六判 上製	六版	定價壹圓五十錢 送料十五錢
法學博士 穗積重遠著	離婚制度の研究	菊判 上製	新刊	定價拾圓 送料四十五錢
經濟學博士 本庄榮次郎著	日本社會史	菊判 上製	十八版	定價貳圓五十錢 送料十七錢
文學博士 朝永三十郎著	カントの平和論	四六判 上製	六版	定圓壹圓五十錢 送料十五錢
文學博士 桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	四六判 上製	六版	定價參圓五十錢 送料貳十一錢
文學博士 松本亦太郎著	心理學講話	四六判 上製	廿二版	定價四圓廿錢 送料廿一錢

秋季の好讀物　改造社

著者	書名	版	體裁	定價・送料
阿部次郎著	北郊雜記	十六版	菊半截上製	定價壹圓九十錢 送料十五錢
倉田百三著	超克	四十版	四六判上製	定價貳圓貳十錢 送料十七錢
吉江喬松著	近代文明と藝術	六版	四六判上製	定價貳圓 送料十五錢
武者小路實篤著	第三の隱者の運命	改版	四六判並製	定價壹圓九十錢 送料十七錢
山本有三著	嬰兒殺し	七版	四六判並製	定價貳圓 送料十五錢
藤森成吉著	東京へ	五版	四六判上製	定價貳價廿錢 送料十九錢
菊池寛著	信康父子	近刊		
山川均著	レニンとトロツキー	十二版	四六判上製	定價壹圓五十錢 送料十貳錢
末弘嚴太郎著	嘘の効用	卅六版	四六判上製	定價貳圓六十錢 送料十九錢

秋季の好讀物

改造社出版

著者	書名	版	判型	定價	送料
谷崎潤一郎著	愛すればこそ	百二版	四六判上製	定價壹圓六十錢	送料十五錢
谷崎潤一郎著	愛なき人々	卅五版	四六判上製	定價貳圓	送料十七錢
吉田絃次郎著	芭蕉	十二版	四六判上製	定價壹圓六十錢	送料十五錢
吉田絃次郎著	タビデと子たち	十一版	四六判上製	定價壹圓八十錢	送料十五錢
賀川豐彦著	死線を越えて	二百八十一版(改版中)	四六判上製	定價參圓	送料十九錢
賀川豐彦著	太陽を射るもの	百七十六版(改版中)	四六判上製	定價貳圓	送料十七錢
賀川豐彦著	星より星への通路	四十八版	四六判上製	定價壹圓五十錢	送料十九錢
廚川白村著	近代の戀愛觀	百十三版	四六判上製	定價壹圓五十錢	送料十九錢
廚川白村著	苦悶の象徴	五十版	四六判上製	定價壹圓	送料十五錢

改造社運動叢書

著者	書名	版	定價	送料
熊谷一彌著	テニス	十七版	定價貳圓參拾錢	送料十七錢
三宅太助著	野球	九版	定價貳圓八十錢	送料十九錢
梅澤親光著	水泳	五版	定價壹圓八十錢	送料十五錢
香山蕃著	ラクビー	近刊		
山田浩二著	撞球	近刊		
野口源三郎著	オリンピアへの旅	四版	定價貳圓五十錢	送料十七錢
槇有恒著	山行	四版	定價參圓	送價十九錢

大杉榮著

（コロタイプ寫眞版一葉及寫眞版六頁挿入）

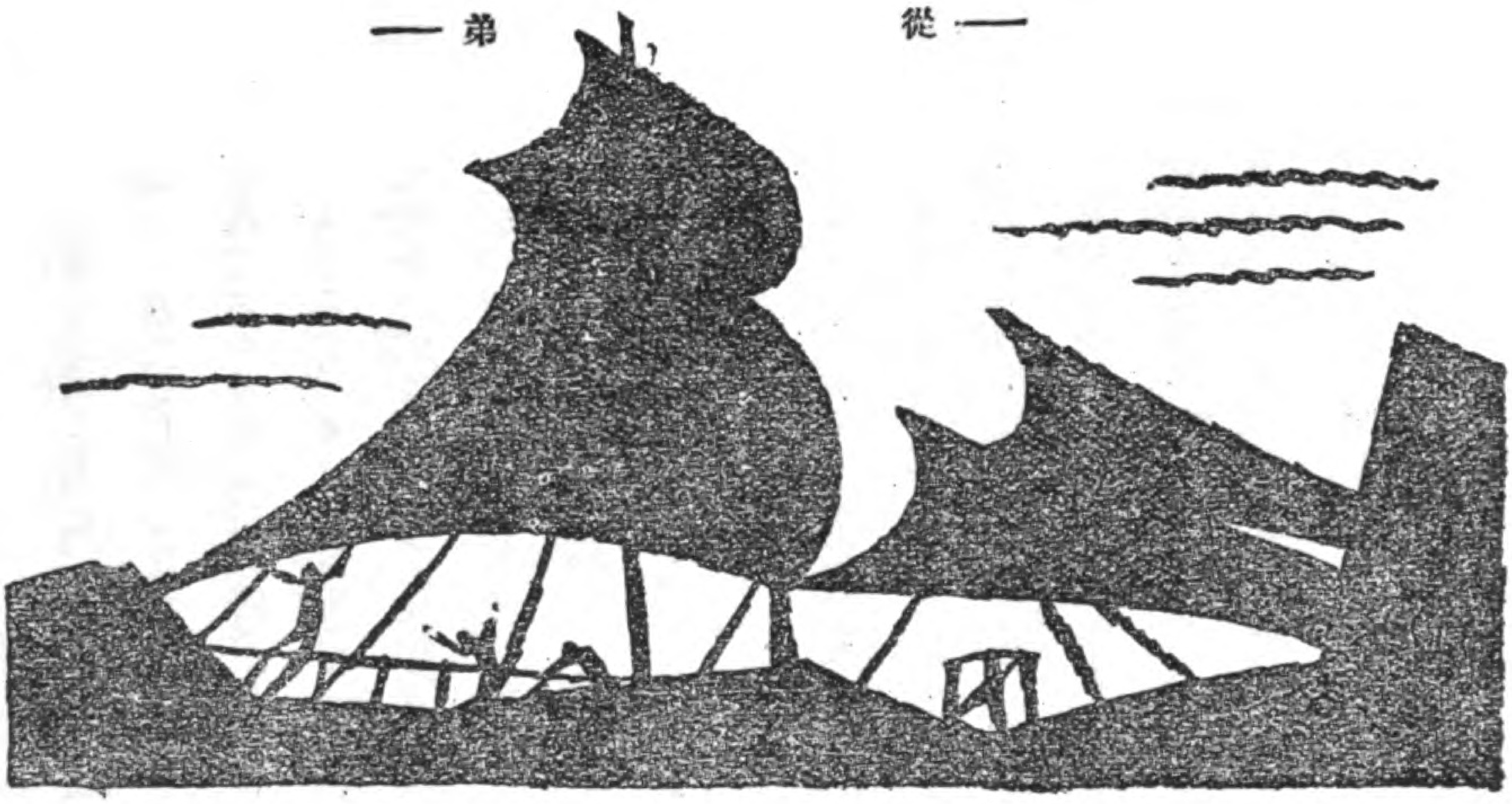
定價一圓　送料十五錢

自叙傳

一周年の最好記念

大震災と、彼の悲慘なる最後とは離るることの出來ぬ關係にある。今や、將に彼の一周年を迎へんとして彼に對する追懷談を、至る所で聞く。無鐵砲、剛情、危險思想家、無邪氣等評する人によつてとりどりであつたが。しかし彼の家庭に於ける半面は涙脆い好いお父さんであつた。野枝氏のためには好いお亭主であつた。此風雲兒を知らんと欲せば先づ本書を讀め。本書こそは彼が生涯中尤も多大の日子を費し、多大の精苦を傾けた藝術的代表作だ。その生立から入獄前後まで紙上に躍如たるものがある。加之、七葉の寫眞は彼が今にも躍り上らんとするの風貌を示しておる。

東京　改造社　振替東京八四〇二



從弟

葛西善藏

初男は、二十三年前に死んだ私の母の一番末の妹さんの總領で、此頃はたしかパウリスタのボーイか何かして、洋畫の稽古をしてゐるらしいが、二十三だと云ふから、丁度私の母の死んだ年に生れたわけだ。隨分不幸な青年ではある。

彼の父は岩手縣の人で、鐵道の土木技手として、青森秋田國境の矢立峠の難工事の始まり時分、自分等の村に來て、叔母の親戚の家に寄宿してゐたのが緣となつて、その頃まだ十七位ゐだつた叔母が望まれて、いつしよになることになつたものらしい。その當座、一時私の家の六疊に夫婦で同居してゐたこともあつて、まだ十二三の小學生だつた自分は、彼の父から英語と露西亞語と幾何學の初歩の手ほどきをして貰つた覺えがある。なか〳〵器用な才子肌の人で、その時分は村田銃ほか見かけない自分等の村で、英國物の立派な鐵砲を擔ぎ廻り、休みの日は雪の中も厭はず雀や烏など追かけ廻してゐた。今になつて考へると、さうした鐵砲とか、素敵もない上等な毛布とか洋服とか——さういつたやうな贅澤物は、大抵請負師側から贈られてゐたものらし

く、彼の月給では買へさうにないやうな物だつた。

工事の進行と共に、彼等も秋田、山形、福島と轉々して行き、そして奥羽線の完成後、その時分は初男の下に二三人も殖えてゐたらしかつたが、たうとう臺灣の方へ赴任して行つたと云ふ話をいつか歸省の時に聞かされたが、格別に親しみを持てるやうな叔母夫婦でもなかつたので、其後は思ひ出されるやうなことも滅多になかつた。

ところが、やはり自分の二十三の年の二月頃だつたが、彼是十年ぶりで、彼の父がぶらりと下戸塚の自分の下宿に訪ねて來た。劍こそ吊つてなかつたが、金絲や朱筋入りの如何にも殖民地の役人らしい制服制帽の姿で、官用で出て來たのだと云つた。がすべてが、彼の云ふことは出鱈目だつたのだ。彼は半年程も前に免職になつて、自分等の郷里の村に叔母と四人の子供をつれて歸り、食ひ詰めて就職口を搜しに上京し、郷里の知人の間を借り倒した揚句、最後に私のところを訪ねて來たものらしい。二ケ月餘り自分の部屋に同居してゐたが、自分の留守に、僅かばかしの持物を纏めて、彼は下宿にいゝ加減のことを云つて出て行つたのだ。自分は後で下宿料の整理に隨分困つたものだ。彼の言葉を信用して、自分は郷里の父から送つて來た金までも、彼に誘はれて、新宿で初めての遊びに使つてゐたのだつた。自分はその夏歸省して「なぜ葉書でもいゝから、あれが來てると云ふことを一寸でも云つてよこさなかつたのか！」と、父にひどく叱られた。その時はもう彼等は北海道に渡つてゐて、村にはゐなかつた。

岩見澤の保線課で相當な地位を得たが、その後町の女郎と女の郷里新潟に妻子を棄てゝ走り、またその女とも別れて娘のやうな年下の女といつしよになつて子を產ませ、それからいろ／＼と面倒ないきさつを重ねて、叔母も北海道で他へ再縁することになつたとか、いろ／＼氣の毒な話もいつとなしに耳に入れてゐたが、從弟妹の誰とも會ふやうな機會はなかつた。

それが四五年前だつたが、下戸塚の弟夫婦の借二階の四疊半で、やはり近所の素人下宿にゐて、遊びに來てゐた初男

に、自分は會つたのだ。自分は用事で鎌倉から出て來たのだつた。彼は十九だと云つたと思ふが、弟の細君が餅を燒いて出してゐたと思ふから、まだ一月時分だつたらしい。成程さう思つて觀ると、彼の笑ふ口尻なぞに、はつきりと叔母の面ざしが偲ばれた。自分の弟ともどこやら似てゐるやうで、爭はれない從兄弟同士の血筋と云ふことを思はせた。彼は早稻田の工手學校に通つてゐると云つた。

「君のお父さんとは僕等はもう他人なんだし、それにいろ〳〵なことからい〻氣持を持つてゐないが、君とはさうは行かないんだからね。……鎌倉の方へもやつて來たまへ」と、自分も親しい氣持で口を利いた。

彼の父は、彼の姉としか思へないやうな若い細君と田端に世帶を持つてゐて、濾水裝置工事の請負見たいなことをしてゐて、始終信州方面の養蠶地方を廻つてゐるらしい。

「君のお父さん見たいな人だから、留守に君を置いては危險だとでも思つて、それで君を家に置かないんぢやないかね？その方へかけては、昔しから大變な人だつたからな」と、自分は笑ひながら云つたりした。

「さうかも知れませんね。何しろ嫉妬深いと云ふところは確かにありますね」と、彼も笑ひながら云つた。

「頭なんかもう眞白でせうねえ。十五年前僕の戶塚の下宿に見えた時分にも、マラリアのせいだとか云つてゐたが、頭も髭も胡麻鹽だつたからな、もう年だつてい〻年なんでせう。それでも感心ぢやないですか、君を斯うして學校に入れて呉れるんだから。……やはり土木の方？」

「さうです。……おやぢ、さうですかねえ、白髮だつたのですかねえ、此頃はすつかりツル〳〵に禿げてますよ。髭は染めてゐるから黑いですが……」

自分は從弟から快活ない〻印象を受けた。貧しいながらに父から學資を得て通學してゐられる彼の境遇は悅ばしく感じ、彼の父に抱いてゐた過去の惡觀念の幾分か〻輕減された氣がされたが、實に前年の夏歸省した時に、父から、彼等が

訪ねて行つても寄せつけるなと云ふ傳言を、弟夫婦にもたらされたことをふと思ひ出して、鎌倉に歸る時、弟の細君にそれとなく注意して來た。初男は、自分が歸省した少し前に、實母の郷里を訪ねて、叔父の家に一週間程も滯在し、その節自分の父のところへも挨拶に寄つたものらしいが、その時の印象が父にはよくなかつたらしい。最初から彼の父たちに對しては好感を持つてゐなかつたのだが、十五年前、彼の父が自分を傷つけ、その整理のため親戚から借金などした苦い記憶を、父は容易に忘れることが出來ないらしいのだ。「あんな孤兒院の子見たやうなのは駄目だ！」父は一言の下に、自分の辯解を斥けたのだつた。

一體に私の父は、人に對して一見臆病なほどに寛容な態度の人だつたが、好惡の感念はかなり潔癖で嚴しいところがあつた。それで、父の人物觀にはいろ〱な場合で啓發されて來た。父の言葉は、大抵自分に信用することが出來た。中年後貧乏のし通しで、しまひには都會の陋巷で稀な寂しい死方をして行つたやうな事實からも、父の性格の底に潛んでゐたさうしたものを、新しく引出されるやうな氣がされる。………

二三ケ月程して、鎌倉から出て來て弟たちを訪ねて見ると、初男は彼等の二階の狹い四疊半に同居してゐた。最初の間は幾らかの金を入れてゐたらしかつたが、そのうち、初男が田端へ行つて金を貰つて來ても自分で遣つてしまふのか、父の方で構ひつけなくなつたのか、弟が勤めに出た後で氣の弱い細君から五十錢一圓と小遣ひまでせびるやうになつた。弟から幾度手紙を出しても、彼の父からは一本の返事も來なかつた。弟の言添とか、自分が弟に贈つた署名した自分の短篇集とか云つたやうなものも、いつの間に無くなつてゐた。晩飯後袴を穿き徽章の附いた帽子をかぶつて出ては行くが、本當に學校に出てゐるとは思へなかつた。當人には氣の毒だつたが、彼の父の態度は、自分等を憤慨させた。

「やつぱし駄目なんだよ。初男には氣の毒なところもあるけれど、あいつに馬鹿にされてると思ふと癪だから、初男にさ

う云つて、出て行つて貰へ。こんなことになると思ふから、最初から注意して置いたんぢやないか」と、自分は弟夫婦をきめつけた。

彼が田端に出かけて行つて、どう云つて父を說きつけたものか、其後また先の素人下宿に歸つて行つた。それからも始終弟の留守を覘つては　氣の弱い細君から小遣ひを持つて行つてゐたが、だん〳〵と、滅多に怒らない弟の眼には餘るやうなことをするやうになつて、しばらく出入りを止められてゐたが、その秋の江戶川の出水騷ぎの時ひよつこり出て來て手傳つてから、また出入りをするやうになつてゐた。その時分から大びらに寫生帖や古ぼけた繪具箱など擔ぎ廻つてゐた。自分はやはり土木科を出て早く自活の道を立て、その上で好きな道ならやつて見てもいゝだらうとすゝめて見たが、いつからかそんな風の友達なぞも出來てゐるらしく、自分の言葉なぞ聽き入れようとしなかつた。

建長寺內の山の上の寺の自分のところへも、ちよい〳〵やつて來た。スケッチ板に若い女の顏を描いたのを二枚、ダリヤか何か描いたのなど四五枚ほどの彼の畫を見せられたが、素人の自分の眼にもなつてゐないとは思はれたが、それも當然だと思はれたので、眞向からの惡口はいつも避けてゐた。

不自由な、そしてその時分病人生活をしてゐた自分には、彼の來て呉れることはたいへん調法でもあつた。一寸した買物なぞ賴んでも、東京に明るい彼は、どんな面倒な注文をも滿たして呉れた。

「あの畫の女の人は、君の何かなんですか？」

「いや、さう云ふ譯でもないんですが、僕に非常に好意を持つて呉れるんです」

「女學生か何かですか？」

「いや、僕の下宿の娘さんなんですよ。丸の內の方の會社の事務員をしてるんです」

「もう關係が出來てるの？」

「いやですなあ、そんなことはありませんよ。おぢさんはぢきそんなことを云ひ出すから困つちまひますね、神聖なもんですよ……」

「神聖は恐れ入つたな……」

自分等は、斯うした冗談を云ひ合つたりした。

夏時分は二晩三晩と泊り込んでゐて、朝早くから海水浴に出かけて、夕方眞黑になつて、眼を凹まして歸つて來た。「そんなに急に激しくやつちや毒だよ」と注意しても、また翌日は朝飯もそこ〲に出かけて行つて、結構秋の晩酌の相手も出來た。歸りには僅かばかりの小遣ひを握つて、欣々然と出て行つた。自分の蟇口の空の場合は、小品文を書いて雜誌社に屆けさせ、二人で小遣ひを分けたりしたやうなこともあつた。兎も角自分等の間は順調に行つてゐた。彼は自分のことを鎌倉のおじさんの弟のことを東京のおぢさんと云つてゐた彼は苦學生としての生活に、充分の滿足と誇りを感じてゐるらしかつた。それが、自分にも悅びだつた。どうか、ものになつて呉れるといゝ、何しろ先きの長いことだから――彼の歸た後で、自分はいつも心からさう思つた。面前ではもつと激しい言葉で、來る度に云つた。

秋の末頃から、例年の持病の喘息で、寺のガランとした暗い部屋で、幾日も打通して寢床の中で暮した。朝も晝もご飯を喰べず、水ばかし飲んで、晩には酒も咽喉に通らないやうなを我慢して飲み、その勢ひで一睡りしたと思ふと、眼がさめると、また苦しい發作の連續だつた。雨降りが續き、どんなに障子を締め切つてゐても、疊はじめ〲だつた。陰慘とも何とも云ひやうのない氣分だつた。さうしたある日、初男は訪ねて來た。斯うした場合の不機嫌さは、自分にはどうすることも出來ないものだつた。傘なしで停車場から歩いて來たので、すつかりびしよ濡れになつてゐた。一晩泊つて翌朝歸る時、やはり雨降りだつたので、自分の冬の外套を貸してやつた。

「不自由なんだから、すぐ小包みで送つて呉れ。自分で持つて來るんだつたら、汽車賃がなかつたら東京のおばさんにさ

う云つて、借りて來て呉れ。僕がさう云つたと云つて……」自分は寢床の中から、ぜいぜい云ひながら、斯う堅く云ひつけた。

それが幾日しても、送つても來なければ、彼が持つても來なかつた。それで、弟に葉書を出して訊かして見ると、確かに小包みで出したと云ふのだつたが、其後弟が心當りの質屋へ行つて見ると、やはりそこに入れられてあつた。そんなことからして、彼はまた弟たちのところへも、自分のところにも寄りつかなくなつた。其後一度、繪具箱をさげ、畫布や三脚を持つて、やはり髮を長くした畫學生と二人で弟の勤め先きへ訪ねたことがあつたさうだが、其後は絕えて消息がなかつた。――一昨年の秋の末のことである。

昨年の九月一日の地震では、自分の足かけ五年間居馴染んだ部屋借りの寺もひと溜りもなく壓潰されて、間一髮と云ふところで生命拾ひをしたが、四五日して歩るいて東京に出て、鎌倉に行く前にゐた本郷の下宿に、着のみ着のまゝの身を落付けたが、すぐ重い脚氣に出られたりして、ひどく困難した。便所の起ち歩るきにも不自由だつた。苦惱と絕望で、終日床の中で呻吟を續けた。さうした二ケ月ほど經つたある日の夕方、女中が「Sさんと云ふ方がお見えになりました」と取次いで來た。

「Sさん……？どんなやうな人？」

「まだお若い方のやうです」

「さう……？」

斯う云つたが、一寸心當りがなかつたので、自分は玄關に出て見た。初男だつた。汚れた黑のサージのズボンに白い毛糸のシエーターを着て、例の、幾らか狡猾らしい感じもされるが、快活な、特に自分には懷かしさを覺える笑顏をして、

鳥打帽を手にして立つてゐた。
「やあ初男君か！　よく訪ねて來たね。……Sなんて云ふもんだから、一寸思ひ出せなかつた。まあ上がれ！」自分は聲をはづませて云つた。
「構ひませんか？　おひとりなんですか？」
「あ、ひとりだよ。構はないよ」
斯う云つて、自分の、柱がゆがみ壁の落ちた陰氣な四疊半に案内した。
久しぶりで酒を飲み合つたが、話はやはり、地震當時のことだつた。彼は京橋のパウリスタでやられ、今は丸の内の假營業所の方に勤めてゐるが、やはり畫は續けてゐると云つた。
「九時が時間なんですけど、すつかり片附くのはどうしたつて十一時過ぎになるでせう。それから、みんなが寢てから描くんですが、夜ほか描く時間がないんで、風景なんか迚も出來ないし、花とか靜物とかなんですけど、電燈の明りでばかり描くんで、ほんとの色が出ないので困りますよ」
「さうだらうねえ。それにしてもよくやつてるね。辛抱するんだな。お互ひに修養だと思つて、辛抱するんだな。……それで、どうかな？　此頃はもう惡さをやめたかね？　あんなつまらないことは、もうよせよ。結局非常な自分の損ぢやないか。あんな眞似だけは、もうどこへ行つてもよして貰ひたいもんだね。……やつぱしちよいちよいやつてるんぢやないか？」
「いや、此頃は絕對に、あんなことはしやしません。どうもおぢさんに會つちや、敵はないなあ」
「さうかね。どうも怪しいもんだな。酒場でちよいちよいお酒を胡麻化しては、飲んでるんぢやないかな。どうもそんな氣がするが……」

「ご冗談でせう。おぢさんぢやあるまいし、僕そんなにお酒なんか飲みたくありませんよ」

「ハッハ……」

私たちは聲を揚げて笑ひ合つた。彼は普通のボーイでなく、酒場にゐて酒を注いで出す役になつてゐるさうだつた。

「僕が行つたら御馳走して呉れるかね。僕はウヰスキーは餘り飲めないが、甘くない葡萄酒のいゝのだつたら、飲みたいね」

「そりや御馳走しますとも。おぢさんが醉拂ふ位ゐの御馳走だつたら、いつでも出來ますから、是非いらして下さい」

「ではあるけるやうになつたら、屹度行くよ」

久しぶりですつかり打解け合つた氣持になつて、彼は歸つて行つた。「しつかりやらなければいけないよ」自分は幾度も繰返して云つた。

ちよい〳〵またやつて來るやうになつた。Yと云ふ三つ四つ年上の長髪の畫の友だちといつしよに來た時もあつた。偶然だつたか、その青年の、十二號大の椿の花の畫を持つて來て見せられたが、新鮮味は缺けてゐたが、筆觸も色も相當にこなれてゐるとは思つた。Yはある研究所に長い間通つてゐる、專門の畫學青年だつた。

何しろY君はデッサンをしつかりやつてますからね」と、初男は云つた。

「Y君どうですか、初男君の畫、ちつたあものになりさうなんですか。自分で働いて自分でやつてるんだから、僕には兎や角う云へないんだが、餘り心懸けのいゝ方とは云へないんでね、僕は怪しいもんだと思つてるんですがね……」と、自分は冗談の調子で云つた。

「いやどうしてなか〳〵、僕なんかの及ばないやうな、一寸天才的なところを持つてますよ」

「天才的と云ふのからして旣に怪しいぢやないですか。兎角胡麻化し屋さんですからね」

「アッハ……S君もこゝでは、さつぱり信用がないんですねえ」と、Yも笑つた。

新年には借着らしい大島銘仙の絣の揃ひを着て、支配人の年始の歸りだと云つて、同僚といつしよに來て、晝頃から晩まで酒を飲んだ。端正な容子の青年だつた。その青年は、三月いつぱいでボーイをやめて、北海道の奥で叔父とかといつしよに開墾に從事するのだと云つた。自分は一寸その健氣さに打たれた。「あゝしたボーイなぞの仲間に、あゝした青年も居るのかなあ……」と、自分は其後も、その好印象の青年のことが時々思ひ出された。

繪具を買ふとか何とか云ふ僅かばかしの無心には、自分は努めて乏しい財布から割愛してやつた。二月の下旬だつたか、彼は一日置きくらゐに訊ねて來て、自分が氣分がわるくて寢てゐると、女中に聞いてはいつも玄關から引返して行つた。自分の氣嫌のいゝ折を見計らつてゐるのだらうと察せられたが、やはりお金のことかな？ くらゐに考へて四五度目に會つて見ると、意外にも結婚の相談だつた。やはり同じ店に勤めてゐる十九か二十かの女事務員らしく、その娘の弟もどこかの給仕に出て居り、その下にまだ二人の小さな妹がゐて、母親との五人暮しと云ふのだが、その娘と少年だけの收入と云ふだから、かなり苦しい生活に違ひなかつた。自分としては無論、その相談には贊成が出來なかつた。

「幾分かでも君に、暮しの方をすけて貰ひたいと云ふおふくろさんの腹なんぢやないかなあ。それに君は、養子に行ける人ぢやないんだし、今からそんな家族なんか脊負ひ込んだら、ほんとにたいへんだぜ。繪なんかの騷ぎぢやないよ。まあ僕は不贊成だね」

「いや實はそれについて、向うのおつかさんと云ふ人が、一度おぢさんに會ひたいと云つてるんですがね、……それに實は僕自身では、斷はるにも一寸氣の毒で斷はりにくいやうな關係になつてるので、それで實はおぢさんに何なんですけど……」

「さう。さう云ふことだつたら、一度會つて話をして見てもいゝがね、それに實際に君の云ふやうな心懸けの娘だつた

ら、君が苦勞さへ覺悟なら强いて僕も反對はしないがね、それにしても、一體こゝまで事を進めるのに、すべて君自身の直接談判だつたの？」

「いえ、あのいつか伴れて來たＹ君が仲にはいつて吳れてるんです」

「もう關係が出來てるんぢやない？　それだと仕方がないが……」と、自分は彼の眼に覗入りながら云つた。

「そんなことは斷じてありません」と、彼は强く打消した。

「嘘らしいね。もう身持ちにでもしてあるんだらう？　無理もないがね……」

「厭だなあ。おぢさんと來ちやぢきに茶化すんだから……」と、彼は兩手で頭を抱へるやうにして苦笑した。

そんなことで、その晚は歸つて行つた。餘り唐突な話で、どこまで信用していゝか疑はしい氣持にされたが、兎も角彼にもいろ〱な人生が働きかけて來て居ると云ふことが、自分には寧ろ彼のために心强い氣がされた。

二三日してまたやつて來たが、畫布を買ひたいと云ふので五圓持たしてやると、框に張つた十二號の畫布を見せに來て、玄關で規丁面に釣錢を置いて行つた。

「描いたのを見せて吳れなくつちやいけないよ」と、自分は念を押して云つた。

「屹度持つて來ます。一週間内には屹度描いて來ます」と云つて、例のシエーター姿で、泥靴を鳴らしながら出て行つた。

やがて、十日程經つて、自分の晚酌がかなり利きかけた時刻に、同じ十二號の畫を二枚持つて、やつて來た。この間のには、チユーリツプの花が、かなり幼稚な筆致で描かれてゐた。もう一枚の「これは傑作です」と云つて出したのには、菊の花が描いてあつた。それを二枚並べて向うの壁に立てかけたのを、自分は盃を舐めながら、無關心な氣持で眺めやつた。

「それで實は、おぢさんに一寸お願ひがあるんすが、僕今度三日ばかし休暇が貰へることになつたので、それでどこかへ

畫を描きに行つて來たいと思ふんですが、どうでせう、このうちどつちか一枚おぢさんに買つていたゞけないでせうか?……」と、長い髪を後ろに搔きあげ、すばしこく眼をしばたゝきながら、にこ〳〵して云つた。

「そりや初男君の畫だから買つてもいゝが、僕今はちつともないんだ。二三日したらちつと位ゐなら出來るんだが、一體幾ら位ゐ入用なの?」

「いえ、そりや幾らでもいゝんです」

「二拾圓位ゐ?」

「それだけだと、隨分結構です」

「ぢやあね、僕は拾圓だけ寄附しよう。そしてそのうち一枚、僕の知つてる人に買つて貰つてやらう。僕は今隨分貧乏なんだから……」

この程度の無心なら遠慮無しに云へる郷里の先輩で、會社に勤めてゐる知人に、手紙を書いて持たしてやらうと思つた。それで、自分は少し注意して畫面に視入つてゐるうちに、ふとY君のことが頭に浮かんで來た。「こいつはいけないな……」と、自分は思はず腹の中で溜息した。

「チューリップの方は、幼稚だけれどだいゝところがあると思ふが、菊の方はどうもいけないな。死んでるぢやないか。どうしてまた斯んな畫が出來たもんかなあ?……」と自分は彼の眼に視入りながら、云つた。

「いや、實はそれは、ずつと前に描いたもので、それも實は丸ビルにあつた鈴木さんの繪の模寫なものですから……」

「模寫としても、……どうもヘンだなあ。またさうだとすると、それだけの模寫が出來るだけの腕だつたら、もうなんとか、そのチューリップの葉つぱや花が、描けてゐさうなもんぢやないか。まるでなつてないぢやないか。どうも君はまだいけませんねえ!……」と、自分は畫面と彼の顏を視較べながら、嘆息して云つた。

「いえ、そんなことはありません！この方は夜描いたんので　それで色や何かもよく出なかつたのです」と、彼も油斷のない眼付を自分に向けながら、云つた。

「夜描いたからつて、晝描いたからつて、それんな馬鹿な話はないよ。がもういゝから、わかつたらいゝから、綺麗に男らしく謝まりたまへ！」

「いえ、斷じてそんなこと僕ありません。模寫とは違ふですから……」

「馬鹿だなあ君は！　ちつとも心懸けが直つてないぢやないか。ほかの事とは違ふんですよ。大事な藝術のことぢやないか。その良心を賣る……今からそんなことで、君は一體どうするつもりなんだ？　君はこの年寄りを摑へて、馬鹿にし切れるものと思つて、やつて來たんですね？　そりや僕だつて、代作物も賣つたことはあるが、君の場合とはたいへん違ふんだ。君のやうに、親身の年寄りの從兄まで嵌めてかゝるやうな人にほんとの藝術なんか出來つこないと思ふ。だから、それが解つたら、よく腹にはいつたら、綺麗に男らしく謝まりたまへ。今度だけは許してやるから……」

「…………」

「やはり謝まりたくないんだね？　どうも仕樣がないね。ぢやあね、その二枚の畫を、僕の眼の前で破つて見せたまへ。君にしたつて、こんなケチをつけられた畫を大事がるにも及ぶまい。二枚とも君の畫だと云ふんなら、僕の眼の前で破つて見せたまへ」

斯う云ふと、彼はいきなりとそのチューリップの畫に手をかけたと思ふと、滅茶々々に框をヘシ折つてしまつた。

「もう一枚のも破れ！」自分は叫ぶやうに云つた。

「これは破れません！　これはY君の畫ですから破れません！」と、彼もすつかり昂奮して云つた。

「だから、最初から綺麗に謝まれつて云つてたぢやないか」

手をついて謝まられて見ると、自分もがつかりして、物悲しい氣分になつた。

「まあそれでいゝよ。少し飲んで歸りたまへ。しかし、ほかのことゝは違ふんだから、男一代の仕事の上のことなんだからね、ほんとに氣をつけなければいけないよ」

少しばかり飲んだところで、彼はY君の畫を新聞紙につゝみ、滅茶々々にした彼のを小脇に抱えるやうにして、悄れ返つて自分の部屋を出て行つた。彼が廊下を歩るいて行く足音を聞きつけて、自分はどんな氣持からだつたか、ガラリと障子を明けて追かけるやうにして、彼の後ろから「やはり君は、當分來ない方がいゝな……」と、さゝやくやうに云つた。

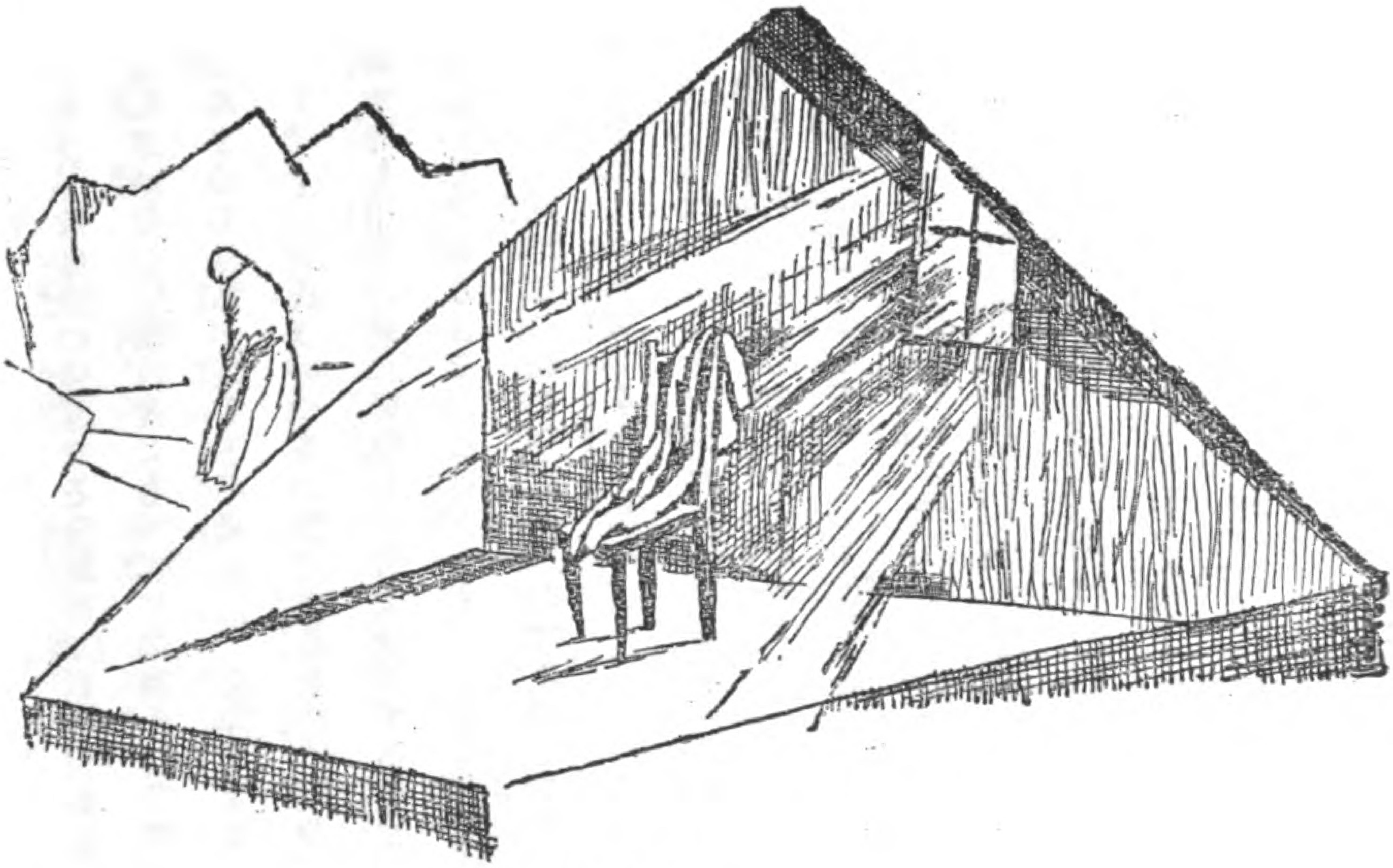
「承知しました……」と、彼も低い聲でこたへた

その晩から四ケ月餘り經つのだが、彼は一度も姿を見せない。結婚の話と云ふのはどうなつたか、跡方もない作り話だつたのか、それにしても無援孤獨な彼のことが時々思ひ出されて、パウリスタに訪ねてやりたい氣もするが、出不精の自分には臆劫でそれも出來なかつた。

「あの旅行の金と云ふのは、實際旅行に使ふ金だつたか、それとも何か結婚について入用の金でゝもあつたのか知ら?…」

なぞと、此頃ふとそんな風に考へても見たりしたが、大體、彼が畫家にならうと思ひ立つた動機――そんなことにまで思ひ詰めて來ると、自分の立場から考へて、多少の憂欝な氣持をそゝられた。

――十三年七月――



春遠からじ（第三回）

ハッチンスン作
木村毅譯

五

フォーチュン氏は以前からセェバァに向つて、この商會をもつと完全な合名會社にしやうとの約束を與へてゐた。彼も非常にそれを望んでゐた。現在の設備でセェバァの分擔するのは出版部であつた。トワイニングは、會社や學校用具を作り出す工場や製作場を管理してゐた。そしてフォーチュン自身は、前記の兩支配人及び、凡ゆる端役の使用人から、凡ての業務の細かな事まで管理した。殊に注文に關してはやかましく、セェバァでもトワイニングでも、彼をさしおいて直接客と接衝することにはひどく反對した。セェバァやトワイニングは商品の製作さへしてゐればいゝ。それを販賣するのは自分の縄張りだ。買ひに來た客と取引きし、それに關して出す一切の手紙に署名するのも自分の縄張りだと云ふのが、彼の腹

だつた。

セェバァは自分の分擔なる出版の方面に、かゝる干渉を受けることを憤慨した。

『私が新らしい敎科書でも出版した場合――』と、彼は抗議を申出でた。『その顧客と關係をもつ人間は私です。だから場合によつては私が彼等と接衝もし、文通もするのが、あたりまへじやありませんか。』

フォーチュン氏はいつもの癖で右足を机に突つぱりながら、セェバァの方へぐるりと廻轉椅子の向きを換えた。それは鯨の如き額を相手の前に展開して彼を威壓する便宜があるからだつた。『現に君は彼等と文通してゐるじやないかね。』

『しかし署名なさるのは貴方です。しかも貴方はしば〲文面を訂正して居らつしやる。』

『しかし俺がここにゐるのはそのためだからな。手紙と云ふのは畢竟私の手紙だ、いづれ君も合名組織の一員に加はるやうになつてから文句を並べ給へ。』

セェバァはいいことを聞きこんだと云ふやうに、にこりと笑つた。『それは、何時さうなるんです。』

『尤も今日のことじやないがね……』

『それは分つてゐますが、この際私の言はうとする事は――』

フォーチュン氏は鯨の鰭のやうな、白い手をあげてそれを遮つた。『わかつたよ、俺の腹は動かないのだ。』

彼は前と同じ巧妙な足の運動で廻轉椅子を廻して、鯨のやうな額を卓子の方へ向けた。敷物と机とが磨り減つてゐるのは、この當てつけと此の急廻轉が毎日幾回となく繰返される何よりの證據であつた。

セェバァはその時、卽座に室を蹴つて出て、半開きになつてゐる扉を足でごち開け、閉めるにも又同じく足を用ゐた。それは扉の開閉にこんな不精をすると、フォーチュン氏が厭な顔をすることを豫め心得てゐるからであつた。

フォーチュンは位置から言ふと、セェバァをこの商會から放逐する事も出來るのだが、しかしセェバァはそんな事位てんから

恐れてもゐなかつた。フォーチュン氏も自分がセェバァから少しも畏服せられてゐないことは知つてゐた。それがため彼はセェバァを嫌つた。が他面、(それを言ひ出せば、彼は斷然否定するであらうから、自分では無意識的にだが……)セェバァを尊敬してゐた。

トワイニンは、グセェバァの同僚で準重役格を占めては居たが、フォーチュン氏の前に少しも頭が上らず、手紙に署名されやうと、自分を訪ねて來た客が彼の前に引見されやうと、決して不服がましい色を示さなかつた。フォーチュン氏が彼の書いた手紙や、彼の讀んだ取引に訂正を加へたり。工場に直接干渉したりする度に、トワイニングはよくへこへこと頭を下げては感謝してゐた。そんなわけでフォチュン氏はトワイニングを好いてはゐた。が意識的にも、無意識的にも、決してトワイングを尊敬してはゐなかつた。

六

空しい約束ではあつたが、併しセェバアは早く合名會社になることを非常に望んだ。それは主として、フォチュン氏の監視を遁れて從前よりもはるかに自由にふるまう事が出來るのが分つたし、それに自分の主張を通したゝめに充實した個人的滿足の得られるとを思ふからであつた。セェバアは自分の仕事に非常な興味と誇とを持つてゐた。そしてフォチュン氏がたとへ自分の意見を容れるにしても、それは非常に澁々、且つ妬ましげにする事を知つてゐたが故に、フォチュン氏を屈服せしめる事は、凡ての價値にもまさる一大光彩を自分の仕事に添へるものゝやうな氣がしてゐた。元來セェバアが來るまでと云ふものこの面會では『學校用』の教科書の發行はしてゐなかつた。この發行はセェバア自らの發案であつた。フォチュン氏は、それが自分の發案ならざるが故に、初めは氣乘りのしないやうな承諾を與へた。そして着手を許可はしたものゝ、問題にする程のことでもないと云ふやうな冷淡な態度でそれを眺めて、夢にも奬勵せうなどとはしなかつた。

出版匆々からそれは非常な成功を收めた。セヽパアは書籍にも興味をもち、教育にも興味をもちだした。彼はゝじめからチッドボロウの先生仲間には多くの友人を持つてゐたが、更に、商會に接觸する教職に携はる人々の團體の間に、もつと多くの知己を作つて行つた。彼は、強情な少年を勵まして、無味乾燥な學習に馴れしめる方法や、その困難さを論議することが好きだつた。そして又新たな同情を以て、その方面に於ける彼自身の少年時代の失敗を思出した。これ等の趣味と性癖とから、いな、恐らくはそれあるがために、どう云ふ風の本を編纂することが必要であるが、又それと同じ位に大切なる問題の、どう云ふ風な人に編纂させたらいいかを嗅ぎ出す特別な嗅覺を、自分が具へてゐる事を彼は發見した。又自分の編纂に關する手腕から、著者側に向つて多くの有益な暗示や、忠告を提供し得る事も分つて來た。

最初に刊行した四冊の教科書が次第に世の視聽を集めやうとしてゐる矢先き、スペクテエタア紙上にそれに對する讃辭を見出した時、どんなに彼は喜んだらう。それには『F・B の商會發行の記號があり、同商會獨特の輕快なる裝幀を施された教科書に接することは、常に記者の欣快とする所である。これを手にした者は、これが教師のために非ず、生徒のためを慮つて指導すると云ふ結構な意圖によつて刊行されたものであると云ふ印象を受ける。全く創意嶄新なる推奬すべき好著である。』とあつた。

フォチュン氏はかねてから、自分の心を、この雜誌に書いてある通り「他のために慮つてこれを指導する」心だと思つてゐた――少くとも人はさう考へるだらうと自惚れてゐた。それにセヽパアに會つて合名會社に何時かはすると何度も言つてゐた約束もあつた。ところがこの仕事はセヽパアの熱心に應ずるだけの豫想外な成功を博しさうな見込みがついたので、この批評の現れた日初めて彼はかう言つた。『結構、結構、セヽパア君。ついては一寸お耳を拜借したい。多分お父さんから聞いてる事と思ふが、君のお父さんと私との間で、君の將來に見込があるなら、合名組織にしようとの内約束が出來てゐたのだ。君の前途は勿論有望だ。が、君が此の出版事業を、この商會の他の仕事と並行せしめる位に成功せしめた曉に

於て、その組織の改革を斷行し、この商會の一方面に――一方面だよ――昔通りのセェバア家の名譽ある位置を、君のため恢復して上げやうじやないか。』――この時許りは彼も最も上機嫌に近い顔色を見せた。

その時セェバアは、『わかりました。私の腹は動かない……』と言つて、感謝の意を表した。

一九一二年セェバアは、出版部が他の營業と比して遜色がないやうになつたと思つた。彼は自分の名を署した二冊の書（一冊は共著）によつて非常な成功を收め、商會の評判を愈々高うした。一冊は『セェバア、オーエン共著初等數學』と云ふのだが非常な好評で各學校で採用された。又今一つは『セェバア著近史』と云ふので、公立學校では、包括の範圍が上下に渉つて三千年より少い本は一切受付けない原則になつてゐるので使用されなかつたが、併し當時擡頭しかゝつてゐた國家的社會的事實に對して、ある立派な概念を、少國民の間に注入しやうと思つてゐる私立學校からは熱狂的歡迎を受けた。

紙數百五十頁、定價十八ペンスの初歩の出版書が好評を博したに勵まされて、セェバアはもつと大膽な仕事をしやうと掛つた。一九一二年の初夏に彼は初めて着手した。彼は、ペンと紙との上に現はれ出るまで、自分でも殆んど知らなかつたやうな思情や感情を、この一卷の中に傾注しつくし得る事を知つた。彼が專念考へ耽つてゐた題材は、恰も磁鐵が鐵片を吸ひよせる如く、先づ心の中で思想感情を湧き立たせ、心からそれを吸ひよせた。その題材は『英國』――まさに『英國』と云ふのであつた。彼はそれが『セェバアの英國』として印刷され、上梓され、評判されることを思ひ描いてゐた。元來英國史に於ける帝王は附隨物たるに過ぎないから、此の書に於ても帝王は只附隨物としてしか記載されない圖になつてゐるその書は正しく『英國である』べきだ。英國民と（如何やうにして）ハウと（何故に）との英國であるべき筈だ。劈頭の一句はかう云ふのである。

『この英國は諸君のものである。それは諸君の所有である。それは此の世に於て最も榮光あり光彩ある國なるが故に、多くの敵國がそれを纂奪しやうとした。本書は、この國土が如何にして諸君のものとなつたか、如何にして安全に護られて

出版匆々からそれは非常な成功を收めた。セェパアは書籍にも興味をもち、教育にも興味をもちだした。彼はゝじめからチッドボロウの先生仲間には多くの友人を持つてゐたが、更に、商會に接觸する教職に携はる人々の團體の間に、もつと多くの知己を作つて行つた。彼は、強情な少年を勵まして、無味乾燥な學習に馴れしめる方法や、その困難さを論議することが好きだつた。そして又新たな同情を以て、その方面に於ける彼自身の少年時代の失敗を思出した。これ等の趣味と性癖とから、いな、恐らくはそれあるがために、どう云ふ風の本を編纂することが必要であるが、又それと同じ位に大切なる問題の、どう云ふ風な人に編纂させたらいいかを嗅ぎ出す特別な嗅覺を、自分が具へてゐる事を彼は發見した。又自分の編纂に關する手腕から、著者側に向つて多くの有益な暗示や、忠告を提供し得る事も分つて來た。

最初に刊行した四冊の教科書が次第に世の視聽を集めやうとしてゐる矢先き、スペクテエタア紙上にそれに對する讃辭を見出した時、どんなに彼は喜んだらう。それには『FH の商會發行の記號があり、同商會獨特の輕快なる裝幀を施された教科書に接することは、常に記者の欣快とする所である。これを手にした者は、これが教師のために非ず、生徒のためを感つて指導すると云ふ結構な意圖によつて刊行されたものであると云ふ印象を受ける。全く創意嶄新なる推奬すべき好著である。』とあつた。

フォチュン氏はかねてから、自分の心を、この雜誌に書いてある通り「他のために感つてこれを指導する」心だと思つてゐた――少くとも人はさう考へるだらうと自惚れてゐた。それにセェパアに會つて合名會社に何時かはすると何度も言つてゐた約束もあつた。ところがこの仕事はセェパアの熱心に應ずるだけの豫想外な成功を博しさうな見込みがついたので、この批評の現れた日初めて彼はかう言つた。『結構、結構、セェパア君。ついては一寸お耳を拜借したい。多分お父さんから聞いてる事と思ふが、君のお父さんと私との間で、君の將來に見込があるなら、合名組織にしようとの內約束が出來てゐたのだ。君の前途は勿論有望だ。が、君が此の出版事業を、この商會の他の仕事と並行せしめる位に成功せしめた曉に

於て、その組織の改革を斷行し、この商會の一方面に——一方面だよ——普通りのセェバア家の名譽ある位置を、君のため恢復して上げやうじやないか。』——この時許りは彼も最も上機嫌に近い顏色を見せた。

その時セェバアは、『わかりました。私の腹は動かない……』と言つて、感謝の意を表した。

一九一二年セェバアは、出版部が他の營業と比して遜色がないやうになつたと思つた。彼は自分の名を署した二冊の書（一冊は共著）によつて非常な成功を收め、商會の評判を愈々高うした。一冊は『セェバア、オーエン共著初等數學』と云ふのだが非常な好評で各學校で採用された。又今一つは『セェバア著近史』と云ふので、公立學校では、包括の範圍が上下に渉つて三千年より少い本は一切受付けない原則になつてゐるので使用されなかつたが、併し當時擡頭しかゝつてゐた國家的社會的事實に對して、ある立派な概念を、少國民の間に注入しやうと思つてゐる私立學校からは熱狂的歡迎を受けた。

紙數百五十頁、定價十八ペンスの初步の出版書が好評を博したに勵まされて、セェバアはもつと大膽な仕事をしやうと掛つた。一九一二年の初夏に彼は初めて着手した。彼は、ペンと紙との上に現はれ出るまで、自分でも殆んど知らなかつたやうな思情や感情を、この一卷の中に傾注しつくし得る事を知つた。彼が專念考へ耽つてゐた題材は、恰も磁鐵が鐵片を吸ひよせる如く、先づ心の中で思想感情を湧き立たせ、心からそれを吸ひよせた。その題材は『英國』——まさに『英國』と云ふのであつた。彼はそれが『セェバアの英國』として印刷され、上梓され、評判されることを思ひ描いてゐた。元來英國史に於ける帝王は附隨物たるに過ぎないから、此の書に於ても帝王は只附隨物としてしか記載されない圖になつてゐるその書は正しく『英國であるべきだ。英國民と（如何やうにして）ハウと（何故に）との英國であるべき筈だ。劈頭の一句はかう云ふのである。

『この英國は諸君のものである。それは諸君の所有である。それは此の世に於て最も榮光あり光彩ある國なるが故に、多くの敵國がそれを纂奪しやうとした。本書は、この國土が如何にして諸君のものとなつたか、如何にして安全に護られて

來たかを語る――それは少數の帝王や政治家や偉人によつて護られて來たのでなく、大多數の英國民に依つて護られて來たのである。英國民は、恰も松明の手より手に渡さるゝ如く、代々此の國土を傳へて諸君の時代まで來た。そして諸君は又これを幾世の末までも繼承させて行くであらう。彼等は英國の光明をして、諸君のためにいや明かに輝やかさしめた。そして彼等が諸君のために備えた基礎の上に立つ諸君は、これを又いや更に輝やかしめるであらう。彼等は凡て去り往いた。而して諸君も亦去り往くであらう。しかしながら英國は永久に存續するであらう。あゝ英國よ。諸君の英國よ。」

第七章

一

メーベルはセェバアの教科書を『あんなお稽古本』と呼んだ。彼女がこの書籍のことを話題にのぼした事は二三度に及んだが、その度にそんな呼び方をするので、セェバアは、彼女をして此等の書籍に興味を持たせる事は不可能であるのを知つた。第一彼はそんな物の言ひ方が氣に食はなかつた。しかしよく〳〵考へて見ると、氣を惡くするやうな原因は一つもない筈だと、自分でひとり腹におさめた。『そんな事は氣にすまい。それは正に學生のお稽古本なのだ、だからそれに就いて僕の文句を言ふ餘地はない。』しかしそれはセェバアの身になつて見ると『そんなお稽古本』と言ふやうな言葉と調子とで侮蔑し去つて了へない大切なものであつた。

ところで今度の『英國』に到つては、前者とは大いに趣きを異にしてゐる積りである。誰だつてそれを『お稽古本』だとは言ふまい。メーベルでさへもその位な事は分るであらう。そこで彼は情熱に溢れながらその事についてメーベルに色んな話をした。が――この事とは無關係なやうな事ながら――國民保險法が丁度その頃國中の人の心を湧き立たせてゐ

て、セェバアはそれについてメーベルと言ひ合ひをしたため、それ以後はぶつりと此の書籍についても語ることを止めた。メーベル一味の上品な人達は口を揃えて、それを『ロイド・ジオジの壓制的證劵』と言ひ、英國の社會はそれを侮辱して迎へて憤怒の頂點にあるの時、メーベルはセェアバにかう言つた。『まあ、何だつて、あんな貧しい人達のお給金から金を盜み取るやうな事を考へつくんでせう。もつといい考へがいくらもありますのにね。』

彼女の謂はゆる『召使やそれと同じ下層階級のための辯護』を常にしてゐる良人の事だから、メーベルはさう言へば於度喜んで貰へる事と思つてゐた。

が、これは彼を喜ばすことが出來なかつた。それは正しく良人の考への『つかみ所のない』一例で、これには彼女も殆んど絕望的な狼狽を感じた。

セェバアは訪ねた。『どうしてそんな事が言へる――彼等の給料から金を掠み取るよりも、もつと宜い方策があるなどと？』

『だつて、こんな慘めな證劵のため、あの人達に三ペンスだつて拂はせやうと云ふのでせう。そりやキャスタア夫人だつたら乾度お買ひなさるわね。だがあの方、どうしてあゝなんだか、私らには想像もつかないわ。』

『えゝ、それじやお前は彼等下層階級のものにあれを買はせやうとはしなかつたのか。』

メーベルはすッかり脹れ上つた。『そんなに見えて？　私、あの人達に買はせやうとは思はないわ。』

『それでは、のッ坊にもちびにも、それぐ買はせなかつたのか。』

『勿論、買はせなかつたわ。』

『しかしお前がその金を拂つてやつたやうな事はないか。』

『えゝ、拂つてやつたわ。』

『あゝ、メーベルそれは大變な間違ひだつた。』

彼女は良人を見上げた。『マアク、あなたは本當に分らない人だわ。間違つてゐるつてどうなの。』

『よくないのだ——あの娘達にとつてよくないのだ。』

『あの人達のお給金よりも餘分のものを出して買つてやるのが、あの人達のためによくないんですつて？』

『勿論よくない。この法案の主旨はそれ等の人々を促して勤儉と、萬一の場合の用意とをさせやう——即ち雨で仕事が出來ない日でも困らないだけの準備を設けやうと云ふことにあるのだ。彼等の獨立を奬勵しやうと云ふ事にあるのだ。それなのに、彼等が當然拂はなければならぬものをお前が拂つてやつたとすると、それは單に彼等の獨立を奪ふに外ならないのだ。』

彼女は例によつて突拍子もない高笑ひを爆發させた。『下層階級の人が獨立の奬勵を望んでゐるなんてことは、私、今迄にあなたより外の人から聞いた事もないわ。獨立なんて、——それこそあの人達に取つては飛んでもない間違ひだわ。』

彼は急に興奮して話し初めた。これこそは彼が非常な興味を抱いてゐる問題の一つであつた。彼は話の起りは何であつたかを忘れて了つたやうに見えた。『いや、さうじやない、さうじやない、メーベル。それは非常な大問題なんだ。彼等が獨立してゐないことが大變な間違ひなのだ。彼等の殆んど全部の存在が、絶對的に雇主に依賴してゐる。それこそ誰れに取つても宿命的な、惡い事なんだ。勞働者にもし、眼があるなら、それが無智な階級の凡ての禍根となつてゐる事が分る筈だ。彼等の缺いてゐるのは自分に對する誇りである。彼等は獲得出來るものさへ取りそこねてゐる。況んやそれ以上の投票權とか自由のための諸多の權利など、彼等が價値と認めることの出來ないものは、決して獲得しやうとしない。彼等は始終資本家の腰巾着になつてゐる。お前が彼等を援けやうとするなら、それは彼等自身の獨立、誇り、自信——つまり彼等の獨立心を昻揚する意味のことでなくてはならぬ。僕はつまり、いろんな事に對する彼等の權利を、彼等自身に昻揚

させるか、でなければこちらでその昂揚に援助してやることを話してゐるのだ。勿論その獲得に努めなきや、何に對する權利だつて持つ事は出來ない、それは彼等に敎へてやる必要もあり、又實際具へてやる必要もある。ね、で此の國民保險は――――』

メーベルは再び笑つた。『あら、不思議だわ。あなたはそんな事を考へて居らしつたの。』

セェバアは彼女の言葉に、辯駁するやうな語氣がこもつてゐたのに氣付かなかつた。『そしてね、これを實際の仕事に移すには、國民保險は非常にいい思ひ付きだ。彼等が病氣の時自由な待遇を受くべき權利を與へるのではなくて、その權利を獲得すべき機會を彼等に與へるべきなのだ。お前がのツ坊とちびに說明してやるべき事もまさにそこなのだ。ね、お前は彼等に向つて言ふべきなのだ。「これこそはお前達の事業だ。お前達自身のものだ。お前達がこれを建設するのだ。こちらではそれを援助する。お前達がいろんな貧しい人達を助けることは、同時にお前達自身を助ける事になる。お前達は國家の土臺石を積み重ねてゐるのだ。國家はお前達のものだ。英國はお前達のものだ。お前達はその上に、お前達の知つてゐる凡てのものを積み重ねて行くべきだ。――」と』

彼は全く興奮した。

『僕が自分の著書の中へ書かうとしてゐるのもそれなんだ。「英國は汝等のもの也」さ。これは評價を超越した尊いものだ。それ故に又國家はその住民自身をもより高貴にすべき尊嚴なる存在だ。僕はお前にも、この本がどんな本であるかを進んで知つて貰ひたいね。』

『本――て、どの本？』

『僕の「英國」の事さ。前にも話したじやないか。この歴史については。』

『あゝ、あのお稽古本のこと！　あんたにも小說が書けるといいわね。』

彼は彼女を眺めて、『あゝ』とだけ言つた。

二

その後彼はメーベルの前では二度と『英國』のことを言ひ出さなかつた。だが彼は誰かに向つて、無性にその話がしたくて堪らなかつた。ペニイ・グリインには、彼が著作上有益な暗示を豫期し得るやうな相手は一人もゐない。が彼の望むのは有益な暗示ではなかつた。彼はたゞ誰か同情のある聽き手が欲しかつた。それは單に著作のこと許りでなく、彼の興味をもつ一切の事柄に對する聽き手である。かう云ふ聽き手は間接に著作の上にもいい影響を與へてくれるものである。同情を以て人の話しに應待してくれる人は、不思議にも、當人に取つて非常なインスピレーションの源泉となるものだ。あながちインスピレーションとならないでも、――少くとも慰藉にはなる。温かい感情と云ふものは凡て、同情ある仲間と共に胸を打ち寛げて語る時、愉快に心の中に湧いて來るものだ。

彼はその事を自分ではつきりと氣づいてゐなかつた。しかしこの數年、恰も飢ゑた子供が食物でも求めるやうにして、彼の求めてゐたものは、實に心の同情であつた。

ペニイグリインにも、さう云ふ人ならあるのを、彼は遂に見出した。尤もメーベルはそれを『ほんとに變な人達』と呼んでゐた。『あのファガスさんだの、息子のパアチさぶだの、そのお母さんだのの、どこかいい人だが、私には思ひも及ばないわ。』とよく云つてゐた。

併しセェバアは彼等に、そのいい所を見出した。

三

ファガス氏の棲居は彼と隣り合せにあつた、その門前でいつかセェバアの自轉車は最も不成績な記錄を作つたことがある。この人はいつも色の悪い服をつけ、色の悪い頬髯を垂れてゐる色の悪い小柄な老人であつた。家族は大柄な細君と、それから痩せて艶のよくない六人の娘とであつた。夏なら四時、冬は六時、ファガス一家は總揃ひでどや〳〵と散歩に出掛ける。女連中はみな足が長くて歩くのも早いが、たつた一人の男切れなる主人公は足が短くて歩くのも遲く、みんなから遲れないためには、ちよこ〳〵と走りつゞけてゐなければならなかつた。彼はかうして同速力を保持すると共に、男性としての位置をも保持せうとしてゐた。セェバアはそれを見る度に、おとなしい痩せた番犬の後をつけ廻してゐる灰色のテリヤの老犬を思出した。散歩から歸る頃には彼はきつと輕く喘ぎながら少し汗ばんでゐた。戸口へ來た時には、これでやつとお暇が出たと云ふやうな顔付きをした。婦人達はこれを「日課」と呼んでゐたが、ファガス氏に取つては確かに苦しい日課であるに違ひなかつた。

總領娘はしかつめらしい顔をした三十九の女で、末子はしつかりした二十八の女であつた　彼女はその年になつても父を『パパさん』と呼んでゐた。日曜の午後などセェバアが時々茶に招かれて行くと、ファガスは常に女連の一列に並んでゐる一番端に腰かけてゐた、夫人はコップに茶を注いで『パパさんに』と言つて、例の一番手前の娘に手渡すと、一聯の娘から娘へと順々に『パパさんに！――パパさんに！――パパさんに！――パパさんに！』と賑やかに手から手へと送られ、まるで落雷のやうな早さでファガス氏の前まで運ばれる。ファガス氏は、神經質な外野手が空を切つて飛んで來る球を待つ時のやうな興奮した手でそれを待つてゐるのが、危くそれを受けとめる。が匙は大抵取り落して、拾ひ上げる事もあれば見失ふこともある。すると女連中はきまつて『チエッ！』と舌打ちをする。そして矢繼ぎ早に『お饅頭――お饅頭――お饅頭！――お饅頭！』と連呼してお菓子の皿を彼等が父親の前に運ぶ。時とするとファガス氏の色艶のよくない小さな顔が、庭の中のセェバアの家との仕切りの壁の上に現はれる事がある。その時『パパさん、梅よ。』とでも云ふ高い

叫びが一隅から聞えやうものなら すぐそれに應じて『パパさん梅よ。』『パパさん、梅よ。』が反響の如く庭の諸方面から響いて來て、その言葉の眞中頃に灰色の小さな頭は素早く家の中へ消えて了ふ。

ファガスの家には、召使が只の一人しか居なかつた。小さな、とぼけたやうな表情の女で片手はいつも背へ廻してはエプロンの紐をまさぐつてゐた。そして連發のピストルの如くみんなの口から『ケート、ケート、ケート』と續けさまに出る呼聲に應答する事に掛り切つてゐた。娘達は家の中で何かはなしてゐた。一人はランプ、一人は銀細工、一人は家畜の飼育をしてゐた。やつてる事は何であるにしろ、兎に角彼等は始終何か彼かしてゐた。その上彼等は各自で、自分の室を片付けるし、それから共同で庭を作つた。どんな仕事も時間表によつてした。だからどのファガス嬢に何時訪問者があつても、彼女は、殘りの姉妹達がどこで何をしてゐるかを明細に語ることが出來た。

此のよく秩序だつた設備の中で、ファガス氏のする主な仕事は、妻と娘の目を避けやうとする事であつた。この仕事に彼は時間と工夫とを凡て吸收されて了つてゐた。セェパアが家の後窓から見てゐると、燻ぶつた小男が、庭作りをしてゐる娘達の目を逃れて、小徑を逃げて行かうとするのがよく見掛けられた。これから推すと彼は家の中で階段や廊下を通る時も、これと同じやうに、こそこそとやつてゐるのであらう。『パパさんはどこ?』――これが娘達の口から口に傳はる止み間のない叫び聲であつた。庭作りに疲勞して來ると彼等は父の追求を口實としてはいつも仕事の手を止めて、小競合ひを初めるのであつた。

家族逃避の暇々に於けるファガス氏が、夢中になつて耽るのは將棋、かるた、文字合せ等の遊戯であつた。セェパアも亦將棋と文字合はせが大好きであつた。毎週日をきめて二人は夕方になると落ち合ひ、この目的のため新聞に設けられた將棋と文字合せの欄に掲げてある新らしい謎を解き合つた。二人の數分の間お互にまじ〳〵と見詰め合つたり、パイプから煙を吹いたり、隱語をさがしたり、それによつて連句を作つたりした。それからそれと同じ位な長時間を、それらの遊戯

でどちらの力が上手であるかを論ずることに費した。これらの智性練磨――將棋、文字合せ、かるた――などに一層の面白味を添えるのはファガス氏がそれを彼の人生觀の一例證として說き出す事であつた。

ファガス氏の人生觀は、凡ゆる人が生れて來たのは divine purdose 神意を充たすためであつて、各人はそれを充たすべき能力を賦與されてゐると言ふのである。ファガス氏は口癖のやうに言つた。『いや、それは fatalism （運命論）ではない。又edestination（宿命說）ではない　それは正しく將棋や文字合せの問題と同じです。創造主が定めておく。彼はその解決、その後の解答を知つてゐる。そして吾々はそれを解くやうにと昔から努めねばならい事になつてゐるのです。將棋に於ける最後の手、文字合せに於ける切りの間が、初めから正しく秘められてゐるやうに吾々に取つてもその解答は秘められてゐる。』この議論の中に於てファガス氏はセェバアに、かるたに失敗したり、將棋に失策を演じたりした時、『やりなほす』ことが如何に愉快なものであるかを敎えた。物事をやり直して、一度しくじつた微妙な點を發見すると限りない滿足のあるのは誰しも經驗して來た所であらう。秘められた道を辿り返せば蹈みそくなつた地點は必ず明かになるものだ

『おや、おや。此れは。』と、ファガス氏はよく言つた。『あなたがそんな事さへなさらなかつたら、こんな結果にはならなかつたでせう。つまりその一手が危機を招來した譯ですね。危機を。』

そして二人は茫ッとしたやうな眼をお互に見合ふ。

『これを實際生活に移して考へるんですね。』と、ファガス氏は口癖のやうに言つた。『誰れでも死してから自分の生涯をなり返つて、その生存中どこで生活を踏み謬つたか、どこで生涯の危機を招いたかと云ふ事を考へてみ、更にその日附を墓石に刻むとしますね。え、さうしたら大變な碑銘が出來つて、誰しも恐しさに墓地を散步する者などはなくなりますぜ。』

セェバアはそれを反駁した。『勿論、誰だつてその危機を知るものなんぞあるものですか。まあ假りに人生には目的があ

ると仰有つたあなたのお説は正しいと致します。だがそれはそれでいいとして、各人が果してその目的を遂げたかを、何うかを、如何にして知る事が出來ますか。あなたのお説のやうに、吾々はその目的の正體さへも分らないのだとしたら、況んや如何にして、その目的に向つて進む事が出來ます。』

小柄な老ファガス氏は益々熱心になつた。

『だつて、あなた、そこが即ち人生の、文字合せや將棋と軌を一にする所以ですぜ。春秋の筆法によればこれらの遊戲の結論が何であるかも分らないのに、どうしてその解決に努める事が出來るとの反論が生じて來る譯ですが、併しあなたは現にこの遊戲をやつてるじやありませんか。』

『併しそこには解決のある事が分つてゐるんですからね。』

ファガス氏の眼は輝いて來る。『それ御覽！そんなら人生に目的のある事も納得が行く筈じやないですか。』

セェバアが興味も持ち、心も惹かれたのは、この小さな老人が七人の女家族の、勢ひのすさまじい仕事の中で日影者のやうな生活を送りながらも、しかも斷乎として、一定の生活目的に向つて貢獻し、接近しつつあるとの確信を持ちつづけてゐる事であつた。彼の言ふ所によると、彼はその生涯中の凡ゆる事件を『やり直し』た。そしてそれが彼を驅つて、遂にペニイ・グリインに彼を落付かせ、七人の女家族に圍繞せられて日を送るやうにしたのだが、それも彼に賦課せられた目的達成のための秘められたる道程で、不可避のことと信じてゐた。彼は増上慢な點も宗教狂の點も、その痕跡だになく、日々、彼をここに遣はせてその目的を遂成せしめるために、神が彼を呼ぶのを待つてゐると語つて、セェバアを吃驚させた。彼は神を、恰も郵便配達から手紙を期待するやうに、期待してゐた。彼がセェバアに向つてそれを語つた時は恰も、封を切らぬ小包みを前にした子供が歡びに慄へながら興奮してゐるやうに、身慄ひして、晴々とした顔色をしてゐた。

ある日セェバアは抗議した。『だがファガスさん、神に召さるゝのが何時かと云ふことが何うしてあなたは分ります。こゝ

が問題になるぢやありませんか。又あなたには神が召すと云ふ事が何であるかも分つてゐない。ね、さうでせう。』
小さき老人は答へた。『いや、私は分ると思ひます。私は、少くとも自分の記憶の屆く限り、幾年と言ふことなく「やり直し」て來ました。そして凡ゆる物事が、いつもぴッたりと密閉してゐるので、私は何に對しても、今こそ私の目的達成の道に在るのだと確信してゐる事が出來ます。あなたも神の呼聲を待たれるならば それと同じことを感ぜられるであらうと思ふ。私はあなたも「備えはなつてゐるか」との質問を心裡に受けられた事があると思ひます。そして私は如何なる問題に於ても「備えはなつてゐる」と答へたいと思ひます。』
これは神秘な崇厳な暗示だと、セェバアは思つた。如何なる瞬間にもあれ、恰も指を以てするが如き接觸を覺えて、神から「備えはなれるか」と訊ねられ、「然り、備えはなつてゐる」と答へる自分自身を信じ得られるとは？
神秘にして崇厳なる神との親和よ！

四

お次ぎはパアチ家の事である。――メーベルはそれを『息子のパアチと、その久遠の老母。』と呼んでゐた。
セェバアは又いつも彼等を『ロド、ポール、オア　パアチの息子』(rod pole or perch　どれも竿と云ふ意味)『ロド、ポール、オア、パアチ老夫人』と呼んでゐた。これは例の如く彼のつけた渾名で、メーベルが、子供臭くて、譯の分らぬと言つてゐる習癖から考へ出されたものである。――のッ坊のジャックスとちびのジンクスとは、最も秀逸の、但しメーベルから言へば默過し難い例であることは前にも述べておいた。かつてもセェバアが、やはり隣りに住んでゐて、彼女には大切な友達であるメエヤア・ミレットのことを『石蹴り老人のミレット』と呼んでゐるのを知つて『いくら何だつて、そんな御冗談を。』と詰問した事があつた。

『いくら何だつて、そんな御冗談を。あの方は石蹴りなんかなさらないわ。』

『しないだらう。だがひよこ〱跳ね廻つてはゐるね。』と、セェバアは說明した。『お前もあの跳ねざまは知つてゐるだらう。九十面をさげながら。』

『九十面ぢやないわ。五十にもおなんなさらないわ。』

『なる程。しかしどの道子供ぢやないやね。然るに彼は、自分が如何に輕快であるかを示さうとでもするやうに、いつもひよこ〱飛び廻つてゐる。彼は物をするのに飛び廻る必要のない時でも、「ほら、來たしよ」と掛聲でもしかねまじき風だ。石蹴り！――これよりうまい名前が外にあるかね。』

『けれども、どうして外の名前を付けて了はねばならないんでせう。』と、メーベルは言つた。『あの方にはミレットと云ふお名前があるのに。』

彼女はふくれて涙聲になつた。『なぜ、別な名前を付けなければならないんです。』

セェバアは笑つた。『さうした事を頭に思ひ浮べればそれがどんなに滑稽であるか、そしてそれを捨てる事がどんなに惜しい事であるか、お前にも分るだらう。ね、分るだらう。』

メーベルは分らないと斷言した。『そんな事が私の頭にはてんで思ひ浮びません。パアチ家の事でもですよ。あの人達にどんな渾名をお付けにならうと、私、構ひませんけれど、「ロド、ポール、オア、パアチ」つて一體、何の事です。どんな意味があるのです。』

セェバアはそれにどんな意味もないと言つた。『お前でも、誰かゞパアチと云ふ名を付けられてるのをきいた時には、ロドとか、ポールとか、パアチとか、音も意味も似寄りの言葉を思出さずには居られまい。それ丈けさ。』

『私、そこを子供臭くて、無作法だと言ふんですわ。』と、メーベルは言つた。

五

パアチ夫人は、病弱で、小柄な身體の持主で、その生活の一半は病床に、他半は車椅子に分割されて、送られねばならなかつたし、又實際、さう兩分して見ることが出來た。が彼女の言に隨へば、彼女は『常に立つてゐる』のであつた。彼女は常に立ちながら、常に手に餘る仕事をしてゐた。なぜなれば彼女は自ら『常に仕事をしてゐる』と號してゐたのだから先づそれに間違ひはないものとする。彼女は常に行ひ、常に食ひ、常に着る事物を一つの限界とし、常に行はず、常に食はず、常に着ざる事物を他の限界として、その中間に介在した狹隘なる空間にその存在を持續してゐた。その空間はまことに狹いものであつた。

彼女の視力は非常に弱かつた。だから外した眼鏡をさがすのが容易ではなかつた。又彼女は錠のおろせる手には恐く錠をおろした。が彼女はその鍵を見付けることが出來なかつた。彼女は知り人の誰れの名前にも必ず『あの』と云ふ肩書を付けて呼んだ。が『あのセェバアさん』が一番好きであつた。セェバアも亦彼女の好意に酬ひた。セェバアは凡ゆる事物を一度心の鏡に映してその幻影を見る例の習癖を通してパアチ老夫人を見ると、彼女は小さな僻見と云ふ鐵壁と鐵壁との間で、唇を動かしたり、指で物を摸つたりして、よち／＼歩ゐてゐた。この鐵壁の間には何の平安も歡樂もありさうには見えないので、セェバアの眼にはこの夫人が一つの悲しい繪畫として映つた。それのにパァチン夫人はそこに歡びを見出してゐた。そして彼女の顏色は光り輝くのを見ると、セェバアには、件の繪畫の悲しき色に言ふべからざる哀切の調子がこもつて、映るのであつた。彼女は赤ン坊でも見ると、それを呼び留めて、あやしたり、讃えたりせずには措かなかつた。すると神秘なる脈管から若々しさが潮のやうに湧き出でて、その銀色の頬と霞んだ眼とを充たし、唇の震えも、指の動きも暫らくは停めさせてしまつた。

又彼女が自分の息子を眺める時の眼には、一層の輝きに充ちた光の潮がさして來るのを、セェバアは氣付いた。

息子のパアチは、痩せ形の脊の高い、そして幸福さうな笑聲を立てる青年であつた。彼の樣子から推すとその魂は、彼の肉體に宿らずに、丁度小枝におりてゆら〳〵と搖れてゐる小鳥の如く、只彼の肉體の上にとまつてゐる丈けのやうに見えた。彼の樣子から得た暗示で、セェバアは暫しの『頭腦混亂』の後、これ丈けの聯想をつけたのだ。この息子のパアチは丈夫さうに見えなかつた。それは心臟が弱いのだと母親は言つてゐた。併し自分では人並以上に丈夫な心臟を以てゐると言つては、いつも母に抗議した。『あゝ、お母さん、そんな譫言は仰有らないで下さい』と。パアチ老夫人はそれに對して言つた。『お前は生れつき心臟が弱いのだし、今だつて少しも丈夫になつてゐないのだから、それをどうして丈夫だなんて言へます。その位の事は私が知らなくてさ……當然私が知つてゐるべきぢやないかね。』

息子のパアチは答へた。『さうです。お母さんは當然、知つてるべきなのです。而も御存じないのです。あなたは一度かう考へこんだら、どんなにしたつてその偏見から拔け出る事が出來ないのです。あなたはどうかすると今に、私の胸には心臟が二つあると云ふやうな事をお考へつきにならないとも限りません。そしてフレデリック・トレヴス卿（英國随一の外科醫）が大審院長の前で私の心臟が一つである事を誓つても、あなたは「あゝ、この人は馬鹿だ、伜の心臟は二つあるのに」と仰有るでせう。ほんとにお母さんに掛つちやかなはない。』

彼はこんな調子で母を戒めた。

併し結局、老夫人の方は自分が健康だと自惚れて變な微笑を洩らし、息子の方は自分が病弱なことを納得して、心ならずも微笑した。

彼等の生活振りは先づそんな調子であつた。

息子のパアチは、一方のポケットには母のため眼鏡を入れておき、他方のポケットには母が必要とする嗅藥を入れてゐ

た。母が眼鏡をさがすのに根氣がつきはてて來ると、息子はいつも言つた。『お母さん、これをお使ひなさい。』母の根氣がつき切つて了はない前には、いくらそれを持ち出したつて、『これは私に合はないよ。』と言つて手に取らない。鍵でも同じで、受取るのは長い時間をかけて狂氣のやうな探索をつゞけた揚句だ。『お母さん、これをお使ひなさい。』『だが、外の鍵だと錠前がいたみはしないだらうか。』

セェバアはよく、このゴッた返しを見ては、自分でも搜すのを手傳つてやる事があつた。息子のパチアはその度に言つた。『さあ、お坐りなさいよ。お母さん、そしてそんなに掻き廻すのは止めて、一番最後にはどこで使つたか靜かに考へて御覧なさい。』

ひどく疲勞し、ひどく困惑したパチア老夫人は『何て、おバカさんだらう。お前は、どこで使つたかゞ分らないのじやないか。それが分つてる位なら、わざ〱搜しはしないやね。』

『それじや、まあ、今のところは此れで濟ましておきなさい。』

『これは私に合ふまい。そんなものを使つちや眼が惡くなる。』

しかも此の、セェバアに多分の信任を寄せ、そして息子と關係のない事にはいかなる種類のことも決して信任せぬロド、ポール、オア、パチア（さきにも言ふ通りパアチ夫人のあだ名。）老夫人は、よくセェバアにかう言つた。『うちのフェデイが、いつも私のために鍵をさがして呉れるのでございますよ。あれは何でも私のために見付けて呉れます。』

その時輝やかしい光の潮は、彼女の面に照りわたつて、別人かと思はせしめる程それを變へた。セェバアはそれを見ると、心に測り切れぬ程の哀感をそそられるのであつた。

六

パアチ家は普通、パンチャ邸で通つた。――それは本道に通ずる小徑に沿ふて數百碼のパンチャア農園と云ふのがあるからであつた――そしてペニイグリインに於ては最も大い、最もヤリッぱなしな家であつた。昔これがシ・ウヴェンズベリとチッドボロウとの間の地方の最も重要な農園であつた頃、代々のパンチャアは頑固にも家の中を娯しく設備する方則も家屋建築の原因も無視して來た。そこで今ではパンチャア家もその農園も共に疲弊して、廿人以上の人をも容易に容れ得る屋數が不思議にもたッた二人で一ぱいになつてゐた。と云ふのは現在の所その室數の半分以上には、用をしなくなつた家具が詰めこまれて、生きた人間は只の一人も入りこめさうになかつた。殘る半數の室には箱や、包みや、束や、鞄や、籃や、古新聞やが、今度は家具は、一つも容れる餘地がない程、叩きこんであつた。パアチ老夫人とパアチとはどの室も、中に藏つてある品物の名で呼んだ。『ヘンリ叔父の寢椅子の入つてゐる室』とか『變な尖のついた大きな青い箱の入つてゐる室』とか、又はそれに似た事を言つて、物をさがすのであつた。

パアチ夫人はいつも『仕事をせう』とは思つてゐた。がその仕事は『女中を雇入れてから』とか『女中を返してから』とかに限る偶發的なものであつた。そこでヘンリ叔父の寢椅子も、尖の變な大きな青い函とか、その他の品物も、物怖ぢした人のやうに、要慎よく、安全に藏はれたまゝになつてゐた。

併しこれらの、室の訪問者が全然無いわけではなかつた。

ある時セェバアは、夏の避暑をメーべより少し早目に切り上げて歸つて來て、この家に一週間程厄介になつた事があつた。その時彼は、此の親子が夜も寢床に入らず、朝になつても起き出て來ない事があるのを知つた。眞夜中、家の片隅で、彼は不思議な物音が起るのに眠りを破られた。欄干から怖々のぞいて、彼は亡者のやうな二つの人影が朦朧と通路を動いてゐるのを認めた。一人は片手に赤い寢卷の裾を掲げ、片手に蠟燭を持つたパアチ夫人で、も一人はやつぱり手に蠟燭をもちながら、眠むさうに欠伸を嚙んでゐる息子のパアチであつた。息子のパアチはこれを『終夜、地獄の家を徘徊』

したのだと呼んでゐた。この徘徊の後目は多分、石油ストウブの上に並べて温めてある乳鍋を見るために、されるのだらうとセエバアは思つたが、ストーヴの火の輝きと鍋の吹く湯氣とから聯想して、これはまるで眞夜中の神々に捧げられた神秘な供物のやうだと思つた。

七

パアチ夫人は、自分の息子には何でも出來るものと信じてゐた。もし高位の官途にでも就きたいなら、アスキスから一寸誰かに紹介狀でも書いて貰へば、それで足るものだと云ふ、不思議な確信を以てゐた。息子のパアチ――彼はいつも『だつてお母さん、僕には僕の仕事があるぢやありませんか。』とこれに抗議してゐた――は園藝家として非常な評判を博してゐた。殊にスヰートピイと薔薇の栽培が最も得意だつた。セエバアは此のロド、ポール、オア、パーチ一家と知り合ひになり初めの時、その暮らしが種子と、鉢植と、切花との販賣だけで優に立てられてゐるのを見て、一寸驚かされた事があつた。

『フレッドのスヰートピイ栽培と來たら大變に有名なもんですね。』と、セエバアはある時パアチ夫人に話した事があつた。『私は今、園藝雜誌で、彼の寫眞のついてゐる訪問記を讀んで來ましたよ。』

老人の顏には輝やかしい光がさした。『あゝ、あの子があんなボロ〳〵の帽子さへ被つて呉れませんでしたらね、セエバアさん。あの日はほんとに運が惡かつたのでございますよ。寫眞を撮る前に、あれがどんな樣子をしてゐるか私は見たいと思つてゐたのですが、ついあなた、私が家から女中に暇を出さうとしてゐた時だつたものですから、その場に立合ふことが出來なかつたのでございますよ。あんな不恰好な帽子では似合ひませんわね。だのにあれはそれを被るんです。あれには何を言ひきかせても役には立ちません。』

これがパアチ老夫人の始終、繰返してゐる愚痴であつた。が息子のパアチも劣らずに、『母が居たんぢや何も出來ない。』と言つてゐた。併し、各人の生活は、相手の指導と支配を脱する事は到底出來ないと云ふのがセェバアの處世觀であつた。息子のパアチは十七の年以來、母から離れては一夜だつて眠れないと、しみじみセェバアに語つた事があつた。彼が外へ出掛けると、母は乾度窓によつてその歸宅を待ち受けてゐるのだから、彼は半日以上家を明けた事は決してなかつた。

セェバアは彼等二人の献身的な愛情に非常な感動を覺えた。彼等の興味も、習慣も、思想も、その年の差程ひどく違つてゐるのに、しかもなほお互が完全に結び合つてゐる。夕方、セェバアがパアチ青年と一緒に坐つて、話に耽つてゐると、老夫人は必ず息子の側に座を占めて安樂椅子に眠るのである。そして時々眼が醒めては、愚痴ツぽさうに『さあ、私はもう寢床に就かねばなりますまいかね。』と言ふのである。

するとパアチ青年は、話は止めず、たゞ手を伸べて母の上におく。老夫人はフェデイから手を觸れられさへすれば、どんな疲れも心配も消え去るかのやうに、靜かな溜息を洩らして又すや〳〵と眠つて行く。

これがセェバアを涙ぐましい程動かした。

セェバアに取つて特に親しい友達と言へば此等の人々であつた。セェバアは彼等と日夕顏を合はせた。その他の人々と會ふことは滅多になかつた。そこへ全く突然に、彼女が彼の生活の中へ歸つて來た。

ノナが彼の生活へ歸つて來たのだ。

第二編　ノナの卷

第一章

一

一九一二年初夏のよく晴れた或る朝、セェバアは心地よい小徑を沿ふて、チッドボロウへと自轉車を驅つて行く、途中坂の上にのぼると、チッドボロウとシ・ウヴェンズベリのペニイ・グリイン郊外住宅を連絡せしめる輕便鐵道の工事が急速に進捗してゐるのが眼に入つたので、たま〳〵彼もいろんな事を考へた。ロードタイバアが公共のためを思ふて先祖代々の墳墓の地を、郊外住宅計畫のため賣つてから二年以内、遂にそれは實現を見るところまで漕ぎつけた。

殘る問題は鐵道だけとなつてゐた。

鐵道敷設のあまり見つともよくはない諸兆候――砂利の塊、開鑿機、騷々しい停車機關、小さな線路に沿ふて走る手推車、鶴嘴と鋤を使ふ工夫の群れ――が、此の六月の晨、たま〳〵セェバァの物思ひを誘ふたと言ふのは、彼がかねてから、ペニイグリイン郊外住宅のこと、メーベルのこと、又この住宅に關する彼自身とメーベルとの關係のことなど、考へてゐたからであつた。あゝ、又しても混亂して來る考へよ！

問題と云ふのはかうであつた。此の大仕掛に畫策されて、而も非常に評判のいい郊外邸宅は、實に彼等の眼の前で起つた事なので、彼にも興味があれば、メーベルの興味をも惹いてゐた。而も二人の間ではその事が只の一度も話し出されなかつた。……いやたツた一度その日の朝飯の折に……それが時も時とてしかも六月――彼は決してそれを忘れはしない――それは二人の結婚した月だつた。……八年前に……八年……

二

郊外住宅でセェバァの興味を惹かれたのは、設備それ自身に對してゞはなかつた。——寧ろペニイグリイン附近にいろんな人が入りこんで來て住ふのは、考へたゞけでゝも厭だつた——彼が興味を惹かれたのはかうした近代的な一つの運動の起る原因であつて、これなどもその好例證として考へることが出來た。彼が述作中の『英國』に於ては、その數章をさいて此れが説明に宛てた。隨つて自分の眼前に斯る結果を見たことは、たま〳〵彼のこの方面の思想を馳驅、刺戟せずには措かなかつた。都市の人口過剩、喧雜な業務の世界から遁避しやうとする希念、事務の繁劇に伴ふて欲求する生活娛樂の増加。此れは年々、より深刻に、より廣汎に人の欲望を動かした。そして交通の便利がこの欲望の滿足を一層容易にしてゐる。凡て近代の傾向に於ては業務の娛しみは次第に少く、勞苦は次第に多くなつて來る——つまり勞働の歡びが滅亡したと云ふ重大なる問題から、凡ての事が生じて來るのだ。あゝ——何と云ふ興味の饒かな問題であらう。

泥土と渾沌とから、郊外住宅の秩序と生氣へ甦つて行く街路にも、並木にも、住宅にも、公共建築にも、セェバァは件の物語を讀み、繪畫を見た。彼の興味を惹かれる理由はそこにあつた。彼が周圍に起つて來ることを面白がる理由はそこにあつた。併しメーベルが興味を抱くのは——彼は自轉車に乘つてゐながら、考へたのだが——それらとは全然違つてゐた。彼がメーベルにそれらの話をし出した時に……そしてメーベルも亦彼女自身でそれに就いて話した時に（彼女はいつもこの住宅の話をしてゐた）彼女が乘氣になつて語つた理由と云ふのを聞いて、彼は思はず貝殼の中へひつこんで了つた。何と云ふ奇怪至極の説明だ。

メーベルは、自分の良人が必ずペニイ・グリイン郊外住宅の計畫は嫌惡し、呪咀するものと確く信じてゐた。それのに實際は、彼はその計畫を好んでゐる。而もその理由を彼女に説明する事は出來ない。——彼がどんなに説明しやうと試み

ても、彼女には少しも了解出來なかつたのだ。不思議だ——八年昔の今月結婚した仲であるのに……

彼は考へつゞけた。ふり返つて見ると、今迄何の話をしても二人の心持はこの通りに外れ合つて 繋がり合ふ事がなかつた、而も世間の眼には、二人は極めて幸福な夫婦として映つてゐた。だが？——幸福な夫婦と云ふのは果してこんなものだらうか。幸福な結婚と云ふものは只、極端な不幸から見逃されてゐると云ふ丈けのことか。單に女房を撲らず、女房は酒に醉つ拂つたり借金を作つたりしないと云ふ丈けのことか。——彼は考へた。『いや、いや。そこには、より以上の何物かゞある筈だ。』そして彼の特癖なる八の字を額によせて考へた。『勿論、これは僕の到らないためだ。それは此の郊外住宅の問題ばかりじやない。凡ゆる事に渉つてなのだ。これが一度きりではない。始終だ。それは彼女の缺陷から來るのではない。僕の缺陷だ。僕にはそれが分る。』

『今朝、朝飯の場合でもさうだ。二人はどちらも上機嫌だつた。その時彼女が言つた。一キングス・クローズの家は一年八十ポンドなんですつてね、トウラア夫人はそれを一軒お借りなさるんですつて。』それに對して僕はすぐ腹を立てたのだ。

トウラア夫人が一年八十ポンドの家を借りたと彼女が話したからつて、僕はどうして腹を立てたんだらう。僕はあの時すぐ新聞を鳴らした。——あゝ、どうして穩かに「さうかね」とか、何とか言ふ丈けにとどめておく事が出來なかつたんだらう。どうして新聞など鳴らさずにゐる事が出來なかつたんだらう。 新聞を鳴らす時の僕はどんな機嫌でゐたのかつて事は、彼女も知つてゐる。確かに知つてゐる筈だ。なぜ僕はそんな事をしたのか？彼女の話に相槌を打つ位は至つて容易い事じやないか。僕には彼女がどんな陰口をきかうとしたのかよく分つてゐたのだ。そして、もしあの家でも借りなからうものならあの奥さんは老トウラアを養育院にでも叩きこまねばなるまいとか、又は、「この次ぎには女中の三人も使ふつもりだらう、今は一人も居ないがね。」とか、輕く調子を合はせる事が 出來た筈だ。メーベルはそんな輕口が好きなのだ。だからさうすれば彼女は屹度笑つたらうに。』

彼は考へた。『だが彼女はどうして牛の胃のやうな久反──蔭口が好きなんだらう。』

彼は考へた。『えいッ！　彼女が何だつて言ふんだ。どうして僕はそんな事を氣にするんだ。どうして新聞を鳴らすのだ。──彼女は到底僕が興味を抱く世界へは入つて來る事が出來ないのだ。併し僕には出來る筈だ。僕は彼女の興味を抱く世界へも入り得るのだ。とすれば何故そこへ入つてやらないのか。勿論、僕には彼女が一切の事物を如何に見てゐるか、はッきり分つてゐるのだ。僕が彼女と考を共に頒つて一緒にその話に耽つてやる事が出來ないのが、彼女にはいかにもつまらなからう。彼女が僕の考へを了解しやうとして呉れないのが、僕にはいかにもつまらない。いや、僕にはつまらなくはない。僕は初めから彼女の無理解を氣にしてゐないのだ。彼女の了解を期待してゐないのだ。期待してゐないのだ。』

彼がかう考へてゐる丁度その瞬間、僥舌なハプグッドでも、もしその顏を見やうものなら、前にも言つたやうに、かう言つたらう。『あれ、あの通りだよ。何か失ひ物をしてそれが何處に行つたのやら分らないと云ふやうな顏色をしてるだらう。はゝあ！』



友と友と（入選）

畔柳すき

二月に入つて初雪を見たがそれ以來は、何となく調子の亂れ勝な天候の日が多く、その日も夕刻になると烈しい風が往還の紙屑を塀の高さ位までも舞ひ上らせた。

規矩子は娘らしくもない八の字を眉の根によせながら、机の前を離れて雨戸を繰つた。晝の明るさは未だ外にあるので閉め切つて部屋に入ると燈いたばかりのどんよりした赤い電燈の光りは、火氣の絶えた火鉢とゝもに寒さうであつた。パラ〳〵雨がやつて來た。

規矩子は再び友達の手紙を讀み直した。用箋に細かく書いた幾枚かは筑波の登喜子が、突然結婚するやうになつた次第を、友達仲間に知らせる爲に筆を取つたもので、同封の二三枚は、群馬縣下の女學校に奉職してゐる小枝子からのであつた。登喜子の手紙の終りには、別々に書くつもりでゐたが、こうした氣持をさう

幾度も書けると思はれないから次々に廻送して見てくれるやうにとあつた。東京にゐる規矩子は、なほ一人西の方に離れてゐる淸子に送る爲宛名を書いた。淸子の結婚が起つたのは一年ばかり前だが、その時書いてよこした手紙も矢張りこうして友から友の手へと送られて行つた事等を思ひ出して、規矩子は惱ましさうな目付きで、片手を疊について體の重みを支へながら、靜に下つてゐる白い電燈の傘に見入つた。南國生れで情熱にも理智にも明るく豐かな淸子が、苦しい事情の爲には自己を海中の水泡にも過ぎないものと見て親の意のまゝな結婚の道に進む氣持を叙した手紙は、年下で而も導かれ勝ちでゐた規矩子に特別強く響いて、自分の將來をも不安がる樣な氣持を起させた。登喜子の行き方も淸子のそれと大して異つてもゐなかつたが、規矩子は彼の時のやうな不安めいたショックは受けなかつた。諦めの窮極はやがてこの友達には宗敎的にも近く、非現實的なところ等がいつそ世の中に對する思想を徹底させてゐるやうであつた。で結婚後淸子が時折りよこす手紙の裏に潛む憂鬱はこの友達の將來には思ひ及ばなかつた。規矩子は却つて、この友達が、田舍の繁雜な家から遠ざかつて一年ばかり北海道の女學校へ赴任した當時の熱のある手紙等を思ひ出すと、遠い所を凝と見てゐるやうな潤んだ大きな目が浮んで、手紙の中の詩の斷片等が胸に湧いた。

桐の葉うらに
夕日の光よわりて行けば
畑中の家、薄もやの中に
ほのかに灯す。水色の空に
うるみ光れる星たゞ一つ…………
うすじめりせる道の小草に膝まづき
——しづかに——いのる。

○

登喜子が良人の勤め先の都合で二人きりで筑波を離れて動坂下に新家庭を結んだのは、花の前自分であつたが今はもう初夏を迎へてゐた。全く夢の樣に月日が飛んだ。家はアトリヱとして建てたと云ふ丈けにどつか小器用に出來てゐて壁の色も桃色をしてゐた。登喜子も始めは茶の間としては落付かぬやうな事を良人に云つて見たが、流石庭の樹木が一日〱と繁つて來ると、この明るい桃色の壁が樂しく眼にうつゝて來た。新婚の日の記念としても離しては考へられぬもの〻如くに。

かなり早起をしても、夫を會社に送り、その後自分も髮の一つも結つて來るとその日も定まつて十一時近かつたが、登喜子は、以前のやうな時間的刺激は感じなかつた。

緣側近く柔いメリンスの座布團に座つて、靜に繕物にかゝつた。と玄關の明いたやうな氣がして一寸耳をすましたがつゞいて音も無いので「お隣か」さう思つて登喜子は膝から落ちかけた赤い切れを、引寄せた。琵琶の遠音が聞えてゐた。曇つた空が急に晴れて、初夏の陽ざしが濡れた板塀にくつきり差して燃えるやうな光を見せた。登喜子は自然に動かされるやうに、緣端に立つて、楓の若葉にふりそゝぐやうな日の光りに凝と覗入つた。それから厠に行かうとすると、玄關に「御免下さい」と云ふ聲がした。出て見ると規矩子であつた。登喜子は、立つたまゝ驚いた顏で然し嬉しさうに

『あら。!規矩さんね。どうぞ。さつき一度お呼びにならなかつた?』

『一、二度お聲かけて見たけど、あんまり物音がないでせう。その邊にお買物にでも行つしたかと思つて……』

『まあ、ご免なさいね』

二人は親しい仲の事で挨拶らしい挨拶もなしに、肩を並べて玄關から茶の間に通つた。

『いゝでせう』規矩子は先づ自分で賞めて、土産に持つて來た花を包紙から取り出して、友達の手に渡した。青い苔の附つ

いた岩躑躅と蘭にも似たかんじよ、それに白と時の半開の芍薬。登喜子は心から嬉しさうに受取つて、禮を云ひながら暫く淡い匂ひをかぐやうに、それを持つて立つてゐた。規矩子は友達より先に無遠慮に長火鉢近くに座ると、下げて來た投入れの籠もそこに置いた。それは小枝子清子それから規矩子の三人から、心ばかりの祝ひの品として、登喜子に贈らうとしたもので、籠とは、規矩子から相談かけた時の登喜子の注文であつた。遠く離れてゐる二人の友に代つて買ひ役を引受けてゐた規矩子は、あれから一月以上も立つてゐたので、一寸面目ない樣な顔をしながら、

『お約束のお祝ひのもの、今頃になつて。』

さう云つて笑ひながら、二、三寸友達の前へおし進めると、登喜子もそこに座つて、

『わざ〳〵持つて來て下さつたのね。どうも有難う。』と感謝に充ちた眼付で規矩子の顔を見た。『ぢや直ぐこのお花を挿しませうか。』さう云つて、登喜子は竹筒に水を入れて來ると、次の部屋の床の間に持つて行つて、生けると、『これでいゝかしら?』と茶の間から眺めてゐる規矩子を振返つた。規矩子は規矩子で、結婚して却つて若々しくなつた樣な友達の丸髷の水々しい後姿に見とれてゐた。艶々光つて居る黒い髪に紅一點のやうに見える赤い絞りの手柄は特別規矩子の眼を引いた。

『中根さん。もう如何にも丸髷にも慣れてゐらつした風に見えてよ。こゝから見てると。』

『いやだ。そんなに見てゐらつしたの?』

堅太りで、白粉氣もない淺黒い顔をそのまゝ光らしてゐる規矩子を、やさしく顧みた登喜子の眼には、一つ位上だとは見えない位姉さんらしいところがあつた。

手早に針仕事のものを片隅に寄せて、臺所に出て行つて登喜子は、有り合せの水菓子とパンに牛乳をそへて持つて來て座つた。二人は氣兼ねなくパンを割けて晝食に代へながら話した。

『良人がね。丸髷が好きで、お前の結ふ髪はもう他にはないんて。』

『さうなの。』

『本當にこの頃は道を歩いてゝも、お湯に行つても、髪を上げてる人は直ぐ眼につくのよ。二、三日前ですけどね。お芝居に行つたら、棧敷の中程に、いゝ格好の髪に結つた奥さんがゐらつして……いゝ氣なものね。以前には、紫さんが、島田なんか結つて歩いてる娘を見ると、恥を知れと云ひたくなるとか、あれは『待ち島田』だとか仰有ると、本氣で皆な同意して――。』

『さう〳〵。』規矩子も噴出すやうに笑つた。なほ登喜子は、結婚してから自分もつくづく女だなと思ふやうになつた等としんみりした調子で話し出すと、規矩子も默つて、友達の實感に耳を傾けた。

『こんな髪でゐると、異つた人のやうでお話しゝにくいんぢやない？』

默り氣味な規矩子に氣が付いたと云ふ風に、登喜子は、いたわるやうにさう云ひ出した。

『いえ別に。母が二十日ばかり出て來てゝ――勿論私の事で――そんな事でこの二三日は疲れた後のやうに、茫やりしてるの。それでも體は何ともないのよ。』

規矩子は、何となしに頰を少し紅めながら否定した。

『さう。何だか今日は蒼い顔をしてゐらつしやるやうよ。暫くお見えにならないから、良人でも、どうなさつたかなんて――。で、お母樣はもうお國へお歸りになつて？』

『えゝ。一週間程前に。』

何を話したともつかない中に、庭先が仄暗くなつて、土の香を含んだ冷とした風が、部屋に入つて來た。規矩子が歸らうとして立上ると、登喜子は是非夕飯を喰べて行つて呉れるやうにと云つて、どうしても放さぬと云つた顔付をした。と急

に思ひ出したやうに、聲の調子を改へて、『明後日吉岡さんが、修學旅行で生徒を連れて出でゐらつしやるんですつて。』さう云つて、茶箪笥の引出しから小枝子の端書を出して、規矩子に見せた。

『では、何か私もお手傳しませう。』

白いエプロンで甲斐〲しく臺所に立つて行つた友達の後から規矩子は聲を掛けた。二人は莢豌豆の筋を取りながら、やがて母にならうとしてゐる西の清子の噂や、一緒に小枝子を上野驛に迎へに出て、驚かさう等と云ふ事を話した。

四十燭光の電氣がパツと部屋の隅々までも明るく照すと、食卓の上には、鮪の刺身皿やその他の手料理が氣持よく竝んだ。蛤鍋の焜爐を登喜子が頰をほてらしながら、膳の上に持ち出すと丁度登喜子の良人の眞一が、歸つて來た。規矩子は、眞一には二三度も合つてゐたが、三人共いくらか改まつて膳についた。規矩子の兩親の住つて居る所は北海道であり、眞一もそこに一年程暮したとか云ふので彼は、丁寧な言葉付で、向ふの事を規矩子に話しかけ等した。眞一の質直な行き屆いた人柄は、話振りにもよく表はれた。食後暫くして、やがて暇さうとして規矩子が手をつくと、眞一は『では運動方々でもございますから、そこ迄お供いたしませう。』さう云つて「ね」と、登喜子を顧みた。家の中は、雨戸を閉め切つたなりで、三人共外へ出た。登喜子と規矩子とが門の錠を、ガチヤ〲させてゐる間に、眞一は三四間先を歩きかけてゐた。二人が歩を早めて、インバネスを着た脊の高い眞一に追ひ付くと、登喜子は『いやだ。一寸待つて下さつてもいいのに。』と云つて良人の肩を叩いた。眞一は、持つた煙草を手から離さずに、滿足らしく微笑した。もう二人の間には、お互にわざと戯れに、夫婦らしい仕草も出して見ると云ふ風であつた。

○

朝の十時二十五分の兩毛線で、小枝子は着く筈であつた。五月のチカ〲するやうな陽光は、バラツク建の上野驛をも心地よくしてゐた。忙しさうに立ち廻つてゐる赤帽の日にやけた顏にも活氣を添へてゐた。輕いほこりが立つてムツとし

てゐる待合室の、一杯の人の間を、規矩子は登喜子を探すやうに眼をくばつてゐると、後からトンと脊を叩かれた。『お待ちになつて？』『まあ驚いた。今來たばかり。』ホームには、震災後旅行者外の者は出入を許さぬので、出口のところで二人は小枝子を待ち受ける事にした。

『吉岡さんは、學校時代は氣取つて歩く事が、割にお好きだつたでせう。田舍の生徒について東京の市中を歩くて云ふのは、先生になつて見れば、何ともないものかしら？』

先生の經驗もある登喜子に、規矩子は訊いて見ると、『さうね』と一應考へて見て、思つて見た時は嫌だつたが、いよいよとなつたら、生徒を預つてると云ふ責任で、自分の事等は氣にしてゐられなかつたと、その頃を思ひ出すやうな眼付で登喜子が答へた。話してる中に田舍の生徒らしい列が、こちらに吐き出されて來た。列の一番終りについて、風呂敷包をかゝへた袴姿の小枝子を、登喜子が先づ眼捷く見付て、『あそこに』さう云つて規矩子を引張つた。小枝子は、二人の姿を見付けると、胸が一ぱいになつてしまつた。二三言云ひ交してから、校長先生に挨拶をして欲しいと云ふので、登喜子と規矩子とは、驛員と交渉をすませて、後れがちに歩んでくる老年の校長先生を待つて、愼ましく頭を下げた。年は六十にもなつてゐるのだらうか。顏の色は赤銅色で頑健さうに光つてゐたが、髮は殆んど白く、眉には眉霜さへ認められた。足にはゲートルをしつかり卷き、水筒を肩から斜に下げ、右手には竹の杖を握つてゐた。校長は、それを動かして生徒を指揮しつゝ先頭に立つて歩み出された。生徒の數は六七十人位であつた。先生としての小枝子は中央に、登喜子と規矩子とは兩側になつて、列の後から續いた。登喜子は、新しいレース入りの水色の洋傘をさして日をよけた。バラックがそれからそれへと聯絡してゐる震災後の發展振を見ても小枝子は驚りした。混雜してる電車が、爆音を立てゝ通り過ぎた。その音の遠ざかつたのを待つて小枝子は、登喜子を見て云つた。

『中根さん。誰方かと思つてしまひましたよ。でも丸髷がようお似合ひになること。』

『氣まりが惡いとも思つたんですけどね、まあ見て戴かうとも思つて。』
『吉岡さんが、お見違へになるのは、當り前ですよ。私でさへおやと思ひましたもの。』
藤色の透いた一重羽織・鼠色の絹手袋・赤い手柄さう云つた裝身具が、今日の登喜子を別の人のやうに見せた。列から後れまいとすると、悠り話して歩くわけには行かなかつた。三人は、ろくに口もきけずに博物館の前まで來てしまつた。登喜子は、十二時迄にしなければならない仕事を云ひ付かつてるからと云つて、名殘惜しさうに『またお逢ひしませう。今日は何のお話しも出來なくつて。でも、またね。』繰返すやうに云つて、別れて行つた。規矩子は切符を求めて、綺麗に掃除の行屆いてゐる館の園内の砂利を踏んだ、園丁が草花の手入れをしてゐた、校長先生が、生徒に何か説明を與へてゐるやうであつた。小枝子と規矩子は、五月の靑く晴れ切つた空に、寂びた靑銅の圓い屋根を望觀して立つてゐた。小枝子は小さな溜息をついた。館内は階下丈見て通つたのであつたが、一呼吸に馳けぬいた心地であつた。さうだらう。校長先生が懷中時計を掌にして、豫定通り十五分間で出口に出たのであつたから。それから動物園へ。生徒達の眼はみんな疲れて呆やりしてゐるやうであつた。お互に口にする話辭も小さく。整列して、今度はやゝ靜に歩き出した。
『ね。私本當の事を云ふと——中根さんがあんなになつておしまひになつて寂しいのよ。あなたも餘り考へ込まない方が得よ。本當に。』
下を向て歩き勝ちでゐた小枝子が、思ひ切つたやうに云つた。館内では「中根さんは、お幸福なんでせう。」と二三度色々に聞き返す友達に、規矩子も出來る丈髣髴と説明したいやうな氣持で、「之が矢張女の自然の道かしら。さう思はれる迄氣持が素直に和いで來た。」と話した言葉をそのまゝ小枝子にも傳へたりした。規矩子は、何と答へていゝかわからなかつた。登喜子とは小學校からの友達で、郷里も一つな小枝子は、何となしに友達の華やかさに、心を寂しくさせられたのだらうか。規矩子は、さうも思ひながら、

『誰でも、結婚したて三月位は、華やぐやうな氣持になるんですつて。』と云つて見た。『さうね。清さんからは、中根さんが、どうか自分のやうな結婚後の悲哀を經驗なさらないやうに祈るつて。』
小枝子はさう云つてから、又つゞけて、
『私この頃は、宗教も何もないのよ。考へたつて、つまらない氣がして。』
『でも、その宗教に救はれるやうな時が來るかも知れない――。』
規矩子は、さう云はうとしたが、友達の横顔を、チラと見ると、胸が一杯になつて『吉岡さん！』と名丈を心こめて呼んだ。
先頭の生徒は、動物園に入りかけてゐた。規矩子は、こゝで袂を分つ事にした。
『明日朝六時で、東京驛をたつのよ。』
『ぢやあ、關西の方へも？』
『エヽ。京都と奈良とへ。』
『さう。折角いゝ旅をなさつてね。御機嫌よう。』
小枝子は、規矩子の側を離れて歩き出したが、思ひ返したやうに、小走りに友達の許にひきかへして來て、規矩子の耳近く『あの事は、中根さんには、默つてゐらつしてね。』
『エヽ。大丈夫。』
規矩子は、深く首でうなづいた。
奧をすつかり隱してアーチを作つてゐる大椎の葉蔭に消えてゆく列の最後の友達の後姿を、規矩子は、憂欝な眼付で見送つてゐた。
（をはり）

勝利の悲哀（入選）

矢幡ちよ子

（一）

勝子は結婚すれば多分良くなるだらうと思つてゐた身體が又もとの不快な現象にまで立ち返らうとして頭を擡げて來たものがひどく氣になり出した。多分と言つたところで、それはほんの一時の氣安めに自分や周圍を誤魔化す以上に確實な信頼を置くことの出來なかつたといふことは、彼女の健康狀態を、最もよく知つてゐる彼女自身より他に知るものゝなかつたのは當然だつた。しかし結婚當初の狀態から考へて、これならば早晩健全な回復を見るだらうと、いくらか結婚前の「多分」に價値を見出すやうになつてから、二ケ年足らずして、それが全然あてにならないと言ふことを知つた今、それが、あたりまへのことのやうにも思はれたけれど、いくらか失望に似た悲哀をも感じないではゐられなかつた。

彼女の可弱な肉體を保つ上に、どうしても必要でなければならないところの新鮮な空氣、榮養、我慢、といふやうな安易な生活が彼女の結婚に於てどうしても相容

れられないやうな境遇に置かれたといふことが、その重な原因であることも彼女は知つてゐた。しかもそれが二ケ年前、彼女自身、死を賭してゞもと乞ひ願つたそれであつたゞけに、その當時は自分の健康なんて言ふ問題は全々眼中になかつた。偶々それを考へて、自分の望んでゐる結婚生活が、どんなに自分の健康の回復を阻害する多くの條件を備へてゐるかといふことが、わかりすぎる位よくわかつてゐても、たゞ一筋に燃え狂つてゐた彼女の熱情は、それ等すべてを裏切ることに何の不安をも感じてはゐなかつた。のみか長い遊惰な生活に倦みつくした彼女の頼りと「變化」を切望する心が、結婚といふ新しい生活に、その身を容れることによつて救はれるといふ精神的な滿足が自分自身の肉體にも或は好結果を齎らすかも知れないといふやうな反撥意識が一種の氣安めをさへ抱かせてゐた。

勿論そうした氣安めが事實、結婚當時の彼女の肉體に豫想以上の効果を現はして、新らしい生活への變化が彼女をかぎりなく滿足させてゐた。しかし物質的に生活の安定をさへ缺いてゐる彼等の貧窮は、彼女の肉體が望んでやまない豐富な食物や閑靜な住居を供給するだけの餘裕がなかつた。のみか日を經るに從つて以前とは何の異るところもない生活の單調が再び彼女の心を倦怠で被ひつゝもうとしてゐた。

それ等が漸次、彼女の肉體に不安な結果を現はしはじめたのである。もつとも我慢といふ點で夫の前に振舞つてゐる彼女の横暴さへ周圍の人々の目をさへそむけさせるほどであつた。しかし、それも彼女の健康を幾分でも保たせる上に何の効果も持つてゐないばかりか、ゆるされるまゝに益々つのつてゆく彼女の暴君的な態度は、屢々夫との間に衝突を起す原因となり、それが一そう彼女の神經をヒステリックに導いてゆくだけだつた。

夫の栗山も彼女の我儘な性格に就いては結婚前から充分知つてゐた。しかも彼女のどんな暴君的な態度も、どんな横暴な我儘をも敢て默認しなければならないほど、すべての點に於てあまりに僭越すぎる彼女であることも知つてゐた。それが偶々栗山自身を醜い僻みに陷れることもないではなかつたが、それ等はすべて彼女を完全に所有し得たといふ、かち誇

つた優越感によつて、打ち消すに決して困難なものではなかつた。

彼等の戀愛が、やがてそれを結婚にまで押しすゝめられやうとした時に、……そうして、それが幾多の周圍の防壁や迫害によつて打ち碎かれやうとした時に、栗山は彼女が自分と結婚することによつて、彼女の生涯をみすく不幸に陷れることになりやしないかといふ恐怖の爲めに、幾度か自分自身の愛を犧牲にして彼女を解放してやることに眞實な愛を道くことを考へて見ないこともなかつたけれど、彼女自身決して、それに應じなかつたのと、長い三ケ年の戀愛に於て既に彼女の淨い處女性を傷つけてゐたといふ大きな責任觀念が、遂に、栗山に彼女を奪はうといふ最後の決心と力を與へたのであつた。

そうして、栗山は、幾多の周圍の人々の反感を買ひつゝも、彼女を、かばはうとする財産や名譽や、地位といふやうなものゝ中から、素裸體な彼女をもぎとつたのであつた。

しかし、それが彼女自身、死ぬほど乞ひ願つた戀の勝利として、彼女の幸福感を、滿足させるに、充分ではあつたけれど、貧しい家の子として生れ、タツタ紙一枚の固有財産をも持たない栗山は、その幾倍かの財産家に、小さい頃から思ひのまゝのぜいたくを盡して暮して來た彼女を、いつまでも、その精神的な滿足だけで、すまさせてゐられるかゞ危まれた。たゞそれだけでも栗山は、彼女の外觀的な不幸を、自分の獻身的な愛の力によつて、償ふより他に、道がないと、決心してゐた。尤も、彼女は、栗山に、そうした僻見を抱かせないだけに、當然與へられるべきものさへ持たずに、女らしい虛榮心を、眞實な戀の前に冥目させて、全くの着のみ着のまゝで栗山に投じたのでは、あつたけれど、それ以上に、あらそはれない彼女の高い敎養や、深い思索と、言つたやうなものが、それ等より、はるかに、低い程度の彼をして、當然彼女に對する僭越をゆづるべく餘儀なくさせてゐたのである。

戀愛時代から、彼女は、栗山にとつて、決して、可愛い小鳥でもなければ雲雀でもなかつた。彼女は、その最初から、まるでクイーンのやうな態度で彼を壓しつゞけて來た。それが結婚生活に入つても、そのまゝ同じやうな狀態がつゞけられてゐた。勿論、それが栗山にとつて、いさゝかの屈辱をも感じさせなかつたのみか、彼女を、そう振舞はせることが、地位や、財產を、捨てさせたことによつて、うちひしがれた彼女の虛榮心が、又異つた意味に於て、頭を擡げ得たことに、或享樂をさへ、感じてゐるらしい彼女の心持を知るだけでも栗山は、彼自身の抱負の幾分でも殺がれたやうな輕い心持に、なることが出來るのであつた。

栗山は、彼女の健康を氣づかふ心から、最初に、選んだ郊外の淸楚な住居さへ、薄給生活の壓迫からその要を充してやることが出來なくなり、間もなく、塵埃にまみれた市街の茅屋にその居を移し、轉々として、固定した住居をすら、彼女のために、用意してやることが出來なくなつたばかりか、不健康な彼女の爲めに、充分の榮養をさへ與へてやることが出來なくなつた爲めに、漸次、衰弱してゆく彼女の肉體を、たゞ焦しい氣持でみつめてゐるより他ないのであつた。

（二）

絶えず熱のこもつた不快な肉體を持てあまし持てあまし、最初に期待してゐた結婚生活の華やかな幻影が漸次その色彩を失つて、再び單調な生活の倦怠が、勝子の心を、段々と腐らせて行つた。それればかりか、煩雜な都會騷音や、苦しい生活の壓迫が、暫く彼女の心を息づまるやうな焦燥にまで驅つて、その度に、彼女は、栗山に、あたり散らすのであつた。

結婚當初には、面白半分から手慣れない炊事を、まるで子供のまゝごとのやうに喜んでせつせつと働いてゐた彼女も、今では、全くその興を失つて、夫のために、たゞ一膳の晩餐を用意することさへオツクウがつた。

栗山は、會社の勤務以外に、自分自身の食ふべきものを自分で作り、彼女のためのそれさへ、用意してやらねばならなかつた。

終日、はげしい社會のたゝかひに、疲れた身體を、携へて歸つてゆく、家にも彼の魂を、憩はすべき彼女の優しい微笑をすら、稀にしか見られないやうになつた。

毎朝、夫の出勤するのも、彼女は、眠つてゐて知らないことが多かつた。栗山が會社の多忙に追はれて、炊事の要を足す餘暇のない時には、彼女はいつも近所の仕出し屋から辯當をとつた。何んでもなく、すませるやうな些細な洗濯物や仕立物さへ御用聞きの手を煩はした。少くとも主婦として持たねばならない何一つをも彼女は充分に果してはゐなかつた。

それが全然彼女の不健康に原因してゐるのではなく、その大部分は彼女の氣まぐれな我儘からであつた。

最初はすべてを默認してゐた栗山も、彼女の奔放な家計の切りまわしが、彼等の經濟上に、明かな支障を齎して、到底彼一人の薄給では、その生活の安定を保證するさへ危まれることに氣がついてから、栗山は度々彼女を、たしなめた。「健康のゆるすかぎりせめて、些細な家事の用ぐらゐは、他人の手を煩はさないですませてくれ」と。

しかし、その度に、彼女は、ひどく、氣嫌を損じた。さうして、その後もヤハリ彼女は、上流社會の家庭でだつて、これくらゐのものは主婦の手で足してゐる。と思はれるやうなことまで他人の手を煩はした。

栗山は、一そ下女でも置いた方が、かへつて經濟かも知れないと思つた。しかし、普通、世間並の報酬を與へねばならないとして豫算しても、到底彼のサラリーから、それにあてるだけの餘裕が見出せさうもなかつた。

栗山は、段々と、生活に對する幻滅を感じ出した。同時に、妻に對する幻滅をも感じ出した。それが漸次、栗山の心に、家庭に於ける自分の地位と言つたやうなものゝ自覺を擡げさせた。

それが明かに彼の言動にまで現はれはじめてから彼等の間には屢々露骨な感情のいきさつがはじまつた。

時には互に罵り合ひ、憎み合ひさへした。

彼女の不健康が、彼の必要以上に過剰な肉慾を飽き足らなくさせてゐるといふことも、見遁すことの出來ない原因をなしてゐた事は事實だつた。

勝子のヒステリックは段々と高調して行つた。彼女は、ほんの小さい事にもよく泣いた。その度に、彼自身も泣いた。

「誰がわるいのでもないのだ。彼女を、こんな慘目な生活のどん底まで陷れて來たのも、その當時の二人にとつては、何物にも變へ難い眞理の道であつたのだ。せめて、俺が彼女のかつての生活そのまゝを、肯定してやれる程度の手腕さへ持つてゐたなら、こんな醜いいさかいを起さずに濟むものを――」

栗山はさう考へる事によつて、自分自身の無力を蔑む前にモット訴へるべき何物かゞあるやうに思はれた。

栗山は彼女に對して、かつて感じなかつたやうな憎惡を感じ出した。一面その反撥が、長い戀愛時代を通じても、決して經驗することのなかつたやうな狂はしい愛着をさへ感じさせた。

二人の愛は時々著るしく分裂した。しかし、その度により強く二人を融和させるものは、お互に共通した周圍に對する意地だつた。

彼等の結婚によつて、可成り大きい裏切りを裏切られた環境にある人々の目は、不調和な彼等の結婚生活に、絶えず、意地のわるい好奇的な目を輝かせてゐた。

彼女に對しては「いつまで、さうした貧窮に堪えられるものか」と言つたやうな眼だつた。栗山に對しては、「いつまで我儘な彼女を養つてゐられるものか」と言つたやうな眼だつた。さうして、それは明かに彼等の結婚の破綻を待ちのぞみつゝ、それが實現された場合、彼等の前に投げかけるべき復讐的な罵倒の言葉を、くまなく用意してゐると言つたやうな眼だつた。

彼等は、その目を自分の間近に感じる時、「たとへ二人で飢え死んでも別れるものか」と言ふやうな強い決意をお互の胸に繰り返すのであつた。

（三）

勝子は眠られぬ幾夜かを甘美な戀愛時代の思ひ出に浸りつゝ、いくつかの、ひめごとを殘して來た故里の地に、堪え難い懷鄕の情をそゝられることが度々だつた。

華やかな濃い色彩をもつて彩どられた青春時代に於て彼等の戀愛は既に人生のあらゆる歡樂を極め、ほしいまゝな享樂をなめつくしてゐると言つていゝくらゐ彼女にとつてはまるで夢のやうな回顧を呼び起させた。

そこには彼等を壓迫する生活の颱風もなければ、煩はしい都會の息吹きに襲はれる心配もなかつた。

靜かな綠の故里は、樂しい戀のパラダイスであり、美しい海は、たゞ彼等の戀を讃美するためにのみ、終日、靜かな波を、打ち寄せてゐるがやうであつた。

生くべく、如何に苦しい現實の世界が、彼等の近い將來に待ち望んでゐるかをも知らずに、甘美な夢幻の世界に陶醉し、切つてゐた彼等は、たゞ感情の赴くまゝに、それを追求し享樂しまるで仲のいゝ、ゐのしゝのやうに、狂ひまわつた。

しかし、彼等が三ケ年の長い戀愛に、最後の完全な勝利を期するために、お互に望み合つた「結婚」といふ現實に、直面した時、そこに、驚くべき大きな岩壁の横つてゐるのに氣がついた。

どうしても、相容れられないお互の境遇と、境遇——それを突破するために、拂はなければならない多くの犧牲と、裏切りを知つた時、彼等は奮然として、最後の悲壯な決意を覺悟しなければならなかつた。

しかし、彼等の、愛と、眞は、遂に、環境の一部に、理解され、同情されて、既に、出奔するの要もなく、更に、死を

擇ぶの要もなく、最後の目的を遂することが出來たのである。

しかし、大部分の人は、尚多く彼等に對して反感や侮蔑を抱いてゐた。社會の人々は、彼等の不調和極る結婚に對して、異樣な目をみはつた。

勝子の兩親はひどく、世間體を憚り、コツソリと逃すやうにして、彼等を東京へ旅立たせた。彼等は、まるで落人に等しい慘目な姿で、誰一人の見送りをもうけずに、新らしい生活への旅路を旅立つた。

しかし、この寂しい結婚も、新たな愛と希望にうち震ひつゝ、かぎりない滿足と勝利に浸り切つてゐた當時の彼等にとつて、はいさゝかの空虛をも感じさせなかつた。

「成功するまでは、再び決して、故里の地をふむまい」彼等はお互に、強い決心を繰り返し、繰り返し、心に誓ひながら、思ひ出多い戀の故里にさらばを告げたのであつた。

勝子は、遠い忘却の彼方から押し返へして來る。それ等の追憶をハツキリと目前に繰り擴げながら涙ぐましい回顧の情に、今更、過ぎし日の甘美な青春を懷かしんだ。

「既にその時から二ケ年といふ月日が過ぎてゐるのだ。しかも、あれだけ強く乞ひ願つたこの結婚生活が、いつたい自分に、どれだけのものを與へてくれたらう――冷たい異鄕の人情――煩はしい社會との交渉――生活難――寂寞――悲哀――倦怠――遂には愛の波瀾――肉體的幻滅の豫覺――これ等がやがて、怖ろしい結婚幻滅にまで導くのではなからうか」

勝子はブル／＼と全身を震はせた。しかし、その後から潮のやうに襲ふて來る故里の人々に對する意地は、彼女のそうした不安を、根こそぎに奪つてゆくことに何の造作もなかつた。今は お互に共通したタツタ一ツのこの意地に信頼して、

その刹那刹那を、彼の愛撫にまかせてゆくより他なかつた。

しかし、生活の難風は、益々強く、彼等の上を襲ふた。しかも勝子の健康は、不安な病氣の徴候を明かに、その肉體に現はしはじめた。毎夕必ず四五分の熱を出した。夜は、寢苦しいと言つては、夜中、机の前に座つてゐることもあつた。胸の上尖端が針で突くやうに痛むと言つた。時々輕いせきさへ連發して、彼女の呼吸を、息づまらせた。

栗山は、日夜、金策の煩えに、うち苛まれねばならなかつた。

彼は、故里の兄に、泣き縋れば何とか融通をしてくれるかも知れないと思つた。しかし、彼の強い自負心と、意地は、容易に、それを實行することをさへぎつた。

勝子は、彼女の兄が、栗山の友達でもあり、彼等の「結婚」に就いても種々と氣をくだいてくれた事を考へて、一そ、兄に打ち明けて、融通してもらつては、と、言ふことを、栗山に、相談した。しかし、それは、栗山にとつて、肉身の兄に、泣き縋るよりもモツト強く、彼自身の抱負觀念を裏切るものだつた。

勝子は、暫く、故里へ歸つて、閑靜な海邊の生家で養ひさへすれば直ぐにも回復することはわかりすぎるほどよくわかつてゐたので、時々それを望んで見る氣も起さないではなかつたが、今更、病軀を携へて、歸つて行かれた義理でもなかつた。もつとも母にさへ打ち明ければ、直ぐにでも、そうすることを許してくれるばかりか、强ひてゞも家へ引き戻して、保養させたいと言ひ張るにきまつてゐることも彼女は知つてゐた。しかし今更、そうした母の愛に甘へてみるには、あまりに彼女は主婦じみて來てゐた。それに、彼女が彼等の結婚を、最も最初に母を承諾させ得た重大な條件として、「許してさへ下されば　私の病氣もキツト良くなるにきまつてゐる」と　幾度か斷言した言葉を、見す〳〵裏切つて、僅か二ケ年たらずの結婚生活に、再び傷はれた病軀を、母の前に、さらけ出すのも氣がひけた。尤も、母にしては人一倍子

煩惱な母であるだけに、彼女自身そうした意地や見榮を盾にして、いつまでも、ためらつてゐるよりは、あるがまゝの肉體をそのまゝ自分の前に、投げ出して來たところで、「それ見たか」と言つたやうな氣持は夢だに現はすやうなことの決してない、と言ふことも彼女にはわかつてゐた。

しかし、それが母だけであるならば、まだいゝとして、母が彼等の結婚を、父の前に、叔父の前に、親族一同の前に、圓滿な了解を乞ひ願つてくれた時に、同じく彼女の健康を、第一條件としたことによつて、辛うじて許された事を考へても、今更、病氣のための歸鄕は、彼女の自負心を根こそぎに、うちのめすものだつた

それに栗山との同棲生活が如何に彼女を倦怠させ、時には、お互の愛に、忌はしい波瀾をさへ、見なければならないまでになつてゐても、彼女は一日も栗山と、別居することの寂寞に堪えられない と言ふことも彼女の歸鄕を、ためらわせる原因をなしてゐたことは事實だつた。

それで彼女は、それも、栗山に、相談するほどの問題ではないと思つて、——それに、若しも彼に相談して「歸れ」と言はれた時の不安をも豫想して、決して、それを口に出そうとはしなかつた。

しかし、栗山自身にとつても、それは、ズツト以前から考へてゐた問題だつた。それに、既に、こゝまで生活が行き詰つてしまつた以上、彼女に、それを實行させるより他に道がないとまで思ひ及んでゐた。しかも栗山は、彼女の健康といふことが、彼等の結婚を受け容れられる點に於て、そんなにまで重大な意味が加へられてゐたことを全々知らなかつたゞけに、物質の窮迫といふよりもむしろ保養地として、故里の生家を擇ぶといふこと、故里の人達に對する意地とを全々別別にして考へることに何のこだわりをも感じてはゐなかつた。

たとへ、それが、自分よりもはるかに多くの裏切りを彼女に、裏切らせたことによつて、自分には感じられないやうな、

意地が、尚彼女の上に多く被ひかぶさつてゐるとして、――そのために、勝子がそれを拒むとしても、それは物質の補助をうけるまで同棲することの屈恥よりは、はるかに小さいもので忍べる、と、考へてゐた。
　栗山はそれを、彼女の前に、言ひ出す機會を待つてゐた。

（四）

　蒸し暑い梅雨期を豫知するやうな不快な天候に傷はれたであらう勝子の不氣嫌さを豫期しながら、家に歸つた栗山は、そこに、いつになく、元氣な彼女が、二三日前に買つてやつた赤い、ぼたんの鉢植を、緣側に持ち出して、それを、いちりながらスパスパと葉卷をふかしてゐるのを見た。彼はちよつと面喰つたが、洋服をぬぎ捨てると直ぐに臺所の土間へ下りて行つた。
「あなた、何してるの？」
「夕餉の仕度じやないか」
「たまに、私が作つたものじや氣に入らないのね」
　栗山はその言葉に驚いて、彼女の側へ行つて見ると、いつも汚い臺所の三疊の隅に落着いてゐる筈の餉臺が、緣側に持ち出されて、その上には既に二三の料理が整へられてゐた。
　栗山は幾日ぶりかで彼女の手料理が食べられるのと、彼女の稀にない元氣な素振りを見て、むしやうに嬉しい氣がした。
「そうか、もう整つてゐるのか。今日は馬鹿に氣嫌がいゝんだね」
　彼女はちよつと不快そうに顔をゆがめて、何か言はうとしてゐたが、直ぐに、それが、氣まりわるさうな、はにかみの色に變つたかと思ふと、いつになく素直な笑顔を、彼の方へ向けた。

彼等は、久しぶりで貧しいながらに、家庭味のある温い夕餉に向つた。
勝子は、箸を置くと、そのまゝコロリと身體を横へて、側にあつた體温器を腋下にはさんだ。そうして、尚も甘美さうに茶碗をかたむけてゐる彼の方を滿足そうにうち守つてゐた。
彼は、今味ひつゝある料理の品々にさし入れられた微細な手數から考へて、彼女の過勞が案ぜられた。
「あるかい」
栗山は、彼女の頭と腋下（と言つても實は露はな白い胸の肌）とを、同等に見くらべなら聞いた。彼女は、體温器を出して見て、ちよつと、その顏を曇らせた。
「七度六分」
そう言つて、勝子は、體温器を、もとのさやにしまつたが、彼女の顏には再び、もとのやうな晴やかさが浮んで來なかつた。それに、いつとなく、白粉をつけた顏が一そうに彼女を病的にさへ見せ出した。
「困るな――」
栗山は食膳を、かたわらへよせながら獨言のやうに言つた。
「私、もう、あと知らない」
「俺が、かたづけるよ」
勝子は彼に煙草の火をつけさせて、横になつたまゝまるい煙の輪を、半ば無意識に、天井に向つて、はきつゞけてゐた。
栗山は例の問題をうち出すには今がいゝ時だと思つたので出來るだけ穩かな調子で言つた。
「暫く、お前、國へ歸つて養生して來たらどうだい？」
勝子はあまり突然だつたのでちよつと驚いたやうだつた。
「だつて……今更大きい顏して歸れる家でもあるまいし……」
「大きい顏して歸ればいゝんだよ。俺逹はかうしてゐてもまだ決して敗殘者ではないんだからな」

「敗残者ではないんだつて？」
「ないよ。決してないよ」
「これ以上に、むごたらしい敗残者が、どこにあるもんですか」
彼女の言葉は角ばつてゐた。栗山は、ちよつと癪に障つた。しかし彼女にしては、そう考へるのが當然だと思つて、それ以上に、否定することを、ためらつた。
「お前が歸りたくないつて言へばいゝさ。しかしお前は、これで堪えて行かれるつもりなのか」
「そりや私だつて歸りたいけれど……そうして歸りさへすればキツと良くなるにきまつてゐるんだけれど……今更、あんなに強いことを言つて出て來た家へ、こんな姿では……」
「歸れないつて言ふのかい」
彼女は強い首きをして見せた。
「だつて病氣だつたらしやうがないじやないか、それに良くなりさへすれば又直ぐに出てくればいゝのだ」
彼女は暫く、ためらつた後、半ば甘へるやうな口調で言つた。
「あなたも一緒に歸つて下されば私…歸るけれど…」
「そんな無理なことがあるものか、それこそほんとうの笑はれものさ」
彼女はちよつと、その身體をねじまげた。
「……そりや私のやうな我儘者を歸られもしない家へ追ひやつて、こんな華やかな土地で獨り暮せば、のんきでいゝでせうよ」
彼女の瞳は明かに嫉妬に燃えてゐた。その頰は熱と昂奮のために、ポーと上氣してゐた。
彼女の不健康がかくも忌はしい疑惑さへ起させるほど彼女の心を僻ませてしまつたのかと、何とも言へない不快な感情がジリジリと栗山の喉元にまで込み上げて、彼を一時にカツト昂奮させてしまつた。

「馬鹿ツ」

栗山はいきなり彼女の頬つぺたを力一ぱい撲ぐりつけた。

口惜しそうに歯を喰ひしばつて泣き崩れてゐる彼女の前に突つ立つて、更に言葉をつぐさへ馬鹿らしい思ひがして、再び彼女を融和させるだけの穏かな氣にもなれなかつた。

暗い沈默の中に各々異つた意味の絶望と、堪えがたい寂しさを抱いて、別々に床に就いてから二時間も經つか經たないかといふ頃、突然烈しく表戸のたゝく音がしたと思ふと、

「電報、電報」といふかん高い聲が聞えた。

二人は殆ど同時に頭を擡げた。

勝子は、何物かを直感したらしく、そのまゝ飛び起きて出て行つた。

栗山はいさかいの後のバツのわるさから心では少からぬ動搖を感じてゐながら自ら床を離れて、その消息を確めるほどの氣持にもなれなかつたので、そのまゝ寢床の中に不安な幾秒かを過した。

彼女はいそ〳〵と、その電報を抱きかゝへるやうにして彼の寢床へ近づいた。

そこに現はれた文字は、悲しい事實を證明してゐながら彼女の顔は言ひ知れぬ喜びと滿足に輝いてゐた。

「あなた、ハハビヤウキ、フタリ、スグカヘレですつて」

彼も思はずニツコリと、彼女の喜びに惹き入れられた。

「先つきのこと御免よ」

彼女は子供のやうに、はしやぎながら、その電文が、今彼等の前に、「何」を齎らしてゐるかといふことさへ考へなかつた。

（完）

選後に

（第一回募集小說を讀みて）

島崎藤村

『才能を有するものはまた勇氣をも有する筈である。彼はおのれの靈覺に信賴せねばならぬ。彼はおのれの腦裏にひらめく意象が健全なものであることに氣づき、自然に彼に生れて來た形式は――よしそれが新規なものであつても――その要求を主張すべき權利あることを確信せねばならぬ。彼はおのれの天性に隨つてその導くまゝに步み行くことの出來るまでは、先蹤のために負はさるゝ影響の重荷を負ふことはおろか、邪路にすら彼自身を曝すほどの勇氣を獲得せねばならぬ。』

こんな言葉をこゝに書きつけたら、さだめしいぶかりもする人もありませう。これは北歐の批評家ブランデスがあのアンデルセンを評するに當つて、その前置きのところに書いた言葉の一節です。

女性改造記者の依賴によつて今月から私は諸子の作品を讀むことになりました。その應募作五十三篇を載せた私の机の上には今、ブランデスの著書一卷も載せてあります。それはことしの夏の讀物にせよと言つて、ある人が歸省間際に私のところへ殘して置いて行つて呉れたものです。昨夜も私はそれを取出して、アンデルセンや、イブセンや、フロオベエルに關する章などを讀んで行くうちに新たな感激を覺えました。私は自分の讀みさしの本の中から、諸子の參考にもと思つて、こゝにその一節を書きつけて見て居るのです。

そのブランデスの言葉の續きには、こんなことも書いてあります。

『曾てアルマンド・カアレルといふ少壯な新聞記者があつた。その記者は自分の書いたもの丶ために主筆から譴責されたことがあつた。主筆は青年記者の筆になつた記事の一節を指しながら「これは皆の書き方とは違ふ」と言つて見せた。すると、記者の答へには、「自分は、皆の書き方によつて物を書かない、たゞ自分の書き方によつて書いた。」――これがその人の返事だつたのである。そして、惠まれた性質を有するもの丶一般の信條はこれである。そは際物的な芥屑や氣まぐれな創作などを相手としない。傳統による形式でも既成の材料でもその自然の特有な要求にはふさはしくないとなるとその時こそ才能の權利をあらはして來る。そしてその力のすべてを養ひ育て丶行くに適したやうな分野を見出すまでは、又心靜かにも自由にもその力を發育せしむるまでは、意識して新しい材料を選び、新しい形式を創り出さうとするものである。』

これから筆を執り物を書いて出ようとするやうな若い人達にとつて、これを好い勵ましの言葉と思ふのです。古大家の書き遺したものに就いて見ても、これこそほんとうの人生だと言はれるやうな創作は、その人の全生涯を通じてさう澤山あらうとも思はれません。そんな容易でない注文をこ丶に持出さうとするやうな私でもありません。けれども、目標だけすくなくも高いところに置きたいものです。そしてお互に好い出發をしたいものです。

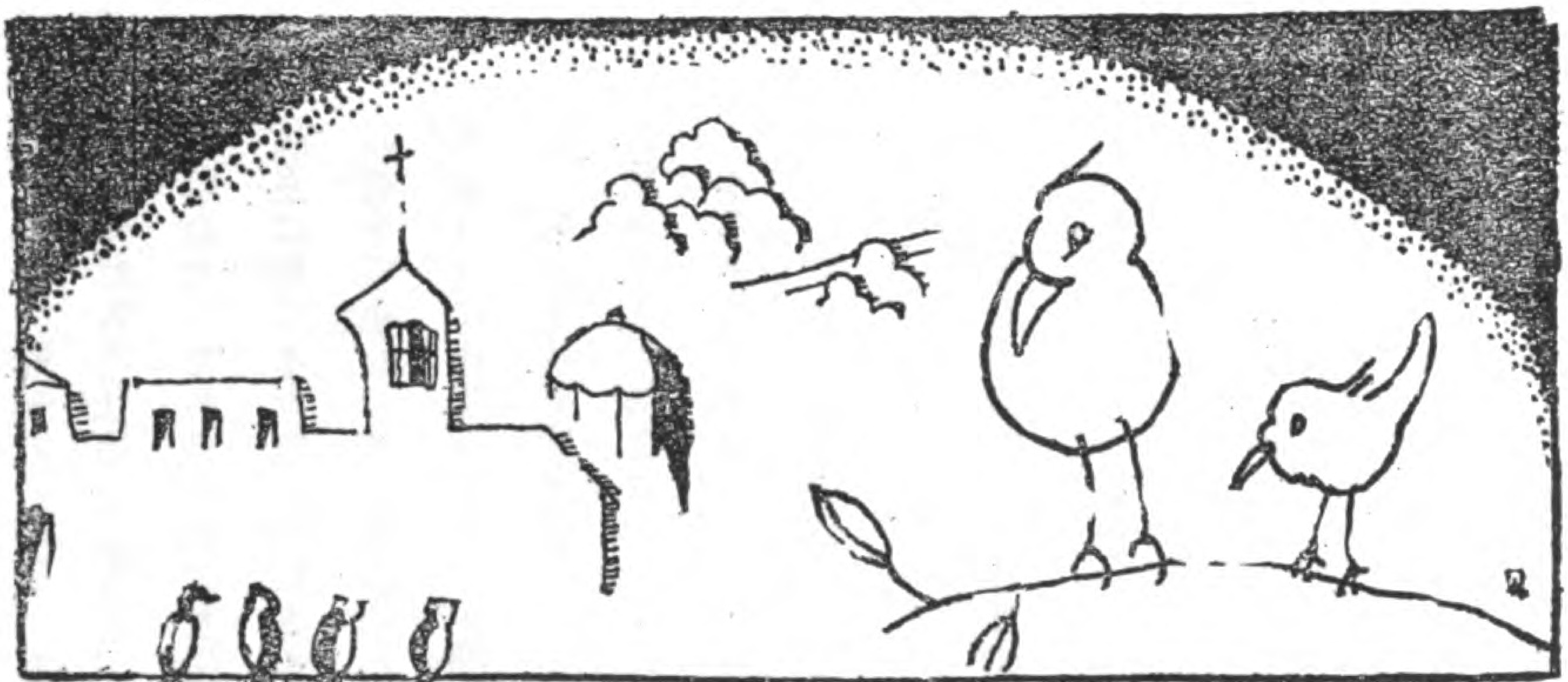
さういふ私は諸子とこの誌上で一緒になつたばかりで、まだ一向手心もよく分りません。直ぐにも親しめるやうな作品があるか、どうか、それすら氣がゝりなのです。女性改造記者から送つて來た五十三篇のうち、私の心をひかれたのは左の十六篇でした。

友と友と	畔柳すぎ	勝利の悲哀	矢幡ちよ子
或女の幼時	近藤としの	吹雪	安部ヨリミ
最後の晩餐	四宮華子	明け方迄	楠千代子

橋田牧師	松村久子	母の一頁	小松萬壽
破談	丹羽瑞子	軌道	藥江久
寂しき悔恨	大原みき	敬一とその母	竹内多仁子
光を求めて	村山美香子	債鬼	日比野友子
百日咳	今村要子	傷つける魂	淸田ます子

右のうち、畔柳すぎの『友と友と』矢幡ちよ子の『勝利の悲哀』の二篇を今回の入選作と定めました。

私は病後の身を養ふために小旅行を思ひ立つて居る際で、作品の一つ一つに就きこゝに短評を試みることも出來ないのを遺憾に思ひます。次回からはいろ〳〵と胸に浮ぶことを書きつけませう。『友と友と』の作者の多望な注意深さ、『勝利の悲哀』の作者の正直さに就いても書いて見たいことはありますが、今は盡せません。(七月三十一日、飯倉にて)



平吉の日記

悦田喜和雄

×月×日

ひでりが三十五六日續いた。父母達は田に水を入れるため、てんてこまひに働いてゐる。しかし、私は仕事をする氣にならないので、三日前から、飯は一日に一度食つたきり、時には一日中食はずに、今日もまだ寢てゐる。

今日も寢てゐると、

『平吉起こせまア！　若い者が樂寢ばつかりしてだうすりや！』と父は母に云つてゐた。

私はまだ一番鷄も啼かないうちから眼を醒して、蚊帳の外の蚊の啼くのを聞きながら左へ右へと寢返をしてゐたのであつた。母が先きに起きたのも知つてゐた。茶釜へ水を入れる音も聞てゐた。父が妹達を呼び起して戸外へ出て行つたらしい音がしたのも知つてゐた。

隣家の人達が仕事に出て行くらしかつた。

『棒何處へやつたんな？』と安吉の小父さんが誰かに云つたのが聞へた。

『こら！ 平吉！ 早よう起きんかい！ 他家の人仕事に行きよるんないか！』と母が云つた。私は默つてゐた。

今日はもう仕事しようと、眼が醒た時から考へてゐて、もう起きよう、もう起きようと心の内で云ひながら、まだ起きずにゐたのであつたが、父母達から小言を云はれると、起きたくなくなつた。まだ今日も寢てゐたろ！ と云ふやうな、故意に寢てやりたい氣になつて來た。

『起きて飯たべて、奥の田へ水取（池から田へ水を取り入れる）行けよ、そんなに寢てばつかりゐたつてだうなりや！』

父は仕事に出て行く時、土間から大きな聲でかう云つた。父が出て行つてから少しして母も出て行つたらしかつた。しかし、私はやはり寢てゐた。そして、やはりかるちやんのことを考へてゐた。すると、ぜひも一度かるちやんに逢はねばならないことは何よりいそぐことであることを知つた。

かるちやんに逢つて、かるちやんの結婚問題がいよ／＼だうかたづいたかを聞て見る。――逢つたつて仕方ない。昨の やうに、あゝまで話が進んでゐるのだつたらもう駄目だ……いや逢つて見る。今日中にでも逢ふことにする。かう決めた。

起きることは起きたが頭がジン／＼した。腰から折れさうな氣がして腰を延ばして歩けないので少し腰をかゞめて歩いた。

門口の小川へ行つて顔を洗つた。しかし、何だか、顔へくもの巣がかゝつたやうで氣持が惡かつた。目蓋が重い氣がして、眼を開けてゐるのにでも大變な力がなくてはならないやうな氣がした。今の私にはこの重い目蓋の垂れて來るのを支へる力さへないやうな氣がした。

家に這入つて爐の傍に坐つた。飯を食はふと思つたが食ふ氣がしなかつた。ひどく疲れたものだ。と思ひながら、口にたまつて來た唾を呑むと、のどがゴツト、ゴツト、と鳴つた。二三度つゞけさまに唾を呑んで、そこへそのまゝ仰向に寢て

伸びるだけ足を伸した。頭がフラ〳〵して眼がくらんで來たのですぐ横寢になつた。

——少しでも早くかるちやんに逢つて、あの結果を訊てみるのが一番よい、ことによれば自分だつてかうまで苦るしまつくて濟むかも知れない、何より早く逢ふことだ。噂ばかりではあてにならない、こりやいかん、下手なことをした、困なたわい！　と心配してゐると、丁度あてにしてゐたことが、どつかりはずれるやうに、そのことに實際あたると、色々想像して心配したよりもたやすく行つて、ホツ、として、あゝよかつた、よかつたと喜ぶことがよくある。このこともそんな風にうまく行つてゐるかも知れない、とつくの昔、かるちやんの結婚問題は破談になつてゐるかも知れない。

私は起きて坐つた。飯を食つて仕事に出てゐないとかるちやんにだつて逢ふことは出來ない、かるちやんが一人で仕事に出てゐる時か、一人で家に歸つてゐる途中でゝないと逢ふことは出來ない、奥の田へ水取に行けば、其行く道か、歸りに逢ふことが出來るかも知れない、ぜひとも今日中に逢つてみたい。

無理にでも飯を食はふと思つて戸棚から膳箱を出した。

飯は裏口の吊棚の上に、イカキ（飯入籠）に入れて置てある。食ふことになるとそれをおろしてこなければならない。

土間へ下りて吊棚の飯を下ろさうと思つて力を入れると眼がくらんで倒れさうになつたので、棚の竹を握つたまゝ眼を閉て立つてゐた。少しして眼を開けると癒つてゐた

三日寢るうちに本當の病氣になつて了つた。もう起きて行つても仕事は出來ない、と思つた。かうなつて一日一日衰弱して行くとなると、尚さら逢つて見なければならない。

なんでもかんでも飯を食つて仕事に出て行つても一度逢つて見たい。かう家にゐてはとても駄目だ、と思つて力を入れて飯の入つたイカキをおろした。今度は眼まいもしなかつた、

イカキを爐の傍に置て、又暫く坐つてゐたがだうしても食ひたくない、食はずにゐてはいつまでたつたつて食えない、

無理にでも食はなきや！、から思つて膳箱から茶碗を出して飯をもつた。

一口食ふとはき氣がさしたので休んだ。茶をかけて食つたら食へるだらうと思つて茶をかけた。そしてさきに茶を吸つてみた。茶は水のやうに冷めてゐた。茶碗の飯を箸でつゝいて一口食つてみた。又胸がムカ／＼して吐氣になつた。

右のこめかみがサク／＼痛みだしたので止した。茶碗に入つた飯はそのまゝにして爐のかばちに置き、膳箱も了はないで寢床へ行つて寢た。

×月　××日

今日はいつになく、顏を洗つたやうに氣持よく眼が醒めた。そしてすぐから考へた。

――かるちやんが、自分がかるちやんを戀してゐるだけの度で戀してゐて呉れるのだつたら自分はかるちやんよりさきに死んでもよい。本當に心から自分を戀してゐて呉れて、自分と結婚したいのだが、父母達や叔母や叔父の手前、仕方なしに福田と結婚するのだつたら自分は何にも云はないで福田とかるちやんの幸福を祈つてゐる。かるちやんが自分に、心から戀してゐて呉れゝばよいが――なんにしてもかるちやんに逢つてみることだ。と、時計が三時を打つた。私はあまり氣持がよすぎるので枕から少し頭を上げて左右に振つてみた。しかし頭は痛ない。よく眠つたからだと思つた。

今日は仕事に行かう？、今日こそかるちやんに逢つてみやう？そして、思つてゐることを十分打あけて話さう？かるちやんが一緒に死なんかとでも云へば喜んで死んでやる。海へ行つて死になと、川で死になと、山で首つろと、何處でゝも死んでやる。

海や川で死ぬんだつたら二人が抱き合つて死にたい、そして自分がかるちやんよりさきに死んでやる。自分が死んだことをかるちやんが知る。それからかるちやんが死ぬやうに！自分がかるちやんに對してこれだけ眞實であることを見せて

やりさへすれば自分一人でゝも死んだつてよい。他人にどれだけ嗤れても、自分の眞實をかるちやんが知つて呉れたらそれ以上のことはないのだ。

隣家に戸を開ける音がした。

父が母に何か云つたのが聞へた。母か父かゞ起きた音がした。鶏が巣から飛びおりる音がした。母が火を焚く音がしたので私は起きた。

頭はよくなつてゐるが腹が折れるやうにだるいので腹を撫でてみた。腹が空つたやうで飯はほしくない、胸部がジイジイした。

皆と一緒に飯を濟ませて奥の田へ水取に行くことにした。飯も欲しくはなかつたが、飯を食はずには働けないと思つて無理に食つた。

家を出た時、もう山と山とに挾まれた狹い谷間の空氣まで、全部が煙のやうな熱を持つて、鼻から這入つて來るのが、丁度日なた水を呑むやうに氣持惡かつた。白く乾いた道路にてりかえつた陽光は、研ぎすました剃刀のはを上へ向けたやうに、見えるやうで見えない。そしてジイ〳〵眼を刺す。私は眼を細くして歩いた。

道路を町の方へ曲ると處々はねつるべで田へ水を上げてゐた。私はなまけ者の自分を恥かしく思つた。

町の方から五六人の女の人が來るのを見た。奥の田へ行くには少しいそいで行つて道路から右手の川堤の方へ行けば其人達に逢はずに行けるので、私は少しいそいで行つた。

川堤を一町ほど行つて川へ下り、又南側の川堤へ上ればそこの堤下がすぐ奥の田である。

田の水はなくなつてゐた。しかし、池の水はいつもより多く溜つてゐた。私は草履を穿たまゝ池の中には入つた。冷い水は頸の中まで氣持よく沁た。着物を着たまゝ水の中へ寢てもよいやうな氣がした。

日にてられて熱くなつたツリハゼ（水取器の一種）の柄に水をかけて熱を冷した。ツリハゼの柄を握つたが身體がだるくて力が入れられなかつた。全身に力を入れて脊延をして見た。と、欠伸が出た。

ツリハゼに、水を一杯入れると息切れがして上らないので半分位入れて上げるやうにした。いつもだつたら、池の水がなくなつて、ツリハゼに水が入らないやうになるまで休まないのであるが、今日はどうしても水が減らない、息切れがして休まずにはゐられないので、まだ水が半分しか減らないが止して池から出た。

田の岸の崖の上に、雜木のしげみがかむさつてゐる。其下へ行つて草の中へ座つた。身體がだるくて座つてもゐられないので仰向に寢た。つゞけざまに出た欠伸をかんで兩手と兩足を伸べるだけ伸ばした。

――かるちやんに逢つて結婚の話がどうなつたかを訊く、かるちやんが自分について來るなら自分はどんなことでもする。かるちやんが家出をして何處かで二人が一緒に暮さうといふのであれば自分は喜んでかるちやんと一緒に暮す。一緒に心中せんか、と云へば自分は喜んで心中する。本當に今こそ自分を殺さうと生かさうとかるちやんの自由だ。かるちやんが自分と同じ度で自分を戀してゐて呉れたら自分はどんなに元氣な氣分になるだらう？なんにも怖くないのに！今の自分には何よりも必要なのはかるちやんだ。

かるちやんが自分と一緒に家を出て、何處かで一緒に暮さうつて云つたら、自分はかるちやんに滿足させるだけ働くことが出來るか？……お金の不足を感じさせるやうなことなく、かるちやんを妻として、自分は夫として一家の主人として、それだけのお金儲けが出來るかどうか？

自分にはこれと云ふ確な腕を持つてゐない、出て行つたつて何をして食つて行く、自分一人でも食つて行けるかだうかそれもはつきり云えない、二人が一緒に家を出て行つて暮すになつてもすぐこんな男だつたら一緒に暮すのぢやなかつた。福田と結婚したらよかつた、とすぐかるちやんは考へるだらう？さうするとどうしても自分にはかるちやんと結婚す

る權利はない、自分は福田だけの腕はないすてられるのがあたりまへだ。

——しかし、かるちやんが自分だけの度で自分を戀してゐて呉れたら、自分が福田のやうに働けなくても、男前が惡くてもそんなことは話にならないはづだ。自分はかるちやんがどれだけ他の女より醜くてもそれに怖れはしい、女の仕事にどれだけけうとくてもそんなことは考へない、それによつてかるちやんを捨てるやうなことはない。

——かるちやんと二人が一緒に暮すとなる、かるちやんはだん／＼自分の弱い所を見つけだす。二人の仲に厭氣がさして來る。かるちやんが思つてゐる半分の偉さも自分にはない、かるちやんはがつかりする、福田と結婚したらよかつた。と思ひ出す。

かるちやんが思つてゐるより、自分は馬鹿でなまけ者じや、自分はかるちやんの手前はえらく見せてゐる。捨てられるのが本當だ！あたりまへのことだ！。

——しかし今捨てられてはたまらない、さきはさきでだうでもよい、今の處だうしてもかるちやんをわがものにしなくてはならない、今かるちやんをわが物にして置けば、さきで二人の仲がこわれる時があつてもその時には子供が出來て、二人の仲をその子が破かないやうにして呉れるだらう？

だうしてもかるちやんに逢つて見ることだ。逢つて十分の話を訊て見ることだ。

私は立つた。頭がフラフラして眼がくらんだので暫く眼を閉じたまゝ立つてゐるとそれも癒つたので池へ這入つた。田に水は入らなかつたが太陽を見ると一時頃らしかつたので水取は止して歸ることにした。

どうかしてこのかるちやんで一杯の腦味噌を引き出して洗濯がしたい。

又、昨日のやうに水取だ。そして昨日のやうに休んだ。
昨日の夕方、桑摘に行くかるちやんに逢つた時何んにも話せなかつたことを、非常に情なく思ふ。私を見た時、かるちやんは顔を赤くした。あれが氣になる。今まで何處で逢つても顔色を變たりしたことのないかるちやんがなぜ顔を赤くしたのだらう？自分が怒りでもすると思つて顔を赤くしたのだらうか？……何にも云えなかつたのが残念だつた。今日は逢つたら胸一杯に溜つてゐることを全部話さう？……しかし、かるちやんに逢つて、かるちやんが、済ないが二人の仲を思ひ切つて呉れ、と云つたらそれこそたまらない、自分は暗夜に灯を失つたやうなものだ。何にも出來ない、毎日飯も食はずに寢るか、それとも自殺するかより他に何にもよい方法はない。それより今までのやうにかるちやんのことばかりを一人で自分によいやうに考てゐる方がましだ。逢つたら話すことにしてこちらから求めて逢ふことは止して置かう。
夕方になつて、どうしても逢つて見たいといふ氣になつた。
仕事を濟ませて家に歸つてから何となく氣が落ちつかないので門口へ出て行つた。そして、門口の少し高い處の草の中へ寢ころんだ。こゝからは私の家へ入つて來る道や、かるちやんの家へ行く道や、其他この狭い谷間にある七軒の家へ行く道全部と、ずつと長く町の方へ出る道路が見えるのである。
夕方にはもう皆一日の仕事に疲れて了つて道路には誰も見えない、たゞ自家に飼つてゐるクロ（犬の名）が長い道路の端から、小さくなつて、夕飯に歸つて來る。暫時して前の家の秀さんが、今日も又一錢のお錢を貰つて酒買ひに行つてゐたのだらう、片手で徳利を提げ、片手は竹を持つて、其竹でいたずらをしながら奥へ〱と來る。
他の古道の方を見ると、籠を持つた女が一人奥へ〱と來る。桑摘に行つて歸りらしい。かるちやんか、かるちやんの叔母だ、と思ふと胸がどく〱した。かるちやんらしい、叔母にしては若すぎる。私は立つた。そしてあたりを見まわした。誰も見えない、私はすた〱かるちやんの家の方へ行く道へ行つた。

私は田の防風木の大きな椨のある處へ行つて足を止めた。かるちやんは次第に近づいて來る。かるちやんを待ちうけてゐると云ふのも何だか恥かしいやうな氣がするので稻を押わけて株の中にゐるオガ（害蟲）を見たりした

　かるちやんが來たので頭を上げたが聲が出なかつた。

『どうしよん？』とかるちやんが云つた。私は口の中に鹽辛い唾が溜つて來るのを感じた。かるちやんの方へ向いたがかるちやんの顔も見ず、默つて俯向てゐた。一寸眼だけ上げてかるちやんの方を見るとかるちやんも俯向てゐた。私の胸はワク〳〵踊りだして來た。

『かるちん！』と云つて私はかるちやんに抱きついた。そして、かるちやんの頰へ自分の頰をぴたりくつつけた。

『晩に來てつかよ、話があるんぢや！』かるちやんは咽喉の奧の方でかう云つた。

『エヽ！』私も小聲でかう答へた。

　私は嬉しい氣持でかるちやんと別れた

　私はいつになく嬉しい氣持で皆と一緒に夜飯を食つた。父母たちをうんと喜ばせたい氣になつたので父母たちの喜ぶやうな話を探しながら喜ぶやうにとつとめて話した。いつになくにぎやかな夜飯だつた。

　行水を濟せてから、腹這になつておさらへをしてゐる下の妹のお下げの髪を引たりした。

長い着物を着て家を出た。今行つてはまだ早いと思つたので、好きな春風の歌を唄ひながら町の方へ出て出つた。

町の新橋の上へ涼みに出てゐる人が見える處まで行つてから後へ引き返した。

　かるちやんの家へ行くと、かるちやんと、かるちやんの母は蠶に桑をやつてゐた。私はそれを見ると、ぬき足で納屋の暗い陰へ行つた。蚊がブン〳〵寄つて來て刺すので足は足踏をし、手は蚊の寄らないやうに動かしてゐた。そして母屋の方を見てゐた。

かるちやんと母は、桑をやるのを濟すとすぐ〳〵籠の傍に蚊帳をつつた。戸口の戸は締たが籠を養つてゐる間は障子も開けたまゝで置くらしい。母は蚊帳の中へ這入つた。私は母家の方へ行つた。そしてかるちやんが出て來るのを待つた。と、電燈が消えた。暗い中でトン〳〵足音がした。

『どうしたんなかる、電燈つけとけ！』と母が云つた。

『ウチ知らんぜ。さわれへんのに消たんないけ！』とかるちやんの聲で云つた。

『つけとけ、つけて來い！』とかるちやんの母は又云つた。

『なんすんぜ、消しといたらえゝんないけ、寢るのに。』とかるちやんが云つた。

『つけとけ、つけて來い！』母は怒るやうに云つた。かるちやんは默つてゐた。

『若い者の無精な奴じや、やれ〳〵！』と云つて、グワチ〳〵ヤ音がしたと思ふと、クワツと電燈がついた。

『どうなへ。こんなに明るうへ眠れるけ！』かるちやんは蚊帳の中で云つた。

『明るいのが何程寢よけりや！』と母が又口答した。

それから二時間と思ふ位の間待つたがかるちやんは出て來なかつた。私は逢はずに歸つても、かるちやんがあゝまで、母に知られないやうにして、自分に逢はふと思つて電燈を消したりしたことを思ふと嬉しかつた。

其夜、寢間へ這入つたが嬉しくて眠れなかつた。

×月 ×日

昨日の松の小父さん話によるとかるちやんの結婚の話はいよ〳〵進んでゐる。もう日まで決めてゐるらしい。私は淋しくつてたまらない。

又今日も水取だつた。昨夜まんじりともしなかつたので少しよくなつてゐた身體は又もと通り疲れて了つた。休むとすぐうつら〳〵して眠氣がさして來る。そしてすぐ夢を見る又すぐ氣がつく、又うつら〳〵眠る。夢をみる。

ぼんやり坐つてゐると、二間位前の石垣からカニが出かけてゐる。私は石を拾つてそのカニに投げつけた。カニはあはてゝ其石を挾まふとした。又投げつけた。今度は氣持よくカニのカウにあたつた。カニはつめをピリ〳〵慄はせて下に落ちた。落ちてもやはりつめを慄はせてゐる。私は濟ないことをしたやうな氣になつた。死にきらないでもがいてゐるのだと思ふと可哀相に思へてならなかつた。私は立つて行つて其カニを拾ひ上げ、あるだけの力を出してそのカニを石垣へ投げつけた。カニは破けて飛んだ。これでカニも苦るしまなくても濟むだらう？と思つて私は安心した。

正午飯に歸る時、丁度一日中の暑いさかりなので、道には誰も通つてゐなかつた。こんな時かるちやんに逢つたら十分話も出來るだらう。かるちやんが話があると云つてゐたことはなんだらう？今だと誰にも見つけられるやうなことはない、今だとよいのに、かう思ひながらあたりを見廻した。桑摘に來てゐるかも知れない？と思つて桑畑の方も見たが見つからなかつた。と、家の方から桑摘籠を持つた女がすた〳〵私の方へ來る。かるちやんだ。と思ふと私の胸はだく〳〵踊つた。丁度云ひ合せたやうによい折だ。と思ふと私の胸は一層踊つた。

たう〳〵かるちやんに逢つた。かるちやんは赤い顏をして俯向て了つた。私も俯向て默つてゐた。しばらくして、私『かるちやん！』と云つて、私はかるちやんにしがみついて行つた。かるちやんは逃げようとしてもがいた。しかし私は離さなかつた。かるちやんは泣きだした。そして、そこへ私と一緒に倒れた。倒れても私は離さなかつた。かるちやんはしきりに泣た。ふと氣がついて私が頭を上げた時、松の小父さんがけゞんな顏をして傍に立つてゐた。私は立つた。私は恥かしくて、腰をかごめて逃げた。

×月×日

昨日かるちやんを泣かせて走つて歸つてから飯も食はずにまだ寢てゐる。今日ももう午近いが飯も食へさうにない。昨日のことを何度も〱繰返して考て見た。自分はもう世間へ顔出しが出來ない。私はあの時　かるちやんを手ごめにしたのではない。又しようと思つたのでもない。しかし皆は私がかるちやんを手ごめにしたと云ふだらう？　もしあの場合かるちやんが逃げなかつたら私はあゝまで大げさなことはしなかつたゞらう？　かるちやんが泣てもがいたから私はかるちやんを退がすまいとしたのだ。それでも手ごめにしたと云はれりやしかたがない、私はどうすることも出來ない。私は世間へ顔出しが出來ない。

×月×日

今日も寢てゐる。日記も四五日休んだ。夕方になつて氣持がよくなつたから日記が書き度くなつた。今朝父母達が仕事に出た後で起て行つて飯を少し食つてみたがすぐ全部吐て了つた。身體には三十八度位の熱がありさうな。少し寒氣がさして來たのでこれで止す。

×月×日

朝輕い咳が出て頭が痛んだ。本當の病氣になつたのか知ら？　風邪引たのかも知れない、色々の臭ひが鼻をつく、鼻の穴へ何か入れて嗅ないやうにしたい。

×月×日

又日記を三日休んだ。ずつと前、自分のやうな首の細い瘠た男は肺病になるかも知れないと思つたことがあつた。たうたうその肺病が來たのかもしれない、毎日きつと朝は咳が出る。そして、咳をすると胸部が痛む、雨が降つたらあたりが涼しくなつて氣持もよくなるだらうに。そして、雨が降つたら父母達にたのんで醫者を迎てもらひたいが？

×月×日

雨はまだ降らない身體は益々惡いらしい、父母達は以前のやうに故意に寢てゐると思つてゐるらしい、父は今朝小言を云つて出て行つた。自分の吐く息のなまぬるいのがいやでたまらない。

×月×日

このまゝ死ぬのもよいが、かるちやんと福田の結婚問題はどうなつたらう？ もし福田が、手ごめにされたやうな女いらないと云つてあの話がこわれて了つたら、それこそかるちやんにもかるちやんの父母達にも濟ない、このまゝ死ぬのだつたら申わけをしてから死にたい、この日記にそのことを書きたいが根氣がなくてさう長くは書けない。

×月×日

夕方氣持がよくなつた。

正午飯前にかるちやんの母が來た。あのことで怒つて來たのかと思つたがさうでもないらしかつた。それとも怒つて來たのだが私があまり苦るしんでゐたので其まゝ歸つて行つたのかも知れないが。

丁度私が苦るしい咳をしてゐた時だつた。私は咳がやむとすぐ蚊帳から出て坐つて、先日かるちやんに濟ないことをし

たことをお詫びしてそれからかるちやんに福田と結婚するやうに云つて下さいと云つた。かるちやんの母は何か云ひたいやうであつたが、又私が咳いつて了つたので默つて了つた。そして、私の脊を撫でて吳れた。咳がやんでから、

『おだいじに！』と云つて去ぬらしいので

『かるちやんによろしく、福田にもお詫びしたいのですが、だうぞよろしく』と云つたらかるちやんの母はしばらく默つて俯向てゐた。そして、歸つて行つて了つた。

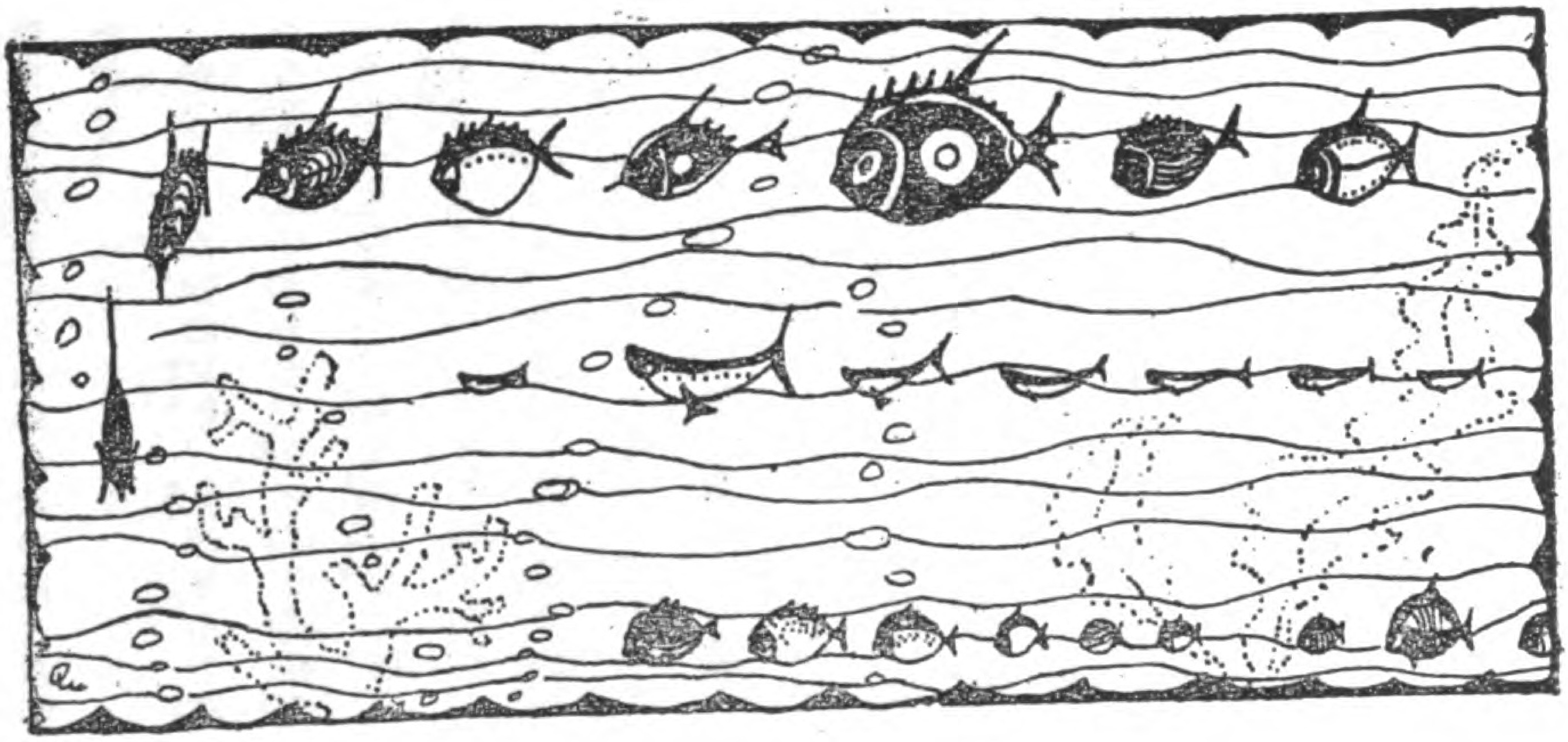
×月×日

今朝私が咳きいつてゐると母が來て脊を撫でて吳へた。咳がやむと

『正午まで水取に行つたら正午からお醫者さん迎て來てやるのつてなう、』と云つて吳れた、もう正午だがまだ歸つて來ないらしい。もうこの日記もこれで止すことにする。醫者が肺病だと云はねばよいが、醫者に診て貰ふのも怖い氣がする。

平吉はこの日記を止してから四五日して、剃刀で首をかきつて死んでゐた。

平吉が死んでから二ケ月ほどして、かるちやんと福田は結婚した。（一三、七、一九日）



繪物語

藤森成吉

あかるい午後の日のなかに浸りながら、靜かに繪の過去をふりかへる。

幼い時分から、私は內氣な、靜かな、疳の高い子供だつたらしい。そとへ出て遊ぶより、家の中にゐて、親にすねたり、筆でいたづらをしたりしてゐたがつたと見える。「家の前のやせ蝗」、――節をつけて、よく、仲間の子供にからかはれたことを覺えてゐる。

私の故鄕の家の、寫眞入れの箱の澤山な大小の寫眞のなかに、六歲のころ獨りで私が撮つた小さな寫眞がある。唐子のやうな頭をして、思ひ入つたやうな眼つきでじつと前を見て、黑い紋附きの羽織を着て、折り目の正しい長い仙臺平を穿いて、そして片手に大きな凧をさげてゐる、その凧には、圓い蕪が一つ、眞中に筆太に描いてある、これが、今記憶に殘つてゐる一番最初の私の繪だ。その古ぼけた寫眞は、だんだん色が薄れて今は大部分消えかかり、蕪の輪

廓なぞも判然とはわからないほどだが、私の記憶も同じやうに消えかかつてゐる、昔の憶ひ出をホンの少しばかり殘しておかう。

いろいろな物の象を、私が好んで書き散らすのを見て、父はいろんな繪の手本を與へてくれたが、やがて、まだ小學校へも登らないうちに、私を或る繪の先生のもとへ弟子入りさせた。

その先生の家へ、私は毎日出かけて、一枚づつ繪をかいて來た。

先生のところは七八丁もあつたが、雨がふつても風が吹いても、私は大抵毎日習ひに行つた。雨と云へば、まだ初めのころの或る日、午後、先生の家で熱心に、蟹の泡を吹いてゐる繪をかいてゐると、急に雷が鳴り出して、瀧のやうな物凄い大雨がザッザッと降つて來たので、先生は立つて雨戸をしめ初めた、みんな立てて了ふと、室がどんより薄暗くなつたので、私は蟹の甲を塗る薄墨の濃さがわからなくて、困つたことを覺えてゐる。

先生は、丁度坊さんの持つ拂子のやうな白い長い髯を垂らした、兩方の耳の高い、痩せ形の老人で、ごつごつと聞き慣れない物の云ひぶりをした。加賀の金澤が先生の故郷だつた、初め小學校に勤めて、町の北の、或る活版屋の二階を借りてひとりで住んでゐたが、毎日私がおもての硝子戸をあけて一足踏み込むと、活版のむすやうな油の匂ひが、むつと私をつつんだことを思ひ出す。

私は、黒い漆塗りの四角の箱の中に、自分の使ふ墨や硯や杯洗や繪の具を悉皆藏めて、その上へ幾何學的の模樣を織つた赤い細長い絨氈の切れを載せて、先生の戸棚の中へ預つて貰つて、行くたんび、そこから道具を出して、疊の上へ絨氈を敷いて、その上へ、右手に硯と墨と筆、前の方へ手本、眞中へチカチカ微かに光るどうさ紙をひろげて、そして左の手で疊を押へながら、右の手を輕くあげて繪をかくのが常だつた。右の手を疊へつけて描くと、手腕があがらないと先生が云つてゐた。私がかいてゐるあひだ、先生は柱にでも倚りかかりながら、本でも見てゐたらしい、或る時、私の書いてゐ

るところを默つて寫生して、あとで見せたのを見ると、私は片つぽの足を横つちよへ出して、大分行儀の惡い坐りかたをしてゐた、これを書け、と云はれたので、私は正直にその行儀の惡い足つきをした子を寫して、家へ歸つてみんなに見せた。

時々、まだ先生が學校から歸つて來ない留守に行くと、私は頭の禿げた背の低い活版屋の親父さんの云ふまま、二階へ登つてひとりで坐つて見たり、ぶらぶら室の中を歩いて見たりしてゐた。そこの子供は、始終青ばなを垂らしてゐるよたッ子僧（註、腕白子僧の意の方言）だつたが、私と同じ年恰好だつたので、時々一緒に遊んだり、喧嘩したりした。そこの職人の一人は、肩幅のひろい、愛嬌のある男で、よく私にやさしい言葉をかけてくれた、この男はあとでアメリカへ渡航しやうとして失敗して、また町へ歸つて菓子の行商をやつたが、その後リヨウマチスを病んで、脚が重くて困つてゐるとか聞いてゐる。

その後しばらくして、先生は中學校の教師になつて、今度は町の南の山の手の家へ引ッ越した、私は又毎日そこへ通つた。

小ぢんまりした家で、書齋の正面の長押には、先生の自筆の油繪の額がかけられてゐた。それはかなり大きい風景で、濃い綠の葉の鬱々と茂つた森の前を、蒼くどんよりした水が湛えて、白鳥が二三羽、白い羽を光らせながら首をあげて靜かに浮んでゐた、森のうしろには明るい日の光がさして、一すじ水を美しく輝かせてゐた、少年のロマンチックな想像はその額の綠の色を基調にして毎日無限の夢をひろげた。

時折り家主の家の幼い女の子が、黑い眼を見張りながら、こツそりとうしろから私の繪を覗いてゐることがあつた、ある時は、小學校で教つた若い女生徒が、二三人位で先生を訊ねて來て、私の描いてゐる傍で遠慮なく喋舌つたり、笑つたり、お轉婆な引ッ搔き合ひをはじめたりするので、私は默つて白い眼をしてやつた。

又或るよく晴れた春の日、家主が來て、庭の池の傍に柳を植ゑると云つて、下男の世話をやきながら、粉のやうに淡綠に烟つた稚い柳を叮嚀に植ゑつけ出した、先生は緣側へ出て、例のごつごつした調子で、言葉寡く家主と話をしてゐる、下男の土を掘る息の喘ぎや、黑土を起す鍬の音なぞが話聲に混る、私はそれらの響きを脊のうしろにきゝながら、夢のやうな氣もちで筆を運ばしてゐたこともあつた。

そのうちに、先生の息子が金澤からやつて來て、一緒に自炊をしながら中學校へ通ひはじめた、「かつら」と云ふ名前だつた、かつらさんは、よく小さな寫生箱を肩にかけて、そこらを步き廻つては寫生してゐた、先生は呼子の笛を一本持つてゐて、寫生の留守中にでも用が出來ると、緣側へ出て、ピイピイ、鳥でも呼ぶやうにそれを吹いた、そうして暫くすると、「何ぢやいのて、」とか何とか云ひながら、若い畫家が緣先きへ戾つて來た、或る時かつらさんが、向ふむきに坐つてゐる丸髷姿の女の寫生を私に一枚くれた、私はそれを持つて歸つて父に見せると、

『これはよつぽどうまいもんだ、とても、お前なんか追つつかない。』

と如何にも感心したやうに云つたので、私はひどくくやしく思つた。

節季ごと、父は私に、禮の金子をもたせて先生に出させた、先生は格別禮も云はなければ不足も云はず、いつも稍にある仙人のやうな表情をして受け取つた。

そうやつてゐるうち、五年ばかりの日が過ぎた、その間に、私は又父の命令で、新しく中學の先生のところへ英語を敎へて貰ひに行くことになつた。

その先生の家へは大分內弟子が通づてゐたが、私ほど幼い弟子は一人もなかつた。

『こんな時分から英語をやらせるのか』

と、先生までが訝いてゐた。

或る日、私はCrawと云ふ字を教へられた、が歸つて來る途中で忘れて了つたので、悲しくなつて泣き出した、父は、わざわざ店の者の一人を先生のところへ送つて、その字の譯を聞いて貰つて來てくれた、翌日行つて教へて貰ふことも、又自分で行つて教へて貰ふことも出來ながら、私はどつちをしやうとも思はず唯泣いてゐるやうな子供だつた、そのナショルリイダアの中には、ペンで描いた珍しい西洋の子供の繪が、どつさり挿んであつた、私はコロンブスのやうに、まるで新しい世界を發見したやうな氣がした、その後何かの都合で、私は老先生のところを去つて、檀家の寺のまだ若い長老のもとへ教へて貰ひに行かせられた。

この時分、私は隨分忙しい身體だつた、晝の二時頃までは學校で勉強し、歸るなりすぐと繪の先生のところへ行き、夜は又英語の先生のところへ行くのだつた、その上に、父は手づから國史槪要なぞの漢文を私に教へた。

英語と云へば、夜、高い山門を潜ると、正面に本堂の屋根がすばらしい大きな鳥の伏せた姿のやうに眞ツ黒く聳え立ち、その左手には、墓地の石塔がずらりと並んでゐた、私はそつちの眼を一生懸命ふさいで、急いで右手の納所の方へ飛んで行つて、木戸をあけて、赤い爐の火を見るとホツと小さい息をついたものだつた、長老は、リイダア教授以外に、いろんな飜譯の本を貸してくれた、ホーマーのイリアツドを私がよんだのも、ダンテの神曲、シエークスピアの劇をよんだのも――勿論みんな梗槪ながら――この時分だつた、それらの飜譯本や梗槪をつゞつた本の中には、美麗な寫眞銅版がどつさりあつた、私の世界は、更に更にひろげられた。

繪の方は五年もかよつたので、もう先生のうちの手本は殘らず寫してしまつた、何も描く御手本がなくなつたので、しまひには歷史上の人物の白描畫を描かせられたが、それも濟んでしまふと、今度は高島北海の山水の白描を習はせられた、私はこの北海の繪は大嫌ひだつた、少年の華かな、夢の多い心情と、その枯淡な機械的な條線とは、どうしても調和出來なかつた、父も長く習はせたからもう大抵にしやう、と云つて、先生へ通ふことをやめさせた、然しその後も、私は父に

せびつて、本屋へ繪の本を探しに行つて買つて來ては描いた、とうとう、本屋にも新しい繪の本がなくなつてしまつた。本屋で見つかる限りの繪の手本と、所謂教訓道德の本とは、ほとんど買ひ切つてしまつたのだつた。

やがて私はその時分の高等二年を終へて、同じ町の中學へ入つたが、もう少し繪の生ひ立ちの他の一面を書かう。

父が、別莊風な新しい二階建てを一軒つくつた時、その座敷と戸袋と押入れの戸へ、私に繪を描かせた。戸袋へは六歌仙を、押入れの戸へは三羽の鵞鳥と青い芭蕉だつた。今その家は他人が借りてゐて、それ以來私はその繪を見たこともない。子供の澤山ある人だから、今頃は、その六歌仙の着物へ空氣鐵砲の玉のあとが透つたり、鵞鳥の頭が、物さしの尖きで滅茶々々に突き貫かれたりしてゐることであらう。そんなものを書いたのも、もうあの時が最初で又最後だらう。

私の繪才を見て、父に、繪の學校で勉强させたらよからうと云ふ人々も多くあつたが、そんな時、私はきまつて毅然としてそらうそぶいた。

『たかが、繪かき位になつて堪まるもんか、おれは、天下を經營するんだ。』

私にかう云はせる爲めには、父の漢學の教授が與つて力があつたのだつた。父自身が、商賣がらにも似ず、又子供に對してそんな夢を持つてゐた。が、この大志を抱いてゐた少年は、一方實に小心で、女らしかつた。或る時、いつも八ツ嶽の麓から馬を二疋引つ張つて、下肥を汲み出しに來る馴染みの「肥料買ひ」の百姓が來て、私の繪を見て感心して、一枚呉れと云つて手に取ると、私はびつくりしていきなり飛び出して、その大きな臭い手から繪をひつたくつて匿れてしまつた。今も、その呑氣な百姓が、私の顔を見るたんびその話をして、高い笑ひ聲をひゞかせる。

又或る時は、父を知つてゐる地方新聞の記者が訪ねて來て、話をしてゐるあいだに私の「グラットストーン」の肖像畫を見て、ひどく賞めて、讓つてくれと云つたことがあつた。――當時、天下國家の志を懷抱してゐた少年は、又グラット・ストーンの絶對の讃美者で、崇拜者だつた。その肖像は特別熱心をこめて書いたもので、自分の机の前へ懸げて、朝

晩偉人の風姿によつて勵まされやうと云ふつもりだつた。そう云ふ大事な繪を、無頓着にいきなり呉れなどと云つたので、私は再び例の迅速な手段を用ゐて相手から奪ひ取らうと試みた。

が、今度の敵手は「山浦」の肥料買ひなどとはちがつて、いくら田舍新聞の記者でも、素速つこいことでは選り拔きの記者だつたので、私の手段も何の效果も奏しなかつた。いきなり彼はその繪を懷に押しこんで、スタコラ逃げ出してしまつた。私は大きな聲で泣き出した。父や家族の人達がやうやく私をなだめて、又グラツト・ストーンの繪を描かせた。

私は歔欷しながら、二枚目を描いた時、それは、多分未だに故鄕の家の藏にでも殘つてゐることだらう。

もう一つは燈籠の繪の事件だ。

私の故鄕の家のある區の氏神は、津島神社と天神である。共に、七月の拾四五の兩日と、二拾四五の兩日に祭禮が催される、拾四日と二拾四日の午後には、祭殿で神式が行はれる、白い角ばつた神衣を着た神主が（この神主はおそろしい酒飲みで、時々醉つぱらつては茹章魚のやうに眞つ赤になつてゐた。）嚴めしい儀式を踏んで、美事な胡瓜を山盛りにした三寶だの、みづみづしい茄子だの、白い大根だの、大きな鯉だのを盛つた澤山の三寶を、順々に、靜かに、おごそかに榊を掛けた神前に備へる、その三寶を一つづつ區長の手から受け取るたんび、眞面目くさつて三度柏手を打つて、輕く頭をさげるのを見て、神殿の下で仰向いてゐる子供の群がみんな鼻汁をすゝりあげて、恭々しいやうな顏つきをする。同じ日の夜には田樂燈籠彩色繪をかいて、社殿へ行く路次の兩側に掛けつらね、白い蠟燭に火をともす。

この燈籠の繪は、普通、町の繪師や上繪師が頼まれて報酬によつて描く習慣だつたが、私が尋常一二年の頃、うちの爺やが、是非私に描かせてみたいと云つて、祭禮の手傳ひに行つて田樂燈籠を一つこつそり取つて、屋根傳ひにうちへ運んで來た、そうして私に描かせた。その時私は、女が何か燒いてゐる繪を描いたそうだつた。これが、私の燈籠をかいた最初だつた。

その翌年には、澤山の燈籠を世話人達が賴んでよこした。何も知らない私は、父と一緒に大分得意になつて、端から描いては安い染め粉を塗りたくつたが、いよいよ夕方になつて、それを路次のあつちこつちに懸けつらねると、晝間賽錢を投げる角箱の中へ入れる杉の葉をむしりに行つて歸つて來た年長の腕白の子供達が、見つけてひどく憤慨した。

『なんだ、青ツ面の、やせ蝗のくせに生意氣な、……こんな燈籠はみんな引き裂いちまへ！』

そう云ふ決議が出來ると、みんなで綺麗に塗つてある燈籠を破りはじめた。

それを見て、私はおどろいて家へ飛び歸つて父に訴へた。子供達の中には親戚の子供もゐたので、その子供だけは父に叱られた、その晩破られた燈籠がどう始末されたかは、私は今覺えてゐない。

その翌年からは、又燈籠の全部を引き受けさせられた。もう迫害は起らなかつた。私はその夜は時々家を抜け出して、大勢の參詣人がぞろぞろと、飴屋や煎り豌豆屋や果物屋やらの露店のカンテラの灯に照らされながら、兩側の燈籠の繪を見たり批評したりして行くなかに、小さい身體を紛らせて熱心に耳を傾けた。「うまいねえ」と云つた言葉が聞えると、胸の血をわくわくさせた。――何と云ふ無邪氣さと無知だつたらう。――店の者達もそう云ふ探偵になり澄まして、戻つて來てはいろんな報告を語つた。あの「白いひげの先生」が、ぶらりぶらり歩きながら「これは、あの坊やが描いたのか」と云つてゐたなぞとも話した。

しまひには、私はただ指揮者だけになつて、多くの店から集つた手傳ひの子僧達を指圖しながら、繪の具などを塗らせた。そうすると女の顏を鬼のやうに眞赤に塗つたりした。中には、又蠅を矢鱈に塗り散らして面白がつてゐる者もあつた。

それがキツカケとなつて、私はあつちこつちの祭禮へ行くたんび、いつも獻燈を特別の注意を以て眺める癖がついた。

その中で、私の氣を惹いたのは其殘描りの俳燈だつた。それは岩波其殘と云ふ俳諧の畫匠をまねた、粗い飄逸な筆致の畫

の上へ、輕い字で一句づつ俳句を添へたものだつた。

其殘は、二十何年以前八十幾つの高齡で死んだ、私の故鄕の人間だつた。町の端の普通の平民の家に生れて、何か少しの荒物を賣つてゐたに過ぎなかつたが、時には諏訪神社の神主をやつたこともあるさうだ、然し本業は俳諧の師匠で、點づけをして悠々として暮しをしてゐたが、その一番特色のあつたのは字體と俳畫だつた、大抵薄墨で、簡素な飄逸な筆致を用ゐて、彼は市井の雜人のさまざまな形態を寫し、それは淡然として然かも變化の豐かな色を塗つて、上の方へ、それもこれも薄墨で俳諧の一句を繪に適合した輕妙な脫俗的な筆でぬたくつた。萬歲や按摩や茶人や遊び人や花見の女や床屋や侍や子供や、さう云つた、ありとあらゆる人間の姿が、特殊な個性の情趣を帶びて描かれてゐる、それを見てゐると、普通の俳畫のやうな枯淡な氣分が起きずに、一種あたたかい人間味が湧いて來る。

今その繪は、私の郡の內外に、廣くひろがつてゐて、中には僞筆も少くないさうだ、私の故鄕の家にも、彼の描いた額が一つ懸けてあるが、田舍男が二人で赤い獅子の首をかついで、二人の子供がおどけて逃げてゆく圖の上へ、「來りけり、惡魔はらひの春の風」との左へ、八十翁、岩波其殘と書いてある。

話が橫へそれたが、私はそれらの燈籠をまねて、時には其殘振りの俳畫を描いて見たこともあつた。が、私の稚い筆は、その俳味の一滴も移すことが出來なかつた。

これはずつと後のことだが、私が中學の五年頃、――その時分には私はもう殆んど繪筆とは絕緣してゐた、――私の區で、停車場が町の北に出來た爲め、そちらの方が繁昌して町の均衡が失はれて來たので、いろいろな手段を講じて、舊家の區域の面目を維持しやうと試みはじめた。そのうち、夏の夜、夜店をひらくことを決議して各々の店が一つづつ角燈籠をともし、夜店商人を招き、餘興として祭文讀みの爺さんを呼んだりして、大いに景氣を張らうとした。

その燈籠の繪は、一切或る上繪師に賴んで書いて貰つたが、私の家の分には、白と紅の牡丹を二株描いてあつた。父

は、あまり畫面が淋しいからと云ふので、私に命じて、その牡丹の一つの幹に蜂の巣をぶらさげさせ、そのまはりに二三羽の蜂を飛ばせ、花の上には、蝶を二羽舞はせた。

惡い洒落だと思つたが、私は云ひつけられるまゝ巣をかき、蜂をかき、蝶をかいた。それで大分賑かな繪になつたが、然しお陰で畫面の調和が破れて變テコなものになつてしまつた。これではいけないと云ふので、父は更にその燈籠を張り替へさせて、私に新しい畫を命じた。

私は、朱雀の月と云ふ歴史畫の一枚を粉本にして描いた、これは大蘇芳年の、月何種かの一つで、二人の公卿が月明の夜、朱雀の廻廊の大柱のもとに立つて横笛を吹いてゐる圖だつた、これが一寸評判になつて、あつちこつちの店から、燈籠の代り繪を私に頼みに來た、私はいやがつたが、父がひどく乘り氣になつてすゝめるので、いろいろ注文に應じて描いた。

一軒の呉服屋では、花嫁のいでたちを描いてくれと云つて、三越の廣告本の表紙畫を持つて來た、その附き添ひの中年の女の顏だけは、私はうまくやつてのけたが、肝腎の花嫁の顏へ取りかゝると少々鼻を低くしてしまつた。私よりも父の方が心配して、水でぬらしたり木賊で削つたり大騷ぎして、やつと大抵墨を拭きとつて、新しく隆鼻術を施させた。

もう一軒の呉服屋では何か衣裳の立派な女の繪を、と頼んで來たので、父は繪本をさがして、左甚五郎が惚れた花魁の極彩色の木彫をつくつて、女が落した鏡をぬすんでその木彫の女の懷へ入れると、いきなり彫刻が動き出して甚五郎に接吻か何かしたので、甚五郎め驚いて唯のみを投げ出して茫然自失してゐると云ふ圖を、私にかけと云つた、そこに描いてある甚五郎の姿態なぞを、父は甚だ好いてゐるのだつた、私は云はれるまゝ描いて、花魁の衣裳を派手な水車と花瓣の模様に塗つた。

家の人々は、すぐに呉服屋へ送つてやらずにその中へ火を入れて試驗して、いろいろ批評したりした。それからやつと

屆けると、主人が大へんよろこんで、金なぞ紙に包んで御禮によこした。

翌年、私の家の燈籠は古くもならないのに、又父が描き代へさせた、今度は雨後の月と云ふ題で、曾我五郎時致が左手で袖をまくりあげ、鎖經衣に固めた太い右腕に長いだんびらをひツさげて、遙か明月をかすめて飛ぶ時鳥の聲の方を、キツと見あげてゐる凄い顔の繪だつた。

店の方の話には、初荷のビラの憶ひ出もある。

私の家では、毎年一月二日商賣初めの日には、初荷と云つて、澤山の荷の注文を年末のうちに得意先きから取つておいて、早朝まだ暗いうちから山のやうに店の前へ積んで、赤い提灯をともし、高く大幟を萬力で押し立て、笹や旗で綺麗に飾つて、夜があけると、集つて來る運送馬車や手車にそれぞれ荷を分けて積んで、注文先きへ送り出す習慣があつた。

その荷印しに、キヤラコなぞの布を長方形に截つて、一枚づつ笹の細い幹へ結んで樹てた。父は、この荷印しの宛名の下へ、何か緣起のいゝ繪を描けと私に云つた。私は仕方なく、毎年年末の何日間かを全く七八十枚の荷印しの繪に費した。最初には三番叟の鈴を振つて踊つてゐるところを、次ぎには、兵士の樂隊が太鼓を打つてゐるところを、次ぎには拾二支の當り年にちなんで、鷄だの犬だのの畫を描いた、かうして、私は少年らしくもない忙しい勞作を終へて、やつと毎年元日を迎えることが出來た。

二日の朝には、床のなかで眼をさますと、倉から鐵軌傳ひに店へすべり出すトロの音が賑かな音を立てゝ、それへ、荷を積んだりおろしたりする店の若い衆の威勢のいゝ掛け聲が入り混つて、沈んだ夜の空氣をびりびり顫はせてゐる。臺所では、母が女中を相手に働いて味噌鉢へ當る摺りこぎの音、ちんちんたぎる湯の音、金網のうへでふくれてハチ切れる切り餅の音なぞが、ペエスとなつて響いてゐる、時計を見ると三時頃だ。山國の長い寒い冬の夜があけるには、まだ四時間のうへある。

私も起きあがつて、厚い羽織を重ねて、炬燵へ抱きつきながら、ふくれた白い餅へ香りの高い醤油を沁ませて食べる。そとでは、その時分、白い縁を取つた猩々緋の大幟のギイギイ捲きあげられる音がする。石油箱の荷を積みかさねる響きが聞える、もうそろそろ人聲が多くなる。

夜の明ける頃になると、澤山の車がひしひし詰めよせて、馬方達は臺所で新年の振舞ひ酒に酔つぱらつて、黄い數の子や黒いごまめをかじりながら、盛んに大聲で話したり笑つたりしてゐる。

やがて荷物の分け前で騒々しく云ひ爭つたのち、酔つた馬方や車引きは、店の「若い衆」に手傳つて貰つて荷を山と車へ積んで、そしてあの私の描いた彩色畫の荷印しを、ゆらゆらゆれる竿の先きへ寒い朝風にひるがへしながら、馬方や初荷の物見の人間や、慾張つた景品買ひの初買ひの連中やらの雜沓のあひだを縫ひ縫ひ、白く堅く氷つた大通りを車を引いてゆく。人の鼻からも馬からも、白い息が霧のやうに舞ひあがる、馬の美しい腹帶へ縫ひつけた黄ろい鈴が、車輪や蹄の音につれてしやんしやん鳴る、その時分には、街の兩側には大道商人がずらり店を並べて、その呼び聲が氷つた空氣を激しくふるはす

私は頭をふりながら、遠く遠く去つてゆく荷印しを見送つて、云ひしれぬ新しい元氣に胸を打たれる……。

さて、私はやがて中學へ入つたが、學校の圖畫の教師は、やはり前の老先生だつた。ここで私は、新しく皆と一緒に毛筆畫や、ペン畫や、鉛筆畫や水彩畫を習つた。

然し私はなまけ勝ちで、まじめに描くと云ふより、輕い茶化し氣味の態度ばかり取つてゐた。時々、傍の席の生徒が鴨の色鉛筆を不きつちよにこつこつ描きながら「君は色盲ぢやあないかね。」なぞと先生から云はれてゐるのを聞いて、皮肉な眼つきをしてその友達の顔を見たりしてゐた、時折り、先生が寫生に皆を教場のそとへ連れ出しても、私達は眞面目に描かうとはせず、——老先生の人のいいのをいい事にして——あかるい暖い日光を受けて日向ぼこりをしたり、赤い罌粟の花びらを挘つたり、土を運ぶ小さい虫を追ひ廻したり、友達の耳を引つ張つたり、遊んでばかりゐた。

そのうちに用器畫の課目が初まると、すつかり閉口してしまつた、圖形や模樣なぞの考へのまるきりなかつた私の頭には、それはただくだらない直線や曲線の遊戯としか思へなかつた、殊に老先生が、いくら生徒がなまけて騒いでゐてもちつとも怒らずに、平然と白い髪を垂らして講義してゐるので、私も少しも講義なぞ聞いてゐなかつた。だから試驗となると、いつも大周章にあはてて、眠い眼をこすりながら、黒い條の自由自在な運動を天下の不思議でもあるやうに見つめて、その理屈を考へた。

三年時分になると、先生は、もう老いたから郷里に歸つて、これから悠々自適の餘生を送るのだと云つて、職を辭して中學を去つてしまつた、そうして新しい繪の先生が來た。「かつら」さんは、中學を終へると繪筆を捨てて、大いに未墾地の開拓に從ふのだと云つて北海道へ出かけて行つた、一二年後の學友會の雜誌へは、開墾事業に關する大分長い論文を、北海道の深い森林の中あたりから寄せてゐた。

かうして、私は長いなじみの老先生父子にぼんやりと別れてしまつたが、その後時々二人の姿を思ひ出すたんび、あだかも夏の朝、水苔のなかに生れる香の高い新しい蕈のやうな憶ひ出がほのかに匂ふ、そうして、ああ云ふ種類の父子には、今後又多く會ふ機會もあるまいと思ふ。

今度來た先生は、おそろしい元氣のいい眞つ黒いひげ男で、酒好きで、氣焰家で、そのうへそそつかしやで、雨降りの日、他人の家を訪ねて、歸りに傘を忘れて尻つ端折りで雨のなかを飛んでもどるなぞと云ふことは、毎日のめしのやうに平凡にやる人物だつた。ある時なぞ、生徒のなかの悪戯者が

『先生、裸體畫を一つ描かせて下さい』。

と云ふと、いきなり敎場で素ツ裸になつて、

『さあ描いて見ろ!』

と怒鳴つたので、生徒は膝を潰してしまつたさうだツた、相撲なぞも好きらしく、ある時は昔の相撲取りの身體を寫した繪を地方の新聞へ載せて、その骨格を論じてゐたこともあつた。

この先生も、例の夜店の燈籠の繪を或る呉服屋に頼まれて、不承々々、桃太郎と渡邊の綱とを描いたが、禮なぞは要らぬと云ふので主人が一夜客に招くと、早速出かけて行つて酒好きな主人と飲みはじめて、氣焔萬丈、痛飲淋漓、ほのぼのと夜のあける頃まで飲んで、すつかり奥さんを手古摺らせたさうだツた。そのあと腦充血を起して、在職中に死んでしまつた――。

その後私は中學を終へて、東京へ行つて高等學校の生徒になつた、いろいろな學課や課外の書物に追はれて、私はますます繪筆から遠ざかつて行つた、時には繪畫の展覽會なぞも觀に行き、又寄宿舍の紀念祭の飾りつけの時には、室の背景なぞを引き受けたこともあつたが、そのあひだに私の思想はだんだん變り、趣味もいつか純日本繪から洋畫の方へ傾いて行つた。

一方、法科にゐながら私の政治的憧憬は次第に衰へて、治國平天下なぞと云ふ言葉は徒らに私を笑はせ、政治家の肖像は、どれもただ顰蹙させるに過ぎないやうになつた。私が幼い時分、もつと眞面目に藝術の世界へ踏み入つてゐたら、と後悔の氣分が次第に私の心を蔽ふやうになつた。自分は、藝術の世界でなければ生きられない人間だ、とまで思ふほどになつた。

老先生のことも、それにつれて思ひ出しはじめた、丁度二年目頃の春、私の故郷の中學出身の在學者の懇親會がひらかれた時、ふと誰かが、あの白い髭の繪の先生は、今東京に來て上野の廣小路あたりに東洋堂と云ふ繪草紙屋をひらいて、傍ら繪をかいてゐると云ひ出した。先生の繪を、どこそこの展覽會で見た、と云ふ者も出て來た。私はその時、詳しくその東洋堂の場所を數へて貰つた。

是非久しぶりで先生の家を訪ねやうと思ひながら、試驗に追はれたりして、とうとう春休みになつた、或る天氣のいゝ日、私は三越の雛の展覽會を觀に行つた歸るさ、わざわざ黒門町へ廻つて、電車を降りた、そうしてあちこち探して、や

つとそれらしい、東洋堂のペンキの横看板を軒先に掛けた繪草紙屋を見つけた。

初め、私はその店の向ひ側に立つて家のなかをすかして見たが、あくどい色彩の大小の本が、釣り下げられたり並べられたりしてゐるなかに、二人の男と一人の女の姿を見つけた。

一人の男は帳場に、他の男は店先の火鉢の横に、若い女は店の腰掛けへ腰をかけて、見張りをしながら手にもつた繪草紙を俯いてよんでゐた。店の前の貼り出し板の前には、二三人の素見の客が立つて繪を眺めてゐた。

私はツと電車路を横切つて、その素見の客の仲間に加はりながら、なほよく店や奥の方を探して見たが、この家のなかにあの老先生がかくれてゐやうとはどうしても思はれなかつた。やがていきなり帽子をぬいで、私は店の中へ入つて行つた、女は、私を見るなりいそいで本を店先へ置き放して、奥へ入り込んでしまつた。

『ちよつと伺ひます、あの、おうちに、宮田先生と云ふ繪の先生はおいでになりませんか。』

私がたづねると、二人の男はひとしく不審さうな顔つきをした。が、

『そう云ふおかたは、おいでになりません、お名前をお聞きしたことも御座いません、へえ。』

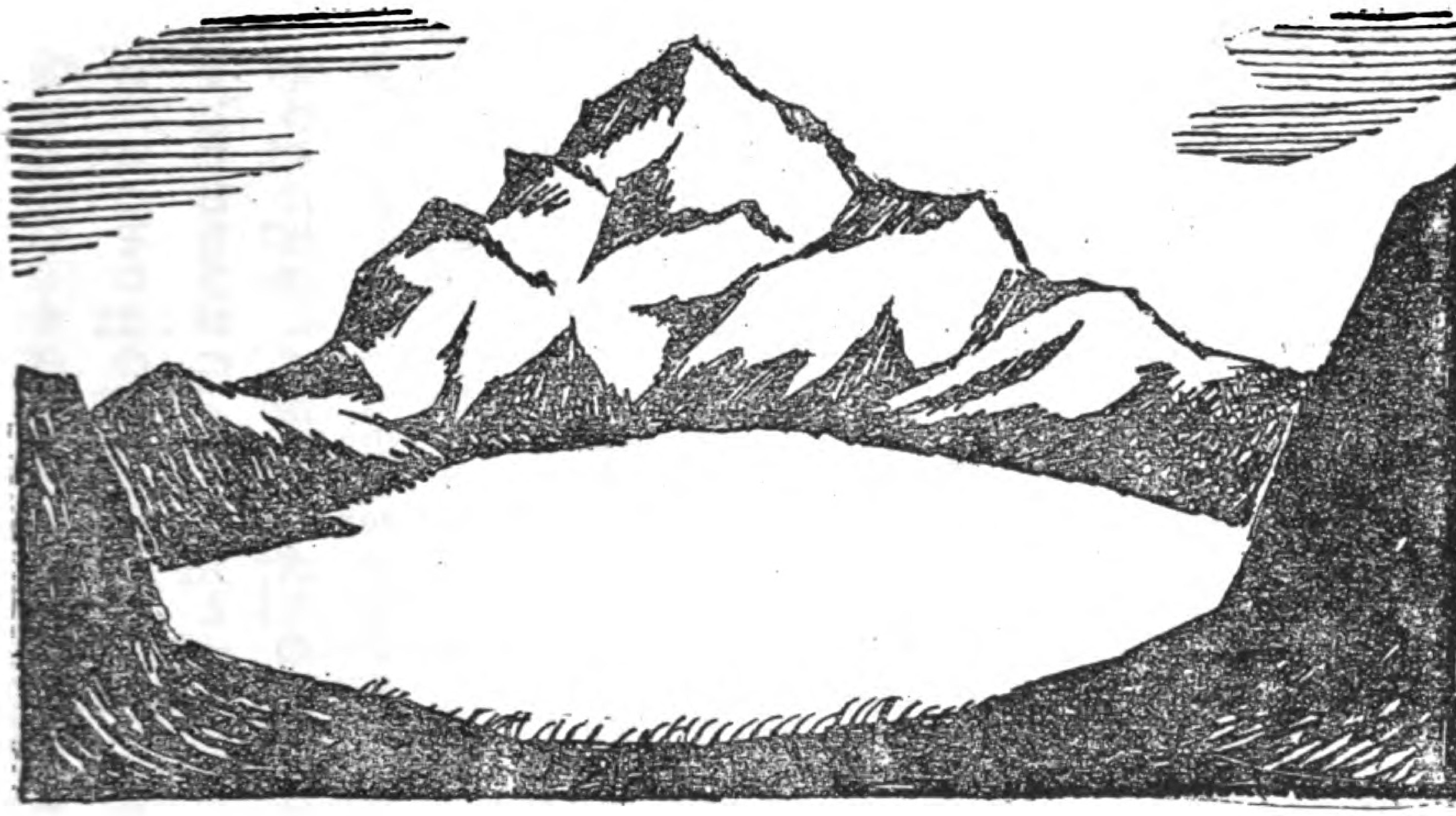
と、やがて一人が云つた。

『そうですか、どうも御邪魔しました。』

そう云つて、私はそれなり店を出て、電車道に沿つてぶらぶら上野の方へ歩いて行つた。

そのまんま、私は再び廣小路の繪草紙屋を探すことをしなかつた、先生の評判をしてゐた人々に問ひ合はせる機會も再び持たずにしまつた。

果して、老先生が忙しい東京のどこかへ出て來てゐるか、金澤に靜かな餘生をすごしてゐるか、それとも——もう死んでしまはれたか、……杳として、その後私は消息に接しない。「かつら」さんについても。



わが生ひ立ち

佐藤春夫

旅の間の出來事

伯父は——私の母の兄は、その時に死んだ。しかも私は平常馴染のない人の死のことを殆んど覺えてゐない。たゞその枕邊に座つたことがあつた——それもまだ生きてゐた病人のか、それとももう回復しなくなつた病人の枕邊であつたか、それさへ思ひ出すことがおぼつかない。私はたゞはつきりと思ひ出せるのは、一疋の犬と、籠のなかにゐた小さな黄色い鳥と、それから水の上にあるお座敷と、大きな戸と、夜なかに目が覺めるといふことがどんなにおそろしいかを知つた事とである。

さうだ。一羽の小さな鳥がゐた。籠のなかをあちらこちらと飛びうつつてゐた。たくさん列んである籠のなかでも私のいふ小鳥の籠は一番店

の前にあつた。よく唄つてゐた。人々がそれを見てゐた。私はその鳥が欲しくつて仕方がなくなつて來たのだ。そこで私は泣いた。ひどく泣いた。母はしばらくそこに立つてゐたつけが、私をぐい〱引つぱつて行つて近くにあつた魚屋で掌ほどの蒲鉾を一つ買つて私の口のなかへ押し込んだ。それからやはり近くの或る店へ這入つて行つて、今度は私に帽子をかぶせてくれた。その帽子が私の氣に入つたやうだつた。それでだまされたのだかそれとも遠くへ歩いて來てしまつた爲めであるかも知れない――私は小鳥の事を忘れてしまつた。その時買つて貰つたのは、紺の天鵞絨で出來てゐて、大たいが軍人のものに似てゐる形で、その庇の上にはあごかけの皮紐の代りに細い金モオルが一本あつた。この帽子のことをこのやうによく覺えてゐるのは、それがつひ近年まで半分壞れながら殘つてゐたからである。

それから、茶色のすばらしい尨犬がゐた。どこだか知らないが道ばたの日なたにゐた。この犬と私は友達になつた。その頸に手をやると犬は横になつたまゝで尾を振つた。尾で砂ぼこりを掃き上げた。全くふさ〱した尻尾だつた。それがのつそりと立ち上ると、私はその上へ跨つた――いや、ひとりでは跨れなかつた。誰かが私を抱き上げてその上へ乘せてくれた。

私は母につれられて汽車に乘つた。汽車は一時間ぐらゐしか乘らなかつたやうに思ふ。ともかくも私がまだこの珍らしい乘物に飽きないうちに、そこから降りなければならなかつた。私は町から田舍へ來た。そこが私の母の母、つまり私の祖母の實家だつたのだ。大きな百姓家であつた。私たちは或る座敷へ迎えられた。――今はつきり思ひ出したが、この旅の季候はたしかに夏の初めだつた。人々が母を團扇であふいでやつてゐた。話に熱中してゐたおとな達はやつと私の退屈に氣づいてくれた。そこで誰か――私はどうもその人が、若い娘ではなかつたかといふやうな氣がするのだが、その誰かが抱き上げて私を椽側につれて行つた。私はびつくりした。私は實に水の上に立つてゐたのである。それは池の上につき出して建てた小座敷だつた。私はそこの廻り緣を京んで歩いた。大きな緋鯉が向ふの方から來て私の足の下の方へかくれ

てしまつたが、直ぐ、また別の方角から靜かに游ぎ出して來た。私はふと父を非難するやうな氣持を抱いた。——なぜ、おとうさんは水のうへゝうちを建てないのだらう、このうちのやうなうちを。これが私の父に對する非難であつた。その次に私は慾望を起した——私は水の上の家に住まなければならない。

黃色い小鳥——それはカナリヤであつたが、それを欲しいと思つた事、それから水の上の家に住みたいと思つた事、これが私が覺えてゐる限りに於ては、私の最初の慾望である。殊に水の上の家に對する慾望は甚だ深く私を動したのではないかと思ふ。私は今でもまだ水の上の家に對するあこがれを充分に持つてゐる。たゞ鯉の代りに私は蓮の花とそれから出來ることなら灰色の鵠とが欲しい。そのやうな水に面して私は自分の書齋を持ちたいと空想することがある。さうして、六つの時に感じた自分の慾望がそれほど根ざしの深いものになつたのぢやないかと考へて見たりする。さうして私が人生に於て最も第一の機會に欲したところのものであるから、出來ることなら生涯のうちに一つ、水の上の家に住んで見たいやうなたわいもない氣がする。——これを書きながらも、それは惡くなからうと思つてゐる……

私たちはこの水の上に座敷のある田舍家に滯在した。それはほんの二月か三日ぐらゐの短い間であつたやうだ。その家には、百姓家だから大きな土間があつて、そこに大きな戸があつた。そこをあけて外へ出るのである。その戸は私の力ではどうしても開けられなかつた。しかも私はそれを開けるのが樂しみで、人々に手傳つてもらつて自分の兩手がかゝるほど隙けて貰ふと、私は滿身の力を籠めてその戸を開けた。また閉めた。私はその大きな戸を開けたり閉めたりして遊んだことをはつきり覺えてゐる。しかしそれよりも、まだはつきり思ひ出すのは、私はその家で夜なかに目が覺めた事だ。

私は伯父の死に就ては別に何の記憶もないやうだけれども、死といふ不思議な事實に就てはよほど怯かされたに違いない。何故かといふのに私は夜なかに目がさめて、眠つてゐる母を見てもしや死んでゐるのぢやないかと思つた。それから母が生きてゐることを確めるために私は母を揺り起してみた。母が生きてゐることがわかると、私は遠くにゐる父のこと

が心配になつて來た。もしや留守の間に父が死んでゐるのぢやないかと案じられ出した。私は母にその心配を打明けた。何でも私は強くそれを否定した。それから、そんな馬鹿なことを言ふのぢやないと言つて私を叱つて、しかし、私をやさしくかき抱いてくれた。私を平和な眠の方へ導く努力をしてくれた。

——考へてみると私はひどく神經質な子供で、この後にもしば〳〵夜中に目を覺す習慣が出來た。その時に私を一番苦しめたものは自分がその一日のうちに何か嘘をついた事がありはしないかといふ考へであつた。それが私の强迫觀念になつて、それで私はその一日を回顧して何でもちよつとした嘘でも發見すると、すぐ母を搖起してその事を母に懺悔した。それを許して貰へるとやつと安心して再び眠についた。父母は私のこの習慣を知つて、私を決して嘘をつかない子供だとして信用してくれた。ずつと大きくなつて私が嘘をつくやうになるまでも母は氣がつかないでゐたのかも知れない。私が十九になつて東京へ出て來た時、母が私を或る人に托する時「この子は嘘を言はない子どもでした」と言つて紹介した。——ともかくも私の幼時の唯一の道德は嘘を言はないといふことであつたかのやうに思へる。さうして家人の誰かが、私に挑戰したいと思ふ時には、きつとわざと私のことを「嘘つき！」と呼びかけた——しかしそれは、もつとあと、私が九つか十ぐらゐになつたころの事である。

旅からかへつた時、母は父に旅での私の出來事を話してゐた。カナリヤの話をした——あまり欲しがるので買つてやりたかつたけれども搬ぶのが大へんだと思つて……と言つてゐた。大きな犬のことを言つた——あまりおとなしくつていゝ犬だし、向ふでもくれるといふのだけれども、神戸の商館にゐたので、まるで小牛のやうな大きさだものだから、牛肉を一度に一斤半もたべるさうだから……と言つた。父は、ほう！と言つてその大きな犬に好奇心を動かしたやうだつた。それや貰つてくれればよかつたと父は言つた。

欲しい！欲しい！カナリヤも欲しい。犬も欲しい。

私は思ひ出して、急にさう叫んだ。

もうカナリヤも犬も死んだもの、そんなことを言つても駄目だ。——と母が言つた。

それから……それからもうよく思ひ出せない。

作者附記——毎月あまり短かすぎますが、これから少し心がけてもつと長くまとめるやうにします。

校正室にて

□早いものです、昨年の九月一日はあの大震災のあつた呪はしい日でした。阿鼻叫喚此世ながらの焦熱地獄でした。電燈なく、飲水なく、飯米なく、家もなければ衣類もなく死のみが我々に恐しく迫まつていたのでありました。それに電話もなければ、郵便もなく、電車もなくして強盗殺人は續々として眼前に演ぜられて邪悪なき兒女の命さえ風前の燈の如く悄々として人心もなかつたのでありました。

□そして天幕生活で、玄米にありついたときの心持ちを帝都の人々はよも忘れはしますまい。もう一命を捨てたと思つた私どもが玆に彼の美しき星空を仰ぎ姉妹兄弟まどゐしてすぎこし秋の讀書にひたることが出來るのは夢の境地だ

□年は遷りゆく、淡き悲みがかま首をもたげてくる。美はしい花を手に持つ人々の兩國を渡る心は哀れにも物悲し、自然の狂威を怨嗟し神々の不當を呪つて斃れ死んだ十萬の精靈よ、希くば今宵の手向けを受けてくれ。

□生ける友人は理想に燃えよ。理想は大地の泉の如く人生の歡果だ。一瞬たりとも此世に生ける以上、現實の低地をのみ這ひ廻はつてはなりませぬ。理想のある所に進歩があり、淨化があり、飛躍があり、創造があり、完成があるのです。つくづく過去の思出では泣かされるが、理想ときくと私共の眼は輝いてくる。私共の胸は躍つてくる。

□廿万、三十万と發行して居た人雜誌が行詰まる時代が急轉直下の勢で到來しました。いつまでも編者が廣告や、輕薄なヂヤナリズムに引きずられると思つたら、大間違です 多くの寄附品が三越や白木にあくびすると同樣に雜誌界の寄附品が大あくびするのは當然です。

□そしてそれと共に寄附品でない我「女性改造」が如何に時代に思ひ出さるるか。内容を精選し、流行を追はず常に獨自の創案を以つて進んで來た私どもの質實な行路が、そして正道がいつかは世に認められやうとは思つていました。

□田沼利男君はジョージ、サンドの「鬼火の踊り」を翻譯した。雙生兒の伴び育つ不思議な愛情、嫉妬を取扱つた世にも稀なる小説です。現代の「獸的文字」と其選を異にして佛國農村の清新な氣分を味へる小説であり、そして熾熱に富む理想派の代表的創作です。山間の牧歌、田園と自然とを味はんとする諸姉に本書の一讀をお勸めします。

□懸賞小説は今後懇切周到な藤村氏の批評を添へ毎月發表いたします。其他の讀物にても毎月讀者よりの投稿は歡迎します。十月の懸賞募集があります。文明批評欄の総頁を一覽下さい。

女性改造 定價表

冊數	定價	郵稅
壹冊	七十錢	貳錢
六ヶ月分	四圓	郵稅共
一ヶ月分	八圓	郵稅共

註文の注意

◇前大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は特別郵稅實費を申受く(但し支那を除く)
◇凡て代引發送せす
◇郵便切手代用は歩割増のこと
◇拂込みは振替によるるが最も便利なり

本誌廣告料一頁 一等百圓 二等七拾圓

⊙本社廣告取次所 博報堂 正路喜社 日本電報通信社

大正十三年七月十三日印刷納本
大正十三年八月一日發行
(九月號特價八十錢)

編輯兼發行者 東京市芝區愛宕下町一ノ一 平田貫一郎

印刷所 東京市小石川區加賀町一ノ一二 株式會社秀英舍

發行所 東京市芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話高輪四九九三
振替東京八四〇二二

廚川白村著

◇◇出版界の新覇王

苦悶の象徴

四六版天金
表紙羽二重
震災後唯
一の美本

定價壹圓八拾錢
送料拾七錢

白村の眞の魂を求めんと欲する者、苦悶の藝術に人生の生命力を見出さんと欲するものは共に本書に就け。藝術の聖地に一日を陶醉せんと欲する者は本書に就け。不世出の名文、稀世の情熱、我之を本書に見る。人本書を讀んで人間にかゝる清境あるかを始めて發見せん。藝術は人生の聖地、人我に聖地あるを知らざれば恥之より大なるはなし。恥を覺ゆる文化人は必ず本書に就く

近代の戀愛觀

113版

定價貳圓五拾錢
送料七拾錢

人間の燃ゆるが如き情熱、感激、憧憬、欲望の白熱化した結晶とも見るべき戀愛には悠久永遠の生命力が動くと斷じゆに戀愛は人間の最高尊であり、人生の最高理想だと高く叫破して肉體的結婚、非戀愛的生活に一大精神を喰はす。本書を味到し得る者のみが新戀愛の勝利者たり得る。

發行所
改造社
東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二

……………三越の招聘した……………

英佛の裁斷師

三越では、洋服の眞の正しい流行を御紹介致します爲め、其の本場から、技術の優秀な二人の裁斷師を招聘致しました。即ち男子服に英人ベントレー氏、婦人服、子供服に佛人ルーズ女史で、十分の自信と抱負をもつて御注文に應じて居ります。何卒御用命願上げます



ベントレー氏

氏は倫敦生れで、今年四十一歳、倫敦の洋服本場ウエストエンドの裁斷師として二十餘年間の經驗を有して居ります。



ルーズ女史

女史は今年二十八歳・生粹の巴里ッ兒で同地の裁斷學校に學び最高免狀を得、彼の地一流商店に勤められた方です。

東京市 三越呉服店 駿河町

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十二年八月十三日印刷納本

九月號

定價八拾錢

復刻版 女性改造〔戦前編〕 第4回配本（第10巻～第12巻）

2008年12月10日 発行

揃定価（本体60,000円+税）

発行者 船橋 治

発行所 不二出版

東京都文京区向丘1-2-12

☎03(3812)4433

印刷所 三進社

製本所 青木製本

ISBN978-4-8350-6082-8（全3冊 分売不可 セットコード ISBN978-4-8350-6080-4）